

語り継ぐ6

阪神・淡路大震災を

かすかに覚えている最後の世代が

高校3年生の言葉で語る

兵庫県立舞子高等学校

環境防災科3年

もくじ

題 名	被災時の住所	名 前	ページ
三歳の記憶	神戸市西区富士見ヶ丘	井元 涼	1
1・17 KOBE	神戸市兵庫区	岩崎 祥平	5
I don't know ～何も知らなかった私～	岡山県倉敷市	遠藤 律子	9
震災を経て	神戸市東灘区田中町	大形 港	13
父がくれた出会い	芦屋市津知町	小島 汀	17
阪神・淡路大震災の記憶	神戸市垂水区	加島 絢子	22
あの日の記憶	神戸市西区	岸根 悠輝	26
真っ黒だ！	神戸市垂水区西舞子	黒田 めぐみ	30
将来につなぐ	宝塚市	香西 宗治	34
伝えていく記憶	神戸市垂水区	後藤 達弥	38
しあわせ運べるように	神戸市垂水区五色山	佐伯 美香	42
あのときの記憶	神戸市垂水区桃山台	佐伯 萌	46
阪神・淡路大震災のこと	神戸市垂水区清水ヶ丘	坂本 恵子	51
語り継ぐために	東条町	柴田 彩	55
1・17 5時46分	明石市枝吉	柴田 健人	60
語り継ぐ	神戸市中央区	杉岡 翔太	64
震災を知る	神戸市西区糺台	平 幸祐	68
悪夢の日	神奈川県横浜市南区	高岡 輝	73
震災体験	西宮市高須町	辻迫 郁未	77
幼い私の震災体験	神戸市垂水区桃山台	徳留 玲奈	81
I wish	神戸市北区道場町	西谷 阿弓	85
私の全く記憶されていない思い出	神戸市垂水区南多聞台	林 ありさ	89
震災体験	神戸市垂水区本多聞	深田 愛梨	93
震災を通して	神戸市北区鈴蘭台	福永 由太	96
みんなの記憶	神戸市垂水区本多聞	藤田 千皓	99
阪神・淡路大震災の体験	神戸市垂水区桃山台	前城 健太郎	103
2歳の私が感じたこと	神戸市須磨区白川台	増田 優香	107
伝わる側から伝える側へ	神戸市須磨区竜が台	松浦 明日香	111
語り継ぐこと	神戸市垂水区海岸通	松下 美紅	115
通過点	加古川市加古川町	松本 佳祐	120
震災当時の自分と今の自分	神戸市西区今寺	的崎 翔太	124
阪神・淡路大震災体験記	神戸市垂水区	真部 賢也	128
天災のカウントダウン	神戸市垂水区清水が丘	三浦 有理沙	132
震災の記憶	神戸市垂水区舞子坂	宮田 遼平	137
阪神・淡路大震災の体験	兵庫県神戸市西区	村上 智哉	141
これからの自分	大阪市東淀川区	山下 大樹	146
震災が残した傷跡と教訓	神戸市垂水区名谷	山田 恵士	150
母の震災体験から考える	伊丹市	山本 悠太	154
手つかずだった世界	神戸市垂水区狩口台	綿田 梨乃	158

三歳の記憶

神戸市西区富士見ヶ丘
井元 涼

家族構成

父親（職業：コンピューター会社勤務）、母親（職業：生命保険会社勤務）、祖父（職業：なし）、兄（幼稚園児）、僕（当時3歳）。

住居・部屋

2階建てに一軒家。少し古い家で地震対策はしていなかった。

父親と母親は2階にある2部屋の内の1つ、祖父は1階にある和室、兄と僕は2階の残りの1部屋を使っていた。

父親と母親の部屋にはツインベッドが一つと、低い棚の上にテレビ、タンスがあり、天井近くの壁の棚には置物が置いてあった。

祖父の部屋にはベッドはなく、蒲団があった。蒲団の周りには何もなかったが、壁には写真が掛けてあった。

僕の部屋には2階建てベッド（兄が下の段で僕が上の段）と、タンスが2階建てベッドのすぐ傍にあった。

1階の台所にある食器棚は2階建てになっており、一つの食器棚の上にもう一つ食器棚が乗っていた。いずれの家具も固定していなかった。

震災前日・いつもと同じ日常

その日は今までと変わらず、父親も母親も、祖父も兄も、そして僕もいつもと同じ、決まった時間に起きた。

僕の家で最初に起きるのは母親で6時半に起床し、次に父親が6時45分頃、祖父が7時、兄が7時15分、最後に僕が7時半頃に、といった順番で起きてきた。母親は7時に仕事に行く父親に一番に朝食を作り、次に、日課である朝の散歩に出掛ける祖父に朝食を作っていた。兄は幼稚園に行くために僕より早めに朝食を食べ始め、少し遅れて僕と母親が食べ始めていた。その間に祖父が散歩に出発して行った。

食べ終わると、僕は母親や兄と一緒に近くの幼稚園の送迎バスがやってくる場所まで歩いて行った。バスが来るまでの間、兄やその友達と一緒に鬼ごっこなどの遊びをしながら時間をつぶしていた。しばらく経ってからバスが来て、兄とその友達は幼稚園に行った。

兄を見送った後、母親と歩いて家に帰り、昼までテレビを見たり、本を読んだりしながら過ごした。祖父は母親と僕が兄を見送っている間に帰ってきていた。

昼食を食べてからは、母親が昼から仕事に出かけて行き、家には祖父と僕の二人が残っていた。祖父はテレビを見たり、本を読んでいたが、僕は昼寝をしたり、すぐ右隣の家で飼われている犬（シベリアン・ハスキー）と遊んだりしていた。犬と遊んでいると飼い主のおばちゃんも出てきて楽しくおしゃべりをした。遊んでいるうちに、母親が仕事から帰ってきた。もうすぐ兄も帰ってくるので、母親と僕は兄を迎えに行った。

それからは兄と二人で近くの公園に行って兄や僕の友達とどれだけ高い木に登れるか木登りをしたり、おもちゃを使ったりして晩御飯まで遊んでいた。

晩御飯は台所にある食卓に父親と母親、兄と僕の4人で食べ、祖父は自分の部屋で食べていた。晩御飯を最後に食べ終わるのは、祖父を除くと決まって僕なので、その日も最後に食べ終わった。

先に食べ終わっていた父親と母親と兄はテレビを見ていて、僕も食器を片づけて家族みんなでテレビを見た。しばらくしてから父親は2階の自分の部屋に戻ってギターの練習を始め、母親は食器を洗い始めた。僕と兄は一緒にお風呂に入った。僕の家では、お風呂に入る順番は僕と兄が1番、父親が2番、祖父が3番、最後に母親の順番で入ることになっていた。

お風呂からあがるとしばらくはテレビを見て9時半ぐらいまで起きていた。9時半を過ぎると母親に「そろそろ寝なさい」と言われたので素直に2階に上がった。しかし、そのまますぐには寝ずに、兄とふたりで人形やおもちゃで遊んだり、ベッドや布団を使って秘密基地を作ったり、ベッドを海賊船に見立てて海賊ごっこをして遊んだ。

結局、母親に怒られてベッドに入って寝るのは毎回10時頃になっていた。

地震直後・5時47分

阪神・淡路大震災が発生した直後、僕は生れてはじめて結構な大きさの揺れを感じた、らしい。その揺れを思い出そうにも記憶が曖昧になっていて、断片的なことしか今の僕は思い出せない。

最初に兄と僕の部屋に駆け込んできたのは母親だ。母親は揺れの衝撃で落ちてきたアライグマの置物がお腹に直撃して目が覚め、揺れが収まってからすぐ真向いの部屋に急いでやって来た。部屋の中を見回した母親はびっくり仰天して悲鳴を上げた。兄と僕が寝ていた2段ベッドの隣にどっしりと置いてあった大きな箆筒が2段ベッドに倒れ掛かっていた。

僕は揺れを感じた時には目を開けていたが、かなり寝ぼけていたので倒れ掛かっている箆筒を見ても「何、これ？」といった感じだった。断片的にしか覚えていないのに、なぜかその寝ぼけていたことを断片的な記憶の中で1番ははっきりと覚えていた。ちなみに、兄はまだ寝ていた。

危うく2度寝をしそうになっていた僕は、母親の轟きわたる悲鳴にこのときやっこのことではっきりと覚醒した。兄もさすがに目が覚めたが、兄も僕も倒れた箆筒を見てもなぜか動揺しなかった。

幸運にも、2段ベッドの2本の柱は母親の服がぎっしり詰まった箆筒の重量をすべて耐えきった。しかし、母親の力では箆筒をどかすことはできなかったので、2段ベッドの上において取りやすい僕を先に救出し、下のベッドにいた兄はベッドと箆筒の隙間に体をねじり込んで救出した。

母親が兄と僕を救出している間に、父親は祖父の様子を見に行っていた。幸い、祖父の部屋に箆筒など、倒れてくるようなものはなく、怪我ひとつなかった。しかし、壁に掛けていた写真は落ちていた。

ほとんどの部屋が被害も少なく、怪我人も出なかったが、台所にある食器棚からはじき飛ばされて粉々に割れた数枚の食器を見て、母親がしばらくの間唾然としていた。

家自体は無事だったので、割れた食器、落ちた写真や置物、倒れた箆筒など、家の中をあらかた掃除した。電気・ガス・水道は無事だった。掃除が終わるころには6時ぐらいになっていたけど、兄や僕、祖父はまだ眠たかったし、することもなかったので寝た。

父親や母親は友達や親せき、明石の祖母や祖父に電話をして大丈夫かどうか確認を取っていた。

震災から次の日

朝、母親に起こされると時間は8時になっていた。兄は幼稚園が休園になったし、母親も仕事が無くなった。祖父はもともと仕事がないので、家には母親と祖父と兄、そして僕の3人がいた。父親は電話があったので仕事場に向かった。

僕の家の周辺は被害が比較的に少なかったもので、近所の人も母親や兄の友達にも亡くなった人はいなかった。右隣りの人も被害はなく、犬も無事だった。それでも念のためにと、母親は朝ごはんを食べた後に近所の家や友達の家を周り、無事かどうかを確認に行った。祖父と兄と僕は、なぜかテレビが映らなくなっていたので祖父の部屋で、部屋にあったラジオを聞いて母親を待っていた。僕は聞くのが疲れたので、いつの間にか眠っていた。

目が覚めると母親は帰ってきていて、近所の人や友達に亡くなった人はいなかったと言った。お昼ごはんを4人で食べながら、母親は小学校に避難してきた人が何人かいるからおにぎりを持っていくと言った。僕も兄もすることがなかったので、母親と一緒に北山小学校におにぎりの差し入れに行った。

小学校に行く道を3人で歩きながら周りをキョロキョロと見わたしてみると、たくさんの人が家の外に出て忙しそうに駆け回っていた。でも、壊れた家などは無かったし、外にいる人も怪我をしている人はいなかったので安心した。時折、母親の友達や、兄の友達の母親などと出会い、世間話や情報交換をした。

小学校に着いてみると、母親が言っていた通り何人かの避難者がいた。でも、その人たちにも目立った怪我は無く、家が半壊したり、水道や電気が使えなくなったりして御飯が食べられないから小学校に

語り継ぐ6

避難してきた人がほとんどで、その人たちの家族にも亡くなった人はいなかった。母親と兄と僕の3人以外にも、避難者に差し入れを持ってきた人が大勢いて、すでに避難者や避難者の対応をしていた学校の先生に差し入れを渡していた。僕たちも差し入れを配っていくと、何人かの人が「ありがとう」と言ってくれた。その後、友達の家や知り合いの家に泊まれない人のために体育館に布団と毛布、枕などを持っていった。避難してきた人はそんなに多くなかったので、広い体育館に数十人ぐらいの人数はとてもさびしいと思った。母親はしばらくの間避難者と話をして励まし、兄と僕は同い年くらいの男の子と遊んでいた。

4時ぐらいになると、母親が晩御飯の準備があるし、祖父も心配だったのでお別れを言って帰った。家に着くとすぐに、父親から今日は帰れないと連絡があった。

晩御飯まで外で遊ぼうとしたら、母親に何が起こるか分からないからだめだと言われたので、兄と二人で祖父の部屋で本を読んでもらった。4人で晩御飯を食べた。お風呂は水がなくなった時のためにためておいたので、軽く体を拭く程度にした。寝る前に、母親が明日は明石の祖父と祖母のところに行くからと言われた。そして、筆筒から遠くはなされた2段ベッドで寝た。

震災から2日目

その日は、朝ごはんを食べてから予定通りに明石に行った。祖父は留守番のために家に残った。車の窓から外を見ていると、小学校に行く時と同じように家から外に出ている人がいた。明石の祖父と祖母の家に着くと、(家は無事だった) どこにも怪我をした様子のない祖父と祖母が笑顔で迎え入れてくれた。明石の祖父と祖母とは、お年玉をもらうだけでなく、時々泊まりに行ったり、ご飯や買い物も一緒に行ったりするほど仲が良かったから、無事で元気な姿を見て本当に安心した。母親は祖母と身の回りの話などの世間話や情報交換をしていたので、兄と僕は祖父と一緒に散歩に行った。その散歩のコースは、祖父の家に泊まりに来た時に必ず行くコースで、歩いているととても懐かしく感じた。その散歩コースを歩いていると、時折疲れた顔をした人とすれ違ったり、見かけたりした。

家に帰るとちょうど昼御飯ができたところだったので、皆でそろって食べた。昼御飯を食べたあと、父親は仕事に行き、母親も一度仕事場に出かけて行った。僕は兄としばらくテレビを見ていたが、暇になってきたので近くの公園に祖父と兄とで遊びに行った。その公園も、泊まりに来た時によく遊びに行く公園なので、何も変わってなくて安心した。しばらくは追いかけてこや木のぼりなどをして遊んでいたが、日が落ちかけてきたので家に帰った。

家に帰ると、母親は帰ってきていて、祖母と晩御飯の支度をしていた。晩御飯まで暇なので、兄と祖父と一緒にテレビを見て待っていた。晩御飯を食べ終わってからはまたテレビを見て時間をつぶし、風呂が沸くまで待った。しばらくしてから風呂が沸いたので、兄と一緒に水かけや潜ったりして遊んだ。風呂からあがると、母親にすぐに頭を乾かされて布団に入れられた。しかし、兄と僕はすぐには寝ずに、人形などの玩具使って遊んでいた。すると、母親が戻ってきて怒られた。

震災から三日目

その日は朝早くから父親は仕事に出かけていた。そして、兄と僕も祖父の日課である朝の散歩と一緒に行く羽目になったので、朝早くから叩き起こされた。まだ寝ぼけている頭でご飯を食べ、顔を洗い、歯を磨いた。祖父は歩くのが早いので、置いて行かれないように兄と僕は急いで歩き、帰ってくる頃にはへろへろになっていた。昼ぐらいまでにはいつものようにテレビを見たり、本を読んだり、遊んだりして時間をつぶした。しかし遊んでばかりなのも疲れるので、いつの間にか兄と二人揃って寝ていた。母親が、家が心配になってきたので帰ることになり、起きて昼御飯を食べ、家の中を軽く片づけてから、祖父と祖母にお礼を言ってからお別れをした。

自分たちの家は出発する前と何一つ変わっておらず、少し汚いと言った程度だった。なので、母親と兄と僕とで協力して家の中を本格的に片づけることになった。留守番をしていた祖父は寝ていたので放っておいた。父親が仕事から帰ってくる頃には家の中は元どおりとまではいかなかったものの、それなりにきれいになっていた。母親は満足していた。そのあとすぐに母親は少し遠くの方にあるスーパーに晩御飯のおかずや次の日の朝御飯の買い物に出かけた。父親は、無事だった友達の家までギターの練習に出かけた。僕は、兄が寝てしまったので暇になり、退屈なので隣の家に遊びに行った。隣の家の人

が飼っている犬とじゃれあい、晩御飯まで遊んだ。晩御飯を食べた後は、家の片づけをして疲れていた
ので早く寝た。

その後

僕の住んでいた所は比較的被害が少なかったもので、復興が早く、他の町よりも早めに日常に戻るこ
とが出来た。亡くなった人もいなかったもので、悲しみは無く、気がつくといつも通りになっていた。父
親も母親もすぐに仕事に復帰していたし、兄もすぐに幼稚園に通っていた。そして僕は最初から最後ま
で変わらなかった。

現在

震災の時の記憶はうろ覚えだけど、未だに自分の記憶の深い所に根付いている。それはおそらく死ぬ
まで消えることはないと思うし、僕自身も消えてほしくないと思っている。僕より下の年齢の人は震災
の記憶は全くないと思う。震災の記憶がないことをうらやましいと思う人もいるかもしれないけど、僕
はそうは思わない。なぜなら、震災の体験があるのとないのとでは、また災害に遭遇した時の混乱の大
きさに大きく関係するので、一度震災を体験した分、混乱は少ない。つまり、生き残る確率が大きくな
るので、僕は震災の記憶を大事にしたい。そして、大事にするだけでなく、震災の記憶がない人に伝え
ることで、たくさんの人を救いたい。

神戸市兵庫区
岩崎 祥平

僕は、震災当時三歳で、すぐに小野市に住む母方の祖母に家に避難したため、ほとんど記憶がない。でも、1つだけ、父が自分の上に覆い被さってくれたことだけが記憶に残っている。ほとんど震災の記憶がないので父の話を基本に聞いた話を書こうと思う。

「震災前日」

震災当初、僕が住んでいた家は祖父が営む酒屋の倉庫の上の二間だけの部屋で風呂なしと、人が住むには限界に近い所に住んでいた。震災前日は近くで火災があり、消防団である父は出動していた。父は休日など関係のない仕事をしていたので、連休であったが特に変化のない変わらない日常だった。

「震災当日」

父は昔から、地震がくる前に何かを感じ目が覚めるというような体の変化があり、阪神・淡路大震災の時も最初の余波がくる寸前に目がさめた。すると同時に下から「ドンドン」と突き上げるような揺れを感じ、布団から上半身を起こしたものの揺れがおさまったので再び寝ようとした瞬間大きな揺れが襲った。そして、父はとっさに僕たち家族の上に覆い被さり布団をかけ揺れが収まるのを待った。揺れが収まると同時に、布団をめくると真っ暗で何も見えないような状況だった。何が起こったかわからない状況だったため、まずラジオを聞こうと思いリビングに行こうとしたが、いっぱい物が倒れていてリビングに行くまで時間がかかった。幸いにも食器棚が僕の置いていたいっぱいのおもちゃで倒れていなかったのが幸いであった。もし、食器棚が倒れていたら皿などが飛び出していて、リビングには行けない状況であった。そして、携帯ラジオと懐中電灯を普段から父は置く場所を決めており、暗闇の何も見えない状況の中でも手探りでその場所まで行き、携帯ラジオと懐中電灯を手に僕たちがいる所まで帰ってきた。携帯ラジオを母に渡し、父は懐中電灯を持って外に出ようとしたが、鍵がかかったままドアがゆがんでいたため手で開けることが出来なかった。そして、たまたま玄関に置いていたペンチで鍵をこじ開け外に出た。外に出てみると、土煙りと近所の人「ドヤドヤドヤ」としたような言葉では言い表せないような異様な雰囲気だった。結局、外に出てみても真っ暗な状況で、現在の状況が把握することはできなかった。すると、近所で酒屋を営んでいる祖父が「5軒先の人が生き埋めになっているからその人のとこ行ってくれ」と言いながらやって来た。そして、父はその現場に向かうと二階建ての家がペシャンコになって潰れていた。近所から集まった人で瓦の撤去から始めた。昔ながらの家で竹が編み込まれていたため、救出作業にはかなりの時間がかかった。しかも、その家族は一階で寝ていたためそれも時間がかかった大きな要因であった。でも、この街は昔ながらの下町だったため、この家の家族構成を把握していたのが幸いだった。計2人を救出し、軽トラックの荷台に乗せられその人たちは病院まで運ばれた。この間、消防車などの緊急車両のサイレン音は一度も聞こえてこなかった。

その後、家に帰りその状況を僕たち家族に話し、家族全員で携帯ラジオを聞いていた。夕方になり電気だけが復旧したのは覚えているが、夕方近くまで何かをしていたのであろうが、記憶はあまり残っていない。それくらい気が動転していたのであろう。水もガスもないということで小野市の母方の祖母の家に避難することになった。僕は、祖母家に行くのが楽しみではなかった。美味しい物も食べさせてもらえるし、色んな所へも連れて行ってもらえるし、親戚の子とも遊べるし、大好きな車にも長時間乗れるのだから、僕にとっては天国に行くようなことだったと思う。僕たち家族は、街中の被害状況を見ながら祖母の家に進んだ。行く途中にかなり燃えている家の横を車で通ったのを僕は覚えている。それが祖母の家に行く時の唯一の記憶である。母の話では、少し高台を車で通る時に、ふと太陽を見てみると、煙で空が濁っていて太陽がオレンジ色みたいな変な色だったという。小野市の祖母の家に行く途中は、当然ながら信号は全て停止し緊急車両ともすれ違うことはなかった。父は、僕たちを小野のこし、いくつものポリタンクに水を入れ再び地獄絵図のような神戸に一人帰ったのだった。

「神戸に残った父」

テレビがつき少しずつであるが情報が入り始めた。長屋だったため雨に備えてブルーシートをはるために、僕が毎日通っていた家の横の駄菓子屋さんのおっちゃんと屋根に登りブルーシートを張った。屋根から北の方角を見ると、5本大きな煙があがっていたのがすごく記憶に残っている。風向きによっては、テレビで有名になった菅原市場の火災の火の粉が家まで飛んできていた。父の食料はというと、僕が残っていたお菓子を毎日食べていた。そして、瓦や瓦礫の撤去作業で一日はアツと言う間に過ぎて行った。

「3日4日経つと…」

3日4日経つと昼も夜も関係なしに緊急車両のサイレンの音が鳴り響いているような状況だった。寝るときにはまた大きな地震がくるかもしれないという思いから、いつでも逃げ出せるような服を着て靴を枕元に置き寝ていた。この頃の頭の中はというと、実際に聞こえてくる緊急車両のサイレン音とテレビから流れてくる緊急車両のサイレン音とで、そのサイレン音が頭の中にインプットされた状況になり熟睡できるような状況ではなかった。

「家の近所で火災発生」

震災から一週間後、家の近くで火の手があがった。近所の人たちは、長田区の火災のことをテレビで延々と見ていたので、自分たちの所もあんな風になるのかという思いから、半泣きの状態で逃げて行った。しかし、その中でも「自分たちで自分たちの街を守らんと」と思った人たちが声をあげ自然と井戸から火災現場に向かってバケツリレーができた。どこかから消火器を持って来る者、家に水をはっているバケツを持って来る者、みんなが協力して消火活動をした。しかし、火の勢いがおさまることはなかった。そこへ、他の県の消防車がやってきて火は燃え広がらずに済んだ。父は、バケツリレーでは一番前に立って消火活動をしていたそうだ。火の手が目の前であったが、この時はもう必死すぎて火の恐怖感など感じなかったそうだ。最後の辺には、手に握力が入らなくなりバケツごと火の中に何個もほりこんでしまったと言っていた。それ程、長時間バケツリレーをしていたということだと思う。

「消防団員としての父の活動」

再燃防止のため家の近くのお寺で泊り込みをし、昼は避難場所の情報を街のみんなに伝えるような活動もしたし、夜は夜で夜回りをかかさずしたそうだ。今でさえ、消防団の招集は少なくなったものの、昔は古い家が多く招集はかなり多かったそうだ。

小野市に避難していた僕たち家族は、水道が使えるようになった頃に神戸に帰ってきた。

「小野市に住む母方の祖母の話」

小野市の祖母の家のすぐ横には北条鉄道という電車の線路が通っていて踏切の「カンカンカン」という音が毎日聞こえてくるような所に家は建っている。なので、僕は今では、「おばあちゃん」と呼んでいるが、小さい時は「カンカンのおばあちゃん」と呼んでいた。親戚の子は、今でも「カンカンのおばあちゃん」と呼んでいる。しかも、電車が通ると家が古いのもあるが凄く家が揺れテレビの映りが悪くなるという最悪の立地条件の所に家がある。でも、良い点もある。それは、電車は毎日決まっている時間に通る＝家が揺れる。それが、目覚まし代わりになるということだ。今も昔も変わらず祖母の目覚ましは電車の揺れである。それ程、線路の際には家は建っている。震災当日も、祖母は揺れで目が覚めた。電車の揺れと勘違いし、時計を見るとまだ6時前だったので、もう一度眠りについた。そして、30分程してから2階から1階に降りて、ストーブをつけようとした時に、母の兄が降りてきて「さっきの大きい揺れ地震や」と言われ、初めてさっきの揺れは地震だということに気づいた。そして、テレビをつけてみると「神戸で大きな地震」があったということに気づいた。そして、慌てて神戸に住む僕たちに電話をかけた。その時は回線が混乱していなかったので、電話がかかったがそれ以降はかかることはなかった。一回目の電話で僕の母が伝えたことは、とりあえず水を入れるためのポリタンクをできるだけ

語り継ぐ6

たくさん買っという欲しいということだった。それを聞いた祖母は、車で近所のホームセンターに買いに行ったが、考えることはみんな一緒にポリタンクは売り切れの状態だった。そこで、祖母は小野市の横の市の、加西市のホームセンターまでポリタンクを買いに走った。そこには、ポリタンクはありそれを購入し家に帰った。ポリタンクを購入できたものの、3つか4つしか手に入れることはできなかった。あともう少し遅ければ1つも手に入れることはできなかっただろう。

「親戚の人の話」

親戚のおじさんは当時、長距離のトラック運転手だった。震災当時もトラックを運転して神戸の長田の会社に物を届けるため高速道路を走っていた。1月17日午前5時46分とてつもない揺れがトラックを運転して高速道路を走っているおじさんを襲った。もう道が「ぐにゃぐにゃ」と波打っているようで、必死にブレーキを踏んだ。「何か大変なことが起こった」と思い、このままでは「ヤバイ」と思い慌てて湊川インターから高速道路を下りた。何が起こったかわからなかったのでとりあえず車のラジオに耳を傾けた。すると神戸で大きな地震があったということがわかり、なんとか今の状況を把握することができた。そして、このまま会社に戻るか届け先まで行くか迷ったあげく届け先まで一応行くことにした。届け先の長田周辺に着いたのは、昼頃に届け先を探したがどこにも見当たらずトラックでウロウロして探してもやはり何も建っていない所にたどり着き、おかしいと思いよく見てみると、その届け先の会社は潰れていたようだ。あのよう、高速道路が横たわっている映像をテレビで見たりすると、自分はよくあんな所をトラックで走っていたと思うし、今になって恐怖感があると言っていた。いつも面白くて周りを笑かしてくれるおじさんだが、阪神・淡路大震災の話になると真剣に話してくれる。それ程恐怖感があったのだろうと思う。

「父の話聞いて」

父からこんなにも阪神・淡路大震災のことを聞いたことはなかったし、話を聞き「そんなことあったけ？」という話もあった。例えば、父は僕に貴重な体験をさせるために水の給水や救援物資の配布の列と一緒に並ばせたりしていたらしい。僕はそんな記憶は残念ながら一切記憶にない。しかし、話を聞くことで、僕も救援物資の列に並んで救援物資を受けとり、貴重な体験ができたという思いになった。このような、語り継ぐという環境防災科の授業の中になかったら、父からこんな話も聞けなかっただろうし自分の住んでいた街の状態などもわからないままだったと思う。阪神・淡路大震災の被災者の一人である父の貴重な体験を聞くことができ良かったと思う。僕も、次の世代にこの貴重な体験談、そして阪神・淡路大震災を風化させないためにも、次の世代に「語り継ぐ」伝えていきたいと改めて思う。

「環境防災科」

僕は、将来消防士になるのが夢で高校では防災のことを専門的に学びたいと思い、環境防災科を受験することにした。環境防災科では、専門機関の外部講師の講義を聞き防災のことだけではなく、阪神・淡路大震災のことも知ることが出来た。阪神・淡路大震災の当時のことを自衛隊や消防や関西電力など色々な機関の人から聞き、この講義は大変貴重な話で、阪神・淡路大震災のことがより詳しく知ることができた。このような話を聞き、僕たちが中心となり次の世代にこの地震を風化させない為にも発信していくことが大事だと思う。この、発信していくことが大事というのも環境防災科で学んだことの1つだ。講義の中や授業の中でボランティアの人が震災で傷ついた心を癒して、炊き出しなどを頂き、神戸の人に勇気を与えて頂いたということを知った。そこで、僕もどこかで災害があれば少しでも力になって勇気を与えられたらという思いから、石川能登半島地震のボランティアに2回、中国四川大地震とミャンマーのサイクロンの募金活動に参加した。石川能登半島地震のボランティアでは、地震で被災された方に直接話したり接することが多く、地震で被災された方の話を生で聞いて非常に良かったと思った。石川県の門前町の小学生と交流した時に、防災に関する知識が高いなと感心した。家がゆがんだ子もいて、身をもって地震の被害の状況を知ることができた。高校生で被災地に入りボランティアをしたことは、貴重な体験をしたと思うし、これからの人生において、僕自身にとって大きな糧になることは間違いのないことだと思う。高校生でこのような体験ができたのも、環境防災科だからこそだと思う。僕は、2回も石川能登半島地震のボランティアに行ったことから石川県で行われた「能登半島地震復興

ユース・フォーラム」に舞子高校の代表として参加し、その舞台上でプレゼンテーションソフトを使い発表した。そこでは、僕たちの世代の人の防災に対する意見や考え方などが聞けた。そこでは、やはり日頃からの備えが大切だという意見が多かった。このように、僕たちの世代が防災を考えることは専門家などが防災を考えるより大切なことだと思うし、このように僕たち若い世代が意見交換するような場が増えれば災害に負けない街づくりができるのではないかと思う。中国四川大地震とミャンマーサイクロンの募金活動では、こんなにも人が募金をしてくれるのかと思い、人の温かさを感じた。この募金活動では、学校の机の上では勉強できないことが勉強できたと思う。この体験も、僕のこれからの人生の中で糧になることは間違いのないことだと思う。普通の高校生では体験することができないような体験をさせてもらっている僕は、幸せだと感じる。

「将来の夢」

僕の小さいときのヒーローは、仮面ライダーやなんとか戦隊とかではなく消防車や消防士だった。これは、父が消防団に入っている影響が大きいと思う。物心ついた時から、家には消防の服や帽子が家にあり、小さいときから消防士という職業に興味があった。そして、消防士に強くなろうと思ったのは、中学一年の時だった。僕の中で身近な人を亡くし、その時に命の尊さというものを強く感じ、将来は人の命を救うような職業に就きたいと思った。そんな時、小さいときから興味持っていた消防士になりたいと本気で思った。自分の命を賭けて、人命救助の最前線に行き、自分の手で人の命を助け、無事家族の元に要救助者を返したいと思った。その為には、消火活動や人命救助が大切だと思っていた。しかし、環境防災科に入ってからその考えは変わった。もちろん消火活動や人命救助は大切だが、一番大切なのは防災教育などの“防災”を伝えるということだと思った。防災を伝えることで、個人個人の防災力が向上し、災害が起きても被害を最小限で食い止めることができたなら、消防の消火活動や人命救助というような活動が迅速でスムーズに活動することができると思う。だから、日頃からの防災は大切だと思う。僕が消防士になったら、人命救助などもしたいと思うが、防災を市民に伝えるということもやっていきたい。個人個人の防災力が向上することにより、社会の防災力も向上すると思うから、まずは個人個人の防災力のレベルアップができるように、防災を伝えたい。僕の目標は、消防士になって満足することではなく、レスキュー隊に入りたいと思う。レスキュー隊に入って日本の緊急援助隊に選ばれて、海外の災害現場でも人命救助などの活動もしたいと思う。その経験をまた、防災に生かしていければと思う。

最後に、環境防災科に入って勉強し色々体験して思うことは、災害の被害=防災力だと思う。

I don't know ～何も知らなかった私～

岡山県倉敷市
遠藤 律子

『震災を知らなくても大丈夫。』私はずっとそう思っていた。

1992年1月17日—私は震災当時、兵庫県内にはいなかった。私は岡山県に父と母と暮らしていた。岡山県も震災があった時、少し揺れたらしい。でも、私は寝ていた。揺れても私は起きなかった。神戸ほど大きな被害はなかったので、全くと言っていいほど覚えていない。家族も無事だった。しかし、今になって、神戸ではなく岡山県が揺れていたら…、もしかしたら自分は大きな被害にあっていたかもしれない、けがをしていたかもしれないということをたまに思う。

阪神・淡路大震災の前日、私たち家族は兵庫県 伊丹市に住んでいる母方の祖母家に行こうとしていた。家でもその準備をしていた。でも、私が急に熱を出したせいで行けなくなってしまった。熱を出していなかったら、伊丹に行っていたら、私たちも被害にあっていただろう。祖母の家も地震の被害があったらしい。たくさん家が壊れ、眠れない生活を送った。最初に揺れてから1ヶ月くらいは、「また揺れるかもしれない。」とすごく怖かった。今でも大きな音が聞こえると驚いてしまうと言っていた。

地震があった日、私の家ではテレビをつけていた。そこには普段とまったく違った映像があったのは、今でも覚えている。道にひびが入っていたり建物が崩れていたり、小さい私でもただ事ではないと感じていた。でも私には何が起きたのか全然分からなかった。

震災体験のない私は、阪神・淡路大震災を体験した友達に話を聞いた。

私は阪神・淡路大震災があったとき神戸市垂水区に住んでいた。当時3歳だった。父と母、兄と私の4人家族だった。私はあまり記憶がないが、何度か両親に話を聞いたりしたことはあった。あの日の朝、すごい地震があって家は大きく揺れた。大きな揺れがあったにもかかわらず、思っていたよりも被害は少なかった。はじめは地震が起きたことも分からなかった。幸いにも、家族全員無事だった。

地震があって少ししてから両親は、テレビをつけていた。とりあえず、地震でこのあたりがどうなったか知りたかった。しばらくテレビを見て情報を集め、どう対処するか考えていた。地震が落ち着いたくらいに外に出てみた。外の様子は、大きな揺れがあったにもかかわらず、いつもの様子とあまり変わっていなかった。壊れた建物もなく、いつもの様子だった。私はもっとひどくなっていると思った。

それからは避難所に行かず、家に残っていた。今思うと、私は家にいれてよかったと思う。あとで聞いた話だが、友達も避難所で生活していたらしい。避難所ではたくさん人がいて、大変だったと聞いた。私の家の中では洗面台の棚が倒れたり、洗面台の鏡が割れていたり—いろんなところに被害はあったが、なんとか生活することはできた。電気や電話が早めに復旧して助かった。テレビもちゃんと見ることができたので、情報も入ってきた。ほかのところはどうなったかすごく気になっていた。しかし、テレビや電話は大丈夫だったが、水は出なかった。水道が止まってしまった。水が出ないので、汚れた服を洗濯することができなかった。またお風呂に入れない日が何日か続いた。何日もお風呂に入れない毎日は大変だった。お風呂に入ることができなかったので、水を使わずにいいシャンプーで頭を洗ったりもした。水が出なくなってしまい公園へ水を汲みに行った。毎日の水汲みは思ったより大変だった。重たい水を持って公園から家へ運ぶのはしんどかった。母と一緒に水をもらいに行った。がんばって汲んできた水は家にあったアウトドア用品などを使って、お湯を沸かししたりするのに使われた。

この震災で一番印象に残っていることは、家族みんなでマスクを配ったことだ。自分の家はあまり被害が少なかった。「何かできることはないか?」と始めたことだった。マスクは私の母の友達が1つ1つ手作りしたもので、ガーゼとゴムでできた簡単なものだった。作ったマスクは生田神社へ行き、困っていた人に配った。ガーゼを細く切って、輪ゴムにつけたものなので、すぐに壊れてしまうかもしれないけれど、一生懸命作ってもらったものなので、とにかく配った。父も母も兄もみんなでマスクを配った。マスクをもらってくれたときはうれしかった。私はこういうときにこそみんなで助け合う必要があると知った。

私は当時、神戸市兵庫区に住んでいた。当時3歳だった。今の家に母と父、私の3人で住んでいたが、震災があった日はスノーボードへ行く予定があったので湊川の祖母の家に行った。家には父、母、私、祖父、祖母の5人でいた。父と母が友達とスノーボードへ行く予定で、その準備をしていたときに地震は起こった。父と母は忙しそうに準備をしていたが、私はよく寝ていた。だから地震で揺れた時のことははっきり覚えていない。覚えていることは、大きな音がしたことぐらいだった。大きな音がしたあと、家の中のあらゆる物がひっくり返ってきたことも覚えている。上からも物が落ちてきた。祖母が落ちてきたお線香立てで頭を打った。少したんこぶができたが、大きなけがにはつながらなかった。私は地震の揺れで、仏壇のお供えのご飯が落ちてきて、手でキャッチした。両親は友達の安否を確認していた。幸いにも周りの人は大きなけがをしていた人もなく、亡くなっている人もいなかった。みんな無事であった。私の祖父は、仕事の人と有馬温泉に行っていた。無事だということを確認したが、地震の影響ですぐには帰ってこられなかった。

しばらくして揺れがおさまってから、家の外に出てみた。たくさんの家が燃えていた。燃えている家から大人や子供が出ていくのが見え、みんな燃えている街の中を走っていた。周りが燃えていたせいなのか、冬でも寒いと感じなかった。むしろ少し暑いと感じるぐらいだった。そして、明るかった。向かいのドアは歪んで平行四辺形になっていて、信じられなかった。あの光景は、今でもはっきり覚えている。電気も水道もガスも止まっていて、外では信号も点いていなくて驚いた。そのとき、私は向かいに住んでいたおじちゃんに抱っこされていた。

とりあえず父の仕事場の知り合いの家へみんな避難することになった。その人は家族一緒に三木に住んでいた。三木では地震はあったけれど、あまり変わっていなかった。何もなかったかのようだった。三木ではコンビニやお店も大丈夫だった。でも大丈夫ではなかったのは父だった。父はお風呂上りで落ちていたグラスを踏んで足の裏を切ってしまったので自分で止血していた。そして病院に行くときに三木へみんなを送ってくれた。大きな車だったので、たくさんの人を運んだ。父は足の裏をけがしているので、車を運転するときは片足で運転した。そして神戸にある病院に行ってみると、たくさんの人がいた。病院の中もパニック状態になっていた。中には頭から血を流している人もいて自分は足の裏を切っているだけだから、治療してもらえなかったと言っていた。病院では重傷者優先でけがが軽い人は診てもらえなかった。

私の中で三木の家での生活は楽しい思い出だった。こんなことを言うのは、あまりよくないことだけれど、つらかったという思い出よりも、小さかった私にとっては楽しかったことのほうが多かった。たくさんの人と、三木の家で団体生活できて、小さかった私には旅行のようで楽しかった。30人くらいの人と1週間一緒に過ごした。私は机の上でおむつをかえてもらったりした。ほかにも、階段があって、私が踏んだら階段がなくなり、滑り台になると思って階段を下りられなかったこともあった。しばらく三木で生活して、落ち着いたので神戸へ帰ってきた。帰ってきたとき、気づいたのは家の方向で家の壊れ方や被害がまったく違っていただことだった。うちはまだマシなほうだったと思う。

父は働きに行った。母は私の面倒を見たり、家事をしたりしていた。私の両親は仕事の関係で知り合いが多く、連絡するとたくさんの物資が送られてきた。父は東京のスノーボード関係の知り合いに連絡すると、トレーナーが送られてきた。冬なのですごくありがたかった。母は化粧品の会社に勤めていたこともあり、連絡すると仙台から化粧品サンプルがたくさん送られてきた。女性にとって何も出来なかったものでこれも母にとってはうれしかった。でも送ってもらった化粧品サンプルの量が多かったため、ほかの人にも分けてあげた。神戸に帰ってきて2～3日後、三宮へ灯油や水を持っていった。三宮でそれを必要としている人に配った。

震災があつてからずっと、動ける人に声をかけて車など運転してもらってたくさんの水を運んだ。私も一生懸命水を運んだ。自分に出来ることは少しでもやりたかった。ほかにもお風呂へ入れない人たちにお風呂を貸してあげた。自分は助けてもらったから今度は困っている人たちを助けてあげたかった。また神戸駅へ行き、友達とプロパンや廃材で屋台を作った。そこで焼きとりを売った。これからのことを考え、お金のためだった。そのときお金はなかったら困るものと思った。

今、私が思うことは冬でよかったと思う。また、朝早くでよかったと思う。もし地震があつたのが夏だったら、衛生面など困ることも多かったと思う。たとえば汗をかいてもお風呂は入ることは出来ないし食べ物などもすぐに腐ってしまう。悪臭などもしていたと思う。また誰かが病気になるとうちに広ま

語り継ぐ6

る可能性もある。夏の暑さで水もなく、脱水症状になる。そうなったら、もっと亡くなった人が多くなっていたらと思う。そういったことを考えると冬なのは幸いだったと思う。冬は寒いけど、夏ほどは汗をかかないし、お風呂に入らなくても大丈夫で、食べ物も腐らなくてすむ。水は必要だけど、夏ほどは消費しない。

震災を通して私たち家族の中ではいい経験の1つだと考えている。被害を受けたのはみんな、その被害を受けた人みんなで助け合って生活できたということは、大切だと思う。知らない人とも交流できた。今でも交流が続いている人もいる。三木に避難させてもらった時の家族の人たちだ。毎年休みにになったら遊びに行く。また、震災によって被害を受けた人同士みんながやさしくなれた。もし自分だけ被害を受けていたら「なんで私だけがこんな目に遭わなきゃいけないの？」と思い、人に優しくすることなんて絶対出来ない。でもこの震災ではみんなが被害を受けて困っていたので自分も人にやさしくすることが出来た。また、みんなで助け合うことができた。周りも人もすごく温かかった。しかしその一方で犯罪もあったらしい。お店に入って物を取ったり、母から聞いた話では女の子を襲ったり、様々なことがあった。みんなが大変で、助け合っていかなければいけない時に自分勝手な行動をする人もいた。私は、みんながいい人ではないと感じた。

私は今まで神戸に地震なんて来ないと思っていた。だから地震があったときは私も家族も何が起こったのかわからない状態だった。はじめは大きな音がして地震なんて分からなかった。どこか近くに雷が落ちたと思った。地震だと思ったのは、揺れがおさまってからだった。でも今となっては、もう2度と体験することはないかもしれない貴重な体験だったと思う。普段忘れていた“人と協力すること”“思いやり”“やさしさ”などに気づくことが出来た。普段は少しかかわりにくかった近所の人とも協力することが出来た。たくさんの方が助けてくれた。今は少し揺れただけで地震のことを思い出してしまったり、想像してしまうけれど私の中では2度と出来ないような経験になったと思う。小さくてあまり覚えていないことも多いけど、人のやさしさにふれることが出来たと思う。

～最後に～

私は今回たくさんの人に震災ってどんなものだったかを聞いた。話を聞いているうちに、すごく悲しい気持ちになった。また、本当に苦労したと思った。話を聞いてみんなは大変なことも、よかったことも話してくれた。でも大変だったことのほうが多かった。話を聞いていてどれも共通だったことは、みんな“知らない人と助け合っている”ということだった。こういった災害のときは人のことなんて考えている余裕ないと思っていた。でもみんな助け合って、困っている人のために行動していてすごいと感じた。私は本当に体験していないだけでなく何にも知らないと改めて思った。

自分は震災を経験していない、震災を知らない。だからこの学科に入ってちゃんと学びたいと思った。

初めて私がこの学科を知ったのは、中学の時に参加した“まちづくりワークショップ”だった。そこで環境防災科の先輩たちに出会った。先輩たちは、「専門の学科で環境や防災についていろいろなことを学んでいる」と話していた。もちろん、阪神・淡路大震災のことも詳しく学んでいると教えてもらった。私には震災体験がなくて、いつもわからないことでいっぱいだった。知りたいと思った。私は、どんどん入りたいという気持ちが湧いてきた。私も環境防災科に入って詳しく、深く学びたいと思ったのが始まりだった。実際、入ってみると震災を様々な視点から見ることができた。電力会社の人や、自衛隊の話を聞いて想像と違っていたところもあった。すごく勉強になった。「震災を知らなくても大丈夫、大丈夫」となんで思っていたんだろうと少し後悔した。

この学科に入りたかったのにはもうひとつ理由があった。毎年1月17日が近づいてくると、周りは阪神・淡路大震災という言葉がニュースやテレビで聞こえてくるようになる。でも私は、正直経験していないし、関係ないと思っていた。学校で作文を書くときでもよくわからなかったし、書けなかった。でも周りは知っているのに自分は知らなくて少し不安だった。専門的なことを学びたいと思った。

この学校に入る時も、「震災体験のない私で大丈夫かな？」と思った。でもこの学校に、学科に入って自分は経験してなくても、勉強していくという事が大切だと知った。また、ただ勉強して終わりではなく、何らかの形で伝えていかなければいけないということも知った。それが私にもできることだと思った。この学科に入って阪神・淡路大震災のことを学ぶだけではなく、ネパールなどの国際的な交流や

消防学校体験などいろいろなことができる。私は神戸で震災を勉強することも大事だけど、もっといろんな事にも挑戦したいと思うようになった。ボランティアもその1つだと思う。環境防災科に入ってよかったと思う。

私はいまだにこの神戸に大きな地震が来たという実感はあまりない。なぜなら、今の神戸の街は何もなかったかのように元通りあるいは、それ以上のものになっている。周りも復興していつている。震災の記憶も、どんどん忘れられそうな感じがする。でもその一方で、長田のまち歩きや講師の話聞いて復興できていないところもあると思った。たとえば長田の人たちは、震災のことを聞くとすごくつらそうに、でも詳しく話してくださった。人と防災センターへ行ったときに聞いた語り部の話でも、つらかったことをたくさん話してくださった。私は震災で被害のあった人が幸せになれるようなまちづくりが必要だと思う。また震災の教訓を生かして、もう2度とあのような被害が出ないようなまちにしなければいけないと思う。私は将来、そういったまちづくりを目指して地震などで被害にあった人を支えていけるようになりたい。

今回、友達の体験を聞いていく中で、それぞれがいろいろな体験をしていたことが分かった。私は体験していなくても身近に体験した人がいて、それを聞くということの大切さを学んだ。この友達の体験をもとにした“語り継ぐ”をできるだけたくさんの人に読んでほしい。そして、私のように震災を知らない人には絶対に読んでほしい。そしてちゃんと震災に向き合ってほしい。たくさんの人が阪神・淡路大震災で亡くなった。命は助かっても、心に傷のある人もいる。私は震災を経験していなくて、何も知らなかったけれど環境防災科で学び、たくさんを知った。はじめは、話を聞いてショックを受けたりもしたけれど、ちゃんと向き合っていかなければいけないと思った。だから私はこれを読んで、震災とちゃんと向き合ってほしい。大切なこともたくさん学べると思う。

今、震災を経験していない子たちはあの大きな震災を知らないまま生活を送っている。きっとこれから先も、震災の話聞く機会が減っていくと思う。でも阪神・淡路大震災があったことは何年たっても忘れてはいけないことだと思う。そして忘れないうために、ちゃんと伝えていく必要がある。これから日常生活をしていく中で、阪神・淡路大震災クラスの地震が起きないとは限らない。もしかしたら起きてしまうかもしれない。そのためにも今から備えておく必要がある。今から備えておいても遅くないと思う。知識は何も知らないより、何か知っているほうがいい。知っていてほしい。だから私はこの環境防災科でたくさんを学び、伝えていかなければいけないと思う。そのために私は、これからも防災・環境など様々なことを学び広めていきたい。そして自分にしかできないことを見つけて行動できるようになりたい。その第一歩がこの“語り継ぐ”だと私は思う。

加古川につくと祖父祖母やおじさん、おばさんが温かく迎えてくれた。自分は近くで被害が少ない所に避難することができたからそれほど過酷な環境を体験することはなかったのだけれど、もし避難することができず近隣の小学校などで避難所生活をしていたら…、と何度も考えたことがある。環境防災科に入ってからの他の人たちの震災体験を聞く機会が何度もあり、その話を聞いて自分は被災してから日常の環境とは言わないまでも日常に近い環境で生活できていたから、自分は幸運だったのだなおもう。被災後、東灘を離れず避難所生活をしていたら僕の人生は変わっていたのではないか、と思うことがある。加古川の家で過ごす数日も何回か余震があった。それほど大きなものではなかったと思うのだがまだ小さかった僕にはとても大きな恐怖だった。

加古川についてから何日かたって、父はおじさんの家に行き、帰ってくるのは夕方になる日が何日もあった。

何度か、自分も家の状況を見に行ってみたくて、「連れてって」と頼んだことがある。しかし、当然のことながらまだ3歳の僕にはしんどい環境だし危ないからと言って、断られた。その代わりにと言って、家の近くにあった商店街の写真や一軒家がペシャンコに潰れた写真を何枚か撮ってきてくれたことがあった。

祖父母の家は何ヶ月かお世話になったのだけれど、それがどれぐらいの間だったのかは覚えていない。ただ、祖父母の家に行ってから何回か余震で揺れたのは覚えている。

それから時間は経っていつのことだか忘れてしまったが、父の職場の計らいで新しい家に引っ越すことになった。まだ4月になっていなかったことは覚えている。

今思うと、すぐに祖父母の家に避難できて、新しい家も割と早く見つかったのだから幸運だった。

大阪に引っ越してから、前に住んでいた家を見に行っていたことがある。4月に入ったばかりのことだったと思う。家は震災直後と変わらない状態で建っていて、立ち入り禁止のテープが張られていた。家の前の花壇にチューリップの球根を植えていったのを覚えている。自分が小学校2年生になる年にその住宅は取り壊されて立て直された。チューリップも一緒に抜かれてしまったと思う。すでに枯れてしまっていたかもしれない。

小学校4年生の春また神戸の地に戻ってくることになった。父の仕事の都合である。しかも、震災前に住んでいた家を取り壊した場所に建て直された公共住宅に、である。最初、場所を聞いた時、もともと生まれ育った土地にまた戻れるという喜びと、良い思い出とはいえない場所に戻るといふ戸惑いのようなものがあった。神戸に戻ってきて小学校にもなじむことができた。

道徳の時間で、阪神・淡路大震災の授業をすることがあって、さまざまな人の震災体験が書かれた冊子を読んだとき、他の人が自分と比べ物にならないようなつらい思いをしているのを読んで、自分はなんて恵まれた環境にいたのだらうと思ったとともに、自分は本当に被災者といえる存在なのだらうかと、思ってしまったことがある。

今考えると、そのことが恥ずかしく思える。震災の被害が大きかったにしろ、小さかったにしろ同じ震災を体験しそのことを後に伝え風化させないようにするのは同じことなのだから。

神戸に戻ってきてから、僕は自然と母や父に阪神・淡路大震災のことについて聞くことが少し多くなっていった。自分が震災の時どのようなようだったか、近所に住んでいた人のこと。僕はそれほど意識して質問していたわけではないのだけれど、そのころからなんとなく心の隅で自分が巻き込まれた阪神・淡路大震災について興味を持ち始めていたのかもしれない。

神戸に戻ってきたとき、この地で震災があったなんて考えたことがなかった。もしかしたら今立っているところに、人が倒れていて家が崩れていたかもしれない、そんなことは小学生の自分は全く気にすることがなかった。しかし今では、震災前に今いる場所がどうなっていたのか気になることがたまにある。そこには震災前に住んでいた人たちの思い出があるだらう。そんなたくさんの思いを一瞬にして奪っていった震災を本当に憎い存在だと思う人も少なくないと思う。

今違う建物が建っているところには震災前何が建っていて、どのような景色だったか気になることがある。震災時、自分が中学生や高校生だったら家族の負担を少しでも背負えたのではないかと思うことがある。それは自分の力を過信しすぎているのかもしれない。いても何もできないかもしれない。阪神・淡路大震災当時多くの人がそうだったと思う。兵庫県では起こらないと思われていた地震が起こり、なんの備えもしていなくて、混乱した人がたくさんいたと思う。

そんな事がないようにこれから震災を通して学んだ教訓、ノウハウを全国、全世界に広めていくこと

語り継ぐ6

が震災を体験した人の役目だと思っている。

中学2年生の夏休み、来年から受験生になる年でろくに進路も決まっておらず少々焦っていた。そんなときに耳に入ってきたのが「環境防災科」の存在である。はじめ、聞いた時は変わった学科だな、と面白半分環境防災科についてのことを調べていた。最初はそれほど面白いなと思っていただけだったのだけれど、体験入学や説明会を聞きに行き、先輩のネパールのような国外のボランティアや台風23号のような国内のボランティアの話を知っているうちにこの学科で勉強してみたいと思うようになり、3年の夏、環境防災科を受験することを決意した。

環境防災科に入ってから、テレビなどを見ているときに流れる地震速報がすぐく気になるようになり始めた。新聞などでも地震の被害について、台風の情報などにもよく目がいくようになった。中学まではほとんど気にすることもなかったものだったのに、高校になってからそれらの情報について敏感になったと思う。家族間でも阪神・淡路大震災の話や自然環境の話について話す機会も増えた。これも災害について学ぶことのできる環境防災科に入ったおかげだと思う。

環境防災科。あまり聞くことのない学科だから特別に聞こえるかもしれない。普通科よりも防災を専門的に学んでいるからといって普段の生活はそれほど変わらない。ありふれた日常ほど幸せなものはないと思う。ありふれた日常は人によって違うけれどその中で生きていけるということはとても素晴らしいことだと思う。ただ普通科と少し違う点は、外部講師の方の講義が多いことである。消防士・警察官・自衛隊・大学の教授の先生方・役所の方々・国連の関係機関の方など、普段関わることのない方々と出会えることができ、関わりを持つことができる。これまで出会ってきた方々から大変多くのことを学んだ、それを自分一人の中で大切にしていけることもよいと思うが、自分の周りにいる家族、友達に伝えていく必要があると思う。

震災から14年経つ今も、1月17日になると僕は毎年地元の小学校で5時46分から行われる阪神・淡路大震災の追悼式に参加している。黙とうをするたびに断片的な記憶ばかりだけれど、地震のことを思い出し、震災によって亡くなっていった方々のことを考える。校長先生が小学校の震災時の話をしてくれるのだが、避難所になった小学校で一番地域のため、避難所のためにと活発に活動していたのは高学年を中心とする小学生だったそうだ。震災が起きて、学校の普通の生活もおくれず、遊ぶ場所もなくストレスもたまる中、学校のためにトイレの掃除や学校内の清掃、気のめいるような環境の中で、人の嫌がる作業を率先して取り組むことができた当時の小学生の話を知った時は本当にすごいな、言葉しか出てこなかった。

阪神・淡路大震災によって神戸は大きなダメージを受けた。今まちを見回すと震災直後とは考えられないほどきれいになり、復興している。しかし、見た目はきれいになり復興しているように見えても、震災によって受けた心にキズがまだまだ癒えていない方はたくさんいると思う。震災は一瞬にして多くのものを奪っていく。そしてそのキズはなかなか癒えることはない。キズを教訓とし、次に同じ失敗を起こさないように語り継ぐものとしていくか、自分ひとりの中にしまいこんでしまい閉じ込めてしまいか、そのキズをどう考えるかはその人次第である。

僕はこのレポートを書きながら震災を振り返ってみると、3歳で記憶もあいまいであり、遺体や血の流れた場面に幸運にも遭遇しなかったため、なにかすごいことがあったんだなということしか感じていなかった。極端に言えば、テレビで他国が戦争をしているのを、すごいな～、こわいな～、とみている感じと似ているかもしれない。確かに元の家には住めなくなってしまい、大変な思いをしたのかもしれないがすぐに祖父母の家に移りそれほど日常と変わらず、不自由のない生活がおくれたからだろう。祖父母の家に遊びに行っている感覚もあったのかもしれない。それから、大阪の新しい家にもそれほど経たずに引っ越したこともあり、苦しい生活には至らなかった。震災の本当の恐ろしさを僕は体験していないといえるのかもしれない。

東京や北海道のような関西圏を外れた地域では、阪神・淡路大震災も、他国の紛争・戦争とみているような感覚といったようにほとんど他人事のような感覚なのかもしれない。しかし、同じ地震災害の教訓を語り継いでいくことは、とても大切なことだと思う。

この環境防災科に入ったということは人生の中で大きなプラスになったと思う。僕はまだ将来なりたい仕事や夢は決まっていない。卒業して、必ずしも防災関係の仕事に就くとは限らない。高校3年間を

生かすことのできる職業とも限らない。それでも環境防災科に入学して、この学科で学んだということは誇りに思いたいと思う。

阪神・淡路大震災にいて自分が語れたことはほとんどなかったと思う。自分は阪神・淡路大震災を体験した、といっても被災した人の何百万分の1人にすぎない。でも、この文章によって地震や防災について考える人が一人でも増え、これからの防災に繋がっていく方が一人でも増えれば良いと思う。

阪神・淡路大震災の教訓を生かし2度とあのような悲惨な出来事を起こさないように活動していくことが、僕たちのやるべきことだと考えている。

父がくれた出会い

芦屋市津知町
小島 汀

私が受けた阪神・淡路大震災の傷は決して癒えないものになった。

「震災はどんどん風化していつている。」そう言われることが、私は本当に大嫌いだ。あの地震が発生した当時から、生まれた子供や地域外から神戸に来た人を含めると経験した人は少なくなってきた。だから風化することが仕方ないものではないと思う。あの地震でどれだけ多くの人が苦しみ、傷ついて、今もずっと背負い続けてきているのか。私の中での震災は風化することは絶対になく、これからも生き続けるに違いない。だから風化することなんて決してないことだと考えている。

私は当時芦屋市のアパートで父、母、兄と4人で暮らしていた。「3才だったら覚えてないやろなあ〜。」そんな風に言われることが多い。確かに当時3才の私はあの日の記憶がうっすらとしているが、断片的なものをしっかりと覚えている。しかし、それは小さい頃から母や周りの人から聞いたりしてきたから、そう思っているのかもしれない。いま私がこのように語る事ができているのは、震災に面と向き合えるようになってきたからだと思う。

「地震発生」

1月17日午前5時46分。あの地震は本当に数秒間で、私たちの街を一瞬にして襲っていった。揺れた瞬間のことは記憶にない。気付いた時には母に抱きしめられていた。真っ暗やみはずっと続き、動くこともできない。ただダンスなどが自分の体を囲んでいるということはなんとなく覚えている。「父！！」母が叫ぶ。すこし離れたところでも兄が必死に叫んでいた。しかし、父の声は返ってこなかった。瓦礫の中にいる間、外では近所の人少しでも早く助け出そうとしようと思命に動いてくださっていた。母は、私たちを先に出してあげようと「おばちゃん来てくれたから」と言って、出そうとしてくれるのに、その時の私は全く外に出ようとしなかったそうだ。その時の私には何か恐怖があったのだろうか、安心して近所の人についていけなかった自分がいた。約3時間経って、叔母が私たちのところに来てくれた。その時になって私は出る気になり、頭の横にあった大事にしていた本を抱えて出た。救出されてからはアパートの向かいにある祖父の教会が避難所になっていたため、すぐに向かった。

その日の記憶で1番心に残っている情景は、助け出された母の血まみれになった顔だった。当然、なぜ母が怪我をしているのかも、父がいないことも自分たちがなぜこんなぐちゃぐちゃの街にいるのかということも全く理解できなかった。

「避難所生活」

私の住んでいたアパートからは6の方が犠牲となってしまった。父を含め、兄の一番の親友だった隣に住む2人の兄弟も亡くなった。後から聞くと、芦屋市の中でも一番被害を受けた町だったそうだ。

18日、私は父の死体安置所となっていたところへと行き、最後に父の顔を見た。その日のことは全く覚えていない。その夜は、兄も私も高熱を出したそうだ。小さいなりに、父の亡くなった姿に衝撃を受けていたのだと思う。23日には火葬だったが、祖母が私には衝撃が大きすぎると心配し、連れていってもらえなかった。

数日後、母は怪我をしたために地元の田舎の病院へ行き、兄と2人で祖父の教会での避難所生活が始まった。日に日に避難所に駆けつけてくる人も増え、知らない顔が自分の周りを行き来するという状況になっていた。教会に届いたカップラーメンやコーンスープを食べることが嬉しくて、目の前の避難所となっていた津知公園に救援物資のプロ野球チップスなどのお菓子を兄ともらいに行くのが日課になっていたりもした。瓦礫に登って、思い出のものを掘り出す中で父が使っていた帽子やバットが出てきた思い出がある。

また、海外や他府県からも多くの方が支援に駆けつけて来てくださった。私たちを元気づけようと常にそばにいてくれ、安心して好きなように遊ばせてくださっていた。現在もそのときの支援がきっかけで、お付き合いをさせてもらい、孫のように成長を見守り続けてくださっている方もいる。海外から来

た鼻の高いお兄さんに抱っこしてもらって泣いたこともあった。私は、そんな人たちの温かさがあったからこそあの状況の中で笑って過ごせていたのだと思う。本当に感謝の気持ちでいっぱいである。

「家族」

1年9か月後には、家族3人がそろって住む家を見つけることができた。3人には狭いアパートだったけれど、久しぶりに家庭の生活が戻ってきたことにほっとする時間を持つことができた。保育園に入ってもすぐに友達もできて、楽しく過ごすことができた。母は、仕事があるにも関わらず自転車で毎日送り迎えをしてくれていた。いつも帰りに買い物に行き、わがままを聞いてくれて好きなものを買わせてくれた。小学校に入学してからは、父のいない生活に寂しさを感じるが増えた。一年生のとき、授業懇談会に母が来れなくて泣いてしまったこともあった。母は仕事が忙しくて仕方ないけれど、なぜ自分だけ来てくれないのかと思い寂しくなった。私は、長い間父の死というものに向き合うことはできなかった。というよりも父がいないこと自体、理解できていなかったのかもしれない。

「震災の傷」

私の母は、隠すことなく父や震災のことを小さい頃から話してくれていた。だから、私は友達と震災の話になったときも父のことを特に秘密にしようと思ったことはなかった。しかし、友達同士が家族の会話をしているときや父親のことを自慢している時には、とても居づらくて一人涙をこらえていることもあった。また、震災で心を傷つけてからは「死ね」などという言葉が敏感になっていて、周りで友達が言っているだけなのに自然とその言葉が突き刺さるように頭に入ってくることもある。特に小さい頃はひどく、あまりのショックで帰ってきて母の顔を見て号泣したことがあった。

また、暗い所が怖い、一人でトイレに入れない、狭い所が怖いなどと小さかった私にも多くのトラウマとして残っていた。高校での勉強などを通して、普通の症状だったと知ることができた。また、学校行事である防災訓練では起震車に乗ることは絶対にできなかった。日常に起こる小さな地震にも体は恐怖を怯え、今でもずっと起震車には乗れない。あのときの揺れは、これからもずっと体が覚えているのだと思う。

「父への手紙」

私が通った精道小学校には「祈」と入った慰霊碑が立っていて、保護者のところに父の名前も刻まれている。今でも毎年17日には全校生徒で追悼式が行われる。私が6年生になった年からは生徒だけで進行する話がすすめられ、総合学習の時間で事前学習が始まった。グループに分かれて震災のことや献花や黙とうの意味まで調べ、発表の練習を繰り返し下級生に伝えた。

私はこの追悼式で父への手紙を読むことになった。しかし、実際に書くことになったとき私の手は全く動かなかった。毎時間この授業になると、避け続けていた自分がいた。ある日、当時担任だった先生が優しく「父が亡くなって辛いことを書きなさい。」と言ってくれた時に「寂しくないもん。」と言ってしまった。なぜそんなことを言ってしまったのかと後悔したが、その時の自分にはきっと父のいない生活が当たり前になってしまっていたのだと思う。母もあのときの自分を受け止めてくれていた。追悼式当日は、初めて父への気持ちと自分の近況をしっかりと伝えることができた。今も、小学校では後輩が毎年、追悼式と語り継ぎを引き継いでくれている。

「境遇のともだち」

私が避難していた教会にある日、大学生が訪ねてきて家庭調査をしにやってきたことがあった。それはあしなが育英会という遺児の心のケアを支援している団体だった。あしなが育英会の存在を知ってから、私には本当に多くの出会いがあった。後に遺児の集いを開いてくれ、いつも大人や学生が私たちを歓迎してくれた。そこでは、震災で親を亡くした境遇の友達とも出会った。年を重ねるにつれて自分の家庭のことや親のことを隠さずに言えるようになった。1999年には東灘区にレインボーハウスというケア施設が設立した。私の家から約5分のところにあり、特に小学校から中学校の間は毎日のように通った。今でも時々訪れ、素の自分を思いっきり出して楽しむことができて安心できる場所だ。

「国境をこえた出会い」

今でも季節ごとにイベントがあり、遺児のつどいが行われる。私が思い出に残っているのは「国際的な遺児の連帯をすすめる会」というもので、世界の様々な理由で親を亡くした子らが日本に集まり、交流会(キャンプ)をするイベントだ。紛争がいまも続くイラクやアフガニスタン、エイズで苦しむウガンダ、震災を受けた台湾やトルコの子供たち。年を追うごとにニューヨークのテロ遺児やインドネシアの津波遺児も迎え、交流する機会を持つことができた。義足で歩く子やストレスで目が見えなくなった子などたくさんの仲間と歌ったり踊ったりしゃべったり、みんなで海に飛び込んだり本当にたくさん楽しい時間を共有する。

このつどいのプログラムの1つの自分史語りの時間では、世界の現状を知るとともに安心して話せる仲間がいることに気づくことができた。言葉を詰まらせながら「僕の父は目の前で兵士に撃たれて死んだ。」「毎日、歩いて水を売って生きている。」そんな風に話してくれた。私は本当に驚き、涙が止まらなかった。親を亡くしてつらい思いをしているのは自分だけではない。同じ思いを持った仲間が精一杯生きている、ということを知ることができた。境遇の仲間との出会いは、私を大きく成長させてくれたきっかけとなった。

「多くの支援」

私は、この14年間本当に周りの人に支えられて成長してきた。2003年には阪神タイガースの星野仙一前監督が遺児を甲子園に招待してくださり、「私も生まれる前に父を亡くしました。とにかく負けるな、勇気を持って前にすすもう」そう言って励ましてくださった。私の父が大ファンだったこともあって、私もこの日をきっかけに遺品である縦縞の帽子とメガホンを抱えて応援するようになった。また、桧山選手は毎年レインボーハウスを訪れて、寄付をして支援を続けてくださっている。今では私たちの成長をみてくださっていたり、本当にいつも元気をもらっている。「頑張ってるね」と言って募金に参加して支援してくださる人がいること。そして私の知らないところで応援してくださる人。そして1番側で支えてくれている母、本当にたくさんの支えがあることを絶対に忘れてはいけない。

「マスコミ」

5年生のときの星野さんとの出会いがあった頃から私は、マスコミに注目されるようになった。マスコミは、すごく大きな情報源であるし大きな力を持つ。マスコミを通して、私の存在を知って応援してくださる人もいる。そして何より震災のことや遺児の現状など、大切なことを市民の方に伝えてくれる。しかし、テレビや新聞で取り上げられるというのは目立つことだからか、私は羨ましがられることも少なくなかった。メディアに注目される自分は決してすごくはない。目立ちたいわけではないのに父を亡くした自分は特別なのか、という悩みは今もずっと持ち続けている。また、マスコミの方が伝えたいことが先行して思いが伝えられなかったり、辛い過去を毎回聞きだされ、泣きたくなることもある。今は、マスコミの方々も震災を伝えようと懸命になってくださっていることを理解できるようになり、自分が伝えることの大切さに気づき始めた。震災があったからこそ関わりを持つことになったマスコミの方、そしてテレビや新聞を通して応援してくださる方がいること。そんな人達の存在は、これからの私の人生に大きな影響を与えと思う。そして、自分にできることをこれからも協力していきたい。

「環境防災科」

私が、環境防災科を知ったのは中学一年のときに招待で中国の天津地震のツアーに行った時だった。そこで環境防災科の先輩も参加していて、多くの訪問場所で勉強してきたこと発表していた。その姿はととても堂々としていて大人に見え、憧れだった。この日をきっかけに将来のことを考えているうちに「震災を経験した自分だからこそできることがあるかもしれない。自分の知らない震災を知りたい。」という気持ちを持つようになった。

今、震災がなければなかった学科で学び、防災について勉強している。授業の中では、震災のときに自分の知らないところで支えてくださっていた方の話を聞くことができた。警察、消防、ライフライン、

大学の先生など本当に様々な目線からのお話だ。印象に残る消防の方の言葉がある。「テレビだけの情報だけを見ないでほしい。当時、消防は動いていないという声があったけど、実際に救助活動の現場では、多くの隊員が命がけでボロボロになるまで動いていた。」小さかった私にはそんな状況があったことさえ知らずにいたことを申し訳なく思った。消防学校でも、訓練の厳しさや真剣な指導から人の命を守ることの大切さを学び、改めて消防や警察の偉大さを知ることができた。

そして、日々行われるボランティア活動の中で多くの人と出会うことができた。防災訓練や地域のお祭りや募金活動などを通して、今まで知らなかった周りの人の防災や、被災地に対しての意識について知ることができた。特に多聞南・東地区では活発に自治会の方が率先して地域に呼びかけている。授業でハザードが大きくても災害対応や社会背景といった周りの人々の意識や町の強化がしっかりしていれば被害は軽減できると学んだ。私は、改めて地域のコミュニティを広げることの大切さを知り、これからも行事の中で多くの人と関わっていきたいと思った。

「世界の災害遺児」

2004年12月26日。インドネシアのスマトラ沖で世界でも最大級の地震が起き、津波によって多大な被害が出た。あしなが育英会の交流会で翌年の夏に遺児を日本に招き、出会うことができた。そして3周年となる2007年12月には、被災地であるバンダ・アチェへと訪れ、再会する機会をもらった。そのセレモニーでは2年前、笑顔を取り戻すことができず、津波のことについて何も話したくないと言っていた子が「大学で勉強したい」という夢をしっかりと話していた。町は、温かい人たちに囲まれ自然に溢れていた。しかし、海沿いに行くと今も残る瓦礫や集団墓地が本当に多くあった。現地の人々は、「ここに見える海は土地だった。全ての土地が津波に削られてしまったんだ。」と話していた。その状況は飛行機からはっきりと見る事ができた。そこに住んでいた町、人が一瞬に流されたこと的事实をつきつけられた。橋を支える柱だけが残る姿。高床式の仮設住宅が広がる町。そして町の真ん中に港から5km先まで流された発電船もあった。遺児たちは、それぞれ津波に負けずに夢に向かって毎日、熱心に勉強していた。アチェで津波と向き合い、前向きになっていく姿に少し安心することができた。

2008年5月12日。四川大地震発生。日本よりも3倍もの面積を持つ四川省を阪神・淡路大震災の1倍ものエネルギーを持つ地震が襲った。その状況を最初にテレビを見たとき、1番にまた自分のような辛い思いをする子がいることを思い、呆然とした。昼の発生だったため多くの子供が犠牲になり、親が必死に名前を呼ぶ姿が頭に焼きついている。

私は、2か月後に現地に訪れる機会を持つことができた。まずは、大学の先生やカウンセラーの人が集まったところで私たちの支援をしてくださったあしなが育英会の方が震災遺児の心のケアについて講義を行った。そこで私も時間をもらい、この14年間どのように成長してきたかを話させていただいた。現地の方は本当に熱心に聞いてくださっていて、とても嬉しかった。そして、私たちは被害を受けた綿竹市を訪れた。そこには見渡す限りに広がる仮設住宅が建っていた。また、阪神・淡路大震災の経験が生かされ、仮設住宅には当時の地域の人が集まって住めるように話が進められていると聞いた。まだ手のつけられていない被災地を歩いた時、私は言葉が出なかった。14年前の震災当時の町を覚えていないため、タイムスリップしたような気持ちになった。そのままの形で台所が残っていたり、靴や子供のおもちゃが転がっていて、2か月前まで生活があったことを実感させられた。また、約10人の遺児と交流することができた。まだ小学校2年生程度の子供たちで最初は笑顔もなかった。しかし、絵を描いたり、人形で遊ぶ中で少しずつうちとけていったように思う。最後に私たちは自分史を語る時間をもち、震災のことを話すとその子らはじっと私のほうに目を向け、真剣に聞いてくれた。その眼差しには不安の気持ちや悲しい気持ちが表れていたように思う。そしてこらえていた涙を流すようにして「また来てください」と言ってくれた。私は、遺児の子たちがつらくなったときに日本にも同じ経験をしている人がいることを思い出して、前に進んでほしいと願っている。1年経った今もあの子たちのことをふと思い出し、どうしているか気になる。四川やアチェで起きた大災害に苦しみ、今もずっと大きな傷を背負いながら、一生懸命に生きている人たちがいる。私には、現地に行ったことでそんな人たちの状況を伝えることができる。環境防災科での授業で「響感」という言葉学んだように一方的ではなく、お互いに響き合って分かち合いながら生きていくことは大事な意味を持つと思う。これからも多くの境遇の仲間と響感し合いながら、そして関わりを持ち続けたい。

「語り継ぐ」

私は、阪神・淡路大震災をこれからも伝えていこうと思う。あの震災を経験し、語り継ぐことのできる世代は私たちで最後になるのだと思う。震災を知らない子どもたちに私たちが住むこの町に震災が起こったこと、そして何よりも命の大切さを知ってほしい。それが私の1番伝えたいことだ。

高校に入学してからも自分の通った小学校、中学校で講師として何回か話す機会をいただいたり、人と防災未来センター主催のユース語り部に参加させていただいた。いつも語り継ぐときにはどこか平気な自分があるけれど、話し始めると涙が堪えきれなくて泣いてしまうこともある。それは、年を重ねるごとに震災に対する思いが強くなってきたからだと思う。私の兄は、未だに地震のことを自分から話そうとしない。それぞれ大きな傷を負い、震災の思いも様々で、今でもずっと向き合えない人も多くいると思う。それは、あの大きな地震を受けた人それぞれが受けた影響だと思う。私にできることは、当時3才の目線から自分なりに伝えること。これからも多くの場で。

「これから」

震災が起こり、私の人生は一気に変わった。父を含めたたくさんの命を奪い、たくさんの人を傷つけた。これからも私は絶対に忘れることはない。しかし、あの地震は犠牲にしたものと引きかえに、命の大切さや人の温かさ、助け合うことの大切さなど本当に多くのことを私たちに教えてくれた。海外の遺児や日本の遺児、そして今まで出会った多くの人は、すべて父がくれた宝物だと思っている。

私には今、防災機関に就きたい夢がある。詳しくは決めていないが、やはり自分があの震災を経験したからこそできることがあると思う。アチェに行ったとき、親を亡くした子と父のことや震災のことを話しているうちに相手もいろんな気持ちを私にぶつけてくれた。そのとき、自分に安心して話してくれたことで親を亡くした子たちの気持ちをわかってあげれる人になりたいと思った。心の傷は癒えることはないけれど、自分が今まで多くの日とにしてもらったように傷ついた子たちが前向きに生きてほしい。また、ネパール訪問を通して他国の建物の立ち方を見ていると、災害が起きたときに助かるとは思えない状況だった。初めて他の国の災害に対しての危険性を知ることができた。その状況をみて、日本との防災意識の違いにも気付くことができ、またこれから学んでいきたいと考えている。

15年を迎える今、私は東遊園地に父の名前を刻みたいと思う。あの震災で生き残ったことは本当に奇跡に近いと思う。普段過ごしている普通の生活がこんなにも貴重で大切に、幸せだということを心に染みて感じる。これからも亡くなってしまった人の分まで毎日精一杯に生きていきたい。それが自分にできる最大限のことだと思うから…。

阪神・淡路大震災の記憶

神戸市垂水区
加島 絢子

《語り継ぐ》

平成7年1月17日午前5時46分 兵庫県南部地震発生

自分の記憶

私は阪神・淡路大震災当時、3歳だった。そんな小さい時のことは、どんなことでもあまり覚えてはいない。阪神・淡路大震災のことで私が唯一覚えているのは、避難していた学校の体育館で大人の人たちが、みんなに食べ物を配っていたと。それと、地震が起きた直後に階段をかけ降りていた場面しか記憶がない。

震災の映像をみるたび、本当に自分がこんな大地震を体験したのか？とよく思う。私が当時住んでいた垂水区は、映像でみるような戦争の後のような悲惨すぎる被害はあまりなかったようだ。

《震災当時》

震災当時の事を母に聞いた・・・

1月17日5：46 阪神・淡路大震災当日

震災当時は、垂水区に住んでいた。『ドオオオオーン』というすごい音と共に強い揺れがおこり、とっさに飛び起きて、家の中を見ると食器棚のコップや茶碗がおちて割れていた。部屋の中のものなども落ちていた。危険だと思い、私を起こした。私は、何かよく分かっていなかったみたいで、揺れにすぐ震えて、怯えていたそうです。

玄関から外にでようとしたが、室内も落ちた物があたり一面に散らばっていたので、ケガをしないようにスリッパをはいて慎重に家を出た。

外では近所の人たちも出ていて「どうしたのか？」「何が起きたのか？」と驚いていた。ガスの臭いが立ち込めていて、朝だったので、通勤している人がたばこを吸っている人がいたから、あちこちで「たばこを吸うな」という声が聞こえていた。垂水区は被害が少なかったが、テレビはつかないし、ガスも使えなかった。遠くの知り合いに電話をしようと思ったが、地震直後は全く使えなかった。

避難所で

避難所は学校の体育館で、数日間過ごした。避難する時に、隣でひとり暮らしをしていたおばあさんと一緒に避難した。すごくふだんから祖父母と仲が良かったから、おばあさんの様子をすぐに見に行った。

母は避難所でパンやお弁当を配ったり、近所の家へ配りに行ったりしていた。避難所にいる間も強めの余震が長く続いた。水がでたので、トイレなどは助かったがガスの復旧が遅れていたのでお風呂に入れず、遠くの加古川や奈良の健康ランドまで行くこともあったそうだ。

テレビがつかなかったのも、最初はラジオで死者や被害などの報告を聞いていたが、そんなにひどいとはみんな思っていなかったし、ほかの地域の様子など、全く想像もつかなかった。テレビがつくようになってから、長田区や中央区の都市中心部の大型百貨店や大型スーパーの建物の破壊被害の映像を見た。その時はこんなにすさまじい事になっているのにととても驚いた。

地震後・・・

しばらくの間、通勤の人たちは自転車や歩いて会社へと向かっていたそうだ。

語り継ぐ6

震災当時は、垂水区内の会社に勤めていた。会社内は物が倒れているのと、その近くの橋が崩れる危険があるということで休職となった。電話も長い間使えなかったので、東灘の知人が亡くなったのを聞いたのも何日かあとだった。職場の人も中央区で震災にあい、家族全員が建物による圧死との事だった。

だいぶ落ち着いてきてから、よくあたりを見ると、地面にひびや地割れが見えた。家も外壁が崩れている部分があることや、近くの家の塀が崩れたりして、様子が変わっていた。

《防災学習》

小学校

低学年のころの記憶はあまりないけれど、道徳の時に震災が近づくと「しあわせ運べるように」という曲を歌っていたのを覚えている。その時の学年の先生がその曲を作詞・作曲した臼井真さんという人と知り合いだといっていたのを覚えている。

中学校

中学では、JICAの人たちが訪問して来た。みんなで防災に対する話や、各国の人の話を聞いた。特に中学では、防災訓練が多かったような気がする。

《ルミナリエ》

神戸のルミナリエでは、阪神・淡路大震災犠牲者の鎮魂の意を込めると共に、都市の復興・再生への夢と希望を託し、大震災の起こった1995年12月に初めて開催されてから、今もずっと続いている。震災でひどく傷ついた神戸の街と市民の人たちに、大きな感動と勇気や希望を与えた。

私ははじめてルミナリエを見たのは、中学生の時だった。すごくきれいだった。人が多いところはあまりすきではないけれど、みんなルミナリエにみとれていた気がする。その時のことは今でもすごく覚えている。

今でも震災当時のことで傷が癒えていない人はたくさんいる。そんなひとたちのためにも、神戸のルミナリエはずっと続いていくと思う。

最近はあまり行っていないから、行きたいと思う。

《復旧・復興にむけて》

個人での取り組み

あんなに怖い体験をしたのに、人が学習しないのはなぜか？とよく言われている。それはやっぱり、一度あったことは、もう生きている間に経験しないと思っている人が多いのだと思う。

家族全体でなくてもいいから、まずは自分の命を守ることが大切だ。だからこそ、今個人でする対策が注目されているのかもしれない。

まずは自分の部屋の家具の位置を変えてみる、寝ている頭の上に落ちてくるようなものを置かない。小さい子がいる家なら、母が危険な場所をチェックしてあげる。そういったことを今やっておくというのは、すごく大事だと思う。普段から情報を集めることが必要だと思う。

地域での取り組み

垂水区でも、被害があったところはたくさんある。復興住宅で暮らしている人たちのためにもいまでもいろいろな支援をしているところもあるそうだ。長田区など被害がすごく大きかった方のためにも、垂水区での仮設住宅を用意した。

これからの災害対策として、すごく色々な地域の人たちで助け合っているのが、すごく分かる。

老人会の方たちがよく小学校で、消防の人たちをよんで消火器の使い方などを教えたりしている。ふれあい運動会を行って、お年寄りの人たちのコミュニケーションの場をつくっている。普段は朝から小

学生たちのために、大人がいろんな場所で通学路にたっていてくれる。防災だけでなく、防犯の力にもなっている。

それに、震災があったからこういった地域の人たちの交流がますます増えた。ということも忘れたくない。

《環境防災科に入って》

入学のきっかけ

中学3年でこの環境防災科を知った。はじめは公立高校の普通科へ行きたかったが、勉強が得意だったわけでもなく、担任の先生や親は諦め気味だった。そんな時に環境防災科があると、いろんな人から聞いて、見学に行くことにした。

環境防災科を受けると決めて、最後の説明会しか行けなかったから、みんなより遅れをとっていたと思う。その説明会に行ったとき、先輩達がネパールやいろんな被災地で活動している写真や映像などを見て、自分もこんなこと出来るのか？と少し不安だった。それに私は、環境防災科に入るまで阪神・淡路大震災や様々な災害のことをあまり日常的に考えることは無かったし、地震や世界で起きている災害など、ニュースなどで聞く程度だった。自分がボランティアで人の力になれるのか？本当に自分がこの防災科があるのか？とすごく悩んだ。でも、体を動かすことが好きだったし、何か手伝えらたらいいなとは思っていた。

災害や防災を学んだ3年間

環境防災科に入学して、震災のことを何度も掘り返しているうちに、当時の状況などが徐々にわかってきた。

震災当時に、これだけのいろんな人が協力し合い助け合っていたのだと、講義に来るいろんな職業やボランティアの人たちをみて思った。

ボランティアを通して学んだのは、自分から何かをすること、いろんな人とのコミュニケーションの取り方が身に付いたと思う。

阪神・淡路大震災あった1月17日は、小学生の弟に自分の体験ではないが、震災当時の話を少ししたりする。弟は「知っている。知っている。」と言うだけで、やはり今の小学生はあまり興味がないのかな？と思った。

最近の災害

私が環境防災科に入ってから、能登半島地震や最近では四川省大地震が起きた。中学の頃は、テレビでニュースが流れているのを、ただ見ているだけだった自分でも、災害関係のニュースが出ると今ではすぐに見ている。きっと環境防災科に行っていなかったら、そんな真剣に災害のことを考える機会はなかったと思う。

この前は、中国の人たちが来てくれて、みんなで防災のことや向こうの状況、国によっての違いなどを話し合っていて交流した。

消防学校

一番印象にある授業は二年間あった、消防学校の体験だ。

一年生で、はじめての消防学校だった。消防署の人たちは本当に新人の消防官に教えるように、とても熱心に厳しく教えてくれた。心肺蘇生法から、水防訓練やロープを使った訓練を、二年生でした。夜の語り部では、わたしたちの先輩が震災当時の話や、防災ゲームをした。しんどかったけど楽しかったし、すごく勉強になった。救助訓練が一番怖かったのを今でも覚えている。とてもためになった。この体験は、環境防災科でしかできないことだ。

これからの環境防災科

これから環境防災科に入ろうと思っている人たちは、阪神・淡路大震災を体験していない人たちになってくる。それでも、当時のことを学んで、風化させないようにしてってくれるという人たちがいてくれるのは、すごいことだと思う。高校生が阪神・淡路大震災を伝えいくことで、より当時のことを分かってもらえるだろう。小学生に震災当時のことを発表する、出前授業というのがある。今の小学生は震災を知らない世代になった。防災に関心を持ち、命の大切さを学ぶ機会にしてもらいたいから、もっと私たちが伝えていかなければならない。

これからも必ずどこかで災害は起きる。これからあの大きな地震が起きないと断言できない。むしろ、阪神・淡路大震災より大きな地震がくるだろう。そんな時のために環境防災科の勉強に取り組んで、次の災害にもっとつなげて行ってほしいと思う。

それに卒業してから、環境防災科に入っていたのでしょ？と言われても、恥ずかしくないように普段から意識をもって勉強しないといけないのは、環境防災科に入った人みんなに言えることだ。

あの日の記憶

神戸市西区
岸根 悠輝

[はじめに]

あの阪神・淡路大震災から14年。3歳のときの出来事だった。今は神戸市垂水区に住んでいるが、当時は西区に住んでいた。震災当時の記憶はほとんどなく、わずかしかない。この「語り継ぐ」の作成を知ったときは、正直大丈夫なのかと不安になった。しかし、自分にも何か伝えることはできると考えるようになった。自分の記憶や考えなどを書いていきたいと思う。

[震災前]

あの震災の1年くらい前に、西区のマンションに引っ越してきた。父親と母親と自分の、3人暮らしだった。人見知りをせずに、食事中でさえもじっとしてられない子供で、今とは大違いだと父親と母親は笑いながら話してくれた。家のすぐ近くには公園もあり、何度も遊んでいた。すべり台に砂場といった遊具があって、とても楽しいものだった。そして、いつも遊び疲れて、早く寝るよく寝る子だったとも言っていた。寝るのはいつも和室で、父親と母親に挟まれる形の川の字で寝ていた。

[震災当時]

地震が発生する前日もいつものように公園で遊んでいた。夜は9時過ぎくらいには、もう寝ていたようだ。この時はまさかあんな事になるなんて、思ってもいなかった。

ガタガタ・・・ガタガタ・・・。

地震の揺れで目が覚めた。すぐにいつもの朝とは何か違うことに気がついた。でも、意味がわからなかった。理解ができなかった。3歳の子供がこの状況で平然とられるはずもなく、怖くなって泣きそうになった。どうしたらいいのかわけがわからずにいると、すぐに父親が布団の上に覆いかぶさってきた。

「そのままじっとしとけ。」と、ただ一言。この一言が不安だった自分を少し安心させた。しかし、恐怖や不安は完全になくなるわけでもなく、揺れている時間がとても長く感じた。

揺れが止まるとともに、父親も覆いかぶさるのをやめた。母親も無事だった。家全体での被害は、皿が割れるといった小さなものだった。この時はまさか神戸があんな姿になっているなんて思ってもいなかった。

家族の無事を確認すると、とりあえず何が起こったのかを知るために、テレビをつけた。しかし、停電しており映らなかった。もちろん電気もダメだった。結構揺れたこともあり危険を感じたので、どこかに避難をすることになった。パジャマで寝ていたのので、セーターやコートなどありっただけの厚着をして、毛布や最低限の飲み物・食べ物をかき集めた。皿が割れて破片が飛び散っている場所があったので、抱きかかえられて外に出た。家の外はまだ暗くて何も見えなかったが、いつもと変わらない様子みたいだ。父親と母親は言葉を交わすことなく、足早に車に乗り込んだ。

この時に、「どこに行くん?」「何をやるん?」「何があったん?」と、気になったので、父親と母親に聞いたかった。でも自分はただただ父親と母親に、従うしかなかった。この緊迫した雰囲気をお互いながら感じており、怖かったというのもあり、何も言えなかったのだ。しかし、いざ避難をしてもどこに行けばいいかわからなかったようだ。そして、とりあえず近所のスーパーの駐車場に避難をした。スーパーの駐車場に到着したが、そこにはまだ誰もいなかった。ようやく家族全員落ち着くことができた。そこでカーラジオで情報を得ることになった。ラジオではまだハッキリはしていなかったが、何時ごろに何があったかなどの大まかな情報を得ることができた。父親と母親はラジオの情報を聞いた直後、衝撃を受けて言葉が出なかったと話していた。

避難してしばらく経つと、駐車場に人が集まりだした。みんな不安だったのか声を掛け合っていた。見ず知らずの人が車に来て、声を掛けてくれた。そこではお互いの無事を確認しあったり情報交換をしたりと、話すことはやっぱり地震のことだったらしい。話をすることで不安が少し取り除かれたと、父

語り継ぐ6

親と母親は話していた。

7時ごろになると外は明るくなってきた。避難をして1時間ほど経過しており、そろそろ疲れてきたので、家に帰ることになった。しかし、自分は完全に安心していただけの車の中で熟睡していた。起こされた時にはもう家に到着していた。とりあえず家を片付けることになった。だが、自分ではできることがなく、危ないから近寄るなど父親に言われ、隅っこでおとなしくその様子を眺めていた。

片づけが終わると、朝食を食べた。家にいることで安心はできたが、余震で何度も揺れるたびに、とても不安になり怖くなった。

10時を過ぎたくらいになると、祖母や親戚から電話が掛かってきた。みんなテレビで地震のことを知って無事なのかどうか心配になり、何度も電話を掛けたがなかなか繋がらなかったそうだ。電話で神戸の状況を改めて知ることになった。

お昼を過ぎたころになると、父親は仕事に行くことになった。状況が状況で行くかどうか迷ったようだが、会社の状況も気になって行くことにしたそうだ。父親から聞いた話では、会社には家やビルといった建物が倒れていて途中の道が通れず、到着するのに3時間ほどかかったらしい。神戸の姿を実際に自分の目で見て現実を知ったとき、「もう神戸はアカンかもしれんと思った」と、言っていた。

父親が会社に行ってしまうと不安になって、地震に対する恐怖もまだ残っており、その夜はなかなか眠れなかった。母親はこの日はずっと甘えてばかりだったと言っていた。

翌日からは普段の生活にほぼ戻っていて、余震もなくなっていた。自分自身も落ち着きを取り戻した。

[震災後]

震災がきっかけで変わったことはなく、5歳のときに引越しをした。同じ西区で、前に住んでいた家から、そう遠くはなかった。

小学校に入学すると新しい友達もでき、毎日遊びまわって楽しく過ごしていた。震災の話をするのもなく、地震なんてなかったに等しい日々だった。しかし、小学校では毎年1月17日前後に震災に関する行事があった。校長先生の話や、「しあわせ運べるように」を歌ったり、震災の授業があったり、先生の震災体験を聞いたり。それは小学6年生のときに引越して、転向した先の小学校でも一緒だった。正直自分は、「こんなやつだって意味ないやん。無駄やんか。」と、この行事の重要さなんて全く理解していなくて、無関心だった。

それは、中学生になっても変わらず一緒だった。「ダルイなあ・・・。」と、毎回思っていた。中学1年生のときには、舞子高校の「1. 17震災メモリアル」に、学年で参加した。その時も正直、ダルイと思っていて話なんて全く聞いていなかった。もちろん内容なんて覚えていない。そんな自分がまさか防災に興味を持つなんて、この時は全く思っていなかった。

防災に興味を持ったのは、中学3年生のときの出来事がきっかけだった。中学3年生にもなると、高校受験の話がちらほらと出てくるようになって、自分自身も意識をし始めていた。そして、中学校で学校説明会も行われるようになった。いろんな学校の説明がある中で、舞子高校の話もあった。内容は環境防災科が中心で、どんな学科なのか、どういった授業や体験学習があつて今までにどんな活動してきたのかなど、さまざまな紹介があった。話を聞いていると、だんだんと授業内容やさまざまな体験学習が楽しそうで、興味を持つようになった。この学校説明会がきっかけで、環境防災科に行きたいなと思い、受験することになった。

中学3年生のときの中学校で行われた震災行事は、環境防災科を受験することがほぼ決定しており、行事への取り組み方が変わった。ダルイなんて思わなかった。この年の行事は新鮮に思えた。そして、今までダルイと思っていた行事がいかに重要なのか、何となく気がつくことができた。また、早く環境防災科に入って、勉強したいなと思うようになっていた。

[環境防災科に入学して]

環境防災科に入学した当初、将来こうなりたいという夢や希望なんて全くなかった。高校で何か見つけなければそれでいいやと考えていた。

1年の「災害と人間」という授業で、阪神・淡路大震災について詳しく学んだ。また、警察・消防・自衛隊などの直接震災に関わった人たちや、水道・ガス・電話といったライフラインを通じて震災に関

わった人たちを、外部講師として招いて話を聞いた。内容は、当時どういった被害で、どんな活動をして、自分はその時どう思ったかなどの震災当時の話を聞いた。すべての話が自分自身の知らなかったことだったので、新しく知ることがたくさんあった。さまざまな外部講師の方の話を聞いていくうちに、ハッキリとした夢が見つかったわけではないが、何か人の役に立つ仕事に就きたいと思うようになった。あと、警察官に興味を持ちだしたのもこの頃だった。それが後に夢となった。

他にも地震以外の台風や火山の噴火などの災害や、災害のメカニズムについて勉強した。自分が知らない初めてのことで、興味があることがたくさんあった。それとともに、自分は防災について何も知らなかったことに気づかされ、もっと知りたいと思うようになった。

[環境防災科での1. 17]

舞子高校では毎年、「1. 17震災メモリアル」という行事が行われている。それは、環境防災科が中心となって行う。環境防災科に入ってから学んできたことをいかに伝えられるかを、試されているようだとは感じた。それは、高校1年生の時の震災メモリアルで行った、クイズラリーで感じたことだ。対象は小学生だったので簡単そうに思えたが、実際は簡単ではなかった。パワーポイントの作成から話し方まで小学生に合わせなければならないからだ。この日が終わるまで不安で仕方がなかった。このクイズラリーで、人に伝える難しさを改めて思い知ることとなった。

高校2年生の時は分科会の担当だった。自分は兵庫県警の担当だった。そこでは、「災害と人間」の授業で聞いたとき以上に、深い話を聞くことができ、現場での緊迫した状況が伝わってきた。また、今までの経験を踏まえて、人生において大切なことも話してくれた。それは、とても貴重な話で、なるほどと思わせる内容だった。

[東遊園地]

高校2年生のときの1月17日。あの震災から14年目を迎えた。友人に誘われたことがきっかけで、東遊園地で行われる「1. 17追悼行事」に、ボランティアとして参加した。いつもテレビで見ている、環境防災科に入学してからは、いつか行ってみたいと思っていた。そんな行事にボランティアとして参加できたことを、今では光栄に思う。

ボランティアは深夜3時ごろから始まった。「1. 17」の文字はほぼ完成しており、作業は竹の中に水を入れてろうそくを浮かべることだった。作業をしていくうちに、こんな小さなことでも役に立っているとふと思い、なんだか嬉しくなった。作業が終わったのは5時過ぎだった。

5時を過ぎたくらいから少しずつ人が集まりだした。5時30分を過ぎたころにはたくさんの人が集まっていた。予想以上の人の集まりで正直驚いたが、やっぱりこの日は特別だと実感した。

5時46分。1分間の黙祷。さっきまでざわついていた東遊園地が、一瞬にして静寂に包まれた。自分は脳裏に震災の様子が浮かんだ。神戸全体の様子や、自分自身の体験。あれから14年経ったとしみじみ思った。ろうそくがいつもと違って見えた。

この日、行事に参加することによって命を大切にしなければならないと思った。近年自殺が増えているが、絶対にあってはならない。無駄な命なんてないのだから。

初めて学校以外での震災行事に参加して、とても大切なことを学ぶことができた。こんな大きな経験をする機会なんて、滅多にないと思う。そんな貴重な経験ができて、本当によかった。来年も参加できるのであれば、是非とも参加したい。

[今思うこと]

環境防災科に入学して、さまざまな授業やいろんな外部講師の方の話を聞いて、災害や防災に対する意識がだいぶ変わった。最初は何も知らなかった自分。今なら少しは知っている。たとえ地震が今起こっても、何かしらの行動ができると思う。しかし、自分自身がわかっている、人に伝えることができるほどの知識や技術があるのだろうか。環境防災科でさまざまな体験をして、人に伝える難しさも学ぶことができた。

また、高校に入って将来の夢が見つかった。それは警察官になることだ。そう簡単になれるわけでは

語り継ぐ6

ないが、いつかその職に就いて人の役に立ちたい。また、警察官として防災を広げていきたい。

今、震災が風化してきていると自分は思う。そりゃそうだ。もう14年経つのだから。しかし、そんなの小さなことは言っていられない。自分は風化させてはいけないと思う。風化させないためにも、今の子供たちに語り継いでいくのが大切だ。講演会を開くといった大規模なことではなく、家族で震災の話をする。そんな小さなことでいい。何か伝わるはずだから。1月17日だけは、少しでもいいからあの日のことを思い出してほしい。これは、被災者だけでなくすべての人に言いたい。意識をすることによって、防災への取り組みが変わってくると思う。

防災へ何か取り組むとしたら、簡単な備えからだと思う。家の耐震化をできたら一番安心できるかもしれないが、莫大な費用がかかるのでなかなか手を出せない。だからどんな小さなことでもいいから、備えることが大切だ。家族で災害時どうするかとか非常持ち出し袋を用意するなど、さまざまなことがある。その1つ1つの積み重ねが、自分の命が助かるかもしれない。そう考えると準備を怠ることはできない。

ふと三宮に出かけてまちを眺めてみると、14年前とは比べものにならないくらい復興している。しかし、それは本当に復興しているのだろうか。建物やまちそのものは復興しているが、人の心の中は復興しきれていないと思う。人の心の中が復興されない限り、阪神・淡路大震災は終わらない。そこを復興するのが、これからの課題だ。

最後に、阪神・淡路大震災ではたくさんの方が亡くなった。そして、震災を経験してさまざまなことを学んだ。はたしてその学んだことを、現在活用することができているのだろうか。もう1度全てを見直すことも大事だと考える。自分は亡くなった方々の分も「今」を、懸命に生きていきたいと思う。

真っ黒だ！

神戸市垂水区西舞子
黒田 めぐみ

【はじめに】

私は3歳になって1週間目に震災が起こった。だから、震災のことはよく覚えていない。唯一覚えていることといえば、自宅（マンション10階）から避難するために黒い靴を履いて父におんぶされ階段を降りたことだけだ。

【阪神・淡路大震災】

- 前日 -

地震の前日夕方6時半ごろ、階下から突き上げるような「ドン」という強い音とともに一瞬揺れた。この揺れが大地震の前触れであった。

- 地震発生 -

1995年1月17日午前5時46分。

母は「ガタガタ」という音と食器が割れる音を耳にして目覚めた。「地震！」と父を大声で叫び起こした。父は「じっとしている！」と言ったが、母は遠くから地響きをたてながらどんどん迫ってくるような恐怖を感じ父と部屋を出た。二人が部屋を出たとたん大きな揺れが起こり、寝ていた布団の上にはタンスが倒れた。ほんの2～3秒差のことだった。じっとしていたら両親はタンスの下敷きになっていただろう。大きな揺れが終わりリビングから外を見渡すと辺りは真っ暗。神戸で大きな地震が起こると言われていなかったもので、頭の中が真っ白だった。

父が子ども部屋に行くと姉は布団を頭までかぶった姿で「ママー」と呼んでいた。私は頭に空箱が落ちて「いちゃい」と言っていたらしい。部屋は真っ暗で、クローゼットから服やハンガーなどがたくさん散らばっていた。私は父にベットから降ろされた。母は避難口の確保のために玄関ドアを開けた。姉と私はすばやく着替えさせられ、玄関に用意してもらった椅子に座らされた。その時に履かされた靴が『黒色』だったことがとても印象に残っている。玄関ドアを開けた時、ドアに取り付けていた飾りのベル音に気づきお隣さんが顔を出した。すばやく、暖の用意とお金などの用意をした。マンションは停電していたが非常灯がついていた。お隣さんと一緒にマンションの1階エントランスに向かった。エレベーターは止まっているため、階段で1階まで降りた。余震が起こるので、みんな必死で階段を降りていた。小さかった私はみんなのペースについていけず、父におんぶしてもらって階段を降りていった。

- マンションの様子 -

私の住んでいるマンションは、10階建て1棟と3階建て3棟があり敷地の中央に小さな公園がある。階段を使って1階エントランスに着いたのは、午前7時半ごろ。エントランスから外に出るための階段は、一部ガタガタになっていた。公園のすぐ近くの棟は液状化が起こっていた。また、その棟のそばにある受水槽の建物は地盤のズレのため（20cm程のズレ）建物を囲むフェンスに密着していた。地面は白ぼくなっていて、空から灰が飛んできていた。空は晴れることなくよどんだ空で空気も冷たく小雪まじりの雨が降っていた。まるで、映画のワンシーンのようだったと両親は話してくれた。

地震直後、狩口台に住む母方の祖父母が姉と私が二段ベッドに寝ていたのが心配でかけつけてくれたのだった。その頃、祖父母の団地では大変なことになっていた。祖父母の安否確認が取れないと団地の人たちは心配していた。

- 一軒家の様子 -

大きな揺れが終わり外を眺めるとマンション近くの一軒家の屋根がずれ落ち、壁も崩れているのが見えた。空がよどんで見えたのは、崩れ落ちた土ぼこりの影響もあるようだ。

語り継ぐ6

- 友人宅へ避難 -

公園にいとマンション友人の母と出会った。停電でエレベーターが使用できないので、余震が落ち着くまでとおじゃますることにした。友人宅は、3階建ての3階。我が家と違い、被害は小さかった。お昼になり、両親は姉と私を預けて家に戻った。家の中は家具という家具は倒れ、テレビは床に落ち、絨毯はガラスの破片だらけだった。地震当日だけでは片付け終わらないので、友人宅で2泊した。どうして私は友人宅にいたのか理由がわからず、両親がいなくなるので少し不安な気持ちになっていた。でも、いつもと違って友人と1日中朝から寝るまで遊んでも怒られることなく「楽しかったなあ」という記憶しかない。

- 歯医者・水くみ -

母は1月に姉と私の歯科定期健診予約を希望していたが、予約できずにいた。2月になったので予約の電話をしてみると、キャンセルが多く今からでも受診可能と言われたので歯医者に出かけた。まだ水は復旧していなかったで、小さい水筒に水を入れた。この水は、母が姉と私に震災の記憶が残るようにと水汲みでくませたのだった。そんな母の思いは通じず私はまったく覚えていない。

【当時の父の手帳が残っていたので、経過を箇条書きでつづりたいと思う】

～ライフラインが復旧から祖父母宅から自宅からもどるまで～

- 1月17日(火) ライフライン完全にストップ (ただし、Am. 10:00電気のみ通電する)
マンションの友人宅に泊まる。
- 1月18日(水) 自宅片付け。マンションの友人宅で2泊目。
- 1月19日(木) マンションの友人宅から狩口宅(母方の祖父母宅)へ避難。
- 1月20日(金) 長田区の(父の)実家へ行く。私立常盤高校でボランティア活動を手伝う。
- 1月21日(土) 長田区の(父の)実家へ行き片付けを手伝う。
- 1月22日(日) 自宅の片づけ。(買い物に出かける)
- 1月23日(月) 体調不良(インフルエンザと診断される)
- 1月24日(火) 体調不良(インフルエンザ)
- 1月25日(水) 体調不良(インフルエンザ)
- 1月26日(木) 自宅の片付け。
- 1月27日(金) 温泉施設に入浴・買い物に出かける。
- 1月28日(土) 自宅の片付け。
- 1月29日(日) 長田区の(父の)実家の片付けを手伝い。
- 1月30日(月) 出勤。(JR神戸駅まで開通、JR灘まで徒歩で移動)
- 1月31日(火) 出勤。
- 2月 1日(水) 自宅の片付け。
- 2月 2日(木) 出勤。
- 2月 3日(金) 出勤。水道が復旧する。
- 2月 4日(土) 自宅の片付け。
- 2月 5日(日) 自宅の片付け。
- 2月 6日(月) 出勤。
- 2月 7日(火) 出勤。
- 2月 8日(水) 出勤。
- 2月 9日(木) 出勤。
- 2月10日(金) 自宅の片付け。(母方の)祖父母宅はガス復旧。
- 2月11日(土) 自宅の片付け。
- 2月12日(日) ガス復旧。自宅に戻る。

【84歳になる父方の祖母の話】

長田区(山陽電車西代駅から徒歩5分)に叔父家族6人と同居。1階に祖母が、2階に叔父・叔母・いとこ4人が寝ていた。

-地震-

朝方、変な気持ちで寝ることができなかった。

『ドン! ガタガタ! ギシギシ!』どうなるのかと思うぐらい揺れて怖かった。布団の上にかけていた毛布を頭にかぶって、部屋の一番頑丈な柱にしがみついた。その行動は正解であった。自宅裏の崖が崩れ、土砂が家の中に入ってきた。もし、そのまま布団の中にいたら危なかった。戦後から住んでいたため、家の中で一番安全で頑丈な柱を知っていた。その柱のそばにはいつも服・仕事の用意・貴重品等を置いていたので困らなかった。揺れが終わると同時に、外へ避難できるようにすぐにふすまや扉を開けた。2階に寝ていた叔父家族に『破片があつて危ないから靴下か靴履いて降りてきなさい!』と言った。外へ出ようとしたら玄関扉は地震で飛んでいて、外階段が潰れていて降りることが困難な状態だった。1人ずつ注意しながら降りた。石垣が潰れていく音が聞こえた。大変な状況であった。再び襲ってくる余震がとても怖かったし、とても寒かった。

-近所の人-

『黒田さん大丈夫か?』と近所の人心配してくれた。安否の分からない人の救出救助をした。

ある家では、おじさんがおばさんの上へのしかかるようにかばっていた状態で発見された。おじさんは亡くなっていたが、おばさんは瀕死状態ではあつたが助かった。

お腹が空いていたので家にご飯を取りに帰ったが、電気が止まっていたためご飯はホカホカのはずが冷たくなっていた。ご飯を食べるのにおはしがなかったため、近所の人にスプーンをもらいご飯を食べた。

また、近所の人と食料を出し合い炊き出しを作った。お粥を作ったりカニ缶でカニ雑炊を作ったりした。カニ雑炊はみんな喜んで食べていた。

正常な生活ができないため、近所の人たちと協力し合った。

-避難-

祖母宅から小学校は、すでに多くの人が避難をしていたため入ることができなかった。そこで、すぐ近くにある私立常盤高等学校に避難した。ここは避難指定場所ではなかったが、非常時ということで学校のご好意により施設を使わせていただくことができるようになった。そのため、支援物質が届かず自宅から布団を持っていった。

みんな規則正しくルールを守っていたので、トラブルがなかった。見知らぬ人が避難してきた時はみんな用心をした。

校内に入ることができず外で寝ていた人は、霜柱がたつて寒くて眠れない状態だったらしい。

体育館で2日間生活を送ったが、孫4人に風邪を引かせないようにと叔父家族を被害のなかった姫路(叔母の実家)へ避難させた。祖母も姫路にいる兄宅に身を寄せた。

-会社(祖母の勤務先) -

自宅から会社へはバスで通勤していたが、地震当日交通機関がマヒしていたので徒歩で向かった。道中、茶色く焼け残った車や地面が地震で盛り上がっていた。地面が熱かった。

会社に着くと、書類は散乱し足の踏み場もなかった。社内には、隣に建っていた家の土が流れ込んでいた。会社は鉄骨でできていたため被害がなかった。隣の家は全壊になっていたが、会社が支えになって隣家の人たちは無事だった。後日、隣家の人が挨拶にきた。

-長田区の火事-

長田区の菅原通りで火事が発生した。火災現場が近いため、会社の方へ火がくるのではないかと心配しながら様子を見ていた。東風が吹いていたが、しばらくして南風に変わり火事を免れた。

ライフラインが寸断されていたため、消火活動にはお風呂の水などを利用したそうだ。

-姫路(祖母の避難先) -

仕事中に調子が悪くなり、祖母は倒れた。長田から車で姫路まで行き診察してもらったら「急性肺炎」だった。1ヶ月ほど入院した。

入院した病院内を見回すと神戸からきた透析患者さんたちが多くいた。

語り継ぐ6

-最後に『祖母の教訓』-

戦争を体験していたので、地震はそんなに恐ろしいとは思わなかった。戦争は命を狙われるが、地震は命を直接狙わないからだ。戦争の経験は貴重であった。

祖母は「水を持っておくこと」「家の中をしっかりと把握しておく」「最低限度の食料やスプーン・ストロー・ビニール袋等の小物を持つとけば役立つ」「頭にかぶるものを用意しておく」「枕元には、懐中電灯・分厚い靴下・日本タオル・貴重品を置いておく」を準備しておけば、地震時に慌てないと話してくれた。

【環境防災科に入学して】

私が環境防災科に入学した理由は授業内容が他の学校には絶対にはない授業内容や体験があることに魅力を感じたからだ。

環境防災科に入学して、外部講師の方の講義を聞いたり校外学習へ行ったり地震のメカニズムの勉強をしたりなど今までに知らなかった知識が入学当時よりもどんどん増えていき震災の知識を身につけることができた。

【語り継ぐ】

今回、「語り継ぐ」をきっかけに両親や祖母に自分が今まで知らなかった震災の体験や状況を聞くことができた。祖母宅は被害の大きかった長田区にあり「全壊」となったため、色々な話を聞くことができた。これをきっかけに、祖母が体験した戦争・神戸の水害の話も聞くことができ、私にとって良い機会となった。

現在10歳代以下で阪神・淡路大震災を経験し記憶に残っている人たちが少なくなってきた。この「語り継ぐ」を読んで色々なことを感じてもらい、災害への意識が変わればと願う。

将来につなぐ

宝塚市
香西 宗治

◆震災前日◆

阪神・淡路大震災の3週間前に父の大阪への転勤が理由で、生まれたときから住んでいた岡山県の乙島を離れ兵庫県の宝塚市に引っ越してきていた。

乙島に住んでいたときも父は1年ぐらい単身赴任で、東京に1人で住んでいたが、父以外の家族は宝塚に引っ越して来ていて荷物の整理があるため、父も土日の休みを利用して引っ越した宝塚のマンションに来ていた。

◆震災当日◆

父は火曜日の朝一の新幹線に乗って東京に帰ろうとしていたため父も母も『そろそろ起きて東京に帰る準備をしよう。』と思って起きて布団から出ようとしているときに阪神・淡路大震災が起きた。

母は普通の地震は横揺れで横に振られている感じがするのに、縦に振られている感じがして『普通の地震とは違う感じの地震だな。』と思ったらしいがすぐに地震だと分かり当時、両親と同じ和室に寝ていた僕を起し布団を被っておくように指示した。

震災当時、僕はまだ3歳で震災のことをそんなに覚えているわけではない。しかし母に起こされ、布団を被っておくように言われたのはうっすらだが覚えている。

幸いにも僕と両親が寝ていた和室には、背の高い家具などを置いていなかったことと、背の高い家具を置いていた和室の横にあるリビングとの間の襖をしっかりと閉めていたため、物の下敷きになることはなかった。

揺れがおさまり、リビングとの間の襖を空けてみると食器棚が倒れていて中に入っていた食器が全て割れて散乱していたらしい。僕も震災で気に入っていたドラゴンボールのお茶碗が割れて泣いたのを覚えている。それと飼っていた金魚の水槽が置いていた机から落ちて割れて、飼っていた金魚が全部死んだ。食器棚と金魚の水槽以外にもテレビや電子レンジなどの家庭用品が倒れていて、電子レンジは壊れてしまった。

父が割れた食器の破片で足をケガしないようにスリッパを履き他の部屋で寝ていた、兄と姉の無事を確認しようと部屋に行った。部屋のドアを開けようとしてみると、ドアの前に置いていた本棚が倒れていてドアが開かなくなっていたため父が消火器を使ってドアを壊したらしい。

普通ならドアを壊すにしてもバールなどの棒を使うだろうが、震災時はそういう棒が何もなく、部屋にいた兄と姉がケガをしていたら早く部屋から出さないといけないため、仕方なく玄関の近くに置いていた消火器を使ってドアを壊したらしい。ドアを壊し、父が部屋の中に入ると、兄も姉も地震に気付かずに寝ていてケガもなかったらしい。兄と姉を部屋から出し、僕と母のいる和室に2人を運んだ。

その後、家の電話が繋がらなかったため父は単身赴任をしていた東京の会社にしばらく出勤できないことと、県外に住んでいる両親の祖父母の家に家族は全員無事という連絡をするために、近くのコンビニにある公衆電話まで行こうとマンションの外に出た。

すると、マンション付近のアパートや電信柱などが傾いていて『今朝の地震の揺れは大きかったし、長い時間揺れていたけれど建物がこんなに傾くほど大きい地震だったのか・・・』と思い驚いたらしい。そして、公衆電話のあるコンビニに行くときたくさんの人が並んでいて、電話をするのに1時間近くかかったらしい。また、電話を待って並んでいる人の中には震災でケガをした人もいたらしい。電話をした後で『もしガスや電気が止まっていたら、ご飯が作れないし食料がいるな。』と思い、コンビニでパンやおにぎりを買って帰ったらしい。

住んでいたマンションのライフラインの状態は、電話はつながらなかったが水・ガス・電気は使えたので、震災当日は食事・洗濯・入浴も普通にできていたが、夜中にはガスが止まり、次の日には水が出

語り継ぐ6

なくなり普通に生活ができなくなったため、乙島の祖父母の家に避難した。

避難は車で行ったが、阪神高速が倒壊していて通行できなかったため、被害の少ない道路を探して避難した。祖父母の家に避難した1週間後、宝塚に残っていた同じマンションの住民に電話をかけてみると繋がり、水が出るようになったことを聞き、宝塚に帰った。帰る途中に電化製品屋で、宝塚では買えるか分からないので新しい電子レンジを買った。

宝塚に帰って来た後も、ガスはなかなか復興せず、食事を作るときは卓上ガスコンロやホットプレートや電子レンジを使った。引っ越したばかりで近所のことが分からなかったということもあったが、市の広報車が住んでいたマンションの付近に回って来なかったため、炊き出しや配給物資の配布場所や日時がまったく分からなかった。そのため、炊き出しを食べに行ったり、配給物資を受け取ったりすることは1度もなかった。

お風呂は当時、住んでいたマンションのお風呂が、電気ではなくガスで沸かすお風呂だったので家のお風呂は使えなかった。そのため近くの銭湯に寒い中、2時間近く並んで入った。しかし毎日に行けないので、電気ポットでお湯を沸かしてそのお湯を使って体を拭いたり、市役所の簡易風呂に入りに行ったり、河川敷でしていた自衛隊のお風呂に入りに行った。自衛隊のお風呂はテントを張り、その中に大きいゴムプールのような物にお湯を溜めて入るもので、時間制限もあったらしい。

震災当時、家屋の被災度を市の役員が診断してランク付けして一定のランク以上の家屋に住んでいる人は、避難所に避難するものがあつた。その診断で住んでいたマンションはまだ新しかったこともあり、地下からの液状化だけで被害は少なく、小学校や公民館に避難することはなかった。

◆震災対策◆

阪神・淡路大震災が起きるまでは、家の家具の固定はほとんどしていなかった。しかし、震災後でリビングの食器棚が倒れて大切なお皿などがたくさん割れてからは家具の固定をするようになった。

他にも阪神・淡路大震災のときは家族全員が家にいたが、地震はいつ起こるか分からないから、地震が起きたときの集合場所を決めている。

また、地震が起きたときに家の電話や携帯電話が繋がらなくても、公衆電話はつながる。だから、両親の仕事先の電話番号や家族全員の携帯の電話番号を書いた紙と、テレホンカードを持ち歩くようにしている。

◆父の感想◆

今、震災を思い返すと当時、引っ越したばかりでまさか地震が起きるとは思っていなかったからびっくりした。しかしちょうど引っ越してきたばかりで、東京に単身赴任しているときにテレビで震災を知ったとかではなく、宝塚にいて家族と一緒に避難とかができたから良かったと思う。住んでいたマンションの被害もほとんどなく、車庫に停めていた車も普通に使えて、玉島の祖父母の家に車ですぐに避難ができて良かった。また、あれだけ大きな地震でも家族の1人にもケガがなく、それが1番の幸이었다と思う。

◆母の感想◆

震災当時、引っ越してきたマンションがまだ新しく、テレビで見るような倒壊などはしていなかったから良かった。また、1日目は電話が繋がらなかったものの他のライフラインは使えてすぐにどこかに避難しないといけないこともなかったし、震災の翌日には乙島の祖父母の家に避難できたし良かった。引っ越したばかりで地域のことがよく分からなく不便なこともあったが、主人も家にいて家族全員ケガの1つもなくてそれが何より良かった。

◆環境防災科に入ったきっかけ◆

僕は中学3年生のとき将来、消防士になりたいと思っていた。進路面談で担任の先生にそのことを言うと、環境防災科を進められ初めてこの舞子高校に環境防災科があることを知った。そして夏休みに行われたオープンハイスクールに行くことにした。オープンハイスクールで、環境防災科には1年と2年のときに消防学校に1泊2日で体験入校をすることや、ボランティアに力を入れていることや、校外学習で色々なところに行き実際に目で見て勉強することを聞き、普通科では学べないことをたくさん学べることを知った。

また、消防学校の体験入校に1番興味を持ち、環境防災科に入りたいと思うようになった。それからは、国語の先生から出された小論文の課題を毎日して小論文の勉強をひたすらした。

他にも、中学校で行われた推薦入試志望者を対象とした面接練習を受けた。その面接練習で先生から指摘されたことなどをふまえて家で姉に手伝ってもらい、面接練習をした。その甲斐があっただけで、環境防災科に入学することができた。

◆環境防災科に入って初めてしたボランティア◆

環境防災科に入学して最初にしたボランティアは、1年の夏休みに三宮でした新潟県中越沖地震の募金活動だった。僕自身、今まで道端で募金活動をしているのを見てもなんとも思わず募金しなかった。だから募金活動をするまでは『どうせ皆気にも止めないだろうな。』と思っていた。

しかし実際に募金活動してみると、小さい子からお年寄りまでたくさんの方が、足を止めて募金をしてくれた。募金をしてくれた人のなかには「新潟の困っている人たちのために使ってあげて下さい。」や「頑張ってください。」など声をかけてくれる人がいたし、「暑い中、大変やろ?」と言ってジュースの差し入れをしてくれる人もいてとてもうれしかった。

また、お年寄りの人の中には「これだけしか入れられなくてごめんね。」と言いながら小銭を入れてくれる人がいた。しかし僕はたくさんのお金を募金した人がえらいとかではなくて、新潟の人たちの力になりたいと思って募金をしたその気持ちが1番大切だと思った。

◆長田のまち歩き◆

2年の1学期に、校外学習で阪神・淡路大震災で神戸市の中で特にたくさんの被害を受けた神戸市長田区に行き、震災を経験した人たちから話を聞いた。

話を聞くと店や家が全壊または半壊をして、建て直すのが大変だったことや、店の商品が壊れたりして震災後もなかなか店を開けられなかったことを聞いた。

宝塚の友達に震災の話を聞いても家が倒壊または半壊したと聞いたことがなかったので、その話を聞いて『やっぱり阪神・淡路大震災はすごく大きな地震だったのだな。』と思った。

また、話をしてくれた金物屋の人は「自分たちは家族の全員が無事だったから、震災の話ができる。けれど、あの震災で家族を亡くした人たちは、今でも震災の話をしたがらない。だから、震災でいくら物が壊れたり、住んでいる家が倒壊しても家族が無事なら前を向いていける。震災はたくさん物や住んでいる建物が壊れたり悪い面もたくさんある。けれど、家族の大切さ、普段は当たり前のように使っているライフラインのありがたさ、わざわざ遠い県外からボランティアに来てくれたりと人の温かさを改めて確認させてくれるという良い面もあった。」と言っていた。

その話を聞いて僕も環境防災科の“語り継ぐ”というレポートでこんな風に震災の話を書けるし、このレポートを書くに当たって両親も震災当時のことを話してくれたのも、家族や親戚に亡くなった人がいなかったからだと思う。震災はたくさん人の命を奪うし、たくさん人の心に傷跡を残す。しかし、傷跡を残すだけでなく、普段では当たり前のことがどれだけ幸せなことなのかを改めて教えさせられるものでもあると僕は思った。

◆将来の夢◆

中学3年生のときから将来、消防士になりたいと思っていた。しかし高校2年生の修学旅行で農業体験をした普通科の友達から話を聞いて、酪農に興味を持つようになった。

それからたまに農業に関するテレビ番組を見るようになった。テレビで見ていると近年、ダサイやし

語り継ぐ6

んどいや儲からないなどの理由から農業をする若者が減っていることや、後継者問題や、農業の知識がない人でも農家の作業を1から教えてくれることを知った。そして農業をしている人が「食べる人たちのおいしいという一言があるから頑張れる。」と言っていたのを聞いて酪農は確かにダサいいし、人気がないかもしれないけれど、やりがいのあるいい仕事だと思うようになった。

そして今では将来、北海道で酪農をしたいと思っている。また、僕が酪農をしたい北海道には十勝岳などたくさんの活火山がある。その活火山が噴火したら、たくさんの被害が出る。だから将来、北海道で酪農をしながら、環境防災科で学んだことを農家の人たちなど色々な人たちに配信していきたい。

◆“語り継ぐ”を書いて◆

今回、このレポートを書いて震災当時僕はまだ3歳で震災のことをそんなにたくさん覚えているというわけではなかったもので、色々な話を聞いて良かった。「震災が風化してきている。」と言われる中で、このレポートで少しでもたくさんの人が震災のことを知ってもらえるとうれしく思います。

伝えていく記憶

神戸市垂水区
後藤 達弥

1、震災より前

阪神・淡路大震災の前日の1月16日、僕はまだ当時3歳だったから記憶はない。変わったことが一つだけあった。祖父母の家に居た手乗り文鳥を飼っていたらしいが、いつもは夜は寝ているのにこの日だけずっと暴れていたり鳴いていたりした。

震災が発生する前は普通の生活をしていて、このような大きい地震がおきることをわかっていなかった。僕は普通に家族とも旅行に行っていたし、遊びにも行っていた。これは誰しものが普通の生活をしていて、このような大きい地震が発生するとは思っていなかった。

2、震災直後

僕の家族は弟がひとりの4人家族でみんな一緒の部屋に寝ていた。5時46分に地震が発生して父と母は飛び起きたらしい。当時3歳だった僕もなにがおきたのか分からず起きてきたらしい。寝ていた部屋にはテレビはなかったがタンスはあった。震災でタンスが前に出てきていた。

母は僕と弟の上に倒れないようにタンスをおさえてくれた。地震がおさまってからリビングに行った。家の中はたいしてぐちゃぐちゃにはなっていなかった。テレビや食器棚が前に出てきていたり、オープンが倒れていただけであった。

たいして、物も割れておらず食器棚にあった皿が一枚割れた程度ですんだ。様子が知りたかったらしく玄関も開いたので、父はマンションのエントランスへと行った。マンションは家の中とは違ってかなりひびが入っていたり、段差がずれているなどの被害があったらしい。まず、食料確保をしないとイケないから、父が買ってきてくれた。パティオが近くにあったが、人が多く来ていると思ったから白川の方へマンションの人と買いに行ってくれた。マンションの上にはタンクがあり、少しの間は水がでた。

ほかにも、震災から1週間ぐらいたってから九州のおじさんがお金とお米を送ってきてくれた。これが人と人とのつながりだと思った。

九州のおじさんからのお米とお金を送ってくれたと親に聞いた時このようなつながりがあるからこそ人は生きていけるのだと実感した。

3、震災から大分たってから

屋上にあったタンクの水が1週間ぐらいで出なくなったから、加古川の土山というところの祖父母の家へと行った。車で祖父母の家に行った。高速が使えず下道で行った。高速を使って20分、普段の下道なら30～40分で行けるところを4～5時間かけて行った。

加古川も震災で揺れたが水は出たし、電気も使えた。さらにガスも使えた。祖父母の家は普通に暮らせた。食料も普通に買えた。加古川のスーパーとかも普段通り営業していたから買い物もできたらしい。

それから、父はいつも通りに会社へと祖父母の家から通勤していた。父が通勤していた会社では無料でカセットコンロが配られていたり、おにぎりが配られていたそう。他にも非常食や生活に必要なものがいっぱい配られていたそう。このことを父に聞いた時、父が通勤していた会社にすごく感謝をした。

しかし、父は自分が震災の被災者だが祖父母の家で普通に暮らしていることが出来ているし食料もスーパーで買えることができるから食料はほとんどもらってはいなかった。父の会社に通勤していた人の中にはまだ食糧がちゃんと手に入れることができない人もいた。だから、普通に生活ができていた父はおにぎりやカンパンなどの非常食をもらえることができなかった。逆にもらうのに抵抗を感じたと言っていた。

そして、自分のマンションがガスを使えだしたころに家に戻った。祖父母の家にはだいたい1ヶ月ぐらいいた。祖父母には非常に感謝をしている。

余震が多かったため、いつでも逃げる事が出来るようにジャージなどの服を着て寝ていた。しかし、

語り継ぐ6

この時はまだ非常持ち出し袋を作っていなかったし、知らなかった。僕の家は最低限必要なものしか用意していなかった。しかし、今ではいつ災害が起きてもいいように非常持ち出し袋も作ってあるし、家族とはぐれたときの待ち合わせ場所も決めてある。これは震災からの教訓だと思う。

4、自分がすんでいたマンションの被害

今僕が住んでいるマンションは震災の少し前くらいにできて、引っ越しをしてきたからマンションがほぼ新築の中の被害はあまりなかった。しかし、家のマンションの壁は大きく亀裂があった。このマンションはほぼ新築だったから被害が少なかったと思えた。震災を忘れない為に壁に亀裂が入ったり、エントランスの段差が一段下がっている写真を今でも残している。

マンションの3段式駐車場の2段目の鉄板が落ちて下の車がつぶれていた。

今は耐震工事をしたから、震災の傷跡は残っていないが耐震工事をする前は壁などに少しの亀裂が残っていた。もう、今は耐震工事をして傷跡は無いが、マンションに被害が少なかったことは奇跡だと思う。幸いにも僕の友達や周りの人も誰も亡くってはいなかった。

僕の住んでいるマンションは「り災証明」も書いた。それも今でも家に残っている。この「り災証明」も震災を風化させないためにもものだと思った。マンションが倒れなかったから仮設住宅に住むことはなかった。だから、マンションがほぼ新築だったから震災の被害が少なかったと聞いて、奇跡的なものだと思った。

5、阪神・淡路大震災を理解したとき

まず、阪神・淡路大震災に触れたのは小学校5年のとき「しあわせ運べるように」を音楽で習った時だった。この曲が作られた理由と一緒に震災のことを教えてもらった。しかし、このときはなにも感じなかった。ただ、大きい地震があった。という程度の理解だった。しかし、中学になると1月17日が近づくと震災についての話題が多くなった。ここで、震災をしっかりと理解していた。中学では震災の概要やどのような事があったのかを教わっていた。多分、ここで震災という大きな地震をしっかりと理解が出来た第一段階だと思う。

舞子高校の環境防災科に入学するにあたって、「人と防災未来センター」へ行った。ここの防災館のほうで阪神・淡路大震災の映像や当時の町が再現されているのを見たりした。他にも、震災のときの写真や詳しいことが書かれたことを見て色々理解をした。他にも「12歳からの被災者学、阪神・淡路大震災から学ぶ78の知恵」という本を読んだ。この、本には震災のことについてと救助活動のことが詳しく書かれていた。僕が阪神・淡路大震災のことを一番理解が出来たと思うのは「人と防災・未来センター」に行行って学んだのと本を読んだことだ。

「人と防災未来センター」では震災のほとんどのことを見る事ができたと思う。「人と防災未来センター」をでたあと、震災についてすごく考えた。阪神・淡路大震災のことを深く知ったので絶対忘れることのできないものだと思った。

「12歳からの被災者学 阪神・淡路大震災から学ぶ78の知恵」を読んでこの本は震災の教訓が書かれていた。中学の時は阪神・淡路大震災では「こんなことがあったのか」や「このような復旧作業をしていたのか」となど思っていた。しかし、高校でもう一度読んでみると思ったことが変わっていた。「復旧作業にはこんなに時間がかかったのか」や「避難所ではこのようなことがあったのか」など思った。僕は避難所に入っていなかったから、避難所の生活を知ることができた。

6、環境防災科にはいって

僕が舞子高校、環境防災科に入って、1年で、阪神・淡路大震災のことを多く学んだ。自分が中学のとき学んだことや聞いたことより詳しく学んだ。色々な会社や警察・消防の人からの講義を多く聞いた。震災当時の映像も見る事が出来た。震災のときは近隣の人が助け合ったと知った。

このことを知ったときいざという時は近所の人助け合えとわかり、処置の仕方を知っておくことが必要だと思う。災害が発生したさいには、近隣関係が大切だと知った。もっと地域などの活動に参加して近隣関係を作っておきたいと思った。

1年次の時、小学校の子たちと「安全マップ」を作った。「安全マップ」を作ったことによって、自

分が通っている学校付近の安全さと危険さを知った。地域みんなで「安全マップ」を作り自分の町の防災を見直すことによって、みんなの防災に対する意識が変わってくるのではないか??と思った。中学で行ったが、高校1年でも「人と防災未来センター」へといった。中学の時とは、「人と防災未来センター」の見方が変わった。中学の時は「震災はすごく被害が出た地震」や「人が多く亡くなった」などの悲しいものだと思っていた。高校では、「絶対に震災を風化させてはいけない」や「教訓から対策は絶対に必要なもの」などの防災に対する知識だと思えた。

2年次の長田のまち歩きで、震災当時のいろいろな話を聞くことができた。町歩きでは、店ごとに話を聞いた。みんなそれぞれ違う震災体験をしていて、震災について多くのことを理解することができた。震災の話を聞いている時、親戚や友達や家族を亡くしたという話を聞いた時辛かった。それでも、長田の人たちは顔色を変えず震災体験を話してくれた。この話を聞いて、震災のことを絶対に風化させてはいけないと思った。長田の地下にあった震災当時など写真が残されてあった。そのような写真を見ると少しばかり辛いものを感じた。しかし、このように写真やものを残しておくことによって長田の町の人は阪神・淡路大震災を忘れないようにしているのだと思えた。

5月12日中国の四川で大地震が発生した。自分たちは阪神・淡路大震災を経験していたからすごく印象的だった。少ししてから、中国の四川のための募金活動が行われた。もちろん参加した。神戸が震災にあった時も他の都道府県の人や海外の人が支援をしてくれたからだ。僕は震災を経験して支援をしてもらった。だから、僕は募金活動ではあるが支援をしたいと思った。

この募金活動では多くの人がお金を入れてくれた。この人たちは何かしら支援がしたいのだと思った。お金を入れてくれた人の中に阪神・淡路大震災を経験している人がいるかもしれない。震災によって、親戚や家族、友達を亡くした人がいるかもしれないと思えた。募金活動をしている僕たちや、お金を入れてくれている人たちはみんな同じ思いなのだと思えた。これは、ひとつのひととひとのつながりだと思った。これから、また多くのボランティア活動がある。できるだけ、多くの活動に参加をして人のつながりを作っていき災害があった場所にはできる限りの支援をしたいと思えた。

7、1. 17追悼式に参加して

僕は2年の1月17日友達と追悼式に参加した。1年の時にもいける機会があった。毎年東遊園地で行われている。時間まではみんなで遊んだり、しゃべったりとしていた。しかし、東遊園地に入った時、すごく静かだった。東遊園地には「1. 17」と竹筒で書かれていた。最初は少し意味がわからなかったが、その竹は6400本あるらしくて亡くなった方々の人の人数と一緒だとわかったときは少しきつかった。その竹に来て頂いた人がろうそくに火をつけて行っていた。そのあとに手を合わせている人が結構いたので、ちょっとつらかった。僕は、そのろうそくに火をつける人へ火を渡す係りをやらせてもらった。先輩からはかなりの重役だといわれた。

この東遊園地に来ている人が最初は少なかった。だから、僕はみんな忘れていっているのかと思ってた。しかし、あとから人がいっぱい来ていた。忘れていたわけではないとわかって少し安心した。

ろうそくに火をつけるのは5時46分より1~2時間前だった。5時46分のちょうどこの時間には黙祷をした。この黙祷のときにはすごい多くの人に来ていた。この黙祷をするために東遊園地に来ている人はみんな思いが一人一人あって、その1つの思いは忘れずこれからも記憶として残っていくと思った。この追悼式は阪神・淡路大震災のことを風化させないためと、記憶に刻んでいく瞬間だと思う。もちろん、亡くなった方への想いもある。

この、「1. 17の追悼式」は神戸市民なら参加するものだと思う。阪神・淡路大震災のことを忘れないかもしれないが、この追悼式は阪神・淡路大震災を心に刻んでおくことができるものだと思えた。

8、最後に

まず、阪神・淡路大震災は絶対風化させてはいけないと思った。だから、僕は風化させないために、阪神・淡路大震災をこれから、大きくなっていく子供たちに伝えていきたいと思った。1. 17の追悼式にも神戸市民は参加してほしいと思えた。追悼式は毎年やる行事だし、亡くなったかたへの黙祷をしている人たちの想いを無くしてはいけない。元町でやっている、ルミナリエをやめしまうと阪神・淡路大震災を風化させてしまう。だから、終わらせてはいけないものだと思えた。

語り継ぐ6

追悼式やルミナリエを毎年やることで、阪神・淡路大震災を風化させず、みんなの心に残しておくものだと思う。僕は参加できるかぎり参加したいし、追悼式やルミナリエの作業のボランティアに参加できるものならしたい。行う人がいなくなってしまうと、来世の子が阪神・淡路大震災を知る機会が少なくなってしまうと思う。

今自分が、阪神・淡路大震災を経験し普通に生きていけているのは、みんなの支援や親の助けがあったからだと思う。多分昔の家だったらすごく大きい被害を受けていたのかもしれない。家族と一緒に新築の家へと引っ越しをしたことによって助かったと思う。だから、このことは忘れてはいけないと思った。この、阪神・淡路大震災があって環境防災科があると思う。僕はそこに入学することによって震災の知識を得ることが出来た。神戸市民の防災意識も阪神・淡路大震災という大きい災害があって高まったものだと思う。決して阪神・淡路大震災は被害をだした大きい災害ではあるが、人々を成長させたきっかけだと僕は思う。震災の辛い面のほうが人々は多いと思う。

しかし、辛い面だけでなく人々のつながりを作ることができ、国際交流などができる。決していいとはいえないがそのような面があるということだけは思っていてほしいと思う。自分が将来生きていく中で震災は忘れることはできないし、追悼式などに参加し人々の想いを心に刻んでいきたいと思う。

国際交流もこれから多くなってくるだろう。そこで、阪神・淡路大震災を話すことで向こうの方にも震災を知ってほしいと思う。僕たちも交流したがわの話を聞いていきたいと思う。

だから、決して神戸市民だけでなく震災を風化させてはいけない災害だと僕は思う。

しあわせ運べるように

神戸市垂水区五色山
佐伯 美香

～自分の記憶～

阪神・淡路大震災の時、私はまだとても小さかった。地震が起きた時も何も気づかずに寝ていた。ひとつ小さいながらに覚えていることがある。それは、大好きな家から引っ越しをしなければいけなくなったことだ。

地震のせいで家にひびが入りそれを修理するため引っ越さなければならなかった。

今まで住んでいた家から離れるのはとても不安のものであったが、私自身引っ越すのは初めてだったためとてもわくわくしていた。引っ越し先のマンションの隣の家には、私と同年の子が住んでいてすぐに仲良くなった。

地震の記憶はなかなか思い出せない。環境防災科に入って、地震の怖さを感じるようになった。もし今起きたら…？そういうことを最近考えてしまう。

地震はいつ起きるかわからない。平凡に暮らしている今でもいきなり起こるかもしれない。こうしてレポートを書いているうちに起きるかもしれない。考えれば考えるほど怖くなる。だからこそこの環境防災科でもっともっと知識を身につけ、行動にもうつるようなそんな人間になりたい。

～母の記憶～

1995年1月17日5時45分 地震発生

2階の2段ベッドで母は寝ていた。父はちょうど仕事から帰ってきたころである。兄は、地震ですぐに飛び起き、私は寝ていたようだ。

家具は少し倒れたり、物が落ちたりしていたが被害は少なかった。偶然にも前の日に家具の向きをかえていたため助かった。家が半壊してしまったが、そのおかげで改築することができた。

父は、すぐにを回って近くの集会所へ泊りこんで長田、兵庫の支援へかけつけた。翌日には、ずっと余震があり怖い思いを何度もした。情報は、テレビ、ラジオなどで得ていた。ライフラインの中で電気が一番最初につき助かったのを覚えている。

数週間たってから、長田、兵庫、灘、東灘の友人宅へ水のいらぬシャンプーや甘栗をととげに行った。今でもその時のマンションが倒れていた光景は目にやきついていて離れない。

父の友人は当日、長田、兵庫に行っているがその時燃えているところから悲鳴を聞いたと言っていた。

祖父の会社が兵庫にある。会社も地震のせいで被害を受け、直したりとても大変だったようだ。

～父の記憶～

仕事から帰ってきてすぐに地震が起きた。最初は何が起きたのかまったくわからず台所で地震がおさまるまでじっとしていた。地震がおさまり、家族のことが心配になり走って2階へ上がり、「大丈夫か～！」と声をかけながら階段を上がった。その時は、電気もつかず手探りで上がってきた。

家族の無事を確認し、家の中は危ないかもしれないから車の中に入り待機した。

ひとり家に戻り、テレビをつけてみたり、電話が通じるかどうか確認したがすべてきれていた。そこから近所も見て回り、集会所に泊まり込みボランティアの活動をした。ボランティア活動では、支援物資を運んでまわったりした。

何日かしてから、ひと段落したので外から自分の家を見たら、家がななめにかたむき隣の家にもたれかかった状態になっていた。少しの間そのまま暮らし、2～3か月してからやっと家の建て替えが行われた。

この地震で家族の絆をあらためてもつことができた。また、他人に対する思いやりの気持ちをもつことができた。これからも地震に対して甘く考えず地震対策に取り組もうと思う。

～しあわせ運べるように～

語り継ぐ6

「しあわせ運べるように」は、いつ聞いても泣きそうになる。

小学生のときには、ただ歌っていただけであったが、年を重ねるうちに歌詞は心にしみるようになった。

わたしの一番好きな歌詞は「亡くなった方々のぶんも 毎日を 大切に 生きていこう」という部分である。本当にそのとおりだといつ見ても思う。毎日を大切に一生懸命になって生きていこうとこの歌詞を見て改めて思えた。

将来、地震の被害を受けた地域に行ってもこの歌をみんなで歌いたい。どこへ行ってもみんな知っているような歌にしたいと思う。

～環境防災科に入学して～

中学の時の先輩が舞子高校環境防災科にいたので、よく話を聞いていた。オープンハイスクールでも、舞子高校を見に行き環境防災のクラスを見ている時、とても楽しそうでいいなと思った。もともと防災や環境問題などにはとても興味があった。環境防災のパンフレットを見ていると、行きたいなと思う気持ちでいっぱいになった。

高校に入って、想像以上に防災や環境について勉強したのでとてもびっくりした。環境防災科にしかない科目はとても興味をもつことができ、楽しく授業をうけることができた。地震の知識をたくさん学び、その学んだことを多くの人へ伝えたいと思う。

授業の中ではたくさんの講師の方に来ていただき、自衛隊・消防・ライフラインなど、たくさんの方から実際に起きた震災の当時の話をリアルに聞くことができた。防災についての知識や教訓を多く学ぶことができた。卒業生の方の話も聞けたり、いろいろなところから情報を得ることができ、環境防災科に入って本当によかったと思った。

知識を身につけたとしても、人に教えるとなるととても不安になる。高校1年の時に小学校へ出前授業へ行った。準備は大変なものであり、また小学生が興味をもってくれないと困る。その時小学校の先生はとても大変な仕事なんだなと思った。

教える立場として間違えたことを教えてはいけない。その不安をもちながらも出前授業を行った。しっかり調べたかきがあって、間違いもなく成功した。これからは発表などがあつたら、間違いがないか、調べに隙はないか念いりにチェックしていこうと思う。

消防学校体験入校にも参加することができ、とてもいい経験ができた。体力練成では、いままでこんなきつい体操したことない！と思うぐらいとてもきついものだった。走ることはとても苦手で、ぜんそくもちというのもあり、みんなから遅れて走っていた。そんな時、教官や先生に励まされ、1年生の時に走り切れなかった距離を2年生には走り切ることができた。応援してくれる教官や先生、また友達がいたから自分の力を出し切れたんだと思う。

また、普段できないような体験をたくさんすることができ、肉体的にも精神的にも成長することができた自分を実感した。

将来、この環境防災科で学んだことを生かしてがんばりたいと思う。自分がリーダーとなりみんなを引っ張っていけるような人になりたいとこの2年間学んできて思った。防災だけでなく環境にもしっかり目をつけ、たくさんの国へ行ってみたい。貧困の問題にも取り組みたい。たくさんしたいことがあるが、今のままでは知識はまだまだ足りないだろう。もっと自分から積極的に勉強していきたい。

～心のケア～

授業で一番興味をもったのが“心のケア”である。

心の傷は災害や事故などで命にかかわるような大きなショックをもたらす体験をした時、この体験が記憶に残り、精神的な影響を与え続けることがある。

わたしは、心に傷を負ってしまった人に助けになりたいと授業を受けた時に思った。心のケアを必要としている人は、大人だけでなくもちろん子供もいる。普段は、明るい子でも地震の話になると泣き出してしまったりしてしまう。そのようなときの対応もしっかり学んでおきたい。

完璧に心の傷をなくすということはとても簡単なものではなく難しい。でも、少しでも話を聞いてあ

げたりすることでその人が楽になれるのであれば、それは心のケアになると思う。

これからも自分を必要としてくれている人の役に立ちたい。

また、わたしは話を聞くだけでなく音楽を通じて心のケアをすることができたらいいなと思う。一緒に歌を歌ったり、楽しいことをたくさん一緒にしたい。「あなたは一人じゃないよ。」というのを伝えたい。

何があっても人を傷つけるのはいけない。災害だけが心に傷をつけるのではない、ひとから人へもあるものだ。そんなことは絶対にあってはいけない。みんな平等に生きていることをもっと感じて、命の大切さをもっと自分で知って行ってほしいと思う。

～将来の夢～

将来は音楽関係にすすむことである。誰にも言わなかったが、小学生からの夢である。高校に入学し、同じ夢をもつ友達に会い、視野が広がり頑張ろうという気持ちはずごく大きくなった。もし、友達に出会わなかったら絶対に叶えてみせようという気持ちにはならなかっただろう。とても感謝している。音楽と防災、環境は深くはかかわりがないかもしれない。でも、諏訪先生が言っていたみたいに「どんな職業でも防災や環境についてはつながっている」という言葉にとっても感動した。

夢と防災というレポートを書くときに、自分の将来の夢なんて防災につながっていないだろうなと思っていてから、聞いた時びっくりした。自分なりに調べてみると、いろいろなところで深く防災とつながっていることがわかった。もちろん防災だけでなく、環境も深くつながっていた。

レポートや調べをかさねるにつれ、さらにその夢を実現させたいと思うようになった。

最近では、音楽を通じてみんなに防災、環境のことを知ってもらいたいと思うようになった。自分たちが中心となってワークショップをひらいたり、チャリティーコンサートを行ったり、貧困問題のある国へ実際に行ったり、したいことはたくさんある。

環境について学んでいるときに、絶対に自分たちが中心となっているいろいろな問題に取り組みたいと思った。そのための知識をもっておかないと何も意味がない。そして、行動を起こせるような人にならなければ意味がない。だからわたしは、今のうちに勉強も音楽もたくさんして知識を増やしていきたいと思う。

夢をかなえるためには、難しいこともたくさんあるもしかしたらなれないかもしれない。でも、そんなことを考えてあきらめるのではなく今できることを一生懸命にやって悔いのない人生を歩んでいきたい。

先頭にたって活躍できるようにこれからもがんばりたいと思う。

～これから～

震災が過ぎ、時間がたつにつれ再び元の姿を取り戻す街。でも、精神的に回復することはそんなに簡単なことではない。また、阪神・淡路大震災を経験していない子たちもでてきている。記憶のあるわたしたちも薄れていってしまうかもしれない。しかし、絶対に忘れてしまうようなことがあってはいけない。亡くなってしまった方はもう2度と戻ってこない。地震は、命の大切さも教えてくれた気がする。

またいつ地震が起きるかわからない今、自分たちに出来ることはしっかりしておくべきである。たとえば、非常持ち出し袋をつくっておくことや、家具の固定をおこなったり小さなことでもしておくことで地震が起きたときその小さなことをしておいたことによって命を救われるかもしれない。何が起きるかわからないという心構えをしっかり持つことがとても大事だと思う。

形に表すことのできる地震対策だけでなく、防災訓練や避難訓練など防災の知識を身につけることも大切である。だからこそ、わたしたち環境防災科がリーダーシップをとりたくさんの行事に参加していくべきである。

震災は、多くの被害をだし、たくさんの人を傷つけた。でも、この災害で多くの教訓を残してくれたこともある。災害はなくすことはできない。しかし減らすことはできる。全部なくそうとするからいきずまったり、あきらめてしまったりしてしまう。

ひとつひとつの小さな積み重ねが災害をへらすことにつながる。被害にあった人には、今でも苦しんでいる人はたくさんいるだろう。その人たちの苦しみや悲しみが無駄にならないようにこの地震の教訓

語り継ぐ6

をわたしたちが語り継いでいかなければならない。

～レポートを書き終えて～

地震は本当に怖いものである。両親に震災の話を書くことはこれで2回目になるがいつもリアルで怖い。初めて聞いたのは中学校3年生のころである。3年たった今防災、環境についてある程度の知識がついた今とでは昔聞いたこととは少し違った感じに聞こえ、こうしたらよかったのでは？と思うこともあった。

年がたつにつれ震災を経験した人は、年をとっていき経験していない人が増えてくる。震災のことは、絶対に忘れないで語り継いでいかなければならないと思う。わたし自身、震災のことをよく覚えていない。だからこそたくさんの人たちにいろいろな話を聞き、子供たちに話していきたい。

これから出会った人たちに地震の怖さや環境のことについて話していこうと思う。たとえ年上であっても地震を体験していなければその怖さはわからないだろう。少しでもわかってもらえたらそれで十分である。

日本に住んでいるのだから、地震はつきものである。だからこそ、どんな災害がきたとしてもそれに対応のできるような社会を自分たち自身でつくっていかなければいけない。

災害に負けないためにも、ひとりひとりが防災の意識を高くもっておくことが大切である。

あのと時の記憶

神戸市垂水区桃山台
佐伯 萌

阪神・淡路大震災から14年が経ち、町並みはどんどん変わり新しい社会になりつつあるが、人の心に大きな影響を与えた、あの大きな出来事を忘れてはならない!!

【震災前日】

1月16日は月曜日であったが、祭日であったため、岡山から母の友達の小山さん一家が遊びに来ていたようだ。夕方に小山さん一家が帰った次の日の朝に地震が起こったので地震に遭わなくて良かったなあって、当時話していたようだ。

長田に住んでいる、父方の祖父や祖母は、次の日に大きな地震が来るとは思っていなかったようだ。祖父は、当時大阪の会社に勤めていて、朝早くに起きなければならなかったので、1月16日の夜は早く寝床に就いたそうだった。そのため、地震が発生する前にはもう目は覚めていたが、朝は寒かったので、布団の中でうつらうつらとしていたようだ。

【私の記憶】

私は当時、神戸市垂水区のマンションに家族4人で住んでいた。家族4人は6畳の和室で寝ていた。3歳になったところで小さかったし、何も気づかずに寝ていたので、正味何も覚えていない。でも、食器棚から食器が出てきてお皿の割れる音がしたのは、かすかに記憶はある。そして、母の悲鳴がたぶん聞こえてきたと思う。家族が寝ていた和室はあまり物を置いていなかった。置いているもので、しいて言えば、腰ぐらゐの高さの軽いピアノや和箏箏だった。それが、倒れてこなくて良かったと思う。もし、それが自分の上に倒れてきたならば、絶対に圧迫死になっていたかも知れない。

私は、母や父や兄に守られていただけだったので、両親は生活するのに苦労があったのかもしれないが、私自身は苦労も何もしなかったと思うと、両親に感謝しないといけないと思った。

震災のことは何も覚えてないけど、小学校1年生のときに配られた「しあわせ はこぼう」の2ページ目に、地震の被害が物語られている写真が載せられてあった。その上に、

「かいじゅうが おそってきた。」
かいじゅうだ
かいじゅうがおそってきた
みんな
ふみつぶされる
かいじゅうは
何を考えているのだ
かいじゅうの
バカーッ!!

と言う文章が書いてあるのを最初に見たときはとても強い印象を受けた。

小学生のとき何気なく歌っていた、「しあわせ運べるように」の歌詞は、一つ一つに意味があって地震になんか負けずに、亡くなった方々の分も毎日を大切に生きていこうって勇気付ける意味であったり、神戸はこれから生まれ変わって生きていこうっていう意味であったり、たくさん意味があったのにそんな意味を考えないで歌っていた。でも今はちゃんとその一つ一つの意味を噛み締め、理解している。

【当時小2、兄の作文より】

「神戸の大地震」

兄は、1月17日の5時45分に怖い夢で起きた。1分経つと地面が揺れた。そして兄は、「やっぱりなあー」と、言った。しばらくすると、母が「キャー」と、叫んだ。兄は、「うるさいなあー」と、思ったようだ。食器棚が倒れてお皿がいっぱい割れて、台所の机が壊れた。母と私が、もう少しで、箏

語り継ぐ6

筈の下敷きになりそうだったらしい。震度4になった時に、私が起きてきたそうだ。父は電灯が付くキーのライトだったので、それを使って、兄の懐中電灯を探した。なかなか見つからなかったけれど、やっと懐中電灯が2つ見つかった。けれど、マンションのパイプの中に入って取れなくなってしまった。なんとか、懐中電灯1つで足りたが、もう少しで電池が切れそうだった。

【家族の体験】

（父の話）

最初に揺れに気がついたのは、母だった。暫く揺れは続いたが、後の3人は中々起きなかった。しかし、激しく揺れて食器棚が倒れ、食卓に直撃し、食卓が割れるほどの勢いで倒れたので、食器やコップなどのガラス、陶器が飛び散った。その時に全員目が覚めた。寝室の隣のダイニングはガラスが散乱し、室内は他にも倒れたものがありそうだが暗いので父以外はじっとしていた。父が外を確認しようとしたが、外は暗く、電気も点かなかったので、すぐに戻ったそうだ。父が外の様子と、出火が無いかを確認したが、すぐには動かず、明るくなるまでじっと寝室で待つことにした。父は知人に電話連絡を取った。最初は回線が通じていたが、暫くして通じなくなった。

父は、当時三宮にある会社の会議に行こうと準備を進めていた。しかし、阪神高速が倒れていたり、三宮の辺りが火事になっていると聞いたので、危ないから会議は中止になった。父の実家の方に電話をかけると、繋がらなくて心配になったので、地震が起こって、少し落ち着いてから長田まで車を走らせて見に行った。2号線を須磨～長田に向かって車で走っていたら、パジャマ姿の人や、布団に身を包んだ人が、歩いていた。歩いている人たちは、西区の方が安全だと思ったのかなと思いながら2号線を走っていたそうだ。長田に着いたのはもう夕方だった。そのとき、祖父は家の損壊した部分や町の状況の写真を撮っていたらしい。

桃山台は被害がそんなに酷くはなかったが、地震後すぐ、中学校前のローソンに人が集まっていた。しかし、電気が来ていないのでレジが打てずに、パニックになっていた。情報収集として、車の中でラジオ聞いたり、電池式の携帯ラジオがあったので、それを使って聞いたりしていた。

復旧の順番として水道、電気、ガスだったと思う。復旧は何ヶ月もかかったらしい。給水は、水の供給は水道局がしていたと思う。復興し始めて、一週間後は、母の実家の堺市に移動する準備をしていた。地震が発生した一ヵ月後ぐらいは、堺市で暮らしていた。

（母の話）

地震の揺れは、初めは、縦に身体を持ち上げられる感じ。次に足を引っ張られるような、横揺れ。まだ、布団の中で、何が起こったのか、訳がわからなかった。寝ていた和室には、足元に和箆筥があって、ぐらぐらしていたので、傍で寝て居た、私の上に覆いかぶさって、倒れたら守ろうとした。次に少し離れて寝ていた兄を、箆筥があたらないように、足で蹴飛ばして、遠くへいかせた。怪我などはなかった。兄や私は、ずっと眠っていて、本震を知らないそうだ。

家の中は、ぐちゃぐちゃだった。冷蔵庫はキッチンの真ん中まで、歩いてきていた。食器棚は倒れて、食器はほとんど割れた。食器棚の重みで、ダイニングテーブルの足が一本折れて、テーブルも壊れた。地震の時に、机の下にもぐれというセオリーは、必ずしも正しくはないと思ったそうだ。食器の破片だらけなので、靴を履いて、室内は移動した。テレビは台から落ちて、とにかくめちゃくちゃ。マンションはエントランスのホールの床タイルが割れていた。他は特に外観は大丈夫であった。近所の水道は大丈夫で、水が出ていたのに、屋上の給水タンクが割れていたため、うちのマンションは水が出なくなった。

揺れが収まり、まず、水をお風呂と、台所の色んな鍋、やかんに貯めた。お風呂が満水になるころ、タンクの水がなくなって、断水した。母方の祖母がとにかく災害時は、まずお水を貯めろとうるさく母を育てていたらしく、まず、水がしっかりと確保出来た。次は、食べ物が無くなると思い、私の父にローソンへ行ってもらい、牛乳やパンなど買ってきてもらった。もうすでに、ローソンは人であふれていたらしい。暴動もなく、黙ってレジを待ってならんでいたそうだ。それから、停電していたので、懐中電灯を探したが、兄が遊びに使って、失くしたらしく、困ったらしい。だから懐中電灯の代わりに、車のキーのライトを使った。破片の掃除を、ほうきでした。

当時の心情は、初めはとにかく夢中。片付けなくてはと必死。あと、電気が点いて、テレビで大きな

地震があったことを知った。実家に電話してもつながらず。友達にもつながらず。後で聞いたが、向こうも必死で電話していたらしい。死んだと思っていたそうだ。主人の友達から電話で、阪神高速が落ちていることを聞いて、びっくりした。

水は、公園でくんだり、マンションの外の水道を、住民で協力して、出したり。廻りの住民が、洗車しているのを見て、激怒した。神戸も西区は被害なかったので、車で苦労して、西区のホームセンターへいき、大きな鍋、カセットコンロ二つ、ガスボンベたくさん、買ってきた。台所のガスが出ないコンロの上にカセットコンロ2台をセットした。あと、牛乳や食料も調達。食べ物はなにかしらあった。堺の母が大阪からの車の乗り入れは自衛隊に制限されていたので、知り合いで加古川のダイエーの人に頼んで、水・ウェットティッシュ・食べものなど運んでもらってくれて、助かった。お風呂は、入れないので、大なべで、湯を沸かし、子供は湯をうすめて、行水していた。母は、身体を拭いたり、髪は水で洗った。一度、スーパー銭湯に皆で行った。満員だった。プロパンガスは使えたので、銭湯はプロパンガスに切り替えたようだった。トイレは、地震直後、風呂に水を貯めたので、少しずつ使ってトイレも使えた。大便の時は流して、小便の時は流さなかった。水が大切だった。外で、トイレ借りるときは教会などに、水を汲んできてくれたら貸すといわれて、汲みに行った。

震災直後の桃山台は殆ど無傷。学校も無事。ガスが長い間でなくて、給食が作れないから、半日授業が続いた。

復興・復旧は予想を上回るスピードで進んでいった。日本人は勤勉で、熱心だと痛感した。町中が、解体工事や、建設工事で、砂埃だらけだった。みんな、肺がんになるなってよく言われていた。

震災1週間後、母と兄と私は、母の堺の実家へ避難した。兄は少しだけ臨時に転校して、堺市の平岡小学校へ行っていた。3週間ほど避難したが、母は精神状態がおかしく、両親とは、まったくうまくいかなかったようだ。

1ヶ月後、兄は桃山台の下畑台学校へ戻り、私は行っていた長田の保育園が全焼したため、しばらく父方の祖母と一緒に留守番していたらしい。母もようやく丸山病院に仕事にいきだした。少しの間、うちのマンションに大勢寝泊りしていたが、父方の祖父母は長田へ戻り、少し後に家を処分して、桃山台の建売住宅を購入して引っ越してきた。

自衛隊は、勤め先の病院で、仮設のお風呂を作って、入院患者の人たちを、入浴させてくれた。警察や消防は、震災直後はたいへんだったと思う。特に、消防は、道の狭い長田の大火事に、懸命に駆けつけても、路上駐車だらけで動けなかったらしい。火は燃え広がるばかりだった。消す水もなかなか調達できなかったらしい。

垂水はガスが3月20日くらいに復旧したので、それでやっと普通の生活らしくなったと思う。2ヶ月以上かかった。

震災を体験してからの生活に変化があった。それは、災害時の持ち出し袋だけは、作って押入れに入れている。ただ、少しの揺れでも、ものすごく恐怖を感じるようになった。自分で勝手に、あんなに大きな地震には、一生あわないだろうと、母は思っている。

【長田（北部）に住んでいた祖父と祖母の話】

地震発生の5時46分・・・

もう起床間近だったので、目は覚めていたが、余震もあると思い、布団をかぶっておさまるのを待った。タンスは倒れてこなかったが、頭の辺りにラジオが落ちてきた。やっとおさまったところで起きた。

台所では、食器棚の中から大半の食器が飛散し、履物無しでは歩けなかった。洋服箆箆は全て倒れ、仏壇も倒れ、花や水と灰まみれになり、とてもグチャグチャだった。そして、テレビは2歩ぐらい進んで倒れていた。玄関も裏戸も家が傾いているせいか、開けられず外に出られないため、近所の人たちが心配して「大丈夫ですか?」と、声をかけてくれた。戸を外して、庭から外に出て、飲み水を買いにスーパーへ行った。スーパーに行っても水は無く、ポカリスエットとかジュース類を買って飲んだ。前日から残っていた水はとても貴重であった。前夜からセットしてあったご飯だけはあったので、朝食は済ませた。カセットコンロを出し、自宅に買いだめしてあった食料で1日～2日までは過ごした。風呂の水があり、井戸があったので、トイレなどは間に合った。たまたま自宅には井戸が2つあり近所の人たちに、トイレと洗濯用の水として使ってもらった。なぜか、寒季は水が少ないのに地震で地面が揺れて水が湧き出していた。後日井戸のある家は災害時に使用提供のため届けることとなる。食べることについて

語り継ぐ6

ては備蓄があり、給食や炊き出しなど学校等であったようだが行かなくて済んだ。公園の水があると聞き、汲みに行き、給水の行列に並んだ。近所からガス漏れがあるとの知らせで家の前に張り紙をし、車の通行を遮断するようにした。

当時の長田の町は、南部の方が夜になって、燃えているのがよく見えた。祖父や祖母が住んでいた北部は家が傾いたり、家の中がぐちゃぐちゃになったりしたぐらいで、火災発生には至らなかった。しかし、アスファルト道路は割れ、穴ボコが出来ていて、自動車も走れず、夜は歩くのも大変だった。

3日後の1月20日より、祖母は祖母の母の介護に追われて、病院通いをしていた。だから、町の様子があまり分からなかったが、なかなかはかどらなかったようだった。入院していた病室は、個室でバストイレ付きの病室であったため、お風呂に入らせてもらったり、洗濯させてもらったりするために、加古郡の土山まで通っていた。

震災にあって、1週間後は私たち家族が住んでいる垂水へ来て、生活をしていた。1ヶ月後は、垂水から長田まで少しでも片付けをしようと、通ったが、板宿の道はガタガタで歩みにくい中を、ナップザックを背負い運動靴で通う。ほとんど、知人や親類の援助による自力復興に励んだ。

家を探して垂水へ6月10日に転居して来た。

《震災への今後の教訓や対策など》

まず「飲み水」の確保が絶対条件である。次に、洗濯や水洗便所用の水も必要不可欠で大事である。雑用水については、井戸水があったため近隣の人たちに喜んでもらった。

建物の損壊による屋根の「雨漏り」対策にビニールシートが大変必要となった。何故かと言うと、神戸市内では手に入らなかったためである。

電気やガスが使えないために、“炊事用”プロパンガスコンロが重宝であった。

飲料水を遠くまで貰いに行くには、ナップザックの中に厚手のビニール袋を敷いて、その中に水を入れて運んだ。入れ物を手で提げるよりは、大変楽に持ち運べたようだ。これこそ震災に遭われた人の知恵だった。

日頃からの近所付き合いをしておく。例えば、挨拶や世間話などをして顔見知りになっておくと災害に見舞われても助けてくれたり、きにかけてくれたりするため。

寝ているところには極力物を置かないようにする。しかし、運動靴や懐中電灯は自分の身近なところに置いておくようにする。

【1. 17の追悼式】

昨年私は初めて、東遊園地の1. 17の追悼式のボランティアに行った。街並みがこんなにも変化していても神戸の人の心は温かくて変わっていないと思う。ボランティアを通して人との繋がりを学ぶことができたし、人の温かさを改めて感じることもできた。何でもっと早くに行かなかったのだろうと後悔している。でも、これから何年たっても追悼式のボランティアには行きたいと思う。

【環境防災科に入って】

中学生のとき、なかなか進路が決まらなくて困っているときに環境防災科の存在を知り、少し興味を持ったので説明会に行った。この学科は、どんな学科なのかを知り環境防災科に入って、防災についての専門的の授業を受けたいと思ったし、ボランティアをしたいと強く思うようになった。

環境防災科に入らなかったら、こんなに深く防災について関わることはなかったと思う。普通の高校に入って普通に暮らしていたら、全くと言ってもいいほど災害や防災についての知識を得られなかった。だから、環境防災科に入ってたくさんの経験ができ、たくさんの知識が得られて良かったと思う。

環境防災科の授業は、外部講師の方の話が聞けたり、体験できたり、自分たちが先生となって小学校に出前授業に行ったりと様々な授業があって、楽しかった。外部講師の方の話は、自分の聞いたことのない話や地震現場で活動していた話を聞いて、凄いと思うことが多かった。私たち市民のために大変な思いをしながら、いっぱい活動してくれて、「ありがとう。」という気持ちになった。

【これから】

当時、母は震災の被害を受け精神状態が不安定になった、ということを知り、改めて心のケアは必要だし大事だと思った。心のケアともっと深く関わっていこうと思った。こんな大きい地震があれば誰もがパニックを起こすと思う。少しでもパニックを起こさないように身の安全を守るには、まず、災害の知識を得ておくことが重要になってくると思う。災害や防災に対する意識を持っておくと、いつか役に立つときが来るし、知っておいて損はない。

私がこれからできることは、震災の教訓の発信・伝承だと思う。私より下の子たちは、地震を覚えていないだろうし、経験したこともないだろうと思うので、地震の恐ろしさや防災の大切さを教え、知識を持ってもらえるように、教えていきたい。ボランティアも今まで以上積極的に取り組んでいき、たくさんの方の役に立つように生きていきたいと思う。

私の記憶は本当に曖昧で、殆ど何も覚えていない状態で、自分自身の記憶がこんなにも風化してしまっているのだと実感した。だから、風化させないようにしていきたい。

あの大きな出来事を忘れないで伝承して行ってほしい…。

阪神・淡路大震災のこと

神戸市垂水区清水ヶ丘
坂本 恵子

はじめに…

阪神・淡路大震災が起こってから、14年。当時私はまだ3才。今でも覚えていることは少ししかないけれど、家族から聞いたこと、私自身が感じたことを全て書きたいと思う。

－地震発生－

1月17日午前5時46分、ものすごい揺れと恐怖で私たちを襲った阪神・淡路大震災。

阪神・淡路大震災が起こったとき、私は父と母と姉と4人一緒に寝ていた。そのときのことを今でも覚えている。1月17日。私はまだ幼かったから、父と母の間で寝ていた。そして、震度7という大地震があったにも関わらず、私は寝たまま気付かず、揺れがおさまってから起こされた。

「おい！起きろ！！！」父にそう言われ起こされた。このとき、まだ3才だった私には状況が把握できなかった。

そして、母に押入れに入るよう言われ、姉と一緒に押入れに入った。そのときはまだ、地震というものがなんなのかを知らなかったの、何が起こったのかわからず姉と一緒に押入れに入って、今から何か楽しいことが起こるのかと思ってわくわくしていた。だけど、そのときの父と母の様子がいつもとは違うなど感じたことを覚えている。

その時の様子を父は、「ガタガタガタ！！ドーン！」と、はじめは縦に激しく揺れて突きあげられるようだった。天井が落ちてきているのかと思った。それから、私と姉をとりあえず、押入れに入れたそう。その当時、私たちが寝ているすぐ横には2メートルほどのタンスがあった。だけど、タンスが倒れてこないようにつっぱり棒を設置していたから、倒れてくることがなかった。そのつっぱり棒も、もう何年もそのままにしているため、最近天井との間に隙間があいてしまっている。古いつっぱり棒だから、頻りに調整しなければならない。もしもこのとき、つっぱり棒がなければ私たち家族はタンスの下敷ききなっていただろう。

－地震発生直後－

それから父は「えらいことになった！」と思い、まだ外は暗かったけれど玄関のドアを開けた。すると、一つ下の階に住んでいる人が「震源地は淡路みたい！」と教えてくれたそう。父の両親は淡路島に住んでいるから「淡路島も大変だ！」と心配になった。揺れが治まってから、父は何が起こったのかを確認するために、まずテレビをつけたという。

そして数分後に心配した近所のおじさんが玄関まで来てくれた。

私の家はマンションの6階で、4階には姉と同級生の友達がいて家族ぐるみで仲が良く、阪神・淡路大震災が起こったときには数分後に、その友達のおじさん来ていた。それは、私たち家族を心配して来てくれていた。そしてしばらく私の父と話をしていた。

それから父は、電話がかかってきても通じないから、とりあえずマンションの下に降りようと思い、エレベーターはとまってしまっていたため、階段で降りたそう。すると、同じマンションの人も何人かいたので話をしたそう。それから、ガス、電気を切っていないことに気付き、二次災害の火事が起きないように切ったそう。その当時は揺れを感じたら勝手にガスが切れる仕組みがなかったのか、その知識を知らなかっただけなのかはわからないが……。

それから、父と母は家の中の状況を知るためにキッチンや洗面所、姉の部屋と私の部屋へ行った。父は姉の部屋に入って勉強机がひっくり返っていることにびっくりしたそう。だけど一番衝撃的だったのは、リビングにおいてあった金魚の水槽が下に落ちて金魚が死んでしまっていたことだった。地震が発生してから、もう1時間以上経ってから気付いたことだった。そして食器棚においてあった食器は全部床に落ちて割れていた。

－震災直後の生活－

震災直後の生活は今でも少しだけ覚えている。私はまだ幼かったから、生活していく上で困ったという記憶はないけれど、水道が止まってしまって水がでない。このことに困ったことだけは覚えている。そのため、父と姉と私は3人でバケツを持ってマンションの下まで水をくみに行った。そのとき、同じマンションに住む人もバケツやなべを持ってきていて、行列だったことを覚えている。そして3人で何回も往復して水をくみに行っていた。だけど、そのとき水をくみにいくことがとても楽しかった。姉と2人で、はしゃいでいたことをはっきりと覚えている。

そして、水が出ないということはお風呂にも入ることができない。私たち家族と姉の友達の家族とみんなで父の車で明石まで行ってお風呂に入りについていたそうだ。

その当時、非常食というものを準備していなかったから父がコンビニまで行ってパンを買ってきてくれた。そのことを姉は、震災直後に非常食が配られていたんだとばかり思っていたらしい。今までは知らなかったけれど、最近知ったんだそうだ。

何日か経って、母が冷蔵庫にあるものを全て捨てていた。電気もとまってしまっているため、冷蔵庫の中にしまっている食料は腐っていたからだ。

－それからの生活－

父の仕事は一週間が過ぎた頃に再開した。

その当時、大阪に勤務していたため仕事にいけない、どうしようと思ったそうだ。

けどなんとか大阪まで行けるようになって、それから何日かは家に帰ってこなかった。仕事の都合だった。父は親戚の家にとめてもらっていたそうだ。

－その後－

私の住んでいるマンションは8階建てだが死者は出なかった。どこの階もつぶれなかったそうだ。

私が住んでいるマンションは耐震補強がしっかりと行われていたからだ。それと震源地が少し離れたのが不幸中の幸いだった。

阪神・淡路大震災は早朝に起こったから、まだ死者は少なかったほうだと父は言っていた。この大地震によって高速道路も破壊されたため、もし昼間に地震が起こっていたら父は高速道路を走っていただろうから、今こうしていることはなかったかもしれない。それに、百貨店や大丸、SOGOもたくさんのお客さんや従業員がいるから大惨事になっていただろう。けど、早朝に起こったからといっても死者は多く出た。まだ多くの人が眠りについていたので、そのまま押しつぶされてしまった人もたくさんいるだろう。

－阪神・淡路大震災を経て－

阪神・淡路大震災で失ったものはたくさんあるけれど、それだけではない。もし、阪神・淡路大震災がなければ環境防災科はなかった。そしたら、みんなと出会うこともなかったはずだ。この震災に教えられたことはたくさんある。

それは、人と人とのつながりの大切さ。命の尊さ。

今こうしてあたりまえのように生活しているけれど、それはたくさんの人に支えてもらっているから今の自分がある。阪神・淡路大震災が発生したときやその後の生活、いろんな人の助けがあったからこそ、今の自分がある。阪神・淡路大震災のテレビを見ると、私はあんなにも気楽だったけれど、そのときこんなにも大変な状況だったんだ、という気持ちでいっぱいになる。人間の命は簡単に奪われてしまう。だから、できる限り家族や友人、たくさんの人に防災についてもっと知ってほしい。そして私自身もっと命の重み、大切さについて考えなければならない。

よく、ニュースや新聞で自ら命を絶ってしまったり、他人の命を奪ってしまうということを耳にする。そんなことがあたりまえのようにになっている気がする。とても恐ろしいことだ。

あの大地震のとき生きたくても生きられなかった人がいる。このことを忘れてはいけない。

語り継ぐ6

私は環境防災科に入るまで防災のことなんて全然知らなかったけれど、勉強していくうちに一般の人たちに最低限の災害の備えをしてほしいなと思うようになった。

そのためには私自身ももっと防災について知る必要がある。高校に入ってから今までにたくさんの防災について学んだ。だけどそれは、学校の先生や講義の方々から教えてもらっただけなのでまだ人に伝えるところまでいっていない。その教えてもらった知識をしっかりと受け継いで、今度は私がたくさんの人に伝えていきたい。そしたら次はその話を聞いた人が伝えていくというように、どんどん防災を広げていけば効果的だ。

—幸せ運べるように—

この歌を知ったのは小学生のときだ。そしてそのときに初めて手話というものを知った。

私がこの歌の中で一番好きな歌詞は「亡くなった方々の分も毎日を大切に生きていこう」というところだ。

震度7という大地震で兵庫県神戸市は、まちも人もぼろぼろになってしまった。だけど、どんなにぼろぼろになっても生きていけば、またやり直すことができる。命をおとしてしまった人にはやり直すことができない。だからその分、どんなにつらくても毎日を一生懸命生きていかなければならないと感じさせてくれた。

—ルミナリエー

震災後、ルミナリエができた。私は最初、ルミナリエはただライトアップされたきれいな飾りなんだと思っていた。だけど母に、あれは阪神・淡路大震災で亡くなった人の数の電球で作られたものだ聞いてとても驚いた。ルミナリエは毎年新聞で大きくとりあげられている。しかも毎年、ルミナリエの形が変わっていて、そのすごさに圧倒される。ここ数年は見に行くことができているけれど、初めてルミナリエを見に行ったとき、電気がついた瞬間感動したことを今でも覚えている。

—これから—

私はこれから舞子高校で学んだたくさんの方のことを、家族のために、友人のために、関わってきた人やそうでない人も含めて伝えていきたい。そして、防災について学ぶことはまだまだあると思う。もっとたくさんの方に話を聞いて自分のなかで整理してじぶんのものにしていきたい。

地震はこれから先、避けることのできないものだ。

しっかり向き合っていくためにも、地震について、またその他の災害についてももっと勉強していきたい。しっかりと備えについて知識を蓄えていけば、これから先の災害に備えていけるはずだ。

—環境防災科—

私が環境防災科に入りたいと思った理由は、普通科と違って授業の中で、実際にいろんな場所に行って学ぶことができるからだ。人と防災未来センターや、三木防災センター、兵庫県広域防災センター、長田のまち歩き、人と自然の博物館、六甲山フィールドワーク、淡路島野島断層、小学生と防災安全マップや消防学校といった、今まで本当に様々な場所へ自分たちで行き、地震に関わることやそのメカニズム、震災当時の状況などを学ぶことができた。

その中でも私は中学2年生のとき、舞子高校に興味を持ち、普通科しかないと思っていたけど環境防災科というのがあると知って、自分で調べていく中で消防学校というものがあるということを知り、それをしてみたいと思ったことが環境防災科に入りたいと思った理由のひとつ。この学科は他と違って自分が実際にその場所へ行って体験することができるということ、そのことに強く惹かれた。そして何より、たくさんの方の体験した話を聞けるということだ。

—私の将来—

私は将来インテリア関係の仕事に就きたいと思っている。

そして防災とのつながりがたくさんある。まず一つ目は、インテリア用品に関することだ。単純に可

愛くしておしゃれなだけでなく、災害を防ぐ活動をしてくれるのだ。

例として、カーテンや火災報知機がある。

どこの家庭にでもあたりまえのようにあるカーテンだけれど、火災を防ぐため専用のカーテンがあるのだ。そのカーテンを家におくだけでも災害への備えをしている。

そのような家具をたくさん作って多くの人につかってもらいたいと思う。

最後に…

私は今17才で、家族や友人、大切な人を失くした人からしたらまだ13年しか経っていないと思うのかもしれないけれど、阪神・淡路大震災からもう14年経っている。まだ17年しか生きていないけれど、それでも家族や友人の大切さはわかる。もしあの日、家族の誰かが死んでいて、今一緒に生活をしていなかったら、今の私とは何か違っていただろう。いつも、家族や友人の顔をあたりまえのように見て生活しているから、突然いなくなってしまったときに存在感の重みに気付くものだ。そして、あの日こうしていればよかったと思うはずだ。

私は後悔したくない。だからいつもあたりまえのように生活していて、その慣れが怖い。だからいつまで経っても適度な緊張感を持って、人と関わっていきたい。

そして今の子どもたちに防災を受け継いでほしい。

防災の教訓を未来へ・・・

語り継ぐために

東条町
柴田 彩

自分はなにが出来るのだろうか。

はじめに

当時の私は神戸から少し遠い場所にある東条町という地域に暮らしていた。地震が起きた平成7年1月17日5時46分の記憶はない。地震が起きる前の私の記憶と、姉と両親、そして祖母、叔母の記憶をもとにまとめた文章だ。

初めての追悼式

中学3年生の1月17日、東遊園地の追悼式に初めて参加した。姉が環境防災科に所属していることもあり、参加することにした。追悼式にはたくさんの方々が来ていた。最初は何をしたらいいかも分からず、ただ姉にずっとひっついていて。まだ中学生の私は、学校で震災の話をくわしくきいたりしたこともなく、正直「なんでまだ追悼式をするのかなあ」と、追悼式の意味をわかっていなかった。その幼い考えを覆したのが、空から降ってきた被災者、そして亡くなった方々の涙のような雨だ。「1月17日は大概雨が降る」誰かが私に話かけてきた。誰かは覚えていない。胸がきりきりと締め付けられるような思いをしたことははっきりと覚えている。

追悼式では竹筒にロウソクをいれるボランティアをした。5時46分が近づくと、環境防災科の先輩方が炎を受け継いできた。そしてたくさんの方々のロウソクに炎が灯された。その都度その都度、炎は雨で消されていった。それをまたつけ直す。消える。その繰り返しだった。思いかけず回りを見回してみたら。涙を流している方がいる。炎をつける作業をしながら、姉が授業内容の話をしてくれた時に言っていた「6400人の死ではなく、6400人分の死」という事実。その事実を目の当たりにした。

追悼の瞬間、あたりは急に静まり返った。私は「あ、追悼や」となぜか焦っていたのが記憶にある。「みんなは、なにを思っているのだろうか。」「あの日のこと、あの瞬間のことを思い返しているのだろうか。」中学3年生の私は阪神・淡路大震災の記憶がない分、自分のことを何も思うことができなかった。だから周りのことを考えていた。隣にいる見ず知らずの老夫婦。子供連れのお兄さんや妊婦さん。なぜ追悼式に来ていたのかはわからないが、ずっと涙を流していた。その行為から、「大切な人を亡くした」ということがわかった。来ていた人、その1人1人には、大地震の記憶とドラマがある。なぜか私は自分に記憶とドラマがないことが悔しいと思った。それらが無いことは幸せなことなのにも拘わらず。

初めて実感した人の命の重さ。参加しなければわからずにいながら毎日を過ごしていただろう。これが震災から「12年」過ぎた追悼式で私が感じたことだ。

震災の街

保育園から幼稚園に上がろうか、という時に私は、神戸の北区に引っ越して来た。あの大地震、阪神・淡路大震災が起きて1年後のことだ。「ここが神戸か」私が第一に思った感想だ。「震災の街神戸」としてテレビ越しに見た神戸とは全然違っていたため、「被災地の神戸」という印象はあまりなく、普通に引っ越ししてきた普通の場所、という風に感じていた。

幼稚園の先生がいきなり、絵手紙を書くと言い出した。文字は書けない幼稚園児なので、絵にしたらしい。私からすると、幼い時から絵は苦手中の苦手だったため、絵を描くことに嫌気がさしていた。しかも何を描くのかと思ったら、自分の体験していない阪神・淡路大震災についての絵手紙だ。私のあの時の顔はすごく機嫌が悪かったと思う。

小学校に上がり、1月17日が近づいたある日、担任の先生からある曲のプリントが配られた。「しあわせはこべるように」プリントの一番上にかかっていた。初めて聞いた曲の名前だった。漢字をまだ全然覚えていない私にとって平仮名でかかっているプリントは読みやすかったのを覚えている。「じし

んにもまけない」このフレーズをみて「あ、阪神・淡路大震災の歌なんや〜」と思った。練習を重ねていくうちに震災についてもっと知りたいと、幼いながらも感じていた。1月17日は歌っただけだった。

小学校2年生になってすぐの時に、私たちはまた引っ越しをした。今度は同じ神戸でも垂水区だった。ここでも、まえの小学校同様に1月17日に近付くと阪神・淡路大震災の曲のプリントが配られた。そこで行った防災教育ははっきりと覚えている。2年生の時は図工の時間に、また絵手紙を書いた。幼稚園のころとは違ってちゃんと文字を書いた。先生が、「地震の時にお世話になった小学校に感謝の気持ちを書いてください」とおっしゃっていた。震災を体験していない私は、なにを書けばいいかわからなかった。そして、前の小学校と比べると同じ神戸といっても防災意識に差があるのに気がついた。被害が大きい地域では記憶は鮮明に残っているし、少なかったところは風化されやすい。小学校高学年になるとそのようなことを思いついていた。

環境防災科

私が中学2年生のころ姉が「環境防災科」に入学した。「全国唯一の学科」このフレーズに心を奪われた。2年生のころから入学するのが目標だった。地球温暖化などの環境問題にしか興味のなかった私は「環境について学びたい!」というすこし曖昧な考えで進路を決めていた。

姉から学科についての話をよく聞いていくうちに「防災」そして「阪神・淡路大震災」に興味を持つようになった。3年生になると「環境」の視点から「防災」について考えるようになり、より一層「行きたい!」という気持ちが高まった。

環境防災科に入学してからは、ライフライン・消防・警察・自衛隊・防災に携わっている大学の教授、様々な視点から震災時のお話を聞く機会をもらった。自分が体験していない震災の被害の大きさを思い知った。生かされている意味を深く考えるようになった。また「人と防災未来センター」への校外学習で学ぶことが出来た阪神・淡路大震災の教訓、野島断層や六甲山フィールドワークなどを通して、地形からの災害の要因を理解することが出来た。環境防災科に入学していろいろな校外学習を通じて地震について知らないことの無知識の怖さを思い知った。

ボランティアの在り方、人と関われる素晴らしさなど、さまざまな事を「全国唯一の学科、環境防災科」で学ぶことができた。

母方の祖母と叔母の体験

母の実家は姫路市の家島町という小さな島にある。叔母は病気を患って、長田区の市民病院に入院していた。祖母はその身辺整理のため病院の近くのアパートで暮らしていた。

叔母が入院していたその市民病院は、5階の部分が潰れたらしい。叔母は当時5階で入院していた。しかし、地震が起きる数日前に急患が入って、6階に移った。その急患のおかげで叔母は助かった。

病院のベッドには患者さんを運ぶためのキャスターが付いている。地震が起きて揺れている間、きつと病院のベッドのほうがよく揺れたらう。叔母は、「地震が起きた時ほんまにジェットコースターに乗っているみたいやった。壁が近付いたり、離れたりするのを自分の目で見たのが一番怖かった」と、言っていたのだから。しかし、叔母は奇跡的に何の被害もなく無傷で無事だった。病院の電気は地震の影響で一気につかなくなっただけらしい。真つ暗な病院の中はすぐく気味が悪かったそう。

私の親戚のなかで祖母が一番被災した。しかし、また奇跡的に無傷だったそう。祖母はまず、入院している叔母が気になったそう。だから一番に叔母のもとに行った。壊れた病院を外から見た時、もうだめだ、とショックをうけ、そこに立ちすくんでしまい動けなくなっただけらしい。しかし、2人は出会い、しばらくの間、祖母の家で暮らしていたそう。もちろん水は出ない。水がないことが一番困ったそう。

どこからかわからないけれど祖母は、私の家に電話をいれてきた。そして、水も何もないことが父に伝えられた。そのことを聞いた父と母は、祖母と叔母の2人をわたしたちの家に招くため、病院まで車で迎えに行った。病院まで車で10時間ぐらいかかったらしく、「とても疲れた」と父は言っていた。祖母と叔母が来てすぐに、準備していたお風呂に入れてあげたらう。2人はお風呂に入れた時、すぐく感謝したそう。この話を聞いて、より一層災害時にライフラインが停止するのは、大変な事なのだ、とわかった。

語り継ぐ6

叔母はわたしたちの家に来るまでの間に、三木の市民病院へ移れる、招待状みたいなものをもらっていらした。祖母と叔母の2人は私たちの家にしばらくいたが、叔母は入院を続けたいといけな体だったので、病院に逆戻りした。祖母も付いて行った。病院生活がまた始まって、時々わたしたちの家にお風呂に入りに来ていらした。

そんな生活が半年ちょっと続いたある日。叔母と祖母は仮設住宅に入れることになったという知らせを聞いた。私たちも、お見舞いとして仮設住宅を訪れたことがある。ところどころだが、私もそれは覚えている。私が覚えていることは、中は狭く、暑かったことだ。そして祖母から棒アイスをもらい、近くのコンクリートの上に座って姉と一緒にアイスを食べたことだ。更地みたいなところにいきなり出来た白い、いくつもの小さい建物のあつまりに、私はかなりの圧迫感を感じた。そして、仮設住宅は新築独特のあまり好きでない匂いがし、すぐに帰りたくなっていた。

これが、母と父から聞いた、叔母と祖母の体験だ。

私の記憶と姉の記憶

17日の夜中2時ごろだったと思う。なぜか目が覚めた。その日は昼寝をよくしていたせいかなのかはわからない。なかなか眠れなかったのが最初は父と母のところに行った。しかしいつの間にかまたこたつにきていて、いつのまにか寝ていた。

姉も私と同様に急に目が覚めたらしい。姉は目がさめるまで兄と一緒に二段ベッドで寝ていた。目が覚めてからは、父と母のところに行ったらしく、入り込めなかったらしく、私が寝ているこたつに入ったらしい。ベッドに戻らなかったのは、暗闇の中のこたつの光が温かく感じたかららしい。「それでもまだ恐怖は残っていた。」と、姉は話してくれた。テレビに近いこたつの端から、少しわたしに近い位置に移動して寝てみることにしたらしい。

こたつの光のぬくもりと、人がいる安心感のおかげで恐怖心は消えた。何をしていたわけでもないが、ただぼんやり、何かを考えていたらしく、しかし、これじゃあ明日絶対起きられないなと思い、明日起こるかもしれない出来事を考えていたらしく、それは、朝母に起こされる様子だそう。ただでさえ夜寝付けなく遅くまで起きていたのに、今またこうして暗闇の中でぼんやりしていると、朝起きるときなかなか起きられない。絶対叩き起こされるはずだ。それはまずい、と思ったらしく、無理にでも寝なくては行けないと、幼いながらも焦ったそう。しかし早く寝なくては、という焦りから余計に寝付けなくなってしまうらしい。そこで姉が行ったのが、ヒツジ数えだ。[ヒツジが1匹。ヒツジが2匹。ヒツジが…]そして眠りかけていた丁度その時、突然「ドーン！！」という揺れを感じた。「波うっているかのような揺れが続いたのは覚えている」と言っていた。しかし、私が住んでいた地域は目立った被害はなかったの、姉が感じた最初の「ドーン！！」という揺れは、実際には体験していないかもしれない。

揺れを感じてからしばらくすると、というよりすぐに父が起きた。そして千鳥足になりながら姉のすぐ近くにあるたんすまで来て、必死に抑えてくれていたらしく、この時の姉は恐怖を感じていなかったらしい。父が起きて来てくれた喜びによって恐怖は消えてしまったらしい。気がつくと母がすぐ近くにいらした、姉が母に気がついたとき、食器棚のお皿が音を立てて割れ、床に落ちた。「ビクッ」としたのを覚えており、寒気が立ったらしく。

母から聞くと、兄も起きて来ていたらしく、しかし私だけ寝ていて覚えていない。姉はこの時、私のことを「よくこんな状況で眠れるな」と呆れていたらしい。

姉がそんなことを思いながら揺られていたその時、「ガッシャーン！！」とも「ガタッ」とも言い表せない音がしたらしく、私以外の家族の全員が振り返るとブラウン管のテレビが下に落ちていた。ちょうど、姉が最初に寝ていた場所だったそう。「葵危なかったなあ」という言葉を聞き、姉は自分が危なかったことに気がついたらしい。姉がもしあのままテレビの近くで眠り続けていたら、テレビが頭直撃だった。つまり、今の姉はここに存在しなかったら。そう考えると今でも、姉は自分の身に起こった奇跡としか言えない出来事に驚いてしまうそう。

姉はこんなことを体験しながら17日の朝を迎えた。姉は安心したのか、知らないうちに眠ってしまったらしい。

震災後の出来事

私たちの家族は、阪神・淡路大震災で誰にも被害は出なかった。そして父は地震が起きてすぐに自分の両親に安否確認の電話をしたらしい。父の親戚は全員無事だった。しかし、母の親戚では、母と祖父と叔父を除く家族全員が被災した。電話は、この父の電話を最後に私たちからは一度もつながらなくなったそうだ。私たちの家族が経験した被害は電話が繋がらないことだけであった。

2回目の追悼式

環境防災科に入学して1年目の時、再び東遊園地の追悼式に参加した。中学3年生の頃とは違い、自分から率先してボランティアの仕事に打ち込むことが出来た。天気は前の年と引き続き雨だ。このとき私は、中学3年生の時に言われた「1月17日は大概雨が降る」という誰かが私に話かけてきた言葉を思い出した。「胸がきりきりと締め付けられるような思い」が再び私を襲ってきた。

黙とうの時私は、1年間環境防災科で学んできた阪神・淡路大震災の概要や被害状況など、様々な震災に関する情報が即座に頭に過ぎった。中学3年生のころ、泣かなかった私はいつの間にか、泣いていた。自分ではなぜ泣いているのか分らなかった。たぶん無知だった私に知識が入り、その知識が私の流した涙に繋がったのだと思う。

「制服をきている高校生が追悼式に参加している」ことが珍しいのか何なのかは、今でも分らないが、いろいろな新聞会社の取材をうけた。取材にはすべて応じた。

「どのような気持ちで参加しましたか」「震災のとき、家族や親せき、自分はどのような被害を受けましたか・・・」このような取材されたとき、すぐに答える気を失った。被災者にこのような取材をしていいのか。確かに、風化させないためには被災者のかたの今の状況を伝えるのも大切だ。しかし、少しは気持ちを考えたらいいのに・・・と思った。

3回目の追悼式

高校2年生の時の追悼式では、天気は晴れていた。しかし、追悼が始まるとどこからともなく強い風が吹いてきた。「私たちを決して忘れないでいてください。」風が私に訴えているような気がした。

まだ3回だけしか、追悼式に参加したことがないけれど3回いってみて「震災の心の傷はまだ癒えていない」ということが切に感じられた。

この追悼式では、取材をすべて断った。自分でもなぜ断ったのかは、わからないが取材を受けることに対して、嫌気がさしていた。

環境防災科に入学し、2回目の追悼式は私にとってこれから「環境防災科」という学科で自分がどのように過ごしていきたいかを決めることが出来た忘れられない追悼式になった。

その出来事は先輩方が受け継いできた炎を見たときである。「自分も環境防災科の生徒として、受け継ぎたい。」先輩の中には、クラスの子も混じっていて、すごくうらやましく思えた。環境防災科の生徒として追悼式に参加できる最後の年は、絶対に私が受け継ぎたいです。

人

「人という漢字は、左はらいと右はらいの、たった2画で成り立つ簡単な漢字です。でも、もしも左はらいが少しでも動いたら、右はらいは、たちまち倒れてしまうでしょう。また、右はらいが勝手に動いても、同じように左はらいは倒れてしまいます。」これは、姉が小学校の時にお世話になった先生に最後に教わった言葉である。この言葉を姉は私に教えてくれた。このことばを聞いた時はうまく理解することができず「ふーん」と流していたけれど、今思い返してみるとすごく意味を持った言葉ということが分かった。かけがえのない人生の中で、人は人に支えられて生きているのだ、人は決して一人では生きていけないのだ、と理解することが出来た。

「災害が起きたとき、自分を助けるのは自分しかない」そう思っていた私は、理解することが出来たとき、「頼ってもいいよ」と語られているような気がした。人に頼らずに生きていけることが私なりの自立だと、心得ていたので、「頼る」という言葉に少し違和感を感じた。しかし、今までも今でも人に頼っていることに気がつきました。頼っている方々に感謝したいです。

語り継ぐ6
最後に

たくさんの方の尊い命を一瞬にして奪った、阪神・淡路大震災。私たちは絶対にこの震災を忘れてはいけない。また、インドネシア・中国・ネパール・能登半島などたくさんの災害も忘れてはいけない。忘れないためにも、風化させないためにも、私たち環境防災科が交流し発信し、そしてたくさんの方々に交流を深めていってほしい。

この3年間、防災を学んできて、自分なりの防災に対する考えがすごく大きなものとなった。今は、過去の災害を風化させないことの大切さ、そして、震災を経験していないこれからの世代の子供たちへ語り継いでいきたいという気持ちでいっぱいだ。

1・17 5時46分

明石市枝吉
柴田 健人

●家族構成●

父(会社員)、母(パート)、僕(園児)、兄(小学1年生)の仲の良い家族だった。

●震災前●

僕は3歳でよく近所の子供たちとあそぶ元気な子供だった。

そのころはミニ四駆が流行っていてよく友達と外で走らせていた。いつも兄にひっついて遊びに行つて決してひとりで遊ぶことはなかった。僕はそんなさみしがり屋な子供だった。

僕は小さい頃からよく幽霊を見ていた。空を飛んでいる白い女のひと、窓を平手で「バンバン」と叩いてくる男の人、その他にも夢を見ていた。夢ではとても大きな岩が落ちてきて自分が死んでしまう夢を毎晩見ていてずっとうなされていた。震災があった夜も同じ夢を見ていた。

1月16日は父と夜遅くまで仮面ライダーのビデオを見ていたのをよく覚えている。その日は二人ともそのままテレビの目の前で寝てしまった。しかし、深夜に父が「ここで寝とったら風邪ひくから部屋に行くぞ」と言って二人とも部屋に戻り、眠りについた。それは、震災から1時間前のことだった。

●震災直後●

するとその直後1月17日午前5時46分阪神・淡路大震災が僕たちを襲った。

僕は、とても大きな揺れだったので怖くて動けなかった。腰を抜かしてしまった。兄は大きな揺れにも関わらずにぐっすりと眠っていたようだ。食器棚は倒れ中に入っていた僕のお気に入りの茶碗もほかの食器類もほとんど割れていた。前の夜に見ていたテレビも台から落ちて倒れ、ていた。僕はあの時父に言われずにずっとテレビの前で眠っていたら確実に命はなかったと思う。あの時起こしてくれた父に感謝している。

僕が住んでいたマンションは10階建てだった。僕たちが住んでいたのはそのマンションの最上階の10階だった。だからものすごく揺れが大きくて長かったようだ。

立つことができなくて、「これからどうなるんやろ・・・?私もう死ぬんかな・・・?」と思うことができるくらい長いこと揺れたようだ。母はもう死ぬと思い、死ぬ時ぐらい息子の隣で死にたいと思ったようで、必死に地面を這いつくばって兄のもとへ行き兄を引き寄せたようだ。しかし、幸運なことに家族全員は無傷で命は助かった。

あたり一面は真っ暗だった。手さぐりで出口を探したと母が言っていた。扉も開かなくて強引に開けたようだ。扉を開けて外を見たが暗くてわからなかったようだ。ただ、火の手は上がっていなかったと言っていた。電気もつかない、ガスも出ない、水道も出ない・・・ライフラインが断たれたのだ。

ただ、ずっと家で飼っていた金魚は水槽も倒れずに元気よく泳いでいたようだ。それがうれしかったと言っていた。

このことは関係ないかもしれないが、この日を境に僕が「あそこにまた幽霊がおる」などと奇妙なことを言うことはなくなったようだ。また、僕の記憶では毎晩のように見ていたあの大きな岩が落ちてきて僕が死んでしまうという恐ろしい夢もその日ぐらいから見なくなった。今考えてみると、僕が見ていた幽霊や恐ろしい夢は何かの警告だったのかもしれない。

みんな寒かったので服に着替えて、父の車の中に入ってみんなで寄り添いあって暖房をつけて暖をとっていた。

明るくなってきたら近くにある父の仕事場(飲食店)に行った。飲食店だったので食べ物や飲み物には困らなかった。父は、震災で働くことはできなかったけど店からはちゃんと給料が出ていたようだ。

トイレの水は出なかったので店にあった魚の水槽の水をトイレに使ったようだ。

2日間ずっと仕事場で寝泊まりもして、食べ物や飲み物、トイレなどの生活にあまり支障がなかったので国に助けを求めることはなかったようだ。だから、僕たちはあまり苦勞をすることがなかったそう

語り継ぐ6

だ。でも、やはりいつ地震が来るかわからなかったのでパジャマに着替えずにずっと私服で寝て次の地震のために備えていた。

●数日後●

私たちはライフラインがなかなか復旧しなかったこともあり今住んでいる祖父の家に引っ越すことになった。祖父の家は北区にあり被害はあまりひどくなかったのですぐに普通の生活に戻ることができた。ひどくないと言ってもテレビは倒れ、食器棚から食器が出て割れていた。祖父は無事でよかった。

ガスも水道も電気もすべて大丈夫だった。しかし、祖父は自分の体が元気だったので、何かしたいと思い、神戸に応援に行ったそうだ。

食事は1日に一回で朝5時に家を出て、被災地でいろいろな手伝いをして帰ってきたのが夜の2時くらいだったそうだ。とても大変だったと思う。

三宮のそごうは復旧に半年くらいかかると言われていたが1か月半で復旧できたそうだ。その復旧作業にも祖父は加わっていてミキサーで復旧作業にあたったそうだ。

私たちは祖父の家で1か月間暮らした。そして、1ヶ月後にもう大丈夫だろうということで明石の家へ帰ったそうだ。そして、引越しの準備をしてもう一度祖父の家で暮らすことにしたそうだ。

●親戚の話●

自衛隊がお風呂を用意してくれていたそうだ。久しぶりのお風呂だったのでみんな喜んでいたら、お風呂の中は泥や石が入っていてとても汚かったそうだ。汚かったとはいってもやはり久しぶりのお風呂だったのでみんなよるこんで入っていたそうだ。

交通機関が使えなかったのでポートアイランドから三宮までずっとあるいていったそうだ。

震災時に配給があったのだが、すべての配給に長蛇の列が並んでいてなかなか配給がもらえなかったそうだ。

配給だけでなくいろいろな方法で食料を確保していたそうだ。

ローソンなどのコンビニエンスストアも地震で潰れていて誰も見えない間にその中から食料を持って帰ったりもしていたそうだ。物を盗むということは犯罪だけれども、やっぱり人間はこういう危機的な状況に追い込まれると犯罪にも手を染めるのだなと思った。だから災害が起こったときは、こういう面での暴動や犯罪を起こさないようにしないといけないなと思った。しかし、それで、人の命が助かるならそれも仕方ないと思う。

親戚の人は文化住宅に住んでいて、2階に子供が寝ており、1階に親が住んでいたそうだ。その親子はとても仲が良くて評判のいい家族だったそうだ。しかし、地震が起きた時に1階が潰れてしまった。2階に寝ていた子供は生き残っていたけれど、1階に寝ていた親は残念ながら亡くなってしまったそうだ。まだ、小さいのに親を亡くしてしまうというのはとても悲しいことだったと思う。

家は潰れてしまったけど、火災が起きなかったから保険がおりないという家庭は、自分の家を自分たちで燃やして保険をおりるようにしたそうだ。

亡くなった人のほとんどが家の倒壊による圧死だったそうだが、ショック死で死んだ人も多かったそうだ。ショック死というのは自分の家族の誰かが死んでしまって、そのストレスに耐えきれずに亡くなってしまおうというケースだそうだ。

備えは大事だとゆうことに気付いたそうだ。ATMなどの機関も使うことができなかったそうで、食料も冷蔵庫などに入っていたのが全部食べることができなくなってしまったので何回も「ああ食べ物を備えておけばよかった」と思うことがあったそうだ。

避難所には歌声が響き渡っていた。ボランティアは避難生活をしている人に、自分で生活を始めるように働きかけることだと言っていた。奉仕ではなく、自立するためのサポートをすることを心がけると言っていた。助けるばかりでは避難している人は自立しないからだ。ボランティア団体は3月末に撤退しないとイケないらしい。住民はもうしばらくボランティアをしてほしいと言うがこれは甘えだと言っていた。避難所はボランティアがいなくても自分でやっていけるようにしないとイケないと言っていた。

●停電●

停電は、地震発生した時は260万軒にも及んだ。ほかの県から電気をもらい停電を100万軒にまで少なくすることができた。また、電柱が折れていたりしたら、人間が骨を折った時のように電柱も修理したり、他の地域から遠隔操作などで電気を分けてもらうなどして、135時間後、約6日後には停電した全世帯の電気を復旧することに成功した。

僕の家も電気が使えなくなり、店に行って店の懐中電灯やろうそくを使っていたそうだ。電気は2、3日くらいしたら復旧したそうだ。

電気の問題もすぐに北鈴蘭台に引っ越したのであまり問題にはならなかったそうだ。

●水道●

水道は約2週間切断されていたそうで、さっきも書いていたとおり仕事場で水が完備されていたので水にはあまり困らなかったそうだ。

そして、お風呂は我慢して、北鈴蘭台に行ってからお風呂に入ったそうだ。2日ぶりのお風呂は、とても気持ち良かったそうだ。水道の復旧が一番早かったそうだ。

●ガス●

4月11日にほぼ全部の地域で復旧が完了した。

ガスの復旧が一番遅かったらしい。ガスが使えなかったけど、父の仕事場の食料があったので食べ物で困ることはなかった。でも、ずっと同じ食べ物を食べていたけど、店に滞在している日にちが少なかったので飽きることはなかった。北鈴蘭台に行ったらガスが使えて火が使えたのでとてもうれしかったそうだ。

●この阪神・淡路大震災における唯一の救い●

今回の地震で唯一の救いがあるとしたら、思いやりやいたわりの心が出せるようになったということだと言っていた。街が優しくなった。すぐに声をかけてくれる。善意というより、人が本来持っている手を差し伸べたいという気持ちが素直に出せるようになったと言っていた。今までは、恥ずかしさもあって優しくする機会が奪われていた。この気持ちは本来人間が持っているやさしい気持ちだそうだ。人間はこうゆう危機的な状況に追い込まれると本来の姿に戻るのだと思った。

僕は母からこういう話を聞いて、こういう優しさをこれから先ずっと続けることはできないのかと思った。母が言っていたとおり人間は本来こういう優しさを持っているものだと思う。しかし、人間はこういう状況に陥らないと本来の優しさを出せないということに僕は悲しく思う。危機的な状況に陥らなくても本来の優しさを出してほしいと思う。阪神・淡路大震災の時のようなやさしさを持続してほしいと思う。

●環境防災科に入って●

環境防災科に入って、いろいろな人からいろいろな話を聞く機会がたくさんあった。そのなかで、被害が大きかった地域の人の話を聞く機会があった。その人たちの話を聞いて、阪神・淡路大震災がどれだけ恐ろしい出来事だったのかを知ることができた。

震災の時は3歳で小さくてあまり記憶がなかったので被害が大きかった人たちの話は初めて聞くことが多かった。衝撃的なことが多かった。

環境防災科に入って地震のメカニズムや防災のいろんな知識を学ぶことができてよかった。環境防災科に入ることができてよかった。

これから僕たちの人生は常に災害と向き合っている。災害から逃れることはできない。災害を失くすことはできないが、災害を減らすことはできる。環境防災科で学んだ知識をみんなに発信してこの震災のような出来事を2度としないように生きていきたい。

●将来●

語り継ぐ6

僕は高校を卒業したら消防士になって災害で助けを求めている人たちを命をかけて救いたいと思う。こんど阪神・淡路大震災のような大きな災害が起こったら僕が最前線にたって救助・救出をしたいと思う。僕は将来消防士になってたくさんの方の命を救うために環境防災科に入った。環境防災科でいろいろな専門的な知識を学習して、将来の仕事に生かしていきたいと思う。

●親に感謝●

僕は震災のことはあまり覚えていない。今回の阪神・淡路大震災を語り継ぐという卒業研究で親や親せきの人にいろいろな話を聞いた。その中で母が死ぬ時は兄と一緒に死ぬと思い兄を必死に抱き寄せたと言っていた。そういう状況を想像すると親子の絆とゆうのを感じさせられた。

僕も父に命を助けられた。地震発生の1時間前に僕をちゃんと寝室に戻して寝かしてくれたこと。地震が発生したときに僕を守ってくれたこと。父は僕を必死に守ってくれたと言っていました。こういう親の行動に僕は感謝しています。

僕たちが困っているときに家に泊めてくれた祖父。いろいろな存在があって今の僕があると思います。僕は本当に幸せ者だと思う。日々親に感謝して親孝行をしていきたいとこの卒業研究を通して感じた。そして、この感謝の気持ちを継続してこれからも家族で支えあって生きていきたいと思った。

●現在●

現在はほとんど震災の記憶がない。だけどやはり自分が受けた激しい記憶は残っている。残っている記憶はとにかく怖かったことと、怖すぎて腰を抜かしてしまったこと。僕のお気に入りだったお茶碗が割れてしまったことぐらいである。

環境防災科に入っているいろいろな体験談を聞かしてもらいすごく為になった。親にも感謝して消防士になるとゆう夢を達成させたいと思う。僕がああ地震がまた起きた時に命をかけて人の命を救いたいと思う。これが、僕の目指している夢だ。

語り継ぐ

神戸市中央区
杉岡 翔太

◎震災前

僕は、3歳だった。あの阪神・淡路大震災が起きたことで僕の人生も大きく変わったと思う。震災前、父と母は自営業で姉と兄は小学生で僕は幼稚園で僕たちは古いアパートに5人家族で住んでいた。

父と王子動物に自転車の練習のためよく通っていたのを覚えている。

そのときは、神戸には地震が来ないと考えていたし、家族でも非常袋などの防災などは全くしていなかったと父と母言っていた。

◎震災直後

僕は、小さかったけど覚えていることがある。それは、最初から大きな揺れが来てその揺れが収まると次に、「ゴゴッー」という今まで感じたことのない揺れが襲った。実際には20～30秒だったらしいけどとても長い時間揺れていた感覚がしていた。

すると、父が「起きろ！」と大きい声を出し僕の上に乗ってきたのを今でもはっきりと覚えている。僕は何が起きたかまったく想像もしていなかった。

そして、大きな揺れが収まり布団から出て辺りをよく見ると食器棚は倒れ、お皿が床に散らばっていた。父と母が呆然とした顔をしていた。親は、懐中電気を取りに行こうとしたがどこにあるのかわからなかった。外が暗いので動かないようにして子どもたちに靴をはかせ、布団から一步も動かなかった。地震の後には外が静かになってとても不気味だった。

◎しばらくして

あたりが明るくなりときらりひどい状況になっていたことが気づいた。食器棚だけではなく、テレビやタンスなどのものがすべて倒れていることがわかった。靴を履き外に出てみると南側にあったブロック塀(高さが120センチ)がなかったことに気づいた、そのときにはじめて地震の大きさにわかった。他にもあたりの家も見ると傾いている家もあり、潰れている家もあった。

◎父の行動

県庁の近くの祖母に連絡するために家の電話で母が電話してもみんなが電話している為まったく通じなかった。父は祖母の家にバイクで向かった。

行く途中に道が50センチぐらい陥没していたり、ビルの倒壊や2階の家は1階になっていたそうだった。もちろん信号機もついていなかった。走行している車やバイクが徐行運転でゆっくりと走っていた。

家に着き、管理人が「祖母はどっか出て行きました」と言ったそうだった。それを確かめるために13階のビルをエレベーターで行こうとしたけれども電気が通ってなく階段で登った。祖母の家は鍵かかっていたらしい。父は公衆電話で母に電話すると祖母は母の家に来ていたらしい。あとで話を聞くとおじちゃんに送ってもらったそうだった。それで、安全が確認できて安心できたと言っていた。その公衆電話を10人ぐらいの人が並んでいた。

父が家に帰ってカセットコンロや食料や水の確認をしたそうだった。すべて確認したら1週間分の食料があった。しばらくすると、父は地元の消防団に入っていたので消防団に入った。祖母と母と子どもの5人だけになった。父がいなくなると恐怖感も増した。

それと同時ぐらいに、下の家の方で火事が起きた。僕の家の方には火事が起きていなかったのが家は無事だった。その火は徐々に広がり消防車のサイレントがあちらこちらで聞こえた。しかし、その火

語り継ぐ6

はまったく消えることはなかった。

消防士も水道が潰れており、水が出なく小学校のプールの水を使ったりしていたけど、消防士がタンク車で水を汲んだりしたそう。しかし、全く間に合っていなかったと言っていた。

地元の人はお風呂の水で初期消火をした。幸いにも、地元では大きい火事がなかったのが被害にならなかった。

夜となり、地元の消防団員は半分家に帰り、半分で待機して町巡回をした。そうすると、道の人に病院がどこに空いているかを聞かれていたり水や食料などの状況を聞かれたそう。

僕たち5人は避難所に行ったけれども結局家に泊まった。

避難所では避難している人がたくさんいた。体育館ではもともと暖房はなく、家事の危険もあってストーブを使えない。あっても大きすぎるので駄目だった。毛布、布団は少なく僕たちみたいに帰る人たちもたくさんいた。

◎2日目

父の行動

父は倒壊した家の安否活動をしたそう。後は、救援物資頼みに区役所に行き、地元の消防団のところに物資を届けるように頼んでパンとか缶詰をもらった。それらを、何時に配るのを消防団の人が地域の人たちに伝えた。後は、その作業がずっと続いた。

ボランティアの人たちがたくさん来ていたらしいけど、その人たちがどこに行ってもいいのかがまったくわからずに消防団員に聞きに行ったり、小学校に行ったりして初めは何をしていいのかがまったくわからなかったらしい。

しかし、物資がたくさん倉庫に山積みで、仕分けも出来ず、配送も出来ずに、腐ってしまう食品もあり一方避難所では受け取りも出来ず、配分も出来ない状況になった。

こんな時ボランティアが活躍した。日本人だけではなく、外国人のボランティアもいた。そのことがあったことで今のボランティアセンターができたことがわかった。

僕

僕らの5人は家でずっとテレビ被害の大きさにびっくりしていた。電気は昼ぐらいに復旧し始めていた。水洗便所はお風呂の残り水を使って流したり、食べ物は冷蔵庫の中に残り物を食べた。無事を親戚に連絡するために公衆電話に並んだりした。

◎3日目から7日目

数日が立っても余震が襲い、精神的にかなりきていたが、電話も徐々ではあるがつながるようになった。

給水車から水をもらい、学校などにお弁当をもらうために並んだことを覚えている。

親戚同士で山にトイレ用の水を汲みに行ったり、北区の親戚が心配してきて家に来てくれ食料をもらったりしていた。北区はガスも電気も水道すべてが通っていたと話して、北区と中央区では被害の違いに驚いたと言っていた。

王子陸上競技場が自衛隊の基地になり水や食料やお風呂などを用意してくれた。自衛隊は自分の料理を作ってくれた。

救出活動の手際の良さに両親はとても感動をしたらしい。自衛隊が作ってくれたあたたかいご飯を久しぶり食べてとてもおいしかったのを覚えている。この頃になると食料が豊富になっていた。

1週間ぶりに銭湯が再開してくれて、みんながその銭湯にならんでいたことを覚えている。

テレビの画面から祖父の代わりに列に並び、あたたかい汁ものを渡していて祖父が喜んでいた映像が流れた。

◎家の被害

震災直後電気やガスや水道などがすべて通っていなかったけど、電気はその日の昼ぐらいに治っていた。しかし、ガスや水道は復旧が遅かった。家は半壊状態で家族5人過ごしていた。食器などがなかったけれども親戚の人たちが持ってきてくれた。

◎神戸市の被害状況

神戸市水道局

神戸市には、山や川が多いため配水池やポンプ場がたくさんあり、配水池は、123か所ポンプ場は、48か所にもある。

阪神・淡路大震災の時は、応急給水で他県からの応援で92都市も来て、ピーク時に492人もの人が来たらしい。3月中旬まで続き、応援復旧期間は、2ヶ月半（10週間）続いたそうだ。だから、この阪神・淡路大震災で水の大切さが身にしみてわかった。

大阪ガス

それだけではなく、ガス管に泥水の侵入や交通渋滞などもあった。しかし、4月11日には99.9%が復旧した。阪神・淡路大震災の時はガスコンロがあったのでなんとか大丈夫だった。

関西電力

阪神・淡路大震災より、260万軒にもおよぶ停電が発生したが、「一刻も早く電気を」被害者の方々にという気持ちで関西電力は水道会社やガス会社の中で、一番早い153時間で電気が完全に直った。なぜ、関西電力が一番早くなおったのか言うと、電力供給の多重化や架空回線による復旧や他電力会社からの応援や24時間体制で監視など気をつけているからだ。電気はその日の昼までに治ってテレビで被害状況を見ていた。

◎その他

テレビで阪神・淡路大震災のことがいっぱい取りあげられて高速道路や商店街や市役所などの被害の大きさに神戸がこんな状況になるとは思わなかった。

電車が止まっていて、自転車交通手段になったけどすぐにパンクしたりしたけれどもそれをボランティアの人や自転車屋が安く治してくれた。

地震の後で水も食べるものも手にはいらないかも知れないという不安があって、買い占めに行列が出来たが、これが何時間も続ければパニックが起きたはずなのに、今回の阪神・淡路ではそのパニックが起きなかったのは、ラジオ・テレビが使えた事はボランティアがすぐに来てくれたことが安心をくれた事やスーパーや店が普段道理に食品を販売したことがあると話していた。

◎阪神・淡路大震災があったから

このことが起きてからもし、災害が起きた時の避難場所やタンスの固定や非常持ち出し袋を常に準備しているようになった。しかし準備しているだけで、いざという時使えるか心配している。

この震災が起きたとき僕たちは3歳ではっきりした記憶は少ししかない。

しかし、小さいながらもはっきりとしていることもある。大きい揺れが起きたときに親が布団でかばってくれたことテレビや食器棚が倒れていたことや親戚の人たちが心配してくれたこと地域の人たちで助け合ったこと人に感謝することや人のあたたかさがわかった。

今後このような震災が起きたとき他人が僕たちにやさしくしてくれたように僕も他人にやさしくできる人になりたい。

今、三宮に行っても震災の傷の跡がまったくない。

本当に14年前に神戸の町がめちゃくちゃになっていたことが想像もつかないぐらいとてもきれいに復旧している。しかし、これらのことを忘れてはいけないと思うし、今後に伝えていかななくてはなら

語り継ぐ6

ないと思う。

この震災があったからこそ垂水区に引越しをして、この出来事を自分の中で忘れてはいけないと思いや人の為に働けるような仕事につきたいと思ったのでこの環境防災科に入った。

環境防災科で阪神・淡路のことを警察や消防や自衛隊や大阪ガスや関西電力や神戸市水道局側からの話を聞き、今まで知らなかった阪神・淡路大震災の部分などが聞けてとてもいい経験ができています。また、家族に震災当時の話を改めて聞けたりした。

この学科でいろんな災害のことや防災のことを勉強して、なぜ被害が大きくなってしまったのか、その対策についての勉強をしている。

あと、1年間しっかりと勉強をして実際に災害が起きたとき地域の役に立てるような人になりたいし、大学や今後の職場で防災の大切さについて話せるようにがんばりたい。

また、海外に行って発展途上国の人たちに防災の大切さなどを伝えられたらいいと思う。

震災を知る

神戸市西区糶台
平 幸祐

一記憶

阪神・淡路大震災についての記憶といっても、僕は震災当時まだ3歳で、はっきり言って当時の記憶は殆どなく、震災から何日か経ったあとの家の状態がどこか少しいつもと違っていただけに覚えているくらいだ。いつもとの違いというのは、灘区に住んでいる祖母や叔父などが家に集まっており、祖母は寝込んでいたということである。普段から体調など崩したことの無い祖母が自分の目の前で寝込んでいる光景がとても衝撃的でその部分が強く記憶に残っていた。しかし、それが地震と関係していたことも全く覚えておらず、後に聞くと、比較的震災の被害を受けなかった僕の住んでいたまちに祖母と叔父が避難し、祖母は震災の影響もあり、突然体調を崩し寝込んでしまったらしい。

揺れのことなどは幼かった上、寝ていたこともあり全く記憶にない。けれど、震災から何年かした後、たくさんの仮設住宅があったのを覚えている。幼い頃だったので、何故今まで遊んでいた公園にたくさんの家が突然建ったのかが、あの頃は全然分からなかった。また、小学校に入る前の僕は、震災の本を妙に怖がっていたことを覚えている。家が燃えている写真などがたくさん貼ってある震災の本にどこか恐怖を感じ、目に見える場所にその本があると、何故かとても怖かった。僕が覚えているのはこれくらいなので、ここからは家族や親戚に聞いた話を中心に、“後から僕が知った震災”を書いていこうと思う。

一防災力

阪神・淡路大震災が起きる前の家の状況は、防災に対する意識が低かった方だと言える。非常持ち出し袋や、避難場所確認などの準備不足、寝所についても母はガラスの窓のすぐ側のベッドで寝ていたし、手の届く場所に懐中電灯も備えていなかった。ただ、タンスの固定はしていたおかげで、タンスが倒れることはなかった。もし、固定していなかったら、間違いなくそのタンスは倒れていたであろう。そのことが防災の大切さを強く表している。

そして、この神戸市も防災に対する意識が低かったのかもしれない。今住んでいる家を購入するときにも、何を根拠に言っているのかは分からないが、“神戸では地震は起きないので、地震保険には入る必要はないです。”ときっぱり言われたらしい。そのため、まさか自分の住んでいるまちにこんな大きな地震が起こるはずがないと勝手に決め付けていたし、隣近所の宅も同様にこのような災害に対する備えはできていなかったという。この“自分には関係ない”と思う気持ちがおそらく神戸に住んでいた人の多くにあったのではないかと。僕が住んでいるこの地域は、たまたま比較的被害が少なかったから良かったものの、もしここが被害の多い地域であれば、どうなっていたかは分からない。そんな防災意識の低い日常を送っていたと今思うとぞっとしてしまう。

一地震発生

1月17日5時46分、僕たちが住んでいる神戸では、阪神・淡路大震災という大きな地震が発生し、この神戸の街は一瞬にして今までの姿とは全く別のものになってしまった。早朝だったことから、父・母・兄・僕の家族4人の全員が同じ寝室で寝ており、突然の激しい揺れにより父と母が目覚まし、慌てて、父は当時小学校2年生だった兄を、母は僕を守ったという。揺れは本当にもの凄いもので、寝室にあったクーラーが出っ張って見えたり、引っ込んだり見えたりして、何が何だか分からなくなったようだ。

僕はその時からずっと15階建てのマンションに住んでいる。地震が起こったらすぐにマンションの住人の一部はすぐ隣にある小学校の体育館に避難した。僕の家族は避難しなかったので家に居たそうだが、エレベーターが止まっているので、住民が一斉に「ドンドン」と階段を降りる凄い音がしたのが印象に残っているようだ。

そして、灘区に住んでいる祖母は震災が発生した時、海外にいた。ニュースで神戸がとんでもない状況になっているのを見て、慌てて僕の家や叔父の家に電話するも、どこにも全然繋がることはなく、死

語り継ぐ6

んでしまったのかもしれないと思い絶望的だったそうだ。

翌日…

地震発生から翌日、僕の親戚たちは被害の少なかった僕の家避難を始めた。灘区に住んでいる叔父と叔父がいつも一緒に行動していた職場の友人が僕の家避難してきたのである。そして、またその翌日には長田区に住んでいた叔父を僕の父が無事かどうか探しに行き、見付けることはできたが、長田区の被害が酷かったのも、長田区の叔父もそのまま僕の家避難することになり、海外から帰ってきた祖母も僕の家族の無事を確認し、一度灘区の家に戻ったあと、体調を悪くし僕の家避難してきた。祖母が体調を悪くした原因は、おそらく祖母の家のライフラインが止まり、水を汲みに行かなければならない状況で疲労が溜まったことと、祖母の家の周りで家が全壊してしまった人の世話をした時にもおそらく少しずつ疲労が溜まっていたのだろうと母たちは言っていた。

避難してきた叔父はあることにとっても驚いていた。それは、叔父の住んでいる灘区は被害で店を閉め切っているにも関わらず、西神につくと、駅前の店は全て開いていて、食料品売り場などは普段通り営業していることであった。ただ、食料を買うのに最初の3日間くらいは2時間も3時間も並ばなければいけなかったそうだ。しかし、並べばちゃんと食料は手に入り、その営業をしている食料品売り場を見て本当にここでも地震があったのだろうか疑問に思ったそうだ。

一被害

周りの区からもたくさん避難する人が居たほど、比較的被害の少ないこの地域でも、震災による被害は多々あったそうだ。食器やガラスなどはもちろん割れ、窓とガラスの間に隙間ができたらしい。そしてマンションは一部損壊し、外壁などにたくさんのひびが入った。ただ、水道やガスなどのライフラインには影響がなかったそうだ。

しかし、マンションの駐車場の電気が止まって車を出ることができなくなり、父はさすがに仕事にはいけなかった。だが、次の日からは車を出せるようになり父は職場に行くことができた。当時の父の職場は神戸市外にあったことから、職場に着くと神戸市に住んでいる父ともう一人の社員がとても心配され、大変だろうから、と色々持って帰らせてもらったりお世話になったりしたそうだ。震災により人の温かさを実感したという話はよく聞いたことがあるのだが、身近にもそんな出来事があったということは初めて知り、少し嬉しかった。

親戚達は全員、家などの被害はあっても命を落とすことはなかったことが本当に幸運だったと思う。灘区の祖母の家も寝室にあるタンスが全て倒れていたのも、もしたまたま海外旅行に行っていれば正直どうなっていたか分からなかった。そして、長田区の祖父と祖母も、同じように震災の時たまたま、奈良県の叔母の家に行っていたのも、長田区の祖父の家は全壊したが、命は助かることができた。このたまたまは今考えれば本当に“奇跡”と呼べるほどの出来事だったのではないかと思う。ただ、やはり長田区の祖父の家が全壊してしまったことは、祖父や祖母にとってはとても大きな負担になってしまった。僕は、その全壊した長田区の祖父の家を見に行ったことがある。全壊の上、もう殆ど片づけてしまい何もないただの“跡”になっていた。

一震災後

震災から一週間が経ったころ、体調を崩していた祖母も元気になり、叔父たちも全員が、それぞれ家の片付けをするため家に帰った。そして、それから今度は長田区の祖父が長田区の家を片付けるため、奈良から帰ってきて、半月くらいに僕の家泊まることになったらしい。祖父は一級建築士で、長田区にある祖父の家も祖父が自分で設計したものらしく、その自分で設計した家が地震により全壊してしまったことはとてもショックだったようだ。

そして、僕の家は防災対策を改めた。非常持ち出し袋の準備はもちろん、窓ガラスのすぐ側で寝ていた母も、窓ガラスのない和室に寝室を移動した。そして寝室には懐中電灯を手の届く場所に置くようにし、電池の管理もしっかりとするようになった。また、避難所の確認も家族でしっかりと行った。小学校の時、地震など何かあった時、学校にいる時間だったら学校の体育館に、家にいたらマンションの管理事務所のところまで行きなさい、と言われていたのを覚えている。

また、記憶にも残っているように、いつも遊んでいた2つの公園の広場にたくさんの仮設住宅ができた。小学校のクラスメイトにも仮設住宅から学校に通っていた女の子もいた。小学校一年の時、公園にある仮設住宅の人たちが使うトイレを友達と一緒に使っていたら、先生に注意されたこともあった。その時は何故、公園のトイレを使っただけで注意されたのかが分からなかった。でも、今考えれば仮設住宅のトイレを僕達が勝手に使うというのは、人の家のトイレを勝手に使っていたのと同じことだったのだと思う。

もう一つ震災後に印象に残っている出来事は1995年の“オリックスブルーウェーブのリーグ優勝”だそう。震災の影響から神戸での試合開催が危ぶまれたオリックスブルーウェーブだが、最終的には神戸での試合開催が決定され、オリックスブルーウェーブは震災により、傷ついた神戸へ「がんばろうKOBE」をスローガンに戦った。仰木監督のもと、イチローを中心とした最高のチームだったそう。そして僕も、日本シリーズのオリックスブルーウェーブ対ヤクルトの試合を観に行ったらいい。その時の試合はこれまでにない程の盛り上がりだったそう。残念ながら、惜しくも日本一は逃してしまっただけで、1996年はもう一度リーグ優勝し、次は日本一にまでのぼりつめた。神戸を活気付けようとする選手達の姿はとても格好良いものだったと思う。そういった励ましがあつたからこそ、神戸全体が盛り上がり、今の神戸があるのかもしれない。

—環境防災科

震災から何年かの月日が経った。小学生、中学生と1月17日には学校が企画している震災の行事を毎年行い、作文なども書いた。僕はその時、正直に言うとなん年作文も書くことがなくて、記憶も殆ど残っていない阪神・淡路大震災に無関心だったのかもしれない。

中学3年になり、進路について考えるようになった。僕は、将来どうせ働くなら、直接人のために働ける職につきたかった。そんなことを中学校の担任の先生に話していると、この舞子高校の環境防災科を紹介された。僕すぐに説明会に参加した。そして環境防災科の活動などを知り、僕は衝撃を受けた。高校生がこんな活動を進んで参加する学校があるなら、入りたいと思った。

そしてそれから、環境防災科にとっても魅力を感じ興味を持った。同時に、あの阪神・淡路大震災にも人より興味を示すようになった。家にあった震災の本を読んだり、親が当時録画していたニュース番組のビデオを見たりして、阪神・淡路大震災とはどんなものなのかというのを自分なりに学んでいこうと努力した。

入学してから…

環境防災科に入学することができ、僕は更に阪神・淡路大震災についてもっと知りたくなった。それまでは、どうしても記憶が残っていないからあまり関心が湧いてこなかったのだが、考え方が逆に、記憶に残っていない出来事だからこそ、もっと詳しく知りたいというものになった。環境防災科では、阪神・淡路大震災の復旧や復興にかかわった、消防士・警察官・自衛隊・水道局・大阪ガスなどのたくさんの人たちを外部講師として迎え、話を聞く機会がたくさんあった。他にも実際に阪神・淡路大震災と同じ揺れを体験したりもすることができた。たくさん話を聞いたり、体験したりするうちに、本当の阪神・淡路大震災がいったいどのようなものだったのかを分かり始めることができた。これは間違いなく、どこを探してもこの環境防災科でしか学べない貴重なものであると感じた。

長田のまち歩き…

環境防災科に入り1年が経った。2年生では、長田のまち歩きという行事があり、僕たちは長田の商店街の人たちに震災の時の出来事を聞いた。商店街の人たちは当時の辛かった出来事を僕たちに一生懸命話してくれた。中には、涙を流しながら当時の出来事を話してくれる人もいた。当時の記憶が殆どない僕にとって、色々な人の体験談を聞けるということはとても貴重な時間だった。

話をたくさん聞き、絶対に阪神・淡路大震災という出来事を忘れてはいけないと思った。今まで当たり前前に生活できていたのに、その「当たり前」が震災によりたくさん奪われ、多くの人が辛い日々を送った。十数年経った今でさえ、話すと涙が出てくる程のものだから、もしかしたらいくら話を聞いても僕にはその辛さを完璧に分かってあげることは無理なのかもしれない。でも、本当に分かりたいと思っ

語り継ぐ6

たし、商店街の人たちもあの当時のことを分かって欲しいという強い思いが伝わってきた。商店街の人たちは辛さの中に人の温かさを知ったという話や、辛い時に友達が周りにいてくれたから乗り越えられることができたという話も聞いた。その話の一つ一つはとても心に響いた。何気なく過ごしている日常がどれ程ありがたいものかを実感することができ、その日常の関わりが災害時などにも大きく影響するということを知った。

防災教育…

他にも人と防災未来センターに行き、一般の人たちに実験道具の“ぶるる”を使った、地震の説明をしたことがある。自分がそういった立場に立つことはこの環境防災科に入り、何回かあった。1月17日に小学生を舞子高校に呼んで防災学習をしたり、逆に僕たちが小学校に行き、防災教育をしたりしたこともある。教えるということは、逆に自分も学ぶということだと感じた。絶対に間違ったことを教えるわけにはいけないので、何度も見直したし、教えながら自分も確認することができた。また質問されるとそれについてまた考えることもできた。そして小学生に教えるということは、分かりやすく言葉や内容を直し説明しなければならない。そのためには、自分がしっかりと理解していないと無理な話である。防災教育の良いところは、このように教えている側も、教えられている側も防災力が高まることであると思った。環境防災科での教え切れないほどの貴重な体験。本当にこの環境防災科に入ることができて良かったと思う。

—最後に

あの震災から14年という月日が流れた。多くの被害を出したこの阪神・淡路大震災を機に様々ところで、日常の防災が見直され、多くの活動が行われてきた。そして僕も、これからももっと防災について詳しく学びたいと思っている。いつまたこの神戸で大きな災害が起こるか分からない。それは、また阪神・淡路大震災のような大震災かもしれないし、地震とはまた別の大災害かもしれない。それぞれ一つ一つの災害を知り、その災害にあった防災を行うことで、被害を抑え、一つでも多くの命を守らなければならない。

神戸は本当に素晴らしいまちだと思う。あの悲劇から立ち直ることのできた、この神戸が僕は大好きである。ただ、まちは元に戻っても、人は当然生き返ることなどできない。それを僕達はどこか胸の奥にいつもしまっておかなければならないと思う。そうすることによって、この神戸のまちはもっと良いまちになると僕は自信を持って言える。辛い過去はいつまでも引きずっては前に進めない。しかし、完璧に終わりにしてはいけないのである。亡くなった多くの方々のためにも、阪神・淡路大震災を経験した僕たちは、毎日の生活を一生懸命に全力で生きる義務があると僕は思う。一人一人が一生懸命に全力で生きていけば、このまちは悪くなるはずがない。このまちは、あの出来事を機にこれからも、何十年、何百年と良くなり続けさせなければならないのである。それが震災で亡くなった方々に、僕達ができるベストな答えではないかと思う。

そして、この神戸に住んでいる以上、震災のことは知らなければならない。例えば、僕は環境防災科で和歌山県に交流に行ったことがある。その時の話し合いでは、神戸に住んでいるということで、震災のことについて教えてくれと色んな人に言われた。僕は環境防災科に入って学んだことを下手くそながらも伝わるように一生懸命説明をした。それは、この質問に答えることができないと、神戸の人間として恥だと思ったからである。あの震災を経験した神戸の人間として、他の地でこの情報を発信することは何も難しく、特別なことではない。むしろ当然のことであると思う。和歌山県の人たちも僕たちの津波に対する質問に和歌山県の人間として堂々と答えてくれた。とても価値のある時間だったと思う。そういった交流を広げていくことにより、各地で色々な種類の防災を見直してもらい、自分も違う視点で防災を見直すこともできる。情報を発信する、受け取ることはとても大切なことである。

また、もう一つ言えることは今の友達がどれ程大切なものかを実感してほしいということである。長田のまち歩きでも話を聞いたように、あんなに辛い震災でも友達がいたから乗り越えられるということがあるのだ。普段当たり前のように接している友達をもっと大切にし、普段から友達が困っていたら助けてあげるといふ努力をしなければならない。小学校の時に先生に言われるような話だが、実際に困っている友達を助けることは難しいし、勇気がいることかもしれない。ただそれができなければ、震災のよ

うな時でも助け合えるという、本当の意味での友達をつくることができない。本当の友達をつくることは人生の中でとても重要なことだと思う。

「語り継ぐ」の感想…

今まで、震災についての作文はたくさん書いてきた。しかし、震災についてこんな長い文章を書いたのはもちろん始めてだし、「語り継ぐ」で、自分の体験を周りに発信することができるのは僕の中でもとても貴重なことである。そして、「語り継ぐ」を書いて僕が思ったことは、この阪神・淡路大震災を、何年経っても絶対に風化させたくないということである。今書いているこの文章も、いつかそのために役立てられたら嬉しい限りである。実際に僕自身、この「語り継ぐ」を書くことにより、忘れかけていたもの、例えば近所の公園に仮設住宅があったこと、またその仮設住宅にクラスメイトという身近な存在がいたことなどを、もう一度しっかりと思い出すことができた。あの日多くの人が死んだこと、多くの建物が潰れたこと、多くの人が悲しんだこと、全てをこれから先にもずっと伝えていきたい。防災は、人の命を守る大切なものである。

悪夢の日

神奈川県横浜市南区
高岡 輝

はじめに

僕がまだ3歳だった1995年1月17日5時46分兵庫県南部地震が発生した。その地震は「阪神・淡路大震災」呼ばれるようになる災害を引き起こした。その災害が起きた頃、僕は神戸に住んでいなかった。

地震が起きて被害が出た場所からは程遠い横浜に住んでいた。

テレビでは倒壊した高速道路が映しだされていて、バスが間一髪で落ちずに済んでいた情景を覚えている。また、両親が「神戸に住んでいる祖父に水を送らないと」と騒いでいたのも覚えている。その後、父の転勤で神戸へと引っ越してきた。小学校では1月になると震災についての学習をした。そこで命の大切さを学んだ。

1. 阪神・淡路大震災

阪神・淡路大震災とは

1995年(平成7年)1月17日午前5時46分52秒、淡路島北部(神戸市垂水区)沖の明石海峡を震源として発生したマグニチュード7.3の大地震である。兵庫県南部と大阪府北部を中心に大きな被害をもたらした。特に神戸市市街地は壊滅状態に陥った。

地震による揺れは、阪神間及び淡路島の一部において震度7が適用されたほか、東は小名浜、西は佐世保、北は新潟、南は鹿児島までの広い範囲で有感(震度1以上)となり、戦後日本で最大最悪。未曾有の震災となった。この地震はまた震度7が適用された地震である上に、実地検分によって震度7が適用された最初で最後の地震である。

被害の特徴としては、都市の直下で起こった地震による災害であるということが挙げられる。

政府が今日の災害の規模が大きいことに加えて今後の復旧に統一的な名称が必要であるという観点から、淡路島地区の被害が大きかったことにより、災害名を「阪神・淡路大震災」と呼称することが2月14日の閣議によって口頭了承された。2月24日には、5年間の時限立法として「阪神・淡路大震災復興の基本方針及び組織に関する法律」が制定された。この時に「阪神・淡路大震災」と呼ばれるようになったのである。

被害

死者は、6433名、行方不明者3名、負傷者43792名。死者の内訳は兵庫県内6402名(99.5%)・兵庫県外32名(0.5%)。負傷者のうち重傷者は県内の10494名(98.2%)・県外189名(1.8%)軽傷者県内29598名(89.4%)・県外(10.6%)。死者の県内県外の比率から見て県内の負傷者数は混乱の中、正確には数えることはできなかったと推定される。

1 以上は、いくつかのHPに記載されている内容をまとめたものである。

2. 阪神・淡路大震災を経験した友人

当時5歳の友人の体験を聞かせてもらった。当時、神戸市北区の鈴蘭台のあたりに住んでいたそうだ。

「地震」

「ガガガーッ」という凄まじい音が聞こえるとともに激しい揺れに襲われた。部屋の上の電気もユッサユッサと揺れていた。僕は慌てて起きあがろうとしたが、起き上がることはもちろん動くことすら出

来なかった。隣に寝ていた父が「大丈夫か!」と叫んで全員の安否を確認した。そして、僕はただただ怖くて父にしがみついていた。

当時僕は、両親と一緒に寝ていた。両親は、僕の横で寝ていたので無事ということがすぐにわかった。しかし、タンスが僕のいた場所に両側から倒れてきた。両親と僕は挟まれてしまっていた。片側だけでなく両側のタンスが倒れたおかげで、両側のタンスが支えとなって、4人の間にはスペースが出来ていた。そのスペースに挟まっていたので助かった。もし片側だけのタンスだけが倒れていたならば、全員がタンスの下敷きになっていたと思う。今思うと、不幸中の幸いというものなのかとも思う。

しばらくの間、小さい揺れが続いていた。家族全員で身を寄せ合い、揺れがおさまるのを待っていた。だいたい1時間ぐらい、じっとしていた。

しばらくしてから、揺れがおさまり、父がまずタンスの間から抜け出した。それから、全員をタンスの間から引っ張りだした。その後、父は家の中の光景を見にいった。家の中はいろいろなものが散乱していたらしい。玄関では、金魚を飼育していた水槽が地面に落ちて粉々に割れて靴の上に散乱していたようだ。入れ替える容器などある訳もなく、仕方なくそのままにしておいたようだ。リビングでは食器棚がひっくり返っていた。そのひっくり返った食器棚から大量の割れた食器が出てきていた。とてもじゃないけれど、裸足では入れる状況ではなかった。

しかし、母は水とかが出るかなどの確認をするためにリビングの奥にある、荒れているキッチンへと向かっていった。母が水道、ガスを確認したが、寸断されていた。また、電話も使えなくなっていた。すべてのライフラインが断たれてしまったのだ。しかし、不思議なことに唯一電気だけは寸断されることもなく、ちゃんと通電していた。

家の外に出てみると家がすこし傾いていた。僕はただ何か怪獣にでも襲われたのかと思った。後に分かったことだが、家はその段階で後2年も住めるか住めないかという程弱っていたようだ。父と一緒に町を歩いている間に段々と何が起こったのかが読み込めてきた。地面の地割れ、マンホールが飛び出していたりしていた。普段では見る訳のない光景が辺り一面に広がっていた。あとで分かったことだが、それでも北区は被害が少なかつたらしい。それは、長田みたいに燃え盛る赤い炎や黒い煙があがっていなかったということでも分かると思う。

父と一緒に家の中に入ったん戻り、電気はきていたので、テレビをつけた。だいたい9時ぐらいだったと思う。テレビに映し出された光景はすさまじいものだった。阪神高速がなぎ倒しになっている光景、長田の町がすさまじい勢いで赤い炎をあげながら燃えている光景だった。僕は口をポカンと開けてただボーッと見ていた。しばらくして、この映し出されている光景が地震によって引き起こされたものだと理解した。

そして、母に話しかけられたが、僕はそれに答えることすら出来ていなかったと思う。逆に話かける余裕なんてある訳もなく、この日は誰とも会話をすることが全くなかったと思う。その後、家にあったありあわせの食糧で昼食をとることになった。何を食べたかは覚えていないが、食パンや缶詰を食べたらしい。

「ライフライン」

ライフラインの復旧はそこまで時間がかからなかった。一番早かったのは電気だ。電気の場合、復旧ということもなかった。なにしろ、最初から寸断されていなかったからだ。水道やガスは止まってしまっていた。水道は1日ぐらい、ガスは2日ぐらいで復旧したようだ。電話は1週間ほどかかっていたようだ。

2日目の夜、父と一緒に風呂に入ったような気がする。心が落ち着いて、すっきりとしたような感じだったと思う。震災にあった人は誰でも風呂に入っていると当時は思っていたが、それは大きな間違いだったということが後になって、よく分かった。震災2日目にお風呂に入っているのはごく少数だったということが分かった。いま考えると、とても申し訳ないことだと思う。

電話はほとんどつながらなかった。なぜなら、地震が起きると同時に電話する人が集中してしまい、電話回線が輻輳してしまったのだ。通常約50倍近くの人が安否を確認のために電話したといわれている。安否を確認したいという気持ちだが、とても表れているということなのだろう。

災害時に電話が優先されるのは防災機関や病院のごく一部である。一般の人が電話を使用するには災害時用の公衆電話しかなかった。なので、何時間もかけて並んでいたようだ。今は、「171」という

語り継ぐ6

電話をかけると災害用伝言ダイヤルというものがある。伝言を遠く離れた親戚などに安否を伝えることのできるものがある。また、携帯電話にも災害伝言板という同類のものがある。しかし、案外知らない人も多いと思う。こういうものを広げていけばライフラインがおかしくなってしまうこともなく、みんなが迅速に利用することができる。

「備えの大切さ」

備えというものはとても大切だと思う。地震が起きた当日、近くのスーパーとホームセンターに買い物に行ったそう。スーパーには食料品を目当てに行ったが、パンなどは売りきれでほとんど何もなかった。なので、とりあえずインスタントラーメンと缶詰数種類と小麦粉を。ホームセンターでは給水などの水をくむためのポリタンクを2つほど買ったそう。

家の中はとても無残な状況だった。キッチンのあたりでは、割れた食器が散乱しまわっていた。裸足で入れる訳もなかった。靴を履いて入ったが、玄関では金魚の水槽が割れていた為に、靴の中にガラス片が大量に入ってしまった。なので、限られた靴を履いて過ごしていた。外見としては壁にヒビが入っていた。また、家自体が少し傾いていたのだ。耐震工事も何もしていない家だった。後でわかったことだが、地震の被害を受けて2年も住めるか住めないかの家の状況だった。その段階で、家の耐震工事というものは、とても大切だと思った。耐震工事をしていれば、被害を受けていれば、家の中の被害はあったとしても、少なくなる。また、家自体が壊れることもないだろう。

3. 能登半島地震ボランティア

2007年3月25日午前9時42分に石川県能登半島沖でM6.9の地震が発生した。

その地震のボランティアとして、2007年の夏休みを利用して学校という団体でボランティア活動を行いに行った。能登の地元のお菓子である「えご」というものを作ったり、仮設住宅の草抜き、仮設住宅のお年寄りとの茶話会、輪島市にある小学校、中学校、高校を訪問したりした。

「えご」というものを作ったのには目的があった。それは、仮設住宅のお年寄りの方たちに少しでも喜んでもらえるようにと企画されたものだったのだ。「えご」を作るのは初めてで、よく分らなかったが地元の福祉の方たちに丁寧に教えていただいて、きちんとしたものを作ることが出来た。ここで、人のつながりというものは、とても大切だと思った。そして、その作った「えご」を仮設住宅の方にお配りした。中には、泣いてしまう方もおられた。それほど、辛い思いをしたのだろうと、よく分かった。

そして、茶話会ではいろいろなお年寄りから地震当時の話をしていただいた。どの方の話も、生々しくて人事ではないような感じがした。もし、自分があっていたらどうしたのだろうか、考えたりもした。そう考えると、やはり頭の中では分かっている、焦ってしまうだろうと思った。地震というものは当然、突然来るものだ。だから自然災害な訳なのだが、少しでも事前にわかっていたら対策が出来るかもしれないが、いきなり来るものだからほとんど瞬時に対応できることは限りがある。その中でいかに、適切な対応を行うかが大切だと思った。

仮設住宅の集会所の掲示板には、僕たちが現地を訪問する前に送ったメッセージが張り出されていた。そのメッセージを眺めていると、一人の仮設住宅の住民の方が近づいてきて、「その紙を見て、とても元気がでたよ。ありがとうね。」と言われた時には、とても感動した。なぜなら、自分の書いた言葉で心に傷を負ってしまっている人のことを元気づけることが出来たからだ。

僕は輪島中学校を訪問したのだが、地震の爪痕がたくさん残っていた。まず、校門にある門は地震の為に曲がってしまい、開閉作業が一切出来なくなっていたのだ。なので、半分ほど撤去されるという感じだった。とても違和感のあるものだったが、仕方のないことだと思った。校舎の中に入ってみると、所々ヒビが入ったままのところがあったりした。トイレも水道管が破裂してしまっている為、使用不可という感じに、多大なダメージをくらっていた。

後で聞いたことなのだが、中学校の校舎は合併後新築したもので、まだまだ新しかったそう。その新しい校舎でさえ、恐ろしいほど被害を受けていたのだから、地震の恐ろしさは言うまでもないだろう。

4. これからの自分

僕自身は「阪神・淡路大震災」は経験していないが、小学校、中学校、環境防災科で勉強してきた。なので、一通りは知っているつもりだ。小学生のころから、阪神・淡路大震災」の被害の映像をたくさん見てきた。赤い炎と黒い煙をもくもくとあげている長田の町、相当の距離がなぎ倒しになっている阪神高速、JRや阪神・阪急のみじめな線路の光景などだ。そして環境防災科では、地震の概要からネカニズム、または被災者の方達のことなどを学んできた。

ボランティア活動は、はっきり言って胸を張って言える程出来ていない。そのことが、これからの僕にとっての課題だと思う。もちろんボランティアだけをしていれば良いという訳ではない。それに、ボランティアを行うときにも自分自身にしっかりと責任をもって行うということが大切だ。人のことばかりを見るのではだめだ。自分の身の回りのことから「防災」ということをしっかりしていかなければならない。例えば、家具の固定や地域の防災訓練参加などだ。地域の防災訓練の場合、ただ参加するだけでは意味がないと思う。きちんと理解しなければならない。万が一の時にはしっかりと意義があるものにする必要がある。また、参加するだけの側ではなく、企画する側にまわって行くと更に良いと思う。地域の防災力を高めることが、とても大切だと考えるからだ。

5. 「語り継ぐ」を書いて

この「語り継ぐ」を書くにあたって、様々な方達から「阪神・淡路大震災」当時のことを話していただいた。どの方のお話も、とても重みのあるものだった。風化させてはいけないものだと思う。なぜなら、天災といのは忘れたころにやってくるというからだ。実際、東海・南海・東南海地震は一定の周期でやってきている。ちょうど世代が変わる度に来る程度だ。そのため、自分が生きている間に大きい災害に2回あってしまうということは限りなく少ないと思う。大きい災害というものを知らないで、どうしても災害に対して「大丈夫だろう」という甘い考えを持ってしまおうと思う。その甘い考えを持ってもらわない為にも、「防災」の大切さを広げていきたいと思う。

なによりも大切な命なのだから守りたいと思う。

こうして、今楽しく毎日を過ごせているのも何かの奇跡だと思う。「災害」というものはいつ、どこで起きるのか、まったく予想できないものであるからだ。こんなにも充実した毎日を過ごせているということ、また、生きているとうことに感謝しながら1日1日を大切にしていかなければならないと思う。そして、どんな時でもいろんな人と支えあえることの出来る存在となって生きていきたいと思う。

震災体験

西宮市高須町
辻迫 郁未

自分は、当時3歳だったので正直なところ震災についてはあまり覚えていない。むしろ思い出すことができないうらい当時の記憶がない。環境防災科に入るまでは、震災の特番や小学校・中学校の1・17震災関連行事でしか震災に関わらないほどのものだった。そして環境防災科に入り、震災について考えたりしてたくさんのことを学んだ。震災から10年以上たった今、震災のことを忘れていた人もいよう。私たち高校生が震災を知っている最後の世代なので、今後、震災を風化させないために私たちが中心となって、震災で学んだことなどを伝えていかなければいけないだろう。

自分の覚えていることを書きつづるが、かなりあやふやなので、両親や親戚に聞いたこと中心に書いていきたいと思う。どのような感じで文章が完成するか分からないが、自分が書いた震災体験を読んでほしいと思う。

・両親と自分の記憶

当時は自分と両親の3人で西宮市高須町にある団地に住んでいた。今も震災の時と同じところに住んでいる。

震災前日の16日、自分はいつもと同じように近所の友達と遊んでいた。夕方頃、父が仕事から帰宅した。父は神戸の職場からの家に帰る途中、神戸で小さな地震があったそうだ。父は家に帰って「神戸で地震があるのは珍しい」と言っていた。その時は、誰もあのような大きな地震が起きるとは思ってもいなかったと思う。

震災当日、母は朝早くから仕事に行っていたため家には居ず、家には父と自分の2人だった。5時46分、「ゴォー」という大きな音で目が覚めた。ちょうど父も起きた。その瞬間大きな揺れがきた。自分は瞬時に布団の中にもぐった。その時、自分は何が起きているのか全く分からなかった。父は、家具を支えていた。揺れがおさまると、父はライターを取り明かりをつけた。部屋がどうなっているかを確認するために、布団の周りを動きライターで確認をした。幸いテレビは台から落ちてこず、台のギリギリの所で止まっていた。食器棚からいくつかの皿やお椀が飛び出し、棚の下付近で割れていた。他の部屋では、タンスのトビラや引き出しが開いていて服が散らばっていた。靴箱の中の靴は全て飛び出し玄関全体に靴が散らばっていた。各部屋の確認が終わったらテレビをつけて何が起きたのかを確認した。そのあと自分は何事もなかったかのように布団の中で眠っていたようだ。

その頃、母は職場で仕事をしていた。揺れにより、棚の上から荷物などが落ちてきた。工場内から出ようとするが、電気が止まったり、とびらが開かなかったりしたため苦労した。工場の外に出た時は、道路に地割れがあり、余震もあったので明るくなるのを待った。帰宅しようとするが、道は液状化が起きていて、歩くのも大変だった。足元は液状化で汚れ、自転車もドロドロになった。帰る途中、神戸が黒い煙に覆われているのがハッキリと見えた。母は家に戻ったとき、テレビの画面には、阪神高速道路が傾いている映像が流れていて、驚いた。

家の中は、何事もなかったが、水道・ガスが止まり、トイレや風呂などが使えなかった。電気だけは動いていたので、明かりを取るのには困らなかった。隣の尼崎市は何事もなかったそうなので、尼崎の銭湯に行った。次の日から、水をもらうために、長い時間、外で配給車を待った。夜も近隣の小学校や中学校に水をもらいに行くが、確保できなかった。水がもらえた時はかなり嬉しかった。両親はポリタンクを持って、自分は幼かったため力がなく、1リットルペットボトルを持って配給車の所まで行った。家ではガスが使えなかったため、食べるものに困った。ガスコンロで、もらった水を沸かし、インスタントのカップラーメンや紙皿を利用して、カレーを食べた記憶がある。しばらくはレトルト系・カップ麺・冷凍食品を中心に食べていた。震災直後から電話が不通で、長田に住む両親の安否が分からなかった。電話がつながり話をするのができたのは3、4日ほど経ってからだった。

父の職場は、六甲アイランドだったが、家の近辺などの道路の液状化がひどくて、車で出勤するのはかなり困難だったため初日は自転車で出勤をした。いろいろなところで信号が止まっていたり、渋滞が

起きていたり、通行止めがあり、自転車で出勤するのに3時間から4時間というかなりの時間がかかった。六甲アイランドは液状化がひどく、工場の再開がなかなかできなかった。トラックの運搬にも支障がでた。工場が本格的に再開したのは地震から約3週間後ぐらいだった。

近所のスーパーに行っても、食品がなく、食べるものも無くなってきたので、大阪のいとこのうちに神戸の祖父母と一緒に世話になることにしたが、父だけは西宮の自宅に残り、大阪と西宮の二重生活になった。ガスの復旧がかなり遅かったため、西宮にはなかなか戻れず、約1か月間大阪にいた。西宮に戻ってきたころには、ライフラインが完全に復旧していたので普通の生活が送れるようになったが、ところどころ液状化の茶色い跡が残っていた。

自分の家の南側には広い空き地があった。その空き地を利用して復興住宅が完成した。家を失った人がどんどんと入居してきた。地震直後は、活気のない街になっていたが、復興住宅ができたことにより、街に活気が戻ってきた。その後、近隣の学校のグラウンドにあった仮設住宅はいつの間にかすべてなくなっていた。

・父の姉の記憶

父方の姉の家族は震災当時、東京の国分寺市に住んでいた。今もその場所に住んでいる。東京だったので直接的に震災は経験していない。朝のニュース番組で神戸が大きな地震に襲われたのを知り、驚いた。姉と姉の旦那さんは、兵庫県出身だったので実家がどうなっているか不安だった。しばらくすると神戸と電話がつながり、身内や知り合いの安否を確認した。しかし、知っている人が地震で倒れた家の下敷きになって亡くなってしまい、かなりショックを受けた。姉は地震発生から2ヶ月後の3月、旦那さんの実家に帰省した。実家の近辺は全壊した家、1階部分がなくなり2階部分だけが残っている家が多かった。今でもこの光景は忘れることができない。空気もかなり汚れていて壊れた家の木材の匂い、ガスの匂いがひどかった。

その時は空き巣も多かったらしく、姉は実家の高価な着物などを預かった。ゴミの回収も全然なくて、衛生面もかなり悪く、今後は大丈夫なのか心配だったが思ったよりも早く神戸が元通りになり良かった。

・母の両親の記憶

長田に母方の祖父母が住んでいた。長田と言えば、震災で大きなダメージを受けた所でもある。地震当日、祖父母は朝食の準備をしていた。そのため目が覚めていると時に地震にあった。

急に地響きが鳴り何事かと思った。その直後、大きな揺れが。瞬時に地震と分かった。その瞬間、テーブルの下にもぐった。テーブルの脚を持って揺れが強くて、体が振り回されそうになった。揺れがおさまると、ガスの元栓を閉めた。その時、電気が消えた。まだ真っ暗な時間だったので、懐中電灯で明かりを確保した。食器棚から皿などが飛び出し、足もとに破片が散らばっていた。空が明るくなるまでもう1度布団に入った。

空が明るくなり外に出ると、道が割れていたりしていた。これは大変だ！と思い、いろんな所に電話をかけたが全くつながらなかった。身内の安否が不安だったが3、4日ぐらいに電話がつながり、安否の確認ができ、みんな無事で安心した。その後、大阪の親戚の家に行きしばらくの間、そこで生活をした。しかし長田は特にひどかったのでなかなか神戸に戻れずにいた。ずっと大阪にいるわけにもいかず約1か月半～2か月後に神戸へ戻った。神戸に戻ったときは街の雰囲気が変わっていたようだ。その時は一刻も早く神戸を元の姿に戻ってほしいという気持ちだった。その後は大きな地震に備えて家具の固定をしっかりとしているが、今は長野県の古い団地に住んでいるため、「耐震がちゃんとされているかかなり不安だ」と言っていた。

・父の両親の記憶

父方の祖父母は、自分の家からすぐの所に住んでいる。震災の時もそこに住んでいた。震災当時、祖父母は寝室で寝ていた。地響きで目が覚め、その直後に揺れが来た。揺れが収まるまで布団の中にいた。揺れがとても長く感じた。揺れがおさまるとすぐに、家の中を見回った。台所では、食器棚に置いてある皿などが半分以上落ちて割れていた。冷蔵庫の中身も飛び散りほとんどが処分することになった。

ダンスが置いてある部屋では、ダンスの引き出しが全部開いて、中身の物が辺り一面に広がっていた。

語り継ぐ6

部屋の一つは家具がドアの前に倒れ、ドアを開けるのが大変だった。その家具のより壁にもいくつかの穴が開いていた。

祖父母の住んでいる家は高層マンションだ。地震によりエレベーターが動かなくなったため、動くようになるまで階段を利用していった。水も出なくなったため、給水車を待った。しかしなかなか来ないときもあった。祖父母は、力がなかったため1回に持っていく水は少なく困った。その時、近隣の中学生・高校生がお年寄りの方のために、水くみボランティアという活動をしていた。祖父母はその学生たちに水くみを手伝ってもらった。そのため1度にたくさんの水が手に入った。地震発生から3日ほど経った時、電話が繋がり身内の安否の確認ができた。

・環境防災科に入って～これからの自分

環境防災科に入った理由は中学の時、僕は少し防災に興味があったからだ。そこで環境防災科と呼ばれる特殊な学科があるのを知り環境防災科に行きたいと思うようになった。8月の体験入学の時に先輩方が原稿を見ずにパワーポイントの画面だけを見て環境防災科の説明をしている姿、パソコンを使う授業、みんなと話し合いをしながらする授業に感動した。環境防災科の生徒は、積極的にボランティア活動に参加するというのも知り、体験入学のあと、ますます環境防災科に行きたいという気持ちになった。

しかし、生徒会執行部に入っていたのにもかかわらず、喋る力のなかった自分に、環境防災科でやっていけるのだろうか？と秋ごろに思った。当時の担任の先生にそのことを言ったら「うちの学校から初めての環境防災科進学かもしれへん。行きたいという気持ちがあるのなら、挑戦してみろ。後悔しない道にすすめ。」と言われた。その言葉で自分はしっかり考え、環境防災科の受験を決めた。たぶん先生がそのようなことを言っていなかったら、ギリギリまで受験するかしないかで悩んでいたと思う。今でも、その時の先生には感謝の気持ちでいっぱいだ。

自分が決断したあの日から長い月日が経った。入学してから阪神・淡路大震災などの災害についていろいろな方面から学習をした。消防や警察・自衛隊などの外部講師を招き、震災当時の出来事を聞いた。1番印象に残っているのは、消防の方の話で「被災直後、消火活動で指示をされた場所に行く時、途中で何人もの人に助けを求められたがそれを見捨てて指示された場所に行かなければいけない。」ということに消防の方は胸が痛かった。そして自分も心に響いた。その後も防災についてたくさん学んだ。時には難しいこともあり覚えたりするのに苦労した。

これまでにたくさんのボランティア活動にも積極的に参加してきた。その中でも自分の成長のきっかけになったと思える活動は、県の防災訓練に参加したことだ。この防災訓練で初めて学校外の人に話をした。とても緊張したけど、とてもいい経験ができたと思う。これをきっかけに自分は大きく成長できたのだと思う。

2年の時に初めて、阪神・淡路大震災の追悼式が行われている東遊園地に行った。毎年この場所で追悼式が行われているのを知っていたが、1年の時まで家のテレビでしか追悼式の様子を見ていなかった自分は、何もかもが初めてで新鮮な気持ちだった。そこでボランティアスタッフとして活動した。夜中の3時頃から活動が始まった。東遊園地に着くまでは、一緒に行った人らと騒いでいた。東遊園地に一歩足を踏み入ると、それまでとは違う独特の空気が流れていた。竹筒が約6400本。犠牲者の方の数の分だけ置いてあった。その竹の中にロウソクを入れる作業があり、その時、生きたくても生きることができなかった人の思いが自分の心に突き刺さった。知り合いを亡くした自分は、その身近にいた人のように心の底から黙とうをした。

冒頭でも書いたように、今を生きている子どもたちは震災については全く知らないだろう。これから徐々に震災を知らない人が増えていく。それとは逆に、震災を経験した人が減っていく。このままでは阪神・淡路大震災のことが完全に消えていく。震災の記憶を消さないためには、震災を経験した人が震災を知らない人たちに、当時の記憶を受け継いでいかなければいけないと思う。震災を知っている最後の世代の自分たちにできることは、震災を知っている人からの体験談などを聞き、知らない世代の人たちにバトンをつなげなければいけないと自分は思った。今後の自分は、何の職業に就くか分からない。その職業が防災に関係してもしなくても、この「語り継ぎ」だけは大切なことなのでこれからも続けていけたらいいと思っている。今後、環境防災科で学んだことを無駄にしないようにしたい。

・最後に

両親や親せきの人から話を聞くまでは何をどのように書けばいいのか分らなかった。当時の自分がどのようなことをしてきたのかも全くと言っていいほど覚えていなかった。話を聞くに連れて、少しではあるが当時のことが思い出せてきた。自分の住んでいる地域は建物の倒壊はあまりなかった。しかし家から少し北の方に行ったところでは多くの家が倒壊していた。死者も出ていたくらいひどかったそうだ。その亡くなった人の中に父の姉の知り合いがいた。その知り合いとは少し面識があったので、それを聞いた時はすごく胸が痛くなった。この「語り継ぐ」という文章を書いているとき、知り合いの顔がうっすらと浮かび何度も、涙が出そうになった。その知り合いの分、いや亡くなった方の「生きてたくても生きることができなかつた人の思いを持って自分はしっかりと生きていこう」という思いを持って…。

幼い私の震災体験

神戸市垂水区桃山台
徳留 玲奈

雷に似たようで似ていない、なんて表現したらいいのかわからないくらいの凄まじい音で私は目覚めた。当時、私はまだ3歳で、1歳の弟がいた。正直震災当時の記憶はあまりない。だけど、幼い私でもうっすらと覚えていることがある。

いつもと変わらない毎日を過ごしていて、いつもと同じようにその夜も、父なしの親子3人で寝ていた。父は、いつも違う部屋に一人で寝ていた。

大きな婚姻ダンスの横から私、母、弟の順番で。布団に入った時も、いつものように明日のことを考えながらわくわく眠りについたと思う。

まさかこのあととてつもなく身の毛もよらぬ恐ろしいことが起きるなんて、私を含め、世界の誰もが思っても見なかつただろう。

1 1月17日 5:46

「どっかー————んっ！！！！」

凄まじい音とともに体全体が地面に叩きつけられるようなそんな衝動で目を覚ました。当時の私はまだ幼く、「地震」と言うもの自体を知らなかった。「え!?なに!?何が起きたん!?!」とプチパニックを起こしていると、母が私と弟を布団にもぐらせてくれたのを覚えている。幼いながらも、やはりいつもと何かが違うと言うことに気づきかなり不安でびびっていた。弟と一緒に「怖いよ〜」って言い合っていたし、弟が泣いていたのも覚えている。

その後、母が 父の名前を何度も呼んでいた。今思うと、母もきつものすごく焦っていたと思う。

すると、違う部屋で寝ていた 父が来てくれて、私の横にある大きな婚姻ダンスが倒れてこないように支えてくれていた。その姿がとてもかっこ良く見えて、前よりもっと大好きになったのと同時に、一瞬にしてさっきまでの不安は消え去り、弟と一緒に布団の中でそのまま眠りについた。そこからの記憶はない。

私は当時団地に住んでいた。幸い、私が住んでいた地区は被害も少なく、どの棟もひびが入ったぐらいで、全壊することもなかった。

2 母の話

いつも仕事で三ノ宮にいるため、めったに帰ってこない父がその日はたまたまいた。そして、私達家族は、当時団地の1階に住んでいた。1階だったから、私の家の被害は幸いにもテレビがずれて、当時お仏壇があったので、そのお水がこぼれただけですんだ。音の割には…と思ったらしい。

でも、近所の人達に話を聞いたところ、その家では食器が棚から飛び出して割れてしまっぐしゃぐしゃになったり、テレビや他の家具などたくさん落ちてきて危なかったとか、その他にも私の家よりも遙かに悲惨なことになっていたという。その時母は、自分の家は運が良かったなと思ったらしいし、私も聞いたときそう思ったし、本当に奇跡だなと思った。

2回目の揺れがあったあと、すぐ外に出て車の中に避難した。東の方を見ると、あちこちで火が上がって真っ赤になっていた。それを見て、この地震の本当の恐ろしさを知ったらしい。

地震の影響で、家でガスが使えなかった。当時、祖母は近所に住んでいたため、一緒に加古川までお風呂に入りに行ったりしていた。その時の私と弟は小さくて、外出経験が少なかったため、こう言うちょっとした外出を「きゃっきゃ、きゃっきゃ」言いながら、とても喜んでいたらしい。今思うと意味が分かっていなかったから、私たち二人は楽しめたのだと思う。

そして、当たり前がガスが使えないので、料理もできない。そのため、石油ストーブお使ってお湯を沸かして、カップラーメンを作って食べたり、お茶を沸かしたり、あとは石油ストーブで作れる範囲の料理を作ったりしていたそう。父はぐちゃぐちゃになったお店を片付けるのに忙しく、あまり家に帰ってこなかったそう。母は、次いつくるかわからないこの大きな地震の中、一人で私と弟のめんどう

を見たそう。きっと心細かったと思うし、すごく神経を使ったと思う。実際、すごく心配だったと言っていた。

3 父の話

当時、父は、三ノ宮でホストのお店をしていた。そのお店の従業員の人たちのことも心配になり、すぐに連絡を取ったが、なかなか繋がらなかった。父はすぐに従業員達の元へ向かった。みんなに会えたので、全員無事だと思っただけ。でも、一人だけ連絡が取れなかった従業員さんがいた。その従業員さんは、いつもお店に寝泊まりしていたらしい。家がないわけではなくて、ただたんにめんどくさがりだから泊まっていたらしい。だから父は、お店にいるのかな？と思ったのだが、他の従業員の人が、「今日は家に帰った」と言っていたのでその家に向かおうとした。だけどその前に、お店がどうなっているか気になったし、中にもまだお金とかスーツ、その他にもたくさん大事な物があつたので、先に父を含め、何人かの人たちで様子を見に行つた。「まあ、後でも大丈夫やろ〜」と思っただけ。まさかこの時、連絡の取れなかった従業員さんが、亡くなつていても知らず。

お店につき、扉を開けると何もかもが倒れて壊れてしまつていてぐちゃぐちゃ。お酒も全部こぼれてしまつていて床はべっしょべっしょ。お店の中は子供がおもちゃで遊び回つて散らかしたあと以上の悲惨な状態になつていたらしい。もちろん地震で電気はつかないので、真っ暗だった。それが何か、幽霊が出そうな勢いの不気味な感じだつたらしい。みんな、入るのをためらつたが、でも中にはお金もあるし、他にも大切な物がたくさんあると思ひ、勇気を振り絞つて歩き出したそう。

父が懐中電灯を持って、先頭を進んだ。中まで行き、みんなで「うわ〜こんななつてもたんか〜」などと色んな話しながら、お金やスーツ、その他大切なものを探して拾つていた。だいたい物を探して、あともうちょっとつなつた時に「ブルルル…ブルルル…ブルルル…」と、電話が鳴り出したそう。電気は切れてるので絶対にありえないこと。父と従業員達はびっくりして、その場にあつた大事な物だけとりあえず持つて走つて出て行つたらしい。私もこの話を聞いた時は、鳥肌が立つぐらい驚いた。「怖かつたな〜」などと話しながら、連絡の取れなかった従業員さんの元へ向つた。

向かう途中、携帯に電話しているのにその人は出ない。何回かけても留守番になり、父は“俺がかけとらぬになんで出んねん”と思つてたそう。でも、その人が電話に出ないとか絶対にありえないことだと思つたそう。その人は、当たり前のことだけど、ちゃんと仕事にも休むことなく毎日出勤するし、何があつても遅刻はしない。いつもなら寝ていても何をしていても父の電話にはちゃんと出るし、すごくしっかりした良い人だつたらしい。何よりその人は父を慕つていたらしく、父も信頼してたし、かわいがつてた。当たり前のことだからちゃんと出来て、しっかりしているから、父も信頼できたし、かわいがれたのだろう。でも、そんな人が、電話に出ないものだから、“なんでやろ…?”と不思議に思つたらしい。何かいつもとは違ふ気分と言うか、これから何か起りそうな雰囲気と言うか、とりあえずいつもとは何か違ふ感じがしたと言つてた。

いつもならその人も含め、他の誰かに電話して、例えその人が出なくてもなんとも思わないのに、その時はなぜかそうは思えなかつたらしい。今思えば、予兆だつたのではないかと思つたらしい。

なんだかんだしている内に、家に着いて車から降り、父を含めたそこにいるみんなは啞然としてしまつた。連絡がつかない従業員さんはマンションに住んでた。そのマンションが真ん中の階だけ、ぺっちゃんこにつぶれてしまつてたのだ。そして、その真ん中の階と言うのは、その従業員さんが住んでた階だつた。父はその事態を信じられなくて、何も考えられずぼーとしてたと言つてた。そして、そのまま訳が分からず走り出して、気付いたらその家の前で従業員さんの名前を呼んでた。父と一緒にきた従業員の人が警察に電話し、来てもらつて救出してもらつたそう。

その後、父と一緒にいた従業員さんは病院に向つた。

部屋に着くと従業員の人がベッドで寝てた。亡くなつてたのだ。目立つた傷がなかつたので普通に眠つてたようだつたと言つてた。その時父は、頭が真っ白になつて気が付いた時には涙が出てた。

後で思つたことは、お店に行つた時、電気も繋がっていないのにいきなり電話が鳴つたのは、この人からの電話だつたかもしれないと父は言つてた。もし違つてたとしても、そう信じたいと言つてた。

そして、「なんで何も悪いことしてないのに、こいつが死ななあかんのやろ…それに他にもいっぱい

語り継ぐ6

関係のない人達が死ななあかんのか分からん」と思って地震に対してすごく腹が立ったそうだ。私もこの話を聞いた時、自分の中で何か自然と溢れ出すものがあった。「なんで関係のない人まで死ななあかんの？」と思うと、感情が抑えられなかった。そして、「このままではあかん！！」と思い始めた。

4 環境防災科に入学しようと思ったきっかけ、その後

私がこの環境防災科に入学した理由は二つある。

まず一つ目は、昔からボランティア活動に興味があって参加したいと思ったからである。自分は将来、人のために何かをしたり、人の役に立つ仕事に就きたいと思っている。ボランティア活動をすると言うことは、人のために何かをすると言うことだから、そのまんまの意味だけれどすごく興味があった。

環境防災科に入学し、実際ボランティアに参加して、色んなことをさせてもらった。高校2年の夏休みには、能登半島に行った。仮設住宅に行ったとき、自分と同じ、震災を受けたお年寄りの方の話を聞いたりした。自分の体験した阪神・淡路大震災と照らし合わせて聞いて、すごく共感できた。そして、現地の小学生の子供や、同年代の人たちとも震災について話し合った。やはり、何もかも阪神・淡路大震災と照らしあわせることができ、たくさん色んな話ができ、知り合えて、すごくタメになったこともあった。本当に楽しかったし、体験した者同士にしか分かち合えないような絆も生まれた。

この他にもたくさんボランティアに参加した。その時「ありがとう」と言ってもらえると、自分って今、人の役に立ててるんだなあ実感することもたくさんあった。その度に嬉しく思えた。そして、ボランティア活動を通して学んだこともたくさんあるし、何よりも夢が叶ったのもっと夢が広がった。

そして二つ目の理由は、阪神・淡路大震災が起きたとき3歳で、一応この世にはいた。だけど、幼くて正直何にも覚えていないに等しいぐらいで、知識も何もない。このまま何も知らないまま生きて行くのは嫌だったから、もっと詳しく知りたいと思った。そして、災害や地震にも興味があった。実際授業で、阪神・淡路大震災について学んだりして地震の本当の恐ろしさと言う物を改めて実感させられた。父や母に聞くよりもすごくリアルなものがあった。

何より、災害と人間の授業中の講義で消防、警察、自衛隊、医療福祉大学、被災された方…震災を本当に体験された方の色んなお話を聞かせていただいた。

さっきも言ったけど、リアルすぎて本当に泣きそうになったこともあった。「なんでみんな悪くないのに死ななあかんのやろ…」と思うと、本当に何かこみあげてくるものもあったし、それとは逆に怒りもこみあがってきた。自然現象なのだから仕方のないことかもしれないけど、自然現象だからこそ“いつ起きるか分からない”。だから、一日でも油断したらだめなんだなと思わされた。「備え」の大切さに改めて気付かされた。

5 追悼式

高校1年生の時、1. 17追悼式に参加できる機会があった。私は参加した。16日の夜、あの時を思い出させるかのように雨が降っていた。風はすごく冷たく、とても寒かった。私はこれでもかってぐらい着込み、最終バス、電車に乗り、三ノ宮の東遊園地へ向かった。自分自身、追悼式というもの自身初体験で、どんなものか分からなかったのですごくドキドキしていた。

東遊園地について、まず目に入ったのは「1. 17」と言う字がたくさん竹筒で出来ていた。すごく感動した。その近くにテントがはってあったので中へ入った。中にはストーブと毛布が完備されていた。実際寝ている人もいたので、ごそごそしたり、うるさくしたら迷惑になると思ったので外に出た。先輩方もたくさんいて、すごく安心していられた。一緒にいてくれて、すごく感謝している。夜中になり、そろそろ寝ようかと言うことになり、みんなで眠りについた。

5時ぐらいに目を覚ました。服を着こみ、準備万端で外に出た。すると、震災で家族を亡くされた方や、被害を受けた方、新聞記者の方、テレビ関係の方…などと、たくさんの人たちが「1. 17」の竹筒の近くにいた。私はびっくりした。震災から12年経った今でも、こんなにもたくさんの人達がまだ苦しんでいたり、忘れられていないのか…と思うと、なんだか鳥肌が立った。

竹筒の中には水が入っていて、その上に一つ一つみんなでろうそくを置いて行った。そして、みんなでろうそくに火をつけて行った。

その日の天気は雨がパラパラと降っていて、風がとても強く吹いていた。風の音も、「ぼーっ

っと言う不気味な音がした。震災で亡くなった方々の、叫びの声を聞いている気持ちだった。

ろうそくに火をつけて行く作業をそこにいるみんなでした。ろうそくをつけながら泣いている人がたくさんいたし、その他にも祈っている人がたくさんいた。でも、風が強く吹いていたからろうそくに火がなかなかつかなかった。その時にも、やはり震災のことは決して忘れてはいけないんだなと言うことを改めて思い知らされた。

なんとかろうそくをつけ終わり、すごくきれいだった。でもそのきれいさが逆に心を痛くした。

みんなで5時46分ちょうどに黙とうをした。たくさんの人が周りで泣いていた。「何考えてるんやろ…」と思いながらも、なんとなく空気が読めたから体は分かっているけど頭がまだ理解していない感じだった。でも、やっぱり体は正直で、少し涙が出そうになった。でも、自分が泣いてもどうにもならないし、逆に同情の涙だと思ってそれは嫌だったから我慢した。

追悼式が終わった時、今までなにもなかったかのような感じになって。夢を見ていたようにさえ思えた。でも、自分の中で、阪神・淡路大震災に対する思いは前と変わった。この追悼式は、すごく意味があったからとてもいい経験になった。

6 これからの自分

私は本当に環境防災科に入学して良かったなと本当に毎回思う。今まで知らなかったことや、“その時”ためになること、本当にたくさん色んなことが学べて、すごく満足している。阪神・淡路大震災から、もう14年がたった。そんな月日がたった今、阪神・淡路大震災を経験した人が少なくなり、語り継ぐ人もいなくなってきている。それとは反比例し、阪神・淡路大震災を経験していない人たちはどんどん増えてきている。だからこそこれは自分だけが知っておくのではなく、絶対みんなも知っておかなければならないことだと思う。だけど、実際のところ私は震災体験もないし、阪神・淡路大震災の時の記憶もまったくと言っていいほどない。でも、これから色んなことをたくさん学んで行こうと思う。そして、私がたくさん、できれば世界中の人たちに伝えて行きたいと強く思う。阪神・淡路大震災のこともそうだし、防災のことも、とにかく学んだことやもの全て、私にできる範囲のことをこれからの世代の子たちに伝えて行きたい。それは人の役に立てることだと思うし、私が人のために何かできると言ったらこういうことしかないと思うから。だから私は将来、そんな仕事に就きたいと強く思う。みんなに知ってもらいたいし忘れたらだめだから。

I wish

神戸市北区道場町
西谷 阿弓

私は本当に震災を経験したのだろうか。そんな風に考えてしまうほど、震災当時の記憶は少ない。わずかに覚えていることでさえ、もしかしたら、大きくなってから無意識に作り出した想像かもしれない。実際、父や母の体験を聞いてみると、いかに自分の記憶が曖昧かを思い知らされた。あの日のことが知りたい。まずは父と母の記憶を借りつつ、当時を振り返ってほしいと思う。1995年1月17日、私はたった3歳のちっぽけな子どもだった。

震災当時、私たち家族が住んでいたのは、神戸市北区の端の端。少し車を走らせればすぐに三田市に入るような田舎だった。道場町という神戸電鉄の沿線沿いにあるそのまちは、自然豊かで静かなところだった。春には苺狩り、夏は外で行水、秋は柿をもいでおやつにしたし、冬は雪遊びをした。高いビルやマンションなどなく、田んぼに囲まれた広い土地にぽつぽつと家や店が建っていた。震災後5歳から6歳まで通った幼稚園は遠く、私は母に毎日車で送り迎えをしてもらおうというリッチな幼稚園児だった。今から考えると、そこに住んでいたから助かったのかもしれない。震源から離れた、家同士の間隔も広い比較的安全な場所だったから。父の仕事の都合で姫路から引っ越すとき、あの場所を選んでくれた父と母に感謝しなければと思う。私の小学校入学直前に今の家に引っ越してしまったが、あのまちはどうなっているのだろうか。

遊んだことや日々のささいな出来事はけっこう覚えているのに、大きな事件であったはずの震災発生時、1月17日の記憶は皆無に等しい。揺れた感覚、地鳴りの音、何一つ覚えていない。ぼんやりと霧がかかったように頭の隅に残っているのは、ふと目を覚まして横を見たとき、隣に寝ていたまだ1歳にも満たない妹の顔の真横に、ぼと、と落ちてきたビンのようなもの。いただきもののウイスキーのビンが棚に置いてあったのだ。今思えばそれは危機一髪で、危なかったと分かるのだが、当時の私は何の感想も持たなかった。身を挺して妹を守ろうとした、なんて書ければかっこいいのだが、ただひたすら冷静にその出来事を眺めていた。たかだか3歳の子どもの感覚なんてそんなものと言ってしまえばそれまでだが、危険というものを知らないことがとても恐ろしく感じる。本当に、家族が怪我ひとつせず無事でよかった。

同日、午前5時46分。別の部屋で眠っていた父と母は、ごおー、何かが近づいてくるような低い音のあと、どおおん、と下から突き上げる衝撃で飛び起きた。ダンプカーが突っ込んだと思った。目を覚ましたはいいが、何もできない。ゆらゆらゆら、激しい揺れに、ただただ揺られるばかりであった。

揺れが収まり、部屋の中は静寂を取り戻した。いまのは一体なに？何が起きたの？先ほどの揺れで、冷蔵庫と食器棚の中身は飛び出し、床に散らばっている。呆然とそれらをしばらく眺めていると、母が「子ども！」と叫んだ。それを聞いて父も慌てた。気付くのが少し遅すぎるのではないかと思うが、私も妹も何事もなかったのでまあいいとしよう。母は、人間、今まで全く経験していないことが突然起こると何もできない、きっと長田区などの火災に巻き込まれた方たちも、何もできないまま亡くなっていたのだと語る。

外の様子はどうなっているだろう、子どもの無事を確認したあと、父と母は一緒に外に出た。辺りはしんとしていた。同じハイツに住んでいる人たちも、誰も外に出ていない。おそらく、みんな似たような状況で、何が起きたのか分からず混乱していたのだ。夢だったのか、いやでもあの揺れは忘れられない。早朝だったが、またあの揺れが来るかもしれないと思うと怖くて、そのまま起きておくことにした。

私と妹を抱っこして、家族でひとつの部屋に集まる。母曰く私はそのときに目を覚ましたらしい。本当の記憶かどうか自信はないが、漠然と不安だったように思う。外は真っ暗で、カーテンの隙間から覗く黒い闇が、今にも自分にぐわ、と襲い掛かってきそうな気がして、抱っこしてくれている父にぎゅう、としがみついた。暖かった。そこでぷつぷつと終わっている。私自身が覚えている震災の記憶は、前に書いた落下してきたビンと、父の抱っこ、これだけである。あとは父と母の記憶に頼るしかない。

父がテレビをつけた。何事もなく、どのチャンネルでもいつも通りの番組を放送していた。途中で画面の上に緊急速報のテロップが出たが、それも大阪で地震があり、看板がひとつ落下したというだけだ

った。そんな情報しか入ってこなかったから、この辺りの一部の地域が揺れただけなんだ、それにしてもよく揺れたな、と思っていた。実際は違った。神戸の情報が入ってきていなかったためであった。入るはずもない。神戸のまちは一瞬にしてぐちゃぐちゃになり、それどころではなかったのだから。

一応親戚の安否を確認しておこうと、母は姫路の実家に電話をかけた。そのときはまだ電話回線は繋がっていた。プルルルル、と何度目かの呼び出し音のあと、はい、と声がした。母の姉、私からすると伯母が電話に出た。こっちはかなり揺れて、冷蔵庫からもいっぱいものが飛び出したりしたけど、そっちはどうやった？最悪や。バスタオルを引っ掛けてたポールが倒れた。え、それだけ？こんな具合だから、神戸のほうが揺れは強かったみたいだけど、やっぱり大したことじゃなかったんだ。そう思ったのもつかの間、付けっぱなしになっていたテレビの中が、だんだんと慌ただしくなっていた。アナウンサーの後ろで人が走り回り、何事かと眺めていると、通常の番組は全局放送中止になり、そこからはしばらくの間延々と緊急特番である。大阪から中継ヘリが飛び、高速道路が倒れただの、長田のまちが燃えているのだと伝えている。リポーターは、信じられないことが起こっています！と興奮した様子で喚いていた。いつも見ている神戸が、神戸ではなくなっていた。そこで初めて、ああ、やっぱりさっきのは地震だったのか、と実感した。

テレビは、時間を追うごとに次々と変わり果てた神戸のまちの様子を映し出していった。ほんの数日前、父と私のふたりで見に行ったセーラームーンの映画を上映していた映画館は、三ノ宮のセンター街の中にあっただ。センター街は、本当にこれがあるのか、と疑いたくなるほど様変わりしていた。アーケードも店もペシャコンだった。父はもう神戸は終わりだと、頭のどこかでぼんやり思った。

当時、父も母も、地震に対する知識はほとんど持っていなかった。ライフラインが全てすっぱり遮断される可能性があることも知らなかった。唯一、どこで聞いてきたのか、母が電気やガスが止まるかもしれないと言って、炊き出しを始めた。私たちでも食べやすいように、時間が経っても食べられるようにと、ご飯をたくさん炊いて、おにぎりを20個も30個も握った。何が起こったかなど知るはずも無い私と妹は、もくもくとそれをかじっていた。

そうこうしている内に、父の勤める店から電話がかかってきた。明日から店を開けるため、片付けと準備をしに来いと言う。父は当時、某スーパーの藤原台店に勤めていた。数年毎に支店を転々と回って転勤する。引越しが多かったのはこのためだ。現在は和歌山の支店に移り、単身赴任している。ともかく、店から呼び出しがかかったので行くしかない。ちなみに父はこの日、店が定休日休みだったため、今でも震災当日が火曜日だったということを知っている。前日に休みということ意識して眠ったからだ。人の記憶とはそういうものなのかもしれない。

家族を心配しながらも、父は家を出た。冷たい空気が肌を刺した。電車が止まっていたため、車で静まり返ったまちを進んだ。途中、信号が全部ついていないことに驚きながらも、店を目指す。

店に着いて唾然とした。棚という棚から商品は全て落ち、どこかでビンが割れたのか酒の匂いが鼻をかすめた。状況把握もうまくできないため、父を含めた、比較的店の近くに住む、集まった少ない従業員たちで、とりあえず危険なガラスなどの片づけから始めた。他にも連絡がついた従業員やパートの人はいたが、家が全壊した、近くでガスの臭いが充満している、なんて言われてしまっただけとも言えない。仕方なくもくもくと作業を進めたが、いつもなら朝の8時頃には到着する、商品を積んだトラックがやってこない。結局、その日に商品が届くことはなかった。

店内の片付けに追われているうちに、昼になった。みんなで店にあるインスタントラーメンなど、食べられるものをかき集めてご飯を食べた。食べながら、食堂のテレビに映る、壊れた神戸のまちをじっと押し黙って見ていた。誰かがぼそりと、最悪や、と呟いた。

昼ごはんを食べ終えてからも、作業は続いた。父は時々テレビを見に行っていたが、その度に死者の数が増えていた。最初は何十人だったのが、一時間毎に百人単位で増えるようになり、仕舞いには何千人になった。こんなに簡単に人は死ぬのかと、無機質に光るブラウン管を見つめて思った。

夕方になって、家に電話をかけた。繋がらない。プー、という音が続くだけだった。他の人も同じようだった。どこにかけても繋がらなくなってしまった。心配になった父は、帰らせてくれと頼み、家路についた。

6時ごろに家に帰っても、別段変わったことはなかった。何度か余震はあったものの、誰も怪我をしなかったし、私と妹に限っては、父が出かけてからディズニーのビデオを見たりして過ごしていたらしい。なんとも能天気だと自分でも呆れる。それほどまでに幼かったということと済ませられるのかもしれないが、もう少し何か感じるとか、せめて大変なことが起こったのだということくらいは気付いたか

語り継ぐ6
った。

明くる1月18日、父にとって、この日からが本当に大変だった。前日と同じように車で出勤すると、主に生鮮食品を積んだトラックが店に到着していた。運転手に話を聞くと、前日の夜中に出発して、今着いたのだと言う。当時、藤原台店への仕入れのトラックは、大阪の茨木から中国縦貫道を通るルートを使っており、通常なら1時間ほどで着く道のりだ。地震によって交通が遮断されたことの影響がここに出ているのであった。

店内に届いた商品を運び込み、開店準備を始める。普段なら10時に開店するところを、8時に開店することになった。店の前に大行列ができていたためである。北区は被害がほとんどなかったが、また地震が起きるかもしれないという恐怖感から、近隣住人はみんなとりあえず買い物をしたかったのだ。

まだ準備も整っていない中、店は開店した。人の波がわっと押し寄せた。食べられるもの、使えるものならなんでもいいという風に、あるものはみんな買っていく。特に売れたのは、ガスボンベや煙草、インスタント食品、ポリバケツなどである。当時、その地域はまだプロパンガスの家庭が多かった。ガスが止まってしまった人たちが、ガスボンベを大量に購入したと思われる。それほどまでに人が多かったのには、藤原台店が近隣の支店の中で唯一無事だったことも理由として挙げられる。近くの鈴蘭台店などは、建物自体にひびが入り、電気もストップしたため冷蔵庫が使えなかった。そのため、そちら方面からも客が流れ、大騒ぎへと発展したのだ。買い物客の勢いは止まることを知らず、昼過ぎには朝に届いた商品も含めて何もかも無くなった。

2、3日経っても、流通の乱れは続いた。父の店に商品はまともに届かなかったし、それまではなんとか買い物に行けた近所のスーパーも、商品が無くなってしまった。父と母は一緒にあらゆる店を回ったが、どこも大体同じ状況だった。コンビニがまるごと空っぽになっているのを、初めて見た。いつ電気が復旧するか、いつ商品が届くかの見当がまったくつかないため、ただただ商品もないまま店だけが開いていた。

地震から3日目、母は買い物ができなくなり、水がちょろちょろ、くらいしか出なくなった状況を目の当たりにして、私と妹を連れて実家のある姫路に避難することを決めた。父は店に出なければならないため、ひとり神戸に残ることとなった。高速道路は通れないし、一般道もひどく渋滞していたので、裏道を通りながら進み、三木、加古川、姫路まで辿り着いた。それから約一週間、父を除いた私たち家族は姫路で過ごした。

父は毎日店に出勤した。商品のトラックは地震から一週間ほど経つと、普段通りの毎朝8時に到着するようになった。しかし、そのころになっても、消息不明の従業員がたくさんいた。神戸の中心地から通勤している人で、連絡のつかない人は死んでしまったのではないかという噂も広まった。

一週間以上経つと、ぼつぼつ店に連絡がくるようになった。家が壊れて避難所にいる、明日から店にでる、などのように。中には、神戸の中心地に住んでいるが、震災の前日から連休を取り、家族でスキーのバスツアーに行っていて助かったという人もいた。そんな、一見偶然に見える行動が生死を分けた例がたくさんあった。

父がひとりで家に帰ってテレビを見ているときは、ろくでもないニュースばかりが報道されていた。神戸は無法地帯と化し、窃盗団が現れたとか、長田の火災は住民が火災保険をもらうために付け火をしたから発生したとか。人々が冷静になるにつれ、本当かどうか分からない憶測やデマが飛び交った。中には、見ているのかわいそうで、信じられないような映像もあった。破裂した水道管のところに集まって、水を汲む住民の姿。消防士の方が消火活動に向かう。現場に行きたいのに、報道の車や避難しようとする人々の車に行く手を阻まれて行けない。現場に着いても、ホースを車に踏まれて水が出ない。消防の仕事をしたいのにできない。悔しさを噛み締める消防士の姿を見つめながら、父は切ない気持ちになった。

母と私と妹が家に戻ったときには、まちも落ち着きを取り戻しつつあるように見えた。北区だったこともあり、被害を受けた様子もなく、道も普通に通行できた。しかし、やはりまだ流通は少し乱れていた。時間をかけて、やっと店に届いた商品はすぐに売り切れ状態になった。住民が、自分たちの分だけでなく、被害の多かった中央区や灘区、西宮などの親戚へ物品を送っていたためだ。それからしばらくは、スーパーなどに商品が届いても、すぐに無くなるという事態が続いていた。

家族がまた家に揃ってからしばらくして、父の店では期限切れ間近の商品のたたき売りが行われた。父の会社は、創設者が神戸出身だったことから神戸に多くの商品倉庫をもっており、それが地震でほとんどだめになってしまった。まちが落ち着き始めてから、壊れた倉庫の扉をこじ開けてみると、中から

期限切れ間近の商品が大量に出てきたというわけだ。処理に困った会社は、超特別価格で商品売りさばくことにした。ビール全品100円など、ありえない価格で販売され、飛ぶように売れた。父はその時の広告キャッチコピーがとても印象に残っているという。私も斬新なアイデアだと思うそれは、「お願いします、買ってください。」

その後だんだんと生活は日常に戻って行ったが、余震は続いていた。最初のほうこそみんな怖がったものの、一ヵ月もすると慣れっこになった。そういうものなんだな、と思う。同じ状態が続くとそれに慣れる。余震は結局3ヵ月ほど続いた。

あの震災を振り返って、父は最悪の一言に尽きると言う。たった一度の災害で、人が6,000人以上も死ぬなんていうのは、最悪としか言いようがないと。母は、あんなに大きな災害に遭って、家も家族も無事だったことが本当に幸せなことだと言う。阪神・淡路大震災という歴史に残るほど大きな災害が、自分たちの住んでいた神戸で起こり、それによって家族を亡くされた方、怪我をされた方がたくさんいたという事実と、経験した揺れだけは一生忘れられないと。

当時の記憶をほとんど持っていなくとも、私は確かにあの日、あの時を生きていたのだ。そして、震災から10年以上の時が経ち、私は環境防災科に入学した。今思えば、なぜだろう、と思う。そんなに災害や防災に興味があったわけではないのに、進路先を考える中で母に勧められたとき、私はほぼ二つ返事で受験を決めた。自分でもなぜだか分からないが、震災のことは勉強しなければ、と思ったのだ。あの日のことを知らなければと、何かに背中を押されるように。

私が震災を経験したことも、生き残ったことも、環境防災科に入ったことも、偶然か必然かなんて分からないが、きっと何か意味がある。3年間、色々なことを学んだ。阪神・淡路大震災や防災、減災に関する事。たくさんの人たちと出逢って、勉強して、経験して。そうして今、これからの私にできることは、伝え続けていくことだと気付いた。

人は忘れていく生き物である。それはどう足掻いても変えることのできない事実。どんな出来事も、いつかは過去のものになって、忘れられていく。それでも、私は震災のことについて考えることを、伝えることをやめない。やめたくない。例えいつか遠い未来、忘れ去られるのだとしても、私の頭と心が覚えている限り、声が、想いが続く限り、伝えたい。どんな形でもいい。語り部としてでも、自分の子どもに教えるということでもいいと思う。震災によって多くのものを失くし、そして得たこと。防災や減災をすることで、傷つく人やものを減らせること。今こうして、震災で亡くなられた方の数よりも多い文字数を連ねてみても、震災の全てを語ることはなんてできないが、ちっぽけな私の言葉でも、できるだけ多くの人に届けたい。私の記憶と想いを伝えることで、未来に生きる人たちに、災害に前向きに立ち向かってほしいと願っているからだ。災害を恐れるばかりでなく、被害を少なくできるよう、自分たちで考え、行動してほしい。そうする中で、人の命の重さや生きることの素晴らしさ、人と人との繋がりなど、人として大切なことを知ることできるから。もちろん、私自身も参加していく。環境防災科で学んだ者として、役に立ちたいと思う。災害に強く立ち向かう人が増えて、少しずつでも、安全で幸せな社会ができていくことを願っている。

伝え続けて、生きたい。たくさんの人が、しあわせに笑う未来のために。

私の全く記憶されていない思い出

神戸市垂水区南多聞台
林 ありさ

【私の思い出】

阪神・淡路大震災は午前5時46分の朝早くに起きた。私は当時三歳だったために地震が起きたことにも気がつかず、家族と一緒に寝ていた。幼かったからだろうか、それとも記憶を自分の中で封じ込めているのか…わからないが、私には全くといえるほど大震災の時の記憶はない。三歳の思い出として残っているのは、夏に家族とハワイに行った時の記憶と家で飼っていた熱帯魚が死んでいなくなり、土にうめたことだけだ。しかし今思えば…小学生の時に、母親と父親が私と兄の上に覆いかぶさっている夢を見たことがある。その夢は大震災の時のフラッシュバックだったのではないのかと考えるようになった私がいる。

フラッシュバックなんて私には関係ないと思っていたが、心理学のことを少しだけ勉強したら、“悪夢”とかはフラッシュバックが寝ている間に起きていてそれを見ているということなので、私があんな夢は私が唯一覚えている震災体験の一つなのかもしれない。夢の中では揺れているとかはわからないが、両親の表情が陰しいことは一番覚えている。どうして陰しいのかわからなかったことが、この語り継ぐを書く時に理解することになるとは考えていなかった。

この語り継ぐは、私が何も覚えていないために家族から聞いた震災の話をまとめたものをかく。家族といっても、ほとんどの話は母親から聞いたものだ。父親からは仕事の関係上、私が聞きづらいと思っ

てしまっているからだ。本当はどのような活動を当時していたのか？聞きたいと思っている。今回、この“語り継ぐ”を通して、私が勇気を振り絞って聞けるようになれたらいいと思っている。

そして、大震災で私たちの家族や叔父、祖父母が死ななくてよかったと思っている。

【阪神・淡路大震災当時の暮らし】

私の家は当時、県営住宅に住んでおり、家族そろって和室にて寝ていた。ひどい揺れにもかかわらず、タンスなどの家具は私たちの上に倒れてこなかった。もっとすごい事と言えば、私と4歳年の離れた兄はその揺れの中起きる事もなく寝ていた。揺れがおさまった後、県営住宅の後ろが崖に面していたために崩れ落ちることを危惧した両親は、その日の朝7時ぐらいに家がなくなっても暮らしていけるようにキャンプ道具や少しのお水・ジュースを積みこみ、私と兄を抱いて車の中に二日間ほど避難をした。父親は救急隊だったので、私たちを車に積み込んだ後すぐバイクで仕事に向かった。そのまま、一週間ほど帰ってこなかった。車の中で私が起きた時に「スキー？」と母親に聞いたみたいだ。震災時のこの時期は家族旅行としてスキーに行っていたので、車でいつも行くスキー旅行と間違えたから父がいないから母親に尋ねたのだろう。しかし震災前に私たち家族は峰の原スキー場に13、14、15日にかけてスキー旅行に行っていた。

父親を抜いた家族全員で震災起きたその日のうちに、家にいったん戻り必要な物を取り出した。その時、家の中は、ウイスキーや梅酒などのお酒の瓶が割れていたために靴のまま家の中にはいった。ただ荷物を取りに戻ったのではなく、家の中の被害を見るために戻った事も含まれている。家の中はそれほど被害がなかったために、すぐに家に戻りいつものように生活をはじめた。そんな中、4、5日後に家で飼っていた熱帯魚を入れていた水槽が突如割れた。震災によってひびが入っていたのだろう。そのために熱帯魚はすべて死んでしまった。私は熱帯魚の事が好きだったのでとても心が締め付けられるような悲しみを感じた。それからというもの、熱帯魚が売っている場所に行く事ができなくなってしまった。今でも、熱帯魚を見ると幼い頃ほどではないが、胸が締め付けられる事がある。それほど熱帯魚が死んだ事はまだ子供の頃の私にとって「命のはかなさ・尊さ」を教えられた瞬間でもある。

私の祖父母や叔父達は長田に住んでいる為に、母親は電話が通じないためにバイクに乗り、長田まで行き安否の確認を取りに行った。幸いにも誰も怪我をすることなく暮らしていた。安否の確認を取りに行っている間、私と兄は近所の人に預けられていた。祖父や叔父は震災が落ち着きはじめた頃、災害犯罪が起きないように、“自警団”をつくり、まちの防災に取り組みをしていた。祖父などはリーダーとし

て、みんなをまとめていた。それを見た母は王将で餃子を買って差し入れをした。

私の家は、キャンプによく夏場に行くために、キャンプにすぐに行けるようにランプやプラスチックの食器などをケースの中にいつも入れていた。それだけでなく、水や食料を買って入れていた。そのために、買い物はあまり行っていない。いくとしたら舞子の所にある一つだけあいていたというダイエーまで買いに行っていた。

私の祖父は母親がプルタブの仮設住宅を借りられるように準備をしていたが、どんなに危なくとも「この家からは出ない」と…家に愛着があったために絶対に仮設住宅に行こうとはしなかった。祖父母の家は震災の影響によって、屋根が崩れてきそうになっていたのにもかかわらず、その家で生活をしてきた。あとから、母親が「祖父は人との付き合いが苦手だから、仮設住宅にいきたくなかったのかな?」と言っていた。

【阪神・淡路大震災後の暮らし】

私は記憶をなくしているから、その時の恐怖心や悲しみをあまり知らない。熱帯魚の時感じた悲しみは熱帯魚を見ない限り思い出す事はなかった。どのような暮らしをしていたかも知らない。だから、小学校で避難訓練をするのか、どこからか電話が朝にかかってくる意味を見て見ぬふりをしていた。

1月17日の早朝6時ぐらいにどこからか電話がかかってくることは小学3、4年の時に知った。それは何でかかってくるのか、どこからかかってくるのか知らない。電話がかかってくる日は学校で大がかりな避難訓練をしている。なんで避難訓練をしているのか幼い時に震災体験したことを忘れていた私には理解できなかった。電話の意味や、避難訓練の意味を知ったのは中学生の時だ。それまで、気にもしなかった事だから意味を知ろうと思わなかった。意味を知るきっかけは家族との会話だった。消防の話の時に、フツと思った、電話の事を聞いてみたら父親の仕事場…消防署からかかってくる時きた。震災体験から学んだ訓練の一つだそう。すぐに呼び出せるように、すぐに駆けつけられる様に…今でも消防士の中では震災体験は消化できていないことなのだ。父親から震災の話聞くが、これは珍しいことで、未だに話したがらない人がいたり、震災が落ち着いてから仕事をして、助ける事が出来なかった罪悪感などから消防を辞める人もいたそう。電話内容は「勤務先に出てきなさい」と言った簡易的な物であるが、地震以外の災害でひどいときなど呼び出しをされる。地震なら、震度5以上なら自主的に出てきなさいと掟で決められている。

私は環境防災科に入ってから災害のニュースがあると注意を向けて見たりするようになった。父が消防だから、震災の話は少しだけだが聞いてみたりする。しかし、どこか私が聞きづらいついて感じてしまう。消防や救急の話は環境防災科の中で聞いたからだと思う。父親も救急隊の一員だったので、助けられなかった人もいたろう…そのことを考えると聞きづらいついてしまう。だから震災の話聞くときは母親から一番聞いている。

最近は海外の情報にも目を向けるようになった。海外では災害にたいしてどのような対策をとりおこなっているのかが気になりはじめたからだ。国が違えば、対策も防災授業も少なからず違うから、そこから様々な事を学ぶ事ができるからだ。

私と母親は、小学生の時から避難所とその避難所にて待ち合わせ場所を決めている。避難所は私が行っていた小学校で、その小学校にあるポストの前で待ち合わせをしている。なぜ私と母親だけかという、父親と兄は消防士なので私たちのそばに震災などの災害が起きればいなくなるからだ。私は小学校高学年の時から『自分の身は自分で守る』と目標みたいなのを定めていた。頼りになる父親や、男である兄に頼ることができないから、生きていくために自分で様々なことをしていかなければならないと心の奥のほうで感じていたのだろう。そのため、止血の仕方などの救急法を父親や習い事であるガールスカウトで必死に覚えた。小学生の時から怪我をしても自分で消毒していくようにもなった。それとともに、自然の植物でどの草が血止めに使えたり、火傷に聞いたり逆にかぶれてしまう植物に興味を持った。植物のことに興味を持ったのは、きっかけはただ本が好きで図書館で植物の本をそのときたまたま読んだだけなのだが、「生き物の世界は広いな」と子供ながらに感じた。

【環境防災科に入ったきっかけ】

私は中学三年生のときぐらいからアーチェリーをしてみたいと考えるようになった。そのため、高校

語り継ぐ6

ではアーチェリー部があるところを探していた。インターネットで調べていくとここ舞子高校にアーチェリー部があることがわかり「ここに行きたい」と思い、始めこの学校についてもっとたくさん知りたいと考えてから調べていくうちに『環境防災科』を見つけた。ボランティア活動や、消防体験など様々な活動をしていくことができる学科とわかりとても興味がわいた。説明会は二回とも行ったが、一番興味がわいたことは「ネパールに行く」という外国との交流会だ。このときにはアーチェリー部よりも環境防災科のほうに興味に向いていた。

ガールスカウトなどでも様々なボランティア活動をして、行動力だけは誰にもまけない。自分がしたいと思うことは、両親を説得してまで行ってきた。中学一年の時はニュージーランドにホームステイをいかせてくれたり、幼稚園の時から英会話や水泳、小学生のときからお習字やガールスカウトなど様々な習い事もさせてもらっていた。今までできてきている活動をこの「環境防災科」で生かしていけそうだと感じた。

今思えば、部活で学校を決めていた事に恥ずかしいと感じるのと一緒に、部活のおかげでこの環境防災科のことを知るきっかけになったので、感謝の気持ちもある。部活をしながら環境防災科の行事を両立させていく事は難しかったが、自分がしたいと決めていた事なのできついとは思わず、逆に自分の知らない事を学んで行く事ができて、楽しいと感じている。

【環境防災科の行事】

私は高校はいつすぐの一年の時からネパールに行った。初めての事だから何も分からないし、防災のことなど習い始めたころだったのでその時は先輩の陰に隠れていた。「ネパールにただ行っただけ」となってしまった。それだとただの観光になってしまっているのだから、私は少しでもいいからもっと英語を話せるようになろうと思った。英語だけでなく、防災や震災体験をスピーチできるようにももっと努力をしていくべきだと改めた。

部活はもちろんアーチェリー部に入ったが、環境防災科の行事を優先にしまい部活動をおろそかにしてしまった。両立できていなかったのだ。そのことに気が付いてから、私はなるべく部活がない時に行事を行ったりして両立をはかるようにした。やっぱり、両立は難しいと感じた。

二年生になって、二度目のネパールに行った時はそれなりに防災のことを勉強していたり両親から震災体験のことを聞いたりして、それなりに知識を持って挑んだ。しかし、英語が聞き取れなかったりして会話はあまりできなかった。それでも、日本の歌を教えたり、ネパールの歌を教してもらったりと文化交流はそれなりにできた。それだけでなく、ネパール語を少しだけだがしゃべれるように教してもらった。まだまだ、勉強をしなければならないと思いをあらためた。

【これからのこと】

私の将来はまだ決めていない。「高校入る時は消防士になる」と夢を持っていた。しかし一年生の時に消防体験をしてわかったことは、自分には消防士という仕事は向いていないことだ。それを一年生の時に分かってから今までずっと将来を考えてきた。だが、考えてその仕事について調べてどのような仕事かわかると向いていないことのほうが多くあった。

私は聞く耳を持つことはあまりしなかったが…両親は私以上に私の性格をよく知っているのだから、「それはやめとき」と意見を言ってくれている。夢を見つけるまで様々な仕事を調べていき、「作業療法士」や「臨床心理学」という仕事を見つけた。しかし、消防士の父親や兄がこの仕事はやめときといつも言っていた。実際にそのような人を見ている父親や兄の言うことだから本当にやめてほしいのだろう。それで最初のほうは私は抗議していたけど、結局は折れてまた違う職業をさがしはじめた。

今私は、「臨床検査技師」と「動物衛生看護師」という二つの仕事をピックアップしている。学科自体が違う二つなのでどっちにしようかずっと悩んできているが、そろそろきめないといけない。気持ち的に「動物衛生看護師」のほうにいきたいとは考えている。動物が大好きだからだ。それだけでなく、子供の時から熱帯魚やハムスターを飼っていたために「命のはかなさ・尊さ」のことを知っているためにその命を助けたいと思うからだ。だから、このままいくと「動物衛生看護師」の道に行くと考えている。

簡単にいくとか言っているが、そんなに甘い世界ではないことは重々理解している。命を預かる世界

のために、勉強することなどたくさんある。それらのことを踏まえて私は「動物衛生看護師」を目指していきたく強く思っている。

私は小学二年生の時から、ガールスカウトをしている。まだガールスカウトの中でしか発展途上国のくらしや防災のことを発表したことはないが、もっとたくさんの子供たちにこの環境防災科で学んだことを伝えていくことができるように活動をする。それが、環境防災科に入って、自分が学んだ知識を生かす事が出来ると考えてる。発表した内容は、生きていたヤギがその日の晩御飯に出されたりしたこと＝当たり前食べているお肉も、もとは生きていた動物。私たちは生きていたモノを食べて生きていることを…。それだけでなく、子供たちから大人たちに防災のことを伝えていけるように、子供たちでもわかりやすいように防災を教えたりした。

それだけではなく、「動物衛生看護師」と防災をつなげていくことができるように、今考えている。動物たちも災害を前にしたら、被害を受けた側になる。動物たちだってけがをしているかもしれない。それらの動物を保護したりできるのではないかと考えている。それだけでなく、ペットたちをゲージに入れる訓練を進めたりして、災害が起きた時にすぐにゲージに入ってくれれば避難がしやすいのではないかと思う。それによって動物たちも失われずにいい命を助けることができると考えた。

震災体験

神戸市垂水区本多聞
深田 愛梨

家族構成

わたしの家族は当時、父、母、わたし、妹の4人だった。何匹か熱帯魚を玄関の近くで飼っていた。父も母も働いていたので、土日以外は保育園に通っていて、おままごとをしたり、砂遊びをしたり、おにごっこやかくれんぼをしたりしていた。友達と遊ぶのがすきだった。土日にはよく近所の友達と三輪車に乗って遊んでいた。雨の日は家で、絵本を読むのがだいすきだった。

わたしは1週間前に3歳の誕生日を、妹は4日前に1歳の誕生日を迎えたばかりだった。1週間前には、ケーキを食べて、お祝いしてもらって、楽しい日をすごしていたのだと思うと、すごく不思議な気持ちになる。

わたしの震災体験

わたしには震災の記憶はほとんどない。

起きると、父に抱えられて駐車場に出ている。母は、妹を抱えていた。わたしはトトロの、妹はネコバスのきぐるみパジャマを着ていた。妹は泣いていた。

わたしはわけがわからず、「なんでこんなところ居るん？」と思っていた。起きたばかりでトイレに行きたかった。母に言うと、「今家入れへんから我慢できる？」と言われた。そういわれてもなんでものか意味がよくわからなかった。

気づいたら妹は泣き終わっていて、眠っていた。

近所の人たちもたくさん出てきていて、なんだか驚いたような、あっけにとられたような、何かに脅えているような、すごく複雑な顔をしていた気がする。なぜかみんな、小さくて低い声でひそひそと話をしていた。今思えば、すごく重い雰囲気だった。

わたしが住んでいた棟にはひびが入っていた。

その後のことは、まったく覚えていなくて、どんな生活をしていたのかもわからない。いつもは保育所へ行っていたのに、その時は行ってなかったような気がする。

あとで聞いた話だが、その保育所は建物が壊れてしまって、行けなくなってしまったのだそうだ。今ではその保育所はすごくきれいになっていて、クラスの名前までおしゃれに変わっている。

わたしは、震災のあとから、違う保育園に通った。

家族の震災体験

震災の前の日の夜、妹が夜泣きをして、父と母はあまり寝られなかったようだ。普段は夜泣きなどすることはなく、静かに寝ているのに変だと思った、と母はよく言っている。「まだ小さかったから、予知出来たんかもしれへんなあ」などと話したりもする。

5:46、震災が起きた時も、まだ父と母は起きていた。突然のことにびっくりしたが、とにかく逃げないと、と思って父がわたしを、母が妹を抱きかかえて逃げたのだそうだ。

父は車の中だったら安全だと思って、駐車場に出たらしい。

家から出る時に、当時玄関の近くで飼っていた熱帯魚の水槽が倒れていて、玄関は水浸しで魚たちがはねていた。

揺れがおさまってから家に帰って、母が祖母の家に電話をした。親戚はみんな無事で、祖母の家の近くの水道管は工事したばかりで、水も出ていたようだった。私の家からの連絡が1番遅かったらしく、とても心配していた。

何日かはまだ水や電気、ガスなどが使えなくて、とても困ったと母は言っていた。

小学校・中学校

わたしの住んでいたところは、そんなに被害もなかったし、みんな小さかったこともあって、小学生や中学生になっても友達と震災の話になることもなかった。時々、「地震の時のこと覚えてる？」という話になっても、ほとんどの人が「覚えてない」と言っていた。

小学生の頃は1月17日が近づくたびに、ビデオを見せられたり、祖父祖母が語り部にきてくれたり、防災訓練をしたりした。わたしは正直、面倒くさいと思っていたし、こんな話を聞いたからと言って何にもならんやろとっていて、話のほとんどを聞いていなかった。防災訓練も、いつもふざけてやっていた。

中学生になってからも、ほとんど興味がなかった。宿題で話を聞いてこなくちゃいけないから話を聞いただけ、防災訓練をしても地震も何も起きないから大丈夫、という感じだった。

小学生の頃からの親友に「環境防災科」のことを教えてもらうまでは。

久しぶりに遊んだ時に、親友が夏休みの環境防災科体験に行ったことを話してくれた。すごく楽しそうだったこと、「一緒に舞子高校に行こな」と小さい頃に約束していたこと、普通とは違うことをやりたかったことから、わたしは環境防災科に入りたいと思うようになった。

環境防災科入学

環境防災科に入ることを考え出してから、震災のことを時々考えるようになった。そういえば、震災の時あんなことがあったな、時々母がそんなこと言っていたな、とかいろんなことを思い出した。自分でも、覚えていることに驚いた。

祖父が入院していて、わたしは医療系の勉強もしたかった。環境防災科に入ったら役に立つかもしれないと思っていた。

祖母の家に行った時に、たまたま祖母のお友達と話をした。

祖母が、「この子、環境防災科に入りたいんやて」と言うと、その人は、「わあ、ほんま。すごいねえ、あの地震のことしたり募金したりしてるところでしょ？」と言ったあと、わたしに地震の時のことや戦争の時のことを話してくれた。

「地震の時はね、戦争の時のことを思い出したわ。もう、親戚やらお友達やらいっぱい亡くなってしもてねえ…。ほんまに怖かった。わたしのだんなさんも亡くなってなあ。あんたらみたいな若い子がそうやって地震のこととかしてくれたら、わたしもうれしいわ。あんたのおじいさんも喜ぶよ。がんばってね」と言ってくれた。

環境防災科に入ると言っただけで、祖母も、祖母の友達も喜んでくれた。入院している祖父も喜んでくれると言ってくれた。びっくりした。

震災のことを勉強することで、そうやって喜んでくれる人もいるんだったら、とわたしは環境防災科に入る決意をした。

環境防災科に入ってから、話を聞くのは正直すごく苦手だった。しかし、たくさんの方々の話を聞いていくうちに、震災体験は人によって全然違うこと、毎年毎年、学校やテレビで阪神・淡路大震災の話題が出される意味がやっとわかった。

阪神・淡路大震災の恐ろしさを高校に入学してから実感した。

しかし、こんな曖昧でささいな記憶しかないわたしに、語り継ぐことなどできるのだろうか。阪神・淡路大震災を風化させないためにはどうしたらいいのだろうか。

もともとあんまり興味もなく、地震の時のことなんてほとんど覚えていないわたしには、すごく不安だった。3歳下の子になれば、もう震災を体験した人もいない。そんな世代に震災のことを話しても、全然聞いてくれないのではないか。

きっかけ

そんな風に思っていたわたしの考えを変えてくれたきっかけが2つあった。

まず一つ目は、小学生に防災の授業をすることになった時だった。

授業をクイズ形式にしたり、実験をしてみたりすると、小学生たちはすごく興味を持って、ちゃんと話を聞いてくれたし、意見まで言ってくれた。「これ知っとお！学校でも、習ったで！」と言ってくれる子や、震災の映像を見て、「すごいなあ…怖いなあ。」と言ってくれる子もいた。

語り継ぐ6

「面白くない」と言われるかもしれないと思っていたことに興味を持ってくれて、本当に嬉しかったし、ちゃんと話聞いてくれるんやなあとすごく感心した。

授業が終わった後、先生が「愛梨ちゃん、めっちゃよかったよ！人前で話すの、向いてるんちゃう？」と言ってくれたことで、すごく自信がついた。ちゃんと、震災のことを伝えられるかもしれないと思った。

もう一つのきっかけは、震災メモリアルという行事で話をしてくれた大学生の言葉だった。

その方は震災の後に大阪に引っ越して、震災のことをあまり誰にも話せないままだったそうだ。震災から逃げた、という罪悪感のようなものがずっと残っていたと言っていた。大学に入って震災のことを勉強するきっかけがあって、それからいろんな行事に参加したり、語り部をしたりするようになったらしい。チャリティーライブなども実施して、MCの間に雰囲気壊さない程度に防災の話をしたりするそうだ。

その大学生の話は専門家みたいな難しい話ではなくて、すごくやさしいしゃべり口調だった。年が近いこともあるのか、すごく聞きやすかった。そこも、すごいなあと思った。

その人は、「わたしが震災のことを語り継いでいきたい、防災の知識を持ってほしいと思うのは、わたしが知り合った人に亡くなってほしくないんよ。一人でも多くの人に助かってほしいんよ。語り部とかしてる人はみんな、そういう気持ちで必死なんよ」と言っていた。

わたしはそれまで、防災の知識を伝えたり震災のことを語り継ぐことにどんな意味があるのかと深く考えたことがなかった。その言葉を聞いた瞬間、「ああ、そうか」と、今まで見えなかったものが見えたような気がした。語り継ぐことや防災の知識を伝えることを、していかなければならないと強く思うようになった。

語り継ぐ

たくさんの方が被害が出た阪神・淡路大震災。もう、自分が生きている間は神戸にあんな大きな地震はこないだろうと思っている人も多い。実際、わたしもそういう考えがまだ捨てきれずにいるし、私の家でもこれといった備えをしていない。

しかし、もうすぐ南海地震が起きると言われている。阪神・淡路大震災よりも大きな地震かもしれないとも言われているのに、備えをしていない人や、起こると言われていることを知らない人はたくさんいる。このままだと、またたくさんの方が被害が出てしまう。

私たちが阪神・淡路大震災や防災のことをたくさんの方に伝えていけば、被害を少なくできるかもしれないし、まちも早く復旧・復興できるかもしれない。

無いに等しいくらいの記憶しかなくても、語り継ぐことも、防災を学ぶこともわたしたちにはできる。今できることを精一杯やって、次に起こるかもしれない災害に備えていきたい。

また、わたしには将来保育士になるという夢がある。保育園に通っていた時からの夢だ。そこでも、環境防災科で勉強してきた防災の知識をつかって、子どもたちを守ってあげられるようにしたい。

阪神・淡路大震災を風化させないように卒業してからも防災についての勉強や知識の発信にとりくんで、もし少しでもたくさんの方に震災のこと、防災に興味をもってもらえたらと思う。

震災を通して

神戸市北区鈴蘭台
福永 由太

震災が起こった当時、僕は3歳だったので、記憶はほとんど残っていない。それでも家が大きく揺れる感覚、地震独特の物音、震える身体、声にならない恐怖感を覚えている。母の話によると、地震のあまりの恐怖に、僕は痙攣していたらしい。地震が収まっても暫く痙攣は治らなかったようだ。地震が去り、360度全ての景色がむちゃくちゃに荒れた。中身をぶちまけて倒れたタンスや本棚、食器棚から飛び出してばらばらになったお皿、コップ、水槽は倒れて飼っていた金魚が床に転がっていた。突然すぎてなにがなんだか分からない、でもたった今なにか大変なことが起きた。地震に襲われ、荒れた家の中はしんと静まりかえった。

どこにでもあるのどかな町の小さなアパートに住んでいた。全壊してもおかしくはなかったのだが、運よくアパートは潰されなかった。地震がおさまった後、家族全員無事だった僕らは外にある車で暫く様子を見てみることに話がまとまって、家をでた。アパートに亀裂が走り回っていた。街灯は倒れて光はきえている。立ち並んだ一軒家は一つ残らず全壊していた。想像なんてできなかった、見渡す限りグシャグシャに潰れた家、家、家。悪い夢でも見ている気分になった。物音一つ起きない静まりの中で僕は車へと移動していった。車はほとんど被害を受けてなく、変わったことは入っていた荷物が少し荒れている程度だった。車に乗り込み、最初は落ち着かずにはそわそわしていたけど暫くしていつの間にか眠っていた。半日ぐらいたって車をでて家に戻ったらしいけど、それからのことは全然覚えていない。

今思うと、こんなにも震災のときの記憶が飛んでいるのは不自然なことのようには思える。震災の前の記憶は微かにおぼえているし、震災の後の記憶は当たり前のようにある。確かに幼かったことも記憶が飛んでいる理由に大きく関係していると思うけど、僕の脳が嫌な記憶を排除しようと、或いは閉じ込めようとしたのだと思う。あれだけ恐ろしいことを体験し、悲惨な状況を目の当たりにしてしまった多くの人たちの心のダメージは計り知れないだろう。そう思うと記憶が残ってなくて良かったのかもしれない。

車での半日生活の後、家で生活することは可能だったけど、地域の被害が大きすぎて食糧を確保できないこともあり、地域の被害がほとんどなく家も丸々無事だった父親の実家で暫く面倒を見てもらうことになった。父親の実家が神戸市北区、母親の実家は大阪で、どちらの祖父母も無事だった。大阪の方の祖父母がテレビを見て驚いて、すぐに電話がかかってきたらしい。テレビ越しに娘が住んでいる町が滅茶苦茶になっている光景を見たときの祖父母の驚きや不安感はとても大きかっただろうと思う。もしも自分にとって大切な人に同じような大惨事が降りかかっていることを知ったら、居ても立ってもいられないだろう。僕の場合は家にも身体にもほとんど被害を受けなかったし、身内の人や知っている人は無事だったからよかったけど、被害を受けた人達はたくさんいる。傷を負うのは決して被害者だけには留まらない。被害者の親族、家族、友達、他にも色々関わってきた人達にまで震災の傷は及ぶのだ。だから僕は忘れてはいけないのだと思う。僕にとってとても大切な人が急に居なくなってしまうことがあるということ。だから普段からその人との関わりを大切にしないでほしくないことを。大切にすればするほど、悲しみは大きくなってしまいかもしれないけど、関わり合った時間はその人が生きているときにしか育んでいけない。何をするのが正しいかなんてわからないけど、ただ関わりあえる今を大事にするべきだと思った。そう思えば僕と関わりを持つ人達が全員無事で良かった、心からそう思えた。

祖母の家での生活も暫く日にちがたって北区の町も大分回復してきたみたいなので、自分達のアパートに戻るようになった。その頃にはもうライフラインは回復していて、何不自由なく生活できるようになっていた。今の僕たちの暮らしには科学の力が必要不可欠になっている。動物として運動すべきことを、知恵、頭を働かして代替するようになっていった。そして科学の発達は今も止まることなく進み続けている。けど科学の文明は脆い。実際に天災がふりかかると機能なくなってしまう。そして僕たちは科学の力を失うと、あまりにも弱く、何もできなくなってしまう。科学の力は確かに素晴らしいけど、ものすごく脆弱なのだ。この大震災で強くそれを感じさせられた。

阪神・淡路大震災という非常に強い災害を経験してから、日本は防災のことを全国規模で考えるようになった。当時僕が通っていた小学校にも地震に対する対処、避難訓練でもそれが取り入れられるようになった。他にも震災に関する話をたくさん聞いた。あの日を境に日本の社会が少し変わったと言って

語り継ぐ6

もいづい急な変化だったと思う。僕たちは防災と隣合わせで生活するようになったのだ。日本はこの阪神・淡路大震災を乗り越えて確かに成長したのだ。こうしてなにか事が起こっては、過ちを見直し、反省して、次の対策を考えるのだ、そうしていくことでいい方向にどんどんすすんでいけるようになると思う。またそうしていけるように僕達も災害が起こっては考えなくてはならない。そのちいさな1票がいい未来を造るかもしれないからだ。それが「防災」、と言えるぐらいのことなのかもしれない。

震災から月日は流れて、僕が中学2年生ぐらいになったとき、震災関連の施設に校外学習で行ったことがある。当時の僕は震災に関して興味はなかったし、震災の恐怖も忘れていて、もはや他人事と言ってもいいぐらいにどうでもいいことだった。けどこの校外学習を境に、僕の中の防災に対する意識が急変した。最初はただ「授業がなくなってよかったなあ」とぐらいにしか思っていなかった。適当に見学しようと思っていたのだけど、施設に入って見学していく間にそうはいかなくなっていく。自分が体験したことに、自分の知らないことがいっぱいあった。生々しいほどリアルな震災直後を復元した町を見た。犠牲になった人の多さを知った。酷い事実がいっぱいあった。これまで自分が震災を知ろうとしなかったことを悔やんだ。僕は知っておくべきことを知っていなかったのだ。「自分に被害がなくて良かった。」僕はそこで終わらせてしまった。震災の痛みを知らなくちゃいけない、そして震災に関わっていきたいと思った。この校外学習は僕を大きく変えてくれた。

校外学習に行っていて以来震災に興味をもった僕は、父親にも話を聞いてみた。父は消防士で同時レスキュー隊だった。消防士にとって震災は、生きてきたなかで1番大きなできごと、と言ってもいいぐらいのできごとだったらしい。「かつてないほどの揺れに驚きと不安は半端なものではなかった。けどまずはとっさに身を守った。」と父は言った。寝起きの状態でそう咄嗟にできたというのは、さすが消防士だと思った。揺れが収まって間もなくレスキュー隊出動の号令。いくら普段から訓練していても動揺するだろうと思った。自分ならこのときは痙攣していたぐらいだ。もし自分が父の立場だったら、レスキューするどころか自分がレスキューされていたら。そして町に出動した。「このときの町の景色はまさに地獄絵図だった。ミサイルでもくらったみたいに数々の建物が破壊されていて火がメラメラと噴き出していた。」そう言った父の表情から、その悲惨さが伝わってくる。どこもかしこも建物が崩れていて、しかも火が噴出している・・・想像しただけでぞっとするような光景だ。消防車で移動しようとするものの、倒れた街灯、瓦礫の山、いろんな障害があつてスムーズにはいかなかったらしい。そして被害地の中に入っていて父は「燃え盛る建物の数はかぞえきれないほどあつた、そしてまだ生きている人が、助けを求めている人がその中にいる。どこからいけばいいのか？どこに生きている人がいるのか？考える暇もなかった。」と語ってくれた。母が聞いた父の職場仲間からの話では、猛りをあげている炎に包まれた家、だれもおののき躊躇しているなかで父は、水をかぶって一瞬のためらいもなく家に突っ込んでいったらしい。そして何人もの命を救ったそうだ。普段からあまり会話もなく、父との仲は良くない僕だけど、この話を聞いたときは心底「カッコいい」と思った。また父を尊敬することができた。一通り話して暫くの沈黙があつた後に父は言った。「震災では人の醜い部分も見せられた。」僕はどきとした、なんとなく次に父が言おうとしていることが分かった。そしてその予想は間違つてなかった。「まだ重症の人がたくさんいる。急がなければ命が危ない人も何人いるか分からない。レスキュー隊も救急車も全然足りなかった。そういった状況の中で無傷、または軽症のひとが「しんどいから病院まで運んでくれへんか」とか「怪我して痛いんや、なんとかしてくれ！！」とか「とりあえず病院まで運んで」とか言う人がいた。怒りを抑えられなかった。」こんな状況でそんなことをさも当たり前かのように言ってしまう人がいるのだ。震災ではそういう人達が多かつた訳では決してない。むしろ極限の状況で人は優しさを持ち譲り合うケースの方が多かつたと聞いたこともある。その中で他人のことを全く考慮せずに自分のことだけを考える人がいるのだ。どこかにそういう人は必ず存在する。それはわかっているしどうしようもないことだ。けどその人達も見ているはずだ。悲惨な傷を負い苦しんでいる人を。今にも息絶えそうなひとを。それでもそんなことを言えるその自己中心的な考えに、聞いていだけで胸くそ悪くなるぐらい腹が立った。人を助けたい！あの状況でそう思えることは難しいかもしれない。けどそんなことの以前にある、「可哀想だ」、「こんなこと言つて心苦しい」、「自分は後でいいや」そういった感情は湧かなかつたのだろうか。僕にはとても理解できなかつた。人間の思考は、他の動物とくらべものにならないぐらい多彩で複雑だ。だからこそ手を取り合つて助け合うことができる。それは人間のとても素晴らしい部分だ。けどその裏腹、とんでもなく多彩な悪い感情も秘めている。そういったマイナスの部分の偏つてしまうと人間の素晴らしい感情を見失つてしまうのだろうか。とにかく自分はそうはならないでおこうと最後にそう思つた。父は思い出した怒りを少し顔に浮かべながら続けて

言った。「とにかく急がしかった。手が足りなくて大変だった。寝る時間もほとんどなくて、常に動いている。そんな感じだった。」と語ってくれた。当たり前だけど、手が足りないという現実はきびしいと思った。普段ならば、人手が足りないということは無いといってもいいぐらいらしいのだが、いざ大規模な災害が起こってしまえば、こんなにも不足していき届かないのだ。そのために準備ということが大きくなる必要がある。防災の中で超重要な「備え」だ。「備え」がもっとできていれば被害はもっと少なかっただろう。自分に災害なんて降りかからない、すごくちいさな割合だからきっと大丈夫だろう・・・そういった甘い考えが被害を招いてしまう。震災の恐ろしさを知った僕たちがすべきことは感傷に浸ることではない。災害が次きたときにどこまで防御できるかを考えることだ。生き残った僕たちは強くならなくちゃいけない。胸をえぐられるような悲しい記憶を乗り越えて、その上にたって逞しく生きていくべきなのだ。そうすることができる強さを僕たちはみんな持って生まれてきている。その強さを信じられれば最高だと思う。

舞子高校環境防災科、日本で一つしかない環境防災学科に僕は入った。もちろん環境防災に興味があったからだ。環境防災科は思っていたよりも随分活発な学科だった、校外学習も何回行ったか覚えていないぐらい経験した。普段の授業も専門分野の時間の多さに驚かされた。一般の人ならお金を払って聞くような講義を、環境防災科では無料で沢山聞くことができるのだ。今思えばもの凄く優遇された学科だと思う。そうともかかわらず僕は、貴重な講義の大半を寝て過ごしてしまったり、ボーっと過ごしてしまったりすることがほとんどだった。なんてもったいないことをしてきたのだろうと思う。自分で選んだ学科なのにこんなありさまで情けない。反省したいと思う。そんな中、吸収できたこともいっぱいあった。

高2の1学期に「長田のまち歩き」という学習があった。「長田のまち歩き」は、長田の商店街で働いている人達の中から、何人かに震災当時の話を聞いて回るといったものだった。事前に「追い返されることも今までにあった」と聞いていたので、震災のことに触れて怒られないのか、正直不安だった。けど、いざ尋ねに回ってみると歓迎してくれるひとばかりだった。震災のことを話してくれるのか？思っていたけど、これも自分からどんどん話しをしてくれて、いい人達ばかりでよかった。人間の暖かさに触れられたような気がした。話を聞いた全ての人達は、家は半壊、あるいは全壊したものの家族の命は無事だったので、口を揃えて「無事でよかった」と、語ってくれた。しかしいくら無事であっても被害は半端なく大きなものだった。花屋を営んでいた人の話では、「下のフロアに置いていた花は全て売り物にならなくなってしまった。」とのことだった。それは下のフロアが完全に潰れてしまったからだ。その当時は金銭的にもかなり苦しい時期となったそうだ。そんな状況の中で、潰れた家の再建費用は一銭もでなかったそうだ。こんなところにまで冷たい話が転がっていた。こんなにも苦しい状況を救えるのは行政の力だ。まして日本のような世界有数の先進国家がこういう事態のときに一銭も出さないというのは酷い話だと思った。こんな事態のときにどこまで咄嗟にいい判断をできるか、それが国の力だと思う。話を聞いたなかには戦争を経験した人もいた。その人は「戦争のときに比べればたいしたことはなかった。」と驚く話が返ってきた。いや確かにそれはそうなのかもしれない。戦争の時は空爆がたくさんあって、地震が何度もおこったようなものだったらしい。やっぱり悲惨なことを乗り越えてきた人は強い。そう感じた。だから僕達も困難を乗り越えていければ強くなれるかもしれない。でも実際に震災を乗り越えて国は成長した。必ず強くなれるのかもしれない。このまち歩きでは悲惨な話ばかりではなくて、震災の被害を乗り越えて、色々な工夫を施して店を生き残してきたという逞しい話も聞くことができた。こんなにも苦しい状況の中で逞しく生きていける人の活力は素晴らしいものだと思う。やっぱり一人一人それぞれの話しがあって面白いと思った。「長田のまち歩き」だけでしか聞けない話しを聞けて良かった。

僕は今日も防災を学んで生きていく。いつどこで災害が起こるのかわからない。けど僕はもう災害に立ち向かっていけることを知った。震災を経験して乗り越えていったことで数え切れない知識を手に入れることができた。だから伝えなくちゃいけない。そして防災の輪を広げていかないといけない。いい部分も悪い部分も、震災のことを知ってよかったと思う。これまでの経験がそう思わせてくれた。

みんなの記憶

神戸市垂水区本多聞
藤田 千皓

・はじめに

私は当時、3歳になる前で、震災の記憶はほとんどない。覚えているのは、地震が発生する数時間前にトイレで目が覚めたことと、姉がたくさんの本の下敷きになっていたことだけなので、父や母、姉に聞いた震災体験を書こうと思う。

母の震災体験

・震災前日

私は父、母、姉、私の4人家族で、垂水区にある団地に住んでいた。

夕方、母は姉をスイミングに送って行った。そしてその後、いつものように買い物に行こうとしていたが、ふと太陽を見ると、沈む夕日がやけに赤かった。その夕日はとてもきれいだったのに、あたりはうす暗かった。また、夜は1月で真冬なのにあまり寒くなく、明日は雨かなあ…。と思ったそうだ。

寝る時はいつものように、父、姉、私の3人が一緒に寝て、母だけが別の部屋で寝ていた。

・地震発生

母は遅くまで眠れなかったらしく、私がトイレに行っていたことに気付いていた。地震が起こったのはその少しした1時間後くらいだった。

「ゴォー！」というものすごい音がしたと思ったら、次は「ガタガタガタ」と揺れ始めた。母は何が何だか分からず、揺れているというよりも、食器棚が歩いているという感じだったと言う。父の「地震や！」という声を聞いて初めて、あの揺れが地震だと分かった。2、30秒の揺れは、3分くらいの長さに思えた。

金魚の水槽の水がかかり、テレビも棚から落ちていた。もし寝ていた場所が少しでもずれていたら、母はそのテレビの下敷きになっていたかもしれない。私と姉は、父に守られていたが、本棚の本が激しい揺れで落ち、姉の体の上にたくさん乗っていた。

地震がおさまり、外に出ようとした。しかし、玄関は暗く靴箱が倒れていたため出られなかった。明かりを点けようとするそくを探したが、その間にも余震は続いていた。

7時くらいになってやっと外に出ることができた。家のすぐ前に車があったので、家族全員で乗った。そのとき、東の方から灰が飛んできた。「どこが家事なんやろう？」と思っていたが、長田区からの灰がこの垂水区まで来ていたらしい。一戸建ての屋根の瓦が落ちていたり、家が倒れてしまったりもしていた。

・地震発生から数日間

二日間、小学校のグラウンドに車を止め、そのまま車で寝泊りしたが、19日には家に戻った。テレビをつけると、長田の町や高速道路の様子が映っていてびっくりした。建物が倒れたり、どれだけ被害が大きかったかなどはテレビを見て初めてわかった。学校では寝泊りしたくなかったし、家から出ないといけないとはあまり思わなかった。

家に帰ったらまず、部屋を片付けないといけないと、思ったくらい中は荒れていた。しかし食器棚の中の食器はほとんど割れていたのに、食器棚のガラスは割れていなかった。水道と電気はすぐついたが、ガスがつかなかった。ガスがないだけで、お湯も出ないし、料理することもできず、とても不便だった。

小学校にはよく自衛隊の人たちが救援物資を持ってきてくれ、パン、おにぎり、牛乳をもらった。

辛かったことは、お風呂に入れなかったことだけれど、それでも長田区や東灘区の被害と比べたら、

お風呂に入れにくいことくらい、大したことではないと思った。テレビではよく、他の県の人たちが「頑張ってください。」と励ましの言葉をかけてくれていて、それがとても力になった。しかし、父が役所に勤める人だったため家に帰ってこない日や、夜遅くに帰って来たりすることが多かった。だから、不安な日を過ごすこともあった。余震はずっと続いてしたが、姉も私もそんなには怖がっていなかった。

空き家になっている家に泥棒が入ったりしていたため、わたしたちの家では夜でも電気をつけていた。ご飯はインスタントばかりになってしまい、家族の体のことが心配だった。

お風呂に入れにくいのはやっぱり嫌だったので、親戚の家に借りに行ったり、友達に貸したりしてもらった。私と姉は体が小さかったので、衣装ケースにお湯を入れて入ったりもした。

また何日かして、祖母の家に行こうとしたが、車がとても多く、普段なら40分で行けるところを、5時間くらいかけて行った。また、がれきの撤去などでトラックがたくさん走っていたため、砂ぼこりがすごく、みんなヘルメットをかぶったり、マスクをして移動していた。

父の震災体験

・避難所での仕事

父は、市役所に勤めていたため、地震の次の日には仕事に出かけていた。地震が起きた当日は、母や私が怖いと言っていたため行けなかったそうだ。

父は長田区の避難所の手伝いに行き、お弁当や毛布をみんなに必死で配った。県外の人たちからお水などの差し入れをもらったり、病気の人がでたら、お医者さんに診てもらえるように手配をしたりもした。トイレの水も流れないため、もらった水を使って流したりもした。夜は泊まって、朝帰り、次の日また行くという感じで、泊まりと徹夜を繰り返していた。

避難所の様子は、毛布や少しした荷物しかなかったため、隣の人との境目がなくプライバシーもなかった。気が狂ったような人もいたし、ずっと泣いている人もいた。

みんなのために一生懸命してあげていると思っても、怒られることもあった。父と同じ市役所の人が、父たちがその避難所へ行くまでにお弁当を配ったりしてくれていた地元の人に対し、そのお弁当を自分の物にしようとしていると勘違いしてしまい、ひどいことを言って傷つけてしまったため、父が謝りに行った。

避難所でお世話をしている大変だったことは、食べ物や必要なものを個人からの差し入れなどで、数がきちんと計算されている訳ではなかったため、そういったものをどうやって平等に分け与えたら良いかがとても難しかった。県外の人は何か手助けしたいと思って、すぐに救援物資を送る人もいるが、どこに送ったらいいかわからないので、大体が市役所に送るそうだ。しかし、市役所や兵庫県側は突然の地震でパニックになっていて、そういった救援物資を受け入れる体制がとれていなかった。そのため、仕分けにすごく手間がかかってしまった。だから、そうなっていることが分かっている人は、東北や遠いところからでも、トラックで持ってきてくれたり、単車で持ってきてくれたりした。

また、病人を受け入れてくれる病院がなかなかなく、精神的にしんどくなっている人を落ち着かせてあげられる人もいなかったかことも大変だった。

夢野台高校へ行った時には、トイレがなかったため、グラウンドにたくさん穴を掘ってトイレを作ったそうだ。

それから避難所の仕事を途中でやめ、三宮の市役所のほうに戻った。父の働いていた階は6階で、5、6、7階の被害が大きく、5階が、あのぺちゃんこなってしまった階だった。そのため、建物の中に入ることはできなかったが、新しい再開発を行うための必要な土地の測量や、壊れた建物の調査などをしていらした。

姉の震災体験

・記憶

姉は、震災当時のことをけっこうはっきりと覚えていた。

気づいたら突然、自分の上に何かが落ちてきて、半泣きになった。すぐに父、姉、私の3人で台所のテーブルの下に入り、姉と私で待機していた。父と母は、ろうそくを探してつけたり、炊飯器から御飯

語り継ぐ6

を出したりと、短時間ですばやく動いていた。

家から出ようとした時、食器のガラスが割れてこなごなになっていたその上を裸足で歩いていただけ、何もケガをしなかった。玄関の倒れた靴箱の下をかがみながら出て行った。

車に乗って小学校で待機。車の中をベッドのようにして、布団を持って来ていたから、そこで寝ていた。母はご飯も持って来ていたので、のりと一緒に食べた。祖父母も小学校に待機しに来ていた。車の中で寝転んで、窓から空を見ていると、ゴロゴロという音とともに自分の体も細かく揺れていた。車の外に出た時、どこかの火事の燃えかすが風とともにやってきていたと、母と同じことも記憶していた。

・今思うこと

震災という体験をして、苦労はあったけれど頑張ることができたのは、被害が少なかったからだと思う。被害が大きかったところと比べると比べるとは良くないかもしれないが、もし被害が大きかったところに住んでいたら、頑張れていなかったかもしれない。

また、「なんだろう、この感覚」と思えたこと、滅多にできない体験をしたからこそ、今ではテレビなどで他の県や国が地震を受けたのを見ると、私たちがなにかしてあげないと、と相手の気持ちが分かるようになった。

「助けてもらったことは絶対に忘れてはいけないうし、感謝の気持ちも、この先ずっと忘れてはいけないうことだと思う。」と父も母も話してくれた。

・環境防災科に入るまで

私は、環境防災科に入るまで、阪神・淡路大震災について知っていることはあまりなかった。知っていたことと言えば、阪神・淡路大震災が、とても大きい地震であったこと、長田の町は被害が大きく、火事でたくさんの方が亡くなっていたこと、三宮の建物がたくさん倒れている様子を写真やテレビなどの映像で見たことがあるくらいだったように思う。でも、1月17日が近付くと、母からちょっとした震災の話聞くことはよくあった。他の県で大きな地震があっても、心のどこかで大丈夫だろうと他人事のように感じていた気がする。

環境防災科の存在を知ったのは、中学1年生の時だった。姉の歳が私の二つ上で、高校受験だったからだ。姉は環境防災科を受けるか迷っていて、それで初めて環境防災科という名前を知った。その時はそんな科があるんやあと思う程度だったが、興味を持ったのは確かだった。でも姉は結局環境防災科を受験しなかつたので、私も自然と環境防災科という存在を忘れていた。

・環境防災科に入って

中学3年生のはじめまでは、舞子高校に行きたいと思う気持ちはあったが、まだ環境防災科に受験しようとは思っていなかった。受験しようと思ったのは、進路の希望調査をするようになってからだだと思う。普通科にするかどうか迷い、一時は普通科にしようときめた時もあった。でも、姉が環境防災科を受験せず、普通科を受験したことを少し後悔しているというのを聞いた。私も同じ思いをするのは嫌だと思ったし、人のためになにかをすることができるなら、それはとてもいいことだなあと思い、落ちてもいいから受験しようと思った。

小論文や面接の練習を一生懸命して、無事に合格することができた。

1年生の時は、消防や大阪ガス、関西電力など、一般の高校生では聞くことができない話を、いろんな外部講師の方々から聞いた。また、出前授業という校外学習も行った。今までは授業を聞くことしかなく、自分たちで教える内容などをすべて考えて小学生に教えるという、とても貴重な体験などもたくさんすることができた。

2年生でも、校外学習をたくさんした。とくに印象に残っているのは、長田のまち歩きと、広域防災センター、E-Defenseの見学。

長田のまち歩きでは、商店街の人たちに震災当時のことを聞いてまわった。私のグループは、お茶屋さん、花屋さん、に話を聞いた。どちらのお店の方も、当時の記憶を熱心に思い出して話してくれた。長田のまちは被害の大きかった地域なので、目の前まで炎がきていたなど、びっくりする話ばかりだった。広域防災センターでは、地震の揺れを体験することができる車に乗らせてもらった。阪神・淡路大

震災の震度である震度7は、思っていたより激しく揺れ、こんな揺れを私たちは体験したのかと思うと、本当に怖かったらうなあと思った。

次にE-Defense、実大三次元振動破壊実験施設を見学させてもらった。世界最大の耐震実験施設で、機械全ての大きさに驚いた。

こういったたくさんの体験を通して、震災の中身を深く知ることができたし、たくさんの人と関わることの大切さを学ぶことができた。入学する前と変わったことは、震災がどういうものだったか、どんな人がどんな活動をしてきたかを知れたことが一番大きいと思う。

・これから

環境防災科で、学んで終わりではなく、この学んだことを次の世代に教えていかないといけないと思う。私は将来、柔道整復師になりたいので、その仕事を通して伝えられることがあると思う。

接骨院には、小さい子供からお年寄りまで、幅広い年代の人たちが治療をしてもらいに来るので、普段からいろんな世代の人と話をすることができる。だから、防災のことについて教えられる機会も十分にあると思う。災害が起こった時には、避難所や仮設住宅へ行き、小さい子供からお年寄りまで、みんなの話し相手になることができるのではないと思う。毎日普通に行っていることが、災害が起こった時などのための練習みたいな感じになっているなあと思った。あと、柔道整復師として働いているのだから、けがをしてしまった人や、持病が重くなった人、少しでも体のどこかが痛いと感じる人たちのために、治療してあげることができると思った。でも、ボランティアとして行くと、その地域の接骨院や整骨院がつぶれてしまう可能性がある。なので、接骨院や整骨院で手伝えることがあればなんでもしてあげたいなあと思った。

日々の仕事を通して防災につながられるということは、とても嬉しいことだと思う。私が伝えたことによって少しでも心に残り、実行することで一人でも命が助かるなら、どんなことでも話していこうと思う。

風化することがないように。

阪神・淡路大震災の体験

神戸市垂水区桃山台
前城 健太郎

～はじめに～

今から14年前、当時3歳だった僕は震災の時の事をほとんど覚えていない。だが、ほんのわずかながらの記憶と親から聞いたその時の状況など僕の震災体験を書く。

～自分の記憶～

当時3歳の僕は、こたつで寝ていた。「ゴゴゴゴォー」という音とともに大きな揺れが襲って来た。すぐに両親にこたつの中に入れられたことを覚えている。当時は、まるでバルタン星人の襲撃にあったような感じに思っていた。揺れがおさまりこたつを出てみると食器が割れて床にちらかっていたり電球が落ちていたり食卓の椅子が倒れていたりと家の中がものすごくぐちゃぐちゃになっていた事を今でもうっすらと覚えている。

～母から聞いた話～

1月17日の震災が起きる前日、祖母が家に遊びに来ていて祖母を家まで送って、帰って来たのが遅くみんな疲れていたなので、その日に限って寝室ではなくリビングのこたつで眠ってしまっていた。午前5時46分いつも通りに寝ていたらドンと下から突き上げられた感じで思わず目が覚めた。

大きな揺れが家の中を揺らし食器の壊れる音だけがやけに響いて怖かった。最初は何がおこっているのか分からなく、飛行機でも近くに落ちたのかというぐらいだった。僕は、こたつの中に入れられ揺れが止まるまでずっと入って待機していた。両親は、隅の危なくない所に小さくなって揺れが止まるのを待っていた。あまりの恐怖に声も出なかったらしい。

揺れがおさまり部屋を見ると大変な事になっていた。食器棚は倒れ、食器は全滅、電気製品はとんでいた。いつも寝ていた部屋はクーラーが外れてぶら下がっているし、天井の電気は下に落ちていて、タンスは倒れ、扉が真二つに割れていた。いつものように寝室で寝ていたら家族みんな命がなかったと思うとぞっと寒気がした。

玄関の外に出て、近所のお宅のチャイムを鳴らし、無事かどうか訪ねた。近所の人達みんな元気だと知ってホッとした。電気・ガス・水道が止まっていて、何度も余震が続くので車の中に避難した。電話が使えないので公衆電話に長い列ができていた。近所の人に「何か食べた？」と聞かれ「食べていない」と答えると菓子パンをたくさんくれて嬉しかった。

みんな一カ所に集まった方が良いと思い、父さんの実家に向かった。迎えに行く途中とてもガス臭いにおいがした。みんな集まり我が家に帰って来た。ローソンが開いていたので懐中電灯とすぐ食べられる食料だけ買った。

山のむこうから黒い煙と黒い燃えかすが風に吹かれて飛んできた。山のむこうの須磨の方は大きな火事が発生しているとすぐに気がついた。ただ被災者がこれ以上でないようにと火事が広がらないように祈るだけしか出来なかった。

水道が出なかったのでトイレに苦労した。お風呂の残り湯を洗面器で運んできて流していた。お風呂はもちろん入れていない。

17日の夜は、小学校の横に車を止めて車の中で眠った。

2日目

震災の次の日は、17日の夜みんな車の中で寝ていたのだから寒くて狭くて余震も怖くて眠れないまま朝をむかえた。

壊れた食器などを箒で掃き、ゴミ袋に入れた。大きなゴミ袋が一袋、二袋とすぐに増えていき六袋になった。

水道もガスも止まっていたので料理が出来なく炊飯器の中に残っていたご飯をラップでおにぎりに

して食べた。冷たくてもお腹がすいていたのでおいしく感じた。お味噌汁のお椀が壊れていなかったの
でコップの代わりにしたり、洗い物が出来ないのでサランラップをしいたりアルミシートをひいたりあ
らゆるものを使って工夫してお皿代わりにしていた。

クーラーが落ちかけていたので元に戻したが倒れているタンスや大きな家具はびくともしなかった。
余震が続いていて恐怖で足が震えていた。

家が団地の4階に住んでいたから何かあった時にすぐに1階には降りられないと思い、家の中より車
の中の方が安全という事になり車で過ごす日々が多かった。

2日目の夜、家族みんなで話し合い、被害のなかった母さんの実家に行くことになった。ここでは、
何事もなく日常生活がおくられていて僕達が来ても暖かく迎えてくれて、しばらくの間お世話になった。
神戸を出るだけで4時間かかった。

～震災の復旧・復興～

何度か神戸に戻り親戚の人達の力を借りて、倒れたままのタンスを起し生活出来るように片づけた。
母さんの実家から神戸に戻るたびに実家の近くのでパンなど食べ物を買ひ、近所の人達に差し入れをし
た。みんな喜んでくれていた。

水道が出たので家に帰って来た。ガスは、まだつかなかったの小さなプロパンガスのコンロを使っ
た。衣装ケースにお湯をためて子供のお風呂にしたりと色々工夫しながらの生活が始まった。食器は、
親戚のおばさん達が押し入れの中にねむっていた物をたくさん下さった。精神的にしばらく治らなかつた
事もあった。暗い所をこわがっていた。

ふだんはあまり目に付かず、震災でも大きく取り上げられることのなかった下水道。しかし、トイレ、
炊事、風呂、洗濯などの水を流して衛生的な生活を確保する上で、下水道は都市の重要な基盤施設だ。
もし震災が夏に起きていれば、下水道の被害はより深刻な問題になっていただろう。衛生問題だけでな
く、下水道には水害対策としての役割もある。その意味では、まさに生命に直結するライフラインだ
ということが、改めて認識された。

みんな窓から脱出して無事だったが兵庫の親戚の家もつぶれた。親戚中でトラックやユニックを持っ
て壊れた廃品などを何度も何度も長時間かけてゴミ捨て場になった場所まで運び捨て更地にした。

阪神・淡路大震災で沢山の方が亡くなり、物や建物や家が壊れ、道が壊れ、火事がおこり被害が大き
くなった。学校などにたくさんの人達が避難した。

父の会社は、移動のお風呂を持って避難所に行き、皆さんに暖かいお風呂に入ってもらったそうだ。
寒い日が続いていたからうれしかったと思う。

公園などに仮設住宅が建ちいろんな人達が次々と住んでいった。でも、それは僕の周りだけだったか
もしれない。今まで生活してきた土地での生活再建を、かたくなに望んだ人も多かった。条件さえ満た
せば即入居できるという仮設住宅があるにもかかわらず、避難所での生活を選択した人々が数多くいた。

応急送電は、あくまでも暫定的な措置だ。生活や産業の回復、夏場のクーラー需要などに備えて、十
分な電力を安全に安定して供給するためには、本格的な復旧作業が必要だった。鉄塔なども、梅雨や雷、
台風の襲来時期に向けて本格復旧が急がれた。応急送電の終わった翌日から、関西電力ではこの本格復
旧に向けての活動が始められる。だが、「電力は1月23日で復旧した」というのが一般の持つ印象だ。
このため、警察から緊急輸送路の通行許可証を受ける際にも、理解を得るのがひと苦労だったという。
本格復旧の作業は、どちらかと言えば目立たない地道な努力となる。

また、これと平行して、震災の教訓を活かした今後の電力供給システムに関する検討も進められた。
電力供給拠点の分散・自立化や、供給システムの多系統化。配電線の地中化も、防災対策のひとつとし
て位置づけられる。これらを通じてより信頼性の高い電力供給システムを構築することで、単なる復旧
ではない、街づくりと連携した電力の「復興」が実現されていく。

～ボランティア～

全国から沢山の人達がボランティアで自分の出来る事をして下さっていた。散髪屋さん、歯医者さん、
炊き出し、水運び、食料配り、毛布、衣料、子供たちのおもちゃ、絵本などを配ったりしていた。全国
各地から駆けつけたボランティアが被災者の生活を支えた。

語り継ぐ6

市の募集窓口へ応募したボランティアの多くは、簡単な登録の後、各区役所や民生局へ斡旋され、その後は各現場の指示に従って活動した。特に震災直後の「物資の仕分け・搬送」の作業は、ボランティアの活躍なしに行えなかったといっても過言ではない。物資の調達に追われる職員に替って、市の集配拠点で震災当日から救援物資の搬入・搬出作業に携わったボランティアは延べ約5,100人にも上った。また、冷たい弁当やパンが唯一の食事となった避難所の生活の中で、ボランティアが行った炊き出しは貴重な栄養源となった。

他にも「子供の遊び相手」「お年寄りの世話」「引っ越しの手伝い」「避難所内の清掃」「入浴（温泉ツアーの企画）」「夜間の警備」「調査（避難所の環境調査や仮設住宅の実態調査等）」など。また、独自の専門を生かした種々のボランティアも幅広く活動を続けた。「医師や看護婦による避難所の住診や在宅者の訪問」「臨床心理士によるカウンセリング」「建築士による建物の危険度判定」「弁護士による法律相談」「手話通訳者による聴覚障害者の安否確認」など。

このようなボランティアの活躍に対して、神戸市では、活動のためのスペースや仮眠施設の提供、ボランティア保険の設置、各区にコーディネイトのためのボランティアセンターを設置するなどしてその活動支援にあたった。

ボランティア元年

阪神・淡路大震災をきっかけに、それまで主としてボランティアに携わってきた人々とは異なる多くの市民が災害ボランティアとして参加した。そのため、1995年を日本の市民運動史上では、「ボランティア元年」と呼ぶ。ただ、ボランティア活動自体は1995年以前から日本社会にも定着していたことから、異を唱える主張もある。

～教訓～

阪神・淡路大震災の教訓から、地震の発生後の対応として、行政やマスコミからのからの情報や連絡の確保が、地震以後の生活に大きく影響することが判った。生活のためや復興のために、情報や連絡を受けることが重要となりそれらのために電気の確保が急務となった。神戸では地震から7日間は全く、電気が使えなかった。生活に必要な水道の復旧には10日間、ガスの復旧には80日間かかった。

災害から教訓を得て今後に活かすためには、まず、実際にどのような事態が発生し、それに対してどのような対応がとられたのか、また、どのような課題があったのか等について把握し、理解することが必要である。

阪神・淡路大震災は、これまでに発生対応から復旧・復興に携わった公的機関や防災専門家、ジャーナリスト等のマスコミ関係者、あるいは被災者自らが多分野にわたりさまざまな情報を文献のかたちで発信している。そうした文献の数は10,000点を優に超えると言われている。

本事業では、「震災によって発生した事態」、「それに対する対応」、「その事態や対応における課題」を教訓情報として関連文献から収集し、これらを理解しやすいかたちで整理し、とりまとめることとした。教訓情報は、客観性を極力保持する観点から、文献の該当記述部又はその要約をベースとしてとりまとめたものだ。その際、一つの項目に関してさまざまな観点から教訓情報を浮かび上がらせるように努めた。

ルミナリエ

阪神・淡路大震災の発生を契機に鎮魂と追悼、街の復興を祈念して震災で激減した神戸への観光客を呼び戻す目的で毎年開催されている。

僕は家族と1回行ったけど、ただ綺麗だなと思っていたけど、こういう目的でできたということを知って被害にあった人はルミナリエを通るたびにどのような思いをしているんだろうと思うととてもはしゃげる気分にはなれない。

～感想～

環境防災科に入って、阪神・淡路大震災について学び改めて震災の恐ろしさを知った。当時3歳だっ

た僕は経験したとはいえ全然記憶になく時が過ぎていき、経験しただけで何も知らなかった。でも、環境防災科で学んだり、この「語り継ぐ」を書く時に両親の話を聞いたりしているうちにやっぱり恐ろしい出来事だったと思った。でも、この恐ろしい体験をしたことを不幸だとは思わない。なぜなら逆にこういう経験はめったにないことだからである。この震災を神戸が経験したことによって、日本の震災に対する防災意識が高まり神戸市以外での大きな震災が起きた時に被害が少しでも削減される。家では避難用袋を用意して、白米、自然水、緊急用給水袋、軍手、携帯電話充電器、ラジオライト、単4電池、ポリラップ、衣類収納巾着袋、ポーチ、マルチナイフ、ミニホイッスル、綿棒、傷バン、防寒シート、ソーイングセット、防災心得帳、ウェットティッシュ、使い捨てカイロ、瞬間冷却パックなどを用意していつ震災とかが襲ってきてもすぐに避難できるようにと家族内での防災意識が高まった。

僕たちが環境防災科で学んだことをいろんな人に伝えていきたいと思う。

* 震災のまとめ、感想の一部は、インターネットで調べたHPなどから引用している。

2歳の私が感じたこと

神戸市須磨区白川台
増田 優香

はじめに…

わたしが、震災を経験したのは2歳の時だった。もっと年の離れた世代の方から見られると、2歳の時の記憶なんて無いに近いだろうとお思いになるのかも知れない。正直言って2歳の時の記憶なんてほとんどないに等しい。それでも唯一記憶に残っているのが、私たちを襲ったあの阪神・淡路大震災のことだけなのである。今回、「語り継ぐ」にあたって、容易に「語り継ぐ」なんて言葉を使える立場ではないのかもしれない。しかし、幼いながらにして震災の時だけの記憶が残っているということは、やはりそれだけ恐怖や苦しみなどといったいろんな強烈なものを感じたからこそであると思う。それに、語り部さんなんかにしても、ご年配の方がされてるのが多いなかで、こういった若い世代からの視点で何を感じ、どうしていきたいかという思いを述べているのは数少ないと思う。この貴重な思いを持っている世代だからこそ、伝えていけることであると思う。わたしだけの経験では曖昧になってしまうので、親から聞いた話も参考にしながら「語り継ぐ」を書いていこうと思う。

家族構成

当時、わたしが住んでいた場所は、須磨区にある白川台のマンションだった。阪神・淡路大震災の被害は、比較的少なかった。そのマンションにはたくさんの友達も住んでおり、母親同士も仲が良かったということで、よく家でおままごとをして遊んだり、外にある公園でおにごっこや、かくれんぼなどしてよく遊んでいた。

わたしたちは、父・母・私・妹の4人暮らしだ。当時住んでいたのがマンションだったということもあって、犬などのような大きな動物が飼えなかった。それでもどうしてもペットが飼いたかった私と妹は、お父にわがままを言って、小さな亀を2匹買ってもらい、水槽の中に入れて飼っていた。いたって普通の家族であったし、とくにこれといった変わった何かをするわけでもなく、ごく普通の生活を送っていた。

地震当日

まだわたしと妹が小さかったということもあって母と同じ部屋で、3人で眠っていた。震災前日も、震災が起こることも知るはずもなくいつも通り3人揃って眠っていた。私は、いつも眠るとそのまま朝目を覚ますことなく眠っているらしいのだが、この日は珍しく、わたしは、トイレで目を覚ました。そこから何の目的もないのに父の部屋へ行きそのまま眠りについたという。あまりに珍しいことなので父は若干怖くなったそうだ。そのしばらく後だ。

どーーーーーん！！！！

という下から突き上げるような地響きで目が覚める。父は、何が起きたのか状況が理解できずにいたという。その直後に、立てないくらいの激しい揺れ。子どものときから、防災訓練などでやっていたように、地震が来たら机の下に戻るなんて余裕はなかったそうだ。とりあえず、何も考えずに寝ている私の上に覆いかぶさって地震の揺れがおさまるまでずっと守ってくれていた。わたしは、その状況だけで鮮明に覚えている。

一方、母は最初、爆発音のような大きい音がして何が起きたか状況がつかめず、外の様子を見ようと起き上がろうとした次の瞬間、今までに経験したことがないような激しい揺れがおきた。このときやっとな、地震が起きているという現実を理解させられた。立ち上がろうにも揺れが大きすぎて、立つことは愚か動くことすら困難だった。とにかく、子供の安全だけを考えて母も父と同様、妹に覆いかぶさるようにしてゆれが引くまで過ごしたそうだ。このとき母は、わたしがまさかトイレに行ったまま父の部屋

へ行っているとは思いつきもしなかったことだったので、どこに行ったのかとても心配になったと話していた。

震災直後

ライフラインが寸断されていたため電気もつかず、辺りが明るくなってから部屋中を見回すと足の踏み場もないぐらい散らかっていた。タンスの上に置いていたものが落ちてきたり、テレビが飛んだり、食器棚の中の皿類はほとんど落ちて割れたようだ。いつもわたしが寝ていた場所にタンスが倒れてきていたようだ。わたしは、それを聞いたとき全身に鳥肌が立った。もしあの時、トイレで目覚めなかったら、そしてそのまま父の部屋に行かず、普通に戻ってきていたら…。今でもそう考えるだけで言い表すことの出来ないほどの恐怖感に襲われる。

明るくなってきてからすぐにわたしは父のほうに、妹は母のほうに別れて祖母の家に避難しに行った。わたしはすぐに父の車に乗せられて、当時奈良に住んでいた祖父母の家へと避難しに行った。普通に行けば2時間弱で着くはずの奈良も、みんながいっせいに避難しに来るまで動くことで大渋滞が起り、なかなか車が動かず、4時間ぐらいの時間がかかったようだ。わたしは、長時間の移動のため後部座席で眠っていた。信号にかかり一時停車した。そこで私は、目を覚ました。車からは、ラジオが流れていてその時、ラジオからは、松任谷由美さんの「春よ」が流れていた。そこだけ何故か鮮明に覚えている。今でも音楽番組等で、松任谷由美さんの「春よ」が流れてくるのを聞くと、あの時、車の後部座席に横になりながら聞いていた情景を思い出す。今でも聞くたびに、胸が苦しくなるような泣きたくなるような気持ちになる。

奈良はさすがに被害が無く安全だと思われたが、奈良にまで多少ではあったが揺れがあったようだ。しかし、あまりにも神戸との違いに戸惑いが隠せなかったようだ。神戸は、震災の被害で家も商店街も壊滅的な状況で、全体が絶望的な雰囲気がいっぱいだったのに対し、同じ近畿地方でも県が違っただけで被害の大きさも町並みの雰囲気もあまりにも違いすぎてショックが大きかったようだ。そして、自分等だけが安全な場所で何事もなかったかのように生活を送っている環境にいることに対して罪悪感を持ったようだ。

祖父母の家に着くと、すでにもう一組、親戚が集まっていたようだ。まだ幼かったということもあり、慣れている存在が父だけだったのでひと時も離れることはなかったようだ。父がトイレに行くときでさえも、一人になったら泣きわめいていたようだ。

一方母側は、すぐに同じ神戸市内にある湊川にある祖母の家に向かった。道中、長田の町のあちらこちらから煙が上がっているのが見え不安になる。着いたときには、まだ祖母の家は無事だったがすぐに近所から火が出ていて、あつというまにあたり一面焼け野原となっていた。祖母は、戦争のときの様子を思い出したようだ。消防車などは1台も来ず、母も小さいときから住んでいた家が焼けていくのをただただ見続けるしかなかった。早く消防車が来て迅速な対応が出来ていたなら、犠牲者も出ずに済んだことだろうし、家も、財産も、思い出の品々も、失うことはなかっただろう。幸いにして、祖父母は無事ではあったものそこから長い避難所生活が始まった。

仮設住宅での生活

家を再建することを望んでいた祖父母は、火災保険を利用しようとしていた。しかし、火災保険は、地震ではおられないという事実を知り、愕然とする。ほとんどの人がこの事実を知らなかったそうで精神的なショックは大きかったようだ。そうなると、公的住宅を望むが住んでいたところに近い場所には、入れないと断られ避難所生活を余儀なくされた。プライバシーは全くなく、雑魚寝の生活だった。食事はパターン化されており、朝はパンと牛乳、昼と夜は同じようなお弁当が給付された。しかし、同じようなものばかり食べていては、やはり栄養は偏ってくるもの。そのうえ、高齢者が多かったのもあり風邪が蔓延したようだ。こういう生活を嫌い、全壊の家に危険を承知で戻る人もでてきた。決して数少なかったわけではなかったようだ。やっと公的住宅があたっても誰も知っている人はいない初めての土地。ある程度の年齢以上の人たちにとってはそれに順応するのはとても難しいこと。出来るだけ地方に帰ってこられるような政策を行政にとってほしかったようだ。近年まれに見る大災害により何もかもがパニ

語り継ぐ6

ックに陥り、ほとんどの人が冷静な判断が取れなかったという。「失われた財産や命、思い出のたくさん詰まった品々はもう取り戻すことはできひん。」と祖母は、涙ながらに語った。

復旧

ライフラインが寸断してから、普及するまでに予想していたより時間がかかった。ライフラインが使えなくなってしまうことが、どれだけ辛いかわかり、身をもって実感した。被災してから、ライフラインの有り難さが痛いほど分かり無駄遣いをしないようにするようになった。

水道は、1週間ほどで復旧した。水が使えるようになると、みんな自炊するようになった。そのため、カセットコンロが飛ぶように売れた。

ガスは、1ヶ月ほどで復旧した。ガスと水道が復旧するとだいぶ生活は楽になった。しかし、復旧してからペットボトルに水を入れて貯めておくのもしばらくの間は不安だったため続けていた。

しあわせはこべるように

被災した人ならば、一度は耳にしたことがあるのではないだろうか？わたしたちは、小学生のときに学校で習った。それからは、震災の時期が近づいてくるとよく学校で歌ったりしていた。正直あのころは、歌詞の意味もよく考えず、先生に言われるがまま歌っていた。「しあわせはこべるように」の中でこんな歌詞が出てくる。「地震にも負けない強い心を持って、亡くなった方々の分も毎日を大切に生きてゆこう。」この歌詞の重さが分かったのは環境防災科でたくさんの防災の学習をしてきたからだ。今でもこの歌詞を聞くだけで胸がジーンとして涙が出そうになる。実際に被災したわたしが、こうやって生きているのも本当に奇跡的なことだと思う。こうやって生きているんだから、この命を無駄にしたくない。歌詞にもあるように、「亡くなった方々の分も毎日を大切に生きてゆこう」というのは、言い換えれば、わたしたちへのメッセージなのかもしれないと思ったこともある。生きているからこそできることがあると思う。授業で習った防災知識や、実際にボランティア活動をしたことで感じたこと、そういったことをたくさんの人に伝えることでまた大きな地震が来たとしても、被害者の数は削減することが出来るはずだ。阪神・淡路大震災でこれだけの被害が出たのも、あまりにも災害に対する知識が無知すぎたこと、それに自分等は大丈夫といった変な思い込みによるものが大きな原因だと思う。だとしたら、たくさんの知識を持ったわたしたちが、この経験を伝えることで一人でも多くの人を救うことが出来るのではないだろうか？もし出来たのなら私が3年間習ってきたことはとても意味のあることだと思うし、このことをとても誇りに思う。わたしは、この経験が活かされるような活動を、環境防災科を卒業した後でも続けていくつもりだ。

環境防災科

わたしが、環境防災科に入った理由は2つある。1つは、無知であったために尊い命を失ったことの悔しさ。前にも述べたようにわたしは、死にかけた経験がある。わたしの両親も含め、神戸にも大きな地震が来るかもしれないということを想定して、家具の固定などの耐震補強をしっかりとしていたらこんな思いもしなくて良かっただろうし、6000人以上もの犠牲者を出さなくても良かったはずだろう。あの時、わたしがトイレで目覚めていなかったら…。そしてそのあと父の部屋へ行っていなければ…。あの偶然が重なっていなければ、わたしは間違いなくダンスの下敷きになっていただろうし、もしかしたらこの世にはいなかったかもしれない。まだ17年間しか生きてはいないけれど、楽しいことも嬉しいこともたくさん経験してきた。それでも生きていたら辛いことのほうが多いのでは？と思い悩んだりするときもあった。しかし、こんな思いができるのも命があるからこそ。きっと、わたしたちと年代で、震災で命を落としている人だってたくさんいると思う。そういった人たちのことを考えると、言葉では言い表せられないぐらい悲しいし、とても悔しい。

2つ目は、祖母の仮設住宅についてだ。わたしが幼少時のころから祖母や母から、仮設住宅の不便さについては何度か聞かされていた。当時は、「大変やったんやなあ〜」くらいの気持ちでしか聞いていなかった。しかし、中学生になって本格的に震災について興味を持ち出したころに、もう1度祖母に詳しい話を聞きにいった。わたしは感じた。死傷した人だけが、大震災の犠牲者ではないと。そりゃ、死

傷した方々は精神的・肉体的にも大きなダメージを受けられたことだろうし、周りの家族や友人も悲しむことだろう。一方で、あまり表に出ていない面で苦勞し、大きなストレスなどで、ダメージを受けている方々の存在を忘れてはならない。これによって体調を崩された方や、うつ病になられた方だって少なくはなかったそうだ。世間的に見て、命が助かっただけ幸せだと思われがちだそうだが、そうではないのだ。慣れない環境で知人もいないという環境の中で、ましてや高齢者が生活するのが、いかに困難であるか、世間が・行政が把握しておくべきだったと思った。把握した上で対応していたのであれば、きっともう少し住みよい生活になっていたに違いないのではないだろうか。このような知識不足だったのも、世間一般で、防災に関する知識があまりにも低かったからではないだろうかと思った。そこで、防災に関する勉強をたくさんして知識をたくさんつけて、自分が情報を発信することで、今後2度とこのような過ちを繰り返さないようになってほしいと強く思ったからだ。

これから

わたしは今後、環境防災科を卒業し大学に進学しても、防災に関する活動には積極的に参加していきたいと考えている。これからもたくさんの人に防災情報を発信し、たくさんの防災知識を高めてほしい。そして、その知識を上手に活かしてほしい。また大きな震災が来たときに、無知があるがためにたくさんの犠牲者を出してほしくないし、悔しい思いも、悲しい思いもしてほしくないし、自分自身したくないからだ。

これからの学校生活も、防災の授業をきちんと受け正しい知識を深めていきたい。この被災体験を、うまく活かしていきたい。そして、より多くの人に情報を発信していけるように、頑張っていきたいと思う。一人でも多くの人に自分の伝えたいことが、伝えることが出来たら、わたしはとても幸せだ。そういった防災に携われる職に就けたらいいなと考えている。

4. それからの生活

家族の無事に安心したところで警察官の父親はすぐに職場に行かなくてはならなかった。当時、父はポートアイランドにある警察本部で勤務していたが、いつも利用していた地下鉄は動かなかった。板宿から東側の被害が大きく、電車が通れる状態ではなかったからだ。そのためバイクを利用して職場へと向かった。ポートアイランドは液状化になっており、通れない道が多く移動するのが大変だったようだ。液状化は乾いた後も、目や口をあけてられないほどの砂嵐ができ、大きな被害となった。職場では、他府県からの警察応援の受け入れ計画を作る仕事など多くの仕事が待っていた。そのため、3週間ほどは家に帰ってくることはできず、まともな睡眠もとれなかったという。母は看護助手として当時ポートアイランドの中央市民病院に勤務していた。父と同じく電車を利用することが出来ないためバスと自転車、船、徒歩で職場に向かった。神戸港からはポートアイランドまで臨時の船が出ていたため、それを利用した。いつもなら40分くらいで着く職場が片道4時間もかかった。母は職場へ向かう途中、震災前とあまりにも変わりすぎた景色に恐怖を覚えた。

わたしたちの住んでいた地域は、家がつぶれるといった大きな被害がでることは無かったので、とても信じることが出来なかったのだろう。板宿から南側の多くの家はつぶれていて、いつも見ていた建物や家は横たり、ビルも傾いていた。長田を通ると焼け焦げた家や、たれさがる電線が目に入ってきた。まるで空襲の後のような景色で、地震の大きさを実感した。人が亡くなったあとに花がおいてあり、見るのは辛いことだった。道路も陥没や、がれき、亀裂やひびわれの被害が出ていて、バスが通れない道はたくさんあったため、交通渋滞がすごかった。三宮の道路は傾き歩き辛く、いつも通っていた道も通ることが出来なかった。

職場では、父と同様多くの仕事が山積みになっていた。地震の影響で病院のエレベーターが止まってしまったため、10階まで階段を使って患者さんの水や食べ物を運んだそうだ。何度も何度も重い荷物を運ぶ仕事は、体力的にとっても辛いことだった。ポートアイランドをつなぐ橋が倒壊したため、けが人はあまり運ばれて来なかった。その後ポートライナーが復旧するのに半年以上かかったため、三宮から職場まで自転車で通った。

両親が仕事にでて、帰ってくるのが少なくなってしまうため、当時3才だったわたしと8才の姉は明石の祖父母の家で10日間生活した。祖父母の家へは、電車が止まっていたために叔父が車で迎えに来てくれたが、大きな交通渋滞で、着くまでにいつもの3倍の時間がかかった。祖父母の家は土壁が1部分落ちたものの、電気、ガス、水道のライフラインは無事だった。そのため、洗濯物は祖父母の家で洗濯してもらった。母は近くのスーパーに食材を買いに行ったが、なにもかもが売り切れだった。近所の電気屋さんでは懐中電灯や電池を買う人たちが溢れ、しかも値段はいつもの2倍も値上げしていたらしい。店も必死だったようだ。近くのスーパーでは水運びのためのポリバケツや、お湯をそそげばすぐ出来るインスタントラーメンがたくさん売っていた。

ライフラインが復旧してから、母と近所の小学校の避難所へボランティアにいった。小学校の体育館は避難所となっており、たくさんの人であふれていた。竜が台はほかに比べて被害が少なかったため、避難して来た人はあまりいなかったが、長田区から避難して来た人がとても多かった。避難所では、届けられた物資の配布を行うボランティアをしたそうだ。震災当日から報道で伝えるためのヘリコプターが飛び続け、家の中や建物の中のどこにいても、ものすごい騒音が鳴り続けいた。避難してきた被災者の中には騒音で寝ることができない人もいたそうだ。また、真冬の体育館はすごく寒く、床も冷たかった。みんな毛布にくるまり、家族で身を寄せていたらしい。

5. 震災から月日が流れて

阪神・淡路大震災の被害の状況については、まだ3才だったわたしは全くと言っていいほど覚えていなかった。テレビで見た記憶すらも残っていない。そのため震災の出来事は小学生になってからの震災学習で、教科書やビデオ、写真から学んだ。想像以上の被害にすごくショックを受け、胸をしめつけられる思いだった。たくさんの方が亡くなったにも関わらず、わたしの家族を含め親戚はだれ1人も大き

語り継ぐ6

な被害には合わなかったのは、運が良かったからだと感じさせられた。毎年小学校では1. 17震災行事が行われ、黙とうや手紙の付いた風船を飛ばしたりした。震災で大きな被害を受けた神戸市を元気付けるために作られた“しあわせ運べるように”を一生懸命歌った。それがそのとき、わたしに出来る精一杯のことだった。このころから阪神・淡路大震災をもっと学びたいと思い始めたのだと思う。小学校6年間、先生の体験談や神戸市の当時の様子を学んできたけれど、中学校に入学するとそんな機会も減った。震災の日も、たいして大きな行事をするわけでもなく、そのことになんだかもどかしさを感じた。

6. 仮設住宅と祖母

震災から2、3年たったころ、近くの公園全てのグラウンドに仮設住宅ができた。これが阪神・淡路大震災によって建てられたものだと知ったのは小学校高学年になってからだった。震災で大きな被害がでたことを知らなかったわたしは、いまだ仮設住宅で生活している人がいることなんて思いもしなかった。住んでいた地域の被害は大きいわけではなかったもので、実際につぶれた家を見たことはなく、家をなくした人がまだいるとは思わなかったからだ。

小学校2年生のある日、学童に行く途中の寄り道で仮設住宅に住む1人のおばあさんと仲良くなった。名前は覚えていないけれど、その日から学校帰りにその公園に立ち寄ることは日課となった。その日の学校の話や仲のいい友達の話、家族の話、楽しかったこと。話したいことだらけの私の話を、おばあさんは毎日聞いてくれた。今思えば不思議なことだけれど、わたしはおばあさんが仮設住宅に住んでいることを疑問に思ったことはなかった。そしておばあさんも、一言も震災の話を口にしなかった。普段は人見知りするわたしが初めて会った人とこんなに仲良くなり、何でも話をするようになったのは、初めてのことだった。

お菓子をもらったり、一緒にテレビを見たり、おばあさんの飼っていた猫と遊んでみたり。毎日がすごく楽しくて、おばあさんのところに行くのがすごく楽しみになった。小学校にいる間は、今日は何話しようかとずっとわくわくして、仮設住宅に遊びに行くのがたまらなく楽しみだった。しかし1年半ほどがたったころ、仮設住宅の数が少しずつ減り始めた。残りわずかになった時、おばあさんから明日引っ越すのだと聞かされた。突然の話でびっくりしたわたしは、寂しさと悲しさで大泣きしてしまったことを覚えている。引っ越しの日には小学校があったため見送ることは出来ず、学校のあと仮設住宅に立ち寄ってみると、おばあさんの家は空になっていた。そして数週間後、全ての仮設住宅が片づけられた。それからおばあさんとは1度も会っていない。今でも元気に暮らしているかと思うことがあるけれど、このおばあさんと出会うことが出来てよかったと思う。

7. 環境防災科に入って

わたしは中学卒業後、この舞子高校環境防災科に入学した。環境や防災に興味があったのはもちろんだが、阪神・淡路大震災のことをもっともっと学びたいと思って、この環境防災科を志望した。そして2年間、わたしは阪神・淡路大震災のこと、災害や防災のことをたくさん学んできた。阪神・淡路大震災の学習では、今まであまり聞くことの出来なかった水道局や、NTT、消防、自衛隊など多くの講師の先生のお話を聞くことができた。今までとは違った視線から阪神・淡路大震災を考えることができ、それぞれの問題点や教訓を学んだ。阪神・淡路大震災だけでなく日本の災害をはじめ、世界の災害を学んできた。

そして今、思うことがある。もっともっとたくさんの人が災害についての知識を持ち、地震への警戒心をもっていたならば、被害はもっと抑えられたのではないか。そして、こんなにも多くの犠牲者は出なかったのではないかと。阪神・淡路大震災について学んでくるとよく耳にする言葉がある。「まさかこの神戸のまちに、こんなに大きな地震が来るとは思わなかった。」もちろん両親の口からもこの言葉を聞いた。誰もが地震を予想もしていなかったのだ。そして阪神・淡路大震災から日がたつにつれ、記憶も薄れ、風化しかけている。今の中学生は震災を経験しておらず、恐怖も知らない。知っているわたしたちでさえ、地震に対する警戒心は薄れてきているのではないだろうか。阪神・淡路大震災からもう15年が経とうとしている。しかし震災は、あの当時からまだ続いている。心に傷をおったひとがいる

かぎり、震災はまだまだ続くと思う。そして今、阪神・淡路大震災で得た教訓をこれからの社会に活かし、伝えていかなければならない。

他県の地震で大きな被害が報道されると、まだ阪神・淡路大震災の教訓が広まっていないことを実感させられる。震災の教訓や防災は兵庫県だけに伝えるものではなく日本全体、そして世界に広めなくてはならない。地震大国日本に住む限り、地震やその他の災害から逃げることは出来ないのだ。そして、今まで学んできたことを無駄にしないためにも、わたしは発信者として次の世代へと震災を伝えていかなくてはならない。とは言っても今のわたしはなにも出来ておらず、何もできない。だから残されたあと1年の学校生活で、防災を伝える力を身につけ1人でも多くのひとに防災を伝えていきたいと思う。そして、わたしに出来る最大限のことを考えていきたい。

8. おわりに

今回この文章を書くにあたって、両親の話をもとに書いてきた。家族から震災の話を聞くことは初めてではなかったが、こんなにも詳しく話を聞いたのは初めてのことだった。それに、今までずっと震災の話を聞く立場だったわたしは、今回こうして話す立場にいることになんとか変な感じがする。なぜならば、わたし自身の記憶はほとんどなくわたしの周りの出来事をあまり把握できていなかったからだ。それは、当時まだ3才だったことも原因のひとつだと思うが、年をとるにつれて記憶が風化しているのも大きな原因だと思った。震災を経験した人の数は少しずつ減少する。それは仕方ないことだが、震災の出来事は決して忘れてはいけないことだ。

文章を書いていくうちに、今まで知らなかった家族の様子やまちの様子を知ることができて、本当にいい機会だったと思う。わたしは語り継いでいく1人の人間として、多くの人に震災を伝えていきたい。そしてこの「語り継ぐ」を読んで、1人でも多くの人が防災に興味を持ってくれたらうれしく思う。

語り継ぐこと

神戸市垂水区海岸通
松下 美紅

当時のことはあまり覚えていなかったのですが、母に聞いた話を主にしている。

●地震直後

1月17日の午前5時46分。「ゴォーッ！」というすごい音とともに激しい揺れを感じた。当時私の家は耐震補強や、家具の固定もしていなかったのが本当に危険な状態だったと思う。もっと被害の激しい地域に住んでいたら、もしかしたら私は今ここにいないかもしれない。

体が浮いた感じと同時に強い揺れに地震だと気づき、母は隣に寝ていた私にとっさに布団を被せて上から覆いかぶさり、揺れがおさまるのを待った。その時私はまだ3歳で地震の揺れにも気付かずに呑気に寝ていたようだ。私を体を張って守ってくれた母に本当に感謝している。

まだ外は暗くて電気が消えていたので、大きな揺れを感じていたものの状況が分からず、まさか震度7もある地震だとは思っていなかった。母は暗い部屋の中を歩き回って手さぐりで懐中電灯を探し、魚住に住んでいる祖母、叔父、叔母に電話をして連絡をとった。みんな無事だったことを確認したときは本当に安心した。次に大阪の叔母に電話をかけた時に初めて垂水が震度6の揺れだったことを知り、母は急に怖くなったが娘を守らなければ、と思ったようだ。

母は仲のいい友達の安否を確認するために、電話をかけていた。その中に実家が長田の友達がいて電話を入れたのだが、応答せずに留守番電話に入れた。しかしすぐに連絡は来ず、2、3日経ってから安否の確認ができた。

●被害の大きさ

外が明るくなり始めてようやく被害の大きさに直面にした。家具の固定などの備えはしていなかったので、家の中では皿やコップが食器棚から飛び出ており粉々に割れていた。床に散らばった破片がとても怖かったのを覚えている。テレビやタンスの上に置いてあったものがほとんど落ちていて、畳には落ちてきた衝撃で穴があいていた。もしそこが寝室だったらと考えるととても恐ろしかった。その跡形は今でも残っており、あの時の被害の大きさを物語っている。寝るときは余震に備えて枕もとに貴重品や着替えの入ったカバンや懐中電灯を置き、毛糸の帽子をかぶり、靴下をはき、いつでも逃げられるような格好で布団に入っていた。マンションの5階に住んでいるので、今でも母は余震が続く大きな揺れを感じて怖い思いをしたことが忘れられず、トラウマとなって、少しの振動にさえ敏感になってしまいぐっすり眠れずないことが多いようだ。

●ライフライン

生活面では水道、電気はわりと早く復旧したがガスの復旧が遅くて、とても困った。お風呂は魚住の母の実家に行って入らせてもらった。魚住に行けなかった日はガスコンロで何回も何回もお湯を沸かして、お湯をためて入ったりしていた。私は小さかったので、なぜ家でお風呂に入れないのかも分かっていたが、魚住に行くと祖母にたくさん会えるということと、お風呂に入れることがただ嬉しくてあの時、母が苦勞をして私の世話をしてくれていたことを全く分かっていなかったと思う。色々話を聞いて、本当に母は大変だったのだと今になって感じている。1月で寒い時期だったので母は、やっとガスが復旧して、自分の家でゆっくりとお風呂に入れた時はまるで温泉にでも入っているかのような気持ちよさを感じたようだ。その時にあらためて、普段は当たり前のように生活していることが急に出来なくなることの不便さを痛感したと話していた。

●父の仕事

父の仕事は漁師である。漁に出ている、仕事から帰宅して寝たのが午前3時ごろだったのでぐっすり

寝ていて、地震が起こったことに気付かなかった。父はダンスがたくさん置いてある部屋に寝ていたの
で、地震の揺れでダンスの上に置いていた物が顔面に落下し、その衝撃で目が覚めた。何日か前までは
私と母がその部屋で寝ていたのでもし父と部屋を交代していなかったら、私の上に物が落下して命の
危険にさらされていたかもしれなかった。今はもうその部屋では寝ないようにしているがまだくっきり
と畳に物が落下した跡が残っている。父は顔面から血を流していたが、その時はまだ痛みを感じておら
ず、何が起きたのか把握できていない状況だった。

父が地震後に底引き網漁を再開したとき（2月）は海底が変化し、今まで見たこともないような生物
が現れて網の中に入ってきたそうだ。海底がやわらかくなり、網がうまく引けなくなった。漁港の岸壁
が崩れていて、いつも使っていたセリ場が使用できなくなったので仮設のセリ場を建ててセリを行い、
魚を売ったが明らかに魚屋の数は減っていた。

父は地元の消防団に所属していた。震災が起こった数時間後に、消防器庫に待機する命令がおりたが、
母が「怖いから行かないで」と言ったので行かなかったそうだ。ほかの消防団の人にもそれぞれ家族が
いるので交代で待機し、余震に備えていた。

同じ漁師の祖父はその頃、漁（タチウオ釣り）に出ている地震があった時は船のスクリューに何かか
からまったような感じになった。しかし、まさかそんな大きな地震が起こったとは夢にも思わなかつた
らしい。

●魚住の祖母

魚住に住んでいた祖母は、大地震とは思っていなかったのでもいつものように家を出て、バスで会社に行き
（バスで15分）、帰りはバスが出ていなかったのでも1時間かけて歩いて帰ってきた。祖母の住ん
でいたところはあまり被害がなかったのでも朝も普通にバスが出ていたそうだ。魚住は被害が少なく、
あまり困らなかったが水道が1日使用できなくなった。いざという時のために置いていた水が入ったペ
ットボトルを飲み水や生活をするために使用した。この話を聞いて私も非常持ち出し袋を作ろうと思っ
た。祖母は買い物に行こうと思ひ、近くのスーパーへ行つたが水は全部売り切れだったので買えなかつ
たそうだ。

●東灘区の被害

東灘区に住んでいる母の祖母、叔父にも電話をかけたが連絡がとれず、安否の確認が出来ず心配を
していた。ようやく連絡がとれて状況を聞くと、祖母はダンスの下敷きになり、近所の方に助けてもら
ったものの、肋骨に6本ひびがはいっている状態だった。家の外に出してもらったが、裸足だったので
近所の人に靴をもらひ、毛布をかぶせてもらって東灘小学校へ避難したそうだ。

叔父の家族（5人）は2階建ての木造の文化住宅の1階の南端に住んでいた。地震の強い揺れに耐え
きれず、家が倒壊して下敷きになったが端に住んでいたのでも隙間があり、自力で脱出できた。しかし、
北の方から火が迫ってきていたのでとても怖かつたらしい。同じアパートの人で亡くなつた方がいたそ
うだ。

マンションの3階建ての2階に住んでいたもう1人の叔父の家族（子供が7歳、6歳、4歳、2歳の
4人の6人家族）の生存が分からず家の方へ行くと、3階建てのマンションだったはずが2階になつ
ていた。安否の確認がとれず、警察に捜索を依頼しても「生きている人が先だ」と言われて後回しにさ
れ、死亡の確認がされたのは19日のことだった。家族全員がつぶれた家の下敷きになって亡くなつた
のだ。遺体は近くの体育館に移された。近くの火葬場はいっぱいで空いていなかったのでも23日に姫路
の火葬場まで行った。24日には、須磨寺で拜んでもらい骨をあずけた。須磨寺から、須磨駅に帰る途
中にパンを配っているボランティアの方がいてパンをいただいた。人の温かさを感じた瞬間だったとい
う。

亡くなつた人数が6人と多かつたのでも、新聞記者の人が何回も取材にきたそうだ。思い出すと辛かつ
たが亡くなつた家族の死を無駄にしたいくないと思ひ、取材に答えていたそうだ。

母は、叔父には子供のころにとても可愛がってもらっていたのでも、ショックが大きかつたと話してい
る。1年に1回ぐらいしか会っていなかったのでも、今でもまだどこかで叔父が元気に暮らしている気が
して、夢の中では時々笑顔のやさしい叔父が出てきて会っているとそうだ。私はこの時の話をしてくれ

語り継ぐ6

た母の悲しそうな顔が忘れられない。

●片付け

地震後はすぐに家族で近くの祖父の家に避難した。

母は明るくなってから家の中がどんな状態になっているのか見に行った。エレベーターが使えないので階段で5階まで上った。上っている途中に余震が来てすごい揺れを感じ、1人だったのでとても怖かったようだ。家の中に入ってみると、食器が散乱し、テレビは台や棚からは物が落ちていて足の踏み場がなかった。食器が割れていて危ないので、まずは食器を片付けることから始めた。手や足が切れたらいけないので慎重に片づけを開始した。片付けをしている間も何回も余震が来て、そのたびに母はとても怖い思いをしたのだという。食器の片付けが少し出来てきた後は、簡単に整理できるものだけ片付けをして、また祖父の家に帰ってきた。

地震が起こってから数日経った間も、祖父の家で暮らしていた。家の中はまだぐちゃぐちゃだったし、古いマンションだったので余震がきたら危なかったからだ。いつもそんなに長く祖父の家に居ることはないし、ましてや生活をしたことなんてなかったので子供の私はまるで、引越しをしたとでも思っていたかのように喜んでいたようだ。

●マンション

同じマンションに住んでいた母の友達も、避難するために他県にある実家に1ヶ月以上帰っていた。ほかにも車の中で待機している人がいた。私は7階建てのマンションの5階に住んでいたもので、少しの余震でも大きな揺れを感じていた。階段の上り下りは必ず手すりを持って、1歩1歩慎重に足を出すようにした。

ちょうど、地震が起こった日のごみの回収日だったので各家庭でごみがたくさん溜まっていた。何日か経ったあとはマンションの外にあるごみ置き場がごみであふれていた。大量のごみが無造作に置かれてあり、マナーも悪かったと思う。しかし、みんな自分のことで精いっぱい片付けなんて誰もしてなかった。

私の住んでいたマンションは古くて、当時耐震補強はあまりされていなかったと思う。もし、私の地域の被害が大きくてマンションが倒れていたら、と考えると恐ろしい。母もまさかあんな大きな地震がくると予想していなかったらしく、家具の固定すらしてなかった。今考えると本当に危険な状態だったと思う。今は非常持ち出し袋を用意して中には缶詰や水、貴重品などが入っている。あの震災は多くの犠牲者を出し、たくさんの人の心の中に傷を負わせたが、地震があったから備えの大切さや普段の生活のありがたさが分かった。震災が教えてくれたこともあるのだと思った。

●人とのつながり

父が漁師なので、生簀の魚を近所の友達にあげたり、また反対に近所の人からパンをいただいたりしてお互い助け合った。近所の人に「ありがとう」と言葉を言われたときは心が温かくなったようだ。地震が起こって緊迫している雰囲気の中でこの「ありがとう」という言葉がどれだけ心に染みたくというのは想像できると思う。人を思いやる気持ちが人の心を温かくするのだ。

父からこの話を聞いたとき、普段から助け合うことは大切だと感じていたが、あらためて人と人とのつながりの大切さが身に染みた。そして父の優しさを感じた。パンをくれた人もそうだが、大きな地震があって混乱している中、自分のことで精いっぱいはずなのに、近所の人のことを考えて食べ物を渡した父を尊敬している。

人はやっぱり1人で生きていくのは難しいし、誰かに支えてもらって時には支えてあげて生きているのだとあらためて感じた。私も父のようにどんな状況であっても周囲にも目を向けることのできる大人になりたい。そして母のように、自分のことより先に私や家族のこと、近所の人のことを心配するような大きな心をもった人になりたい。

●環境防災科

私がこの環境防災科に入学したきっかけは、阪神・淡路大震災で亡くなった母の叔父の家族の話を知ったことだ。

震災の日の1月17日が近づいてくるとテレビや新聞で震災のことが大きく取りあげられる。小学校の時は“しあわせはこべるように”を歌ったりしていた。中学校でも震災の勉強をすることがあった。そのころの私は震災の記憶もなかったし、あまり詳しく知らなかった。母もあまり震災のことを話さないで、てっきり私の周りにはあまり被害がなかったのだろうと思っていた。

私は母に何気なく「震災のことを覚えている？」と聞くと母は「覚えているよ」と言った。私は興味本位で話を聞くことにした。そこで母の叔父が亡くなったこと、連絡がすぐに取りえずに困ったこと、余震の怖さなどを話してくれた。その時に私は初めて被害の大きさを知った。

母の叔父の家族が亡くなったと聞いて、住んでいたアパートは耐震化がされていなかったのかということ、どうしてそんなに被害が大きくなってしまったのかということなど疑問がたくさん出てきた。もっと詳しく知りたくて震災について勉強したいと思った。

中学3年のころ、そろそろ進路を決めないといけない時期がきた。いろいろ悩んでいる時にこの環境防災科という特殊な学科を見つけた。調べてみると防災についての知識や専門家の人の話を聞いての学習、課外授業などをすることが分かり、私はこの学科にとっても興味を持った。私が知りたかった地震があった当時の話がたくさん聞けるのではないかと、思った。そして受験することを決め、試験を受けて入学した。

私は今まで勉強してきた中で、たくさんの知識を得ることができて嬉しく思っている。1年の時から普通科にはない専門の授業の中で地震のメカニズムや、災害に備えることの大切さを知ったり、実際に断層を見に行ったりして被害の大きさを知ったりした。今までなかった知識がたくさん増えた。また、中学のころから知りたかった震災当時の話を経験した方から話を直接聞くことができたり、普段関わることのない消防や警察、ライフラインの関係者の人たちからの講義が聞けたりして、ほんとに貴重な経験ばかり出来てとても勉強になった。

私がたくさんの方に話を聞いた中で、人と人とのつながりの大切さを話してくれた人がいた。私の母の祖母もそうだが救助のときに近所の方に助けてもらった人が多いということを知った。消防などは一気にたくさんの人の救助にはあたれないので近所の人協力して救出活動を行ったそうだ。この話を聞いて、人と関わりを持つことは本当に大切なことだと思った。近所づきあいがないと、誰が隣に住んでいてどんな人が住んでいるのか分からないので、災害が起こったときなどいざという時にお互い助け合えないと思う。あまり関わりのない人のことは気にならないけれど、普段仲のいい人は自分がどんな状況になったとしても、気になって連絡を取ろうと思う。このことを改めて考えると普段からの近所づきあいは大切だということが分かる。私はこの話を聞いてから、今までより挨拶を丁寧にするように心がけている。

今までたくさんのボランティアに参加してきた。地域の防災訓練に行ったり自分たちの活動を知ってもらうために発表しに行ったりした。たくさん参加してきた中でボランティアの重要性や意味などを理解できた。しかし、今までは先生たちがいろいろ準備してくれたルールに乗っただけだったので、これからは自分自身で行動を起こしていきたいと思う。

私が今持っている知識を今後の自分の将来にどう生かしていくのかが、今後の課題になってくると思う。高校生から防災の知識を学科で勉強している人は少ないと思うし、こんな貴重な話を聞くことのできる人はたくさんいないと思う。1人でも多くの人に防災の知識を知ってもらうために、私たちが語り継いでいくべきだと感じた。

●語り継ぐ

震災が起こった当時3歳だった私が今こうして18歳になっている。その時に生まれた子供たちや私の弟のようにその後生まれた子供たちはきっと、私でさえ記憶が曖昧なので阪神・淡路大震災を歴史の一部だと思っているのかもしれない。せめて当時の状況や自分の家族や身の回りで起こった出来事などを知っておいてほしいと思う。風化させてはいけないのである。阪神・淡路大震災が起こった1月17日になると震災の映像や特集などが多くなっていく。それを見て震災を体験して人たちは辛い思いをするのだけれど、風化させてしまうことはもっと辛い。辛いから振り返らないのではなくて、辛かったことを無駄にはしていないのだと思う。経験を今後生かしていく必要があるのだ。

語り継ぐ6

私は記憶が曖昧なので震災のことに関する記事やたくさんの人に聞いた話を参考に、これからも語り継いでいくのだと思う。今は私以上に震災を知らない世代の子供たちが増えてきている。そんな中で私にはいったい何ができるのだろうか。考えた結果、語り継いでいく中で毎日を大切に生きていってほしいということを伝えることだと思った。具体的な行動はまだ起こせていないけれど、どんな形であってもたくさんの人に伝えていきたい、と考えている。

将来は、幼稚園の先生か保育士になりたい。子供たちと触れ合うことが好きだし、震災を知らない子供たちに伝えたいと思ったからだ。そしてまたその子供たちがたくさんの人に伝えていってくれたらいいなあと考えている。小さい子供たちに難しい話をしても分からないと思うので震災があったことだけはきちんと知っておいてほしい。

できれば心理の勉強もしたいと思っている。環境防災科の授業で心理の話聞いた時にとっても興味を持ったのがきっかけだ。震災時に心に傷を負った人のサポートができればいいと考えている。また、心理の勉強をした上で子供が混乱してしまった時などに安心させられるような大人になりたいと思っている。

将来は、このような形で防災に関わっていきたい。そして、たくさんの人に震災を知ってもらいたい。

通過点

加古川市加古川町
松本 佳祐

14年…

阪神・淡路大震災…

震災の記憶

僕は、震災当時の事をあまり覚えていない。
震災からしばらくして、母が阪神・淡路大震災の様子を教えてくれた。

阪神・淡路大震災 ～母の記憶ついて～

その日は突然何の前触れもなくやってきた。家族四人その日もマンションの和室で川の字になって寝ていた。突然の揺れで起きた。何が起きているのかよくわからず、でも大変な事が起きていると思った。すぐに隣の広いリビングへ行こうと開けてみたがリビングの食器棚の扉はバタンバタンと開いたり、閉じたり中の食器は飛び散っていて、高い所の物が落ちてきたり物が飛び散ったり揺れもひどい中、動く事が出来ずにいた。幼かった子供達は何も気づかず眠っていた。タンスの上の物が落ちてきて、私は二人の子供をそばに寄せ覆いかぶった。

でも、揺れはひどくなっているような気がしてタンスが倒れてきたら「死んでしまう！」そんな不安から、子供たちをリビングの方へ抱きかかえて行った。リビングの照明は大きく揺れて、床には物が散乱しており割れた食器だらけだった。子供の部屋も本棚の本が倒れていて、部屋の壁にもひびがはいていた。

当時三歳だった佳祐はよくわかっていない様子だったが、六歳の姉はタンスの上の物が足の上に落ちてきて泣いていた。

余震が起こるたびにおびえて、私のそばから離れようとはしなかった。揺れがおさまった時、主人はすぐに仕事に行った。電車が来ない事を確認すると、車で神戸の被災地へと向かっていった。主人は警察官であったため、何日も帰ってこなかった。

テレビで被災地の状況を見た時、あまりの悲惨さに絶句した。被災地で働いている連絡の取れない主人の事が心配で、不安な気持ちになった。また、神戸に住んでいる友達の事も心配になった。

当時、加古川のマンションに住んでいた私達は二年程前まで、神戸の灘区に住んでいたからだ。そのまま、あの場所に住んでいたら・・・そんな事と同時に知り合いや友達の事が気になり、何度も電話をかけてみたが、繋がらなかった。

幾日が経ち、主人が真っ黒な煤まみれで帰ってきて被災地の状況を聞いた時、涙が出てきた。加古川の状況はそんなにひどくなく、三年前に引っ越して来た事を自分達だけが逃れたような気になり、申し訳ないような気持ちになった。

そんな気持ちは、夏に神戸の方へ行った時にも強く残った。私達が慣れ住んでいた神戸の街ではなく、焼けて家が無く、建物もまだまだ壊れたままで痛々しい状態だった。

私達は毎日生活している日常があたりまえだと思って生きてきた。でも、この地震によって当たり前のように生活する事がどんなに幸せな事なのか、痛感した。

この地震が二年前だったら、私達家族も今と同じだったのか？

この地震によって、たくさんの方々の尊い命が奪われ、建物も街も失われた。でも、地震の起きた時間が二時間後、三時間後だったとしたら、被害はまた、違った形で拡大していたのかもしれない。地震などの天災においては、私達人間は無力にちかいと思った。

だからこそ、日々の生活を大事にしっかりと生きていく事が大切だと思った。地震から14年が経ち、神戸の街もやっと何事もなかったように、また美しい街に戻った。

でも、たくさんの方々が犠牲になった事を私達は、忘れてはいけないと思った。

語り継ぐ6

阪神・淡路大震災 ～父の「大震災発生時」からの行動について～

平成7年1月17日、午前5時46分「阪神・淡路大震災」発生時、父は自宅マンションにて就寝中だった。加古川市内に居住していたため、震災による損壊・ライフラインの異常等はなく、母、姉、僕を自宅に残し職場（神戸市内）に向かった。父は警察官であるため、誰に命ぜられる訳でもなく、大震災という現実立ち向かって行った。

【通勤】

午前6時50分頃、自宅を出た。まず、通勤手段であるJRの電車は不通となっていたため、車で通勤した。加古川市内での震災による影響は見受けられなかった。明石市内から、屋根瓦のはがれ落ちた家屋が散見され始めた。垂水区内に入るも、幹線道路は通行止めだった。いろんな脇道を通り、昼を過ぎてはまだ須磨区内だった。須磨の山手から神戸市内を望めば、黒煙が立ち上がっていた。加古川の状態からは、予想できなかった情景だった。車内には、家屋から漏れてきた都市ガスのおいが充満していた。家屋の倒壊、家屋火災など、被災者の方々を多数目にした。長田区内の景色は、戦争中の焼け野原状態だった。兵庫区内は、兵庫警察署倒壊で一階部分がなくなっていた。

【勤務】

勤務場所である港島庁舎は、午後4時過ぎに到着した。港島庁舎は、ポートピアランド内のため液状化現象で床は泥・砂まみれだった。島内の道路も液状化のため凸凹状態で通行には困難を極めた。夕方から、神戸市内の被災状況調査にあたった。昼食・夕食をとることなく夜を迎えた。捜査用車内で徹夜勤務だった。倒壊した建物等から、被災者の救出作業等が開始されていた。なかには、残念ながら亡くなった方々の搬出作業も行われていた。長田区内の歩道上は、火災のため地面は熱く避難所となった学校等は被災者であふれていた。

当時六歳の姉の話

まず縦に揺れ、その次に横に揺れ目が覚めた。起きて電気をつけるとタンスの上のおもちゃが私の足元に落ちていて、部屋の中はぐちゃぐちゃだった。食器棚の扉は全部開き中の食器が全部飛び出ている、割れていた。はじめは何がなんだかわからなかった。テレビをつけて、やっと大変なことが起こったと知った。神戸の街が真っ赤に燃えている映像は、私には想像もできなく、今でもよく覚えている。後、父が何日も仕事で帰ってこなくて、寂しいと同時に、心配になった。

私が小学校に進み、小学校で同じクラスで神戸に住んでいた友達がいた。その子は、震災が起こって家がなくなってしまい、こっちに引っ越してきたようだった。私は「地震はすごかった？」とたずねたが、その子の知り合いや友達も何人も亡くなったと聞いた。その子は暗い顔になり、それ以降何も話さなかった。

震災の頃は、私も六歳で幼かったし、震災がひどい地域ではなかったのが覚えていないが、高校ではじめたボランティア活動で、地震の悲劇を知ることになった。

神戸で新潟中越地震の募金活動をした。私たちの目の前を通る人たちは、神戸で震災を経験した人はもちろんのこと、みんな募金をしてくれた。「がんばってね」「私たちも震災のときはみんなに助けってもらったから」などと言って募金をしてくれたり、震災の時の話をしてくれたりした。

また、あしなが募金にも参加した。あしなが募金とは、親が亡くなった子が、高校や大学に進んで勉強できるように支援する募金だ。そこで、いろいろな理由で親が亡くなってしまって、精神的にも金銭的にも困っている人たちがたくさんいることを知った。

中には、震災で親をなくしてしまった子もいて、何年もたった今でも地震の悲劇が続いていることを知った。

私は、地震のひどかったところに住んでいたのではないけれど、地震のことを知っていく中で、地震はたくさんの悲しみを知り、私たちが決して忘れてはならないものだと感じた。

知り合いの人の震災時の様子

1月17日(火) 兵庫県南部地震が起きる。家族で小学校へ避難。

- 1月18日(水) 小学校で避難生活。(一日目)
- 1月19日(木) 小学校で避難生活。(二日目)
- 1月20日(金) 小学校で避難生活。(三日目)
- 1月21日(土) 小学校で避難生活。(四日目)
- 1月22日(日) 小学校で避難生活。(五日目)
- 1月23日(月) 実家へ避難。(一日目)
- 1月24日(火) 実家へ避難。(二日目)
- 1月25日(水) 実家へ避難。(三日目)
- 1月26日(木) 子供を実家に置いたまま、父・母は家に帰り自宅の掃除。
- 1月27日(金) 父・母、自宅の掃除
- 1月28日(土) 自宅の掃除
- 1月29日(日) 自宅の掃除
- 1月30日(月) 電話が復旧
- 1月31日(火) 水道が復旧する
- 2月1日(水) 家族が全員そろろう

ルミナリエ

1995年12月に神戸ルミナリエが出来てから毎年家族で見に行っていた。

小学生の頃は、ルミナリエの意味なども知らずにただルミナリエを見て「きれいやなあ！」と思って歩いていた。そして、僕がルミナリエに行く本当の理由は、ルミナリエを見た後に大好きなお寿司を食べにいけるからだった。

中学生になってルミナリエを見に行った。その時ふと「何でこんなことしとん?」「何でないとん?」「お金の無駄ちゃうん?」と頭に浮かんだ。歩いているとルミナリエのポスターがたくさんはってあった。そこにはこう書いてあった。“神戸ルミナリエは、阪神・淡路大震災犠牲者の鎮魂の意を込めると共に、都市の復興・再生への夢と希望を託しています”。僕はその時やっとルミナリエの意味を知り、悲しそうな顔をしている人や泣いている人の理由がわかった。

高校生になり環境や防災を学んでいくなかで、心に深い傷を残した人たちは震災からどれだけの月日が経っても、忘れることのできないことを知り、また震災に遭った人、遭わなかった人もけして忘れてはいけないことを知った。

環境防災科

僕が環境防災科に入ろうと思ったきっかけは、ただ机の上にもむかうだけの勉強ではなく、校外学習や消防学校体験入校があり興味を持ったからだ。

入学して、環境防災の授業が始まった。そこでは同じクラスの人が、ライフラインが寸断され水が出なかったなど言っていて、僕には想像も出来ない事ばかりだった。

そして警察や消防などの方々が、外部講師として講義をしてくれた。講義を聞いているうちに阪神・淡路大震災のことが理解できるようになった。

校外学習では、防災の知識をより深く学ぶ事が出来た。そして消防学校体験入校では、クラスの仲間と一生懸命に頑張り汗を流し、環境防災科でしか体験出来ない貴重な経験をさせていただいた。そして僕が一番環境防災科に入ってよかったなと思えるのは、ボランティア活動が出来た事だ。

僕は高校三年間で、いろいろなボランティア活動に参加してきた。そのなかでも石川県輪島市能登半島ボランティア、地域防災訓練はとても印象に残っている。

石川県輪島市能登半島ボランティアでは、仮設住宅の訪問や復興住宅の見学、地元の高校生とワークショップをしてお互いに意見をだしあい、情報交換もした。

地域防災訓練では地域の人たちと、体を使い楽しく防災を学ぶことができた。

ボランティア活動を通し、助け合いの重要性、人と人との繋がりの大切さを学ぶことができた。

僕が環境防災科過ごした高校三年間は、何ににも変えられない大切な宝物だ。

語り継ぐ6

これからの自分にできること

今はとりあえず日々の防災の授業を大切にしていきたい。
そして、人間の記憶は絶対に忘れてしまう。忘れないことは不可能なこと。
でも、忘れることをおくらせることは不可能なことではない。
忘れないための努力をしていきたいし、常に防災を意識して生きていきたい。

最後に

僕には、二つの夢がある。

一つは、県民が安心して生活できる環境をつくり、地域の人から愛される警察官になりたいと思っていること。

二つ目は、高校三年間で学んだ環境や防災の知識と知恵を生かし、防災に詳しい警察官になり舞子高校に戻ってくることだ。

感想

今回卒業研究の「語り継ぐ」をして、6400人の尊い命が奪われた阪神・淡路大震災がどれほど大きかったか改めて感じた。

そして、僕たちが震災を知らない人達に震災のことを伝えていくことが大切だと思った。

震災当時の自分と今の自分

神戸市西区今寺
的崎 翔太

「震災前」

僕は今住んでいる家に2歳ぐらいの時に引っ越してきた。なぜそんなことを覚えているのかというと、当時たくさんの雪が積もりそれで遊んでいる写真が残っているのと、その1年後にあの阪神・淡路大震災が起こったからだ。今思うとあの雪はこの阪神・淡路大震災が起きる前触れだったのかもしれない。あれから雪が降るたびにそう思ったがいまのところ当たったことはない。そんなこと冬になるとよく母親と話した。

「震災当時」

僕が震災を経験したのは3歳の時だ。

最初は地震が起きたなんて全然気がつかなかった。地震が起きても父親に起こされるまでぐっすり寝ていたらしい。あの頃は家族みんなで2階の和室で寝ていた。普通に寝ていたらとなりで寝ていたはずの父親がいきなり大きな声をだして母親を起こした。その後、僕と兄が起こされた。最初はなにが起こったのかわからなかったけど、とりあえず1階に下りた。その時に見たのだが、隣の部屋のタンスが倒れていた。今はその和室にもタンスを置いていたが、その当時はタンスを置いていなくてよかったと思う。もしもタンスを置いていたらタンスの下敷きになっていたかもしれない。そう思うと今でもぞっとする。外を見てみるとすこしずつだが外が明るくなっていた。その時に「もう朝なのか」と思った。その後家の前で近所の人がパジャマ姿のまま集まりだしたのが見えた。父親が外に出て行き近所の人と何かを話しに行った。最初は僕もついていこうとしていたのだが、「危ないから家にいるように」、と言われたので母親と兄との3人で家に残った。その間は1階のリビングのテーブルの下で兄と一緒にいた。布団を母親にかぶせられてうずくまっていた。その間に母親は電話がつながるかどうかや冷蔵庫の中身に何かがあるかを確認していた。当時は何が起きたのかわからなかった。ただ地震が起きたのだということしかわかっていなかった。それを知ったのも父親と母親に「地震があったから起きなさい」と言われたから気がついたのだ。何を話していたかはわからなかった。まだ小さかった僕と兄はそのまま寝てしまった。でも父親はいつもどおりに仕事に出かけてしまった。母親も次の日にはいつもとかわることなく過ごしていた。とても大きな地震だったということを知ったのはもっと後のことだった。

僕の住んでいるところは西区で目に見えるような被害はほとんどなかった。パッと見ただけでは「本当に地震があったのか？」と思うほど被害はなかった。あっても家の壁に少しひびがいたり屋根の瓦が落ちたりするくらいだった。僕の家がそうだった。最初のころはそのひびと瓦が落ちたのせいで雨漏りがしていたが、それも今では修理をしてほとんどあとが残っていない。どちらかということ前よりきれいになったほうだ。

電話やガス、水道もすぐに復旧したほうだと思う。環境防災科に入って知ったことだが僕の住んでいた地域は本当に復旧が早かったらしい。だから水が出ないとかガスが使えないといったことで不自由をすることはなかったと思う。

母親がすぐに祖父の家に電話を入れていた。舞子のほうの家はそんなに被害もなくケガもしなかったらしい。淡路のほうの家もすこし家具が倒れたりしたけどケガはなかったらしい。あれだけの地震にあって身内がだれも怪我しなかったのは、今思うととても運が良かったのだと思う。

当時は小さくうろ覚えだが、テレビはどのチャンネルでも震災のニュースをしていたと思う。そのニュースで被害のひどかった地域の映像を見た記憶がある。その時は何を感じたかもう覚えていないが、おそらくなにかしらショックを受けていたと思う。だからなのか、それともただ単に昔のことだから忘れてしまっていたのかわからないが震災の記憶というのはそれくらいしか覚えていない。でも、当時3歳の子供の、ましてや朝起きてすぐの記憶ということこんなものだと僕は思う。

「震災後」

「しょうらいのゆめはしょうぼうかんになることです」

これは幼稚園の卒園アルバムに書いてあった僕の将来の夢だった。どうしてこのような将来の夢にしたのかは覚えていない。もしかしたらただ単に「かっこいいから」という理由からかもしれない。でも今振り返って考えてみると、あの阪神・淡路大震災が関係しているのかもしれないと思ってしまう。実際に経験している震災により無意識のうちに消防官になりたいと思っていたのかもしれない。どちらであるのかはわからないが、この幼稚園の卒園アルバムが僕の出発点だったのかもしれない。僕はそう思っている。

小学校に入って初めて阪神・淡路大震災の行事に参加した。行事の内容は、6学年全学年がグラウンドに出てきて先生の話と行事が何なのかを聞いてから黙とうをした。小学校に入ったころは、しんどいなとか、早く終わらないかなとか思っていた。阪神・淡路大震災に関係のある行事に対する感想というのはそんなものしかおもわなかった。

小学校の高学年になったときに総合の授業で「人の命」という内容をした。それにより少しだが毎年行っている行事にかける考え方が変わってきた。それからは毎年行われる阪神・淡路大震災の行事の黙とうをしているときに、ただ眼をつむっているときの考え方が変わってきたよう気がする。このころから震災のことに少しだが興味を持ちだした。

小学校の頃はサッカーをやっていて、将来の夢もサッカー選手になることだった。でも小学校の総合の授業に影響されたのか夢が消防官になることに変わっていた。ここから消防官になるために再び歩き出したのかもしれない。

中学校の総合の授業で何度か震災のことをした。震災当時の写真を見たり語り部さんの話を聞いた。当時の話と写真を見聞きしたことによって、この神戸がどれくらい大きな被害を受けたかや、被害のひどかった地域がどのような生活をしていたかを知ることができた。この授業によって人の命というものについて真剣に考えるようになった。これにより今の将来の夢のことを考え始めたのだと思う。そしてこれに関係の深い授業をしている学校を調べてこの舞子高校環境防災科を見つけて、入ろうと思って努力を始めた。

そのころから少しずつだがボランティアのことに興味を持ちだしたような気がする。具体的に何をかをしたわけではないが、いろいろな資料を見てこんなことでも人の命や心を救えるのだと1人で感心していた。

「環境防災科に入って」

この環境防災科の授業で当時のことを、いろいろな立場の人から聞くことができた。警察に消防、電気会社にガス会社、水道局に電話会社といろいろな立場の人に多くのことを聞いた。それを、当時の記憶と重ね合わせていくことにより当時はわからなかったことや、あの行動はだめだったのだということを知ることができた。

特に聞いてよかったと思ったのが消防の人の当時の話だ。

この舞子高校の環境防災科に入ろうと思ったのは震災当時の話をたくさん聞けることもあったが、1番の目的が消防官になるために少しでも有利なことを学んでおこうと思ったからだ。消防が当時味わったつらさを聞いた。助けたくても助けることができないつらさを聞いた。僕が消防官になってそのつらさを味わうことがあるかもしれない。でも、それが1つでも少なくできるように行動していきたいと思った。

環境防災科にはいつから、ボランティアに参加する機会がとでも増えた。

中学生のときは、街頭募金にお金を渡すくらいだった。でも今は本当にたくさんのボランティアに参加するようになった。規模の大きいものは遠くに行つてのボランティア(能登半島地震のボランティア)、規模の小さいものは街頭募金をしてもらおう側をやったり、声かけをしたりなどたくさんの種類のたくさんのボランティアに参加した。

僕が参加したボランティアのなかで一番規模が大きかったのが能登半島地震のボランティアだ。震災から二年ほどたった時に行つたので力仕事のようなことはしなかった。でも地元の学生たちや仮設住宅の人たちとの交流を通じて、今まで自分になかったことを学んだような気がする。それが人の心の強さと弱さだった。

3. 「17震災メモリアル行事」

この舞子高校では1月17日に1.17震災メモリアル行事というものをする。舞子高校全体でやる行事としてはけっこう大きな行事だ。

この行事は舞子高校全体の行事なので普通科の生徒も参加している。もちろん環境防災科の生徒も参加している。だから僕も毎年参加している。

行事の内容は様々である。普通科の生徒は体育館で阪神・淡路大震災に関係のある話を聞いたあと、各々の教室に分かれて警察官に消防官、関西電力にNTTと、たくさんの方々に阪神・淡路大震災当時の話を聞いていた。環境防災科の生徒はほとんど普通科の生徒とは別行動だ。学年によっても行動も違う。1年生は今までに学んだ阪神・淡路大震災のことや地震のメカニズムについてのことを、小学生を相手に授業をする。この授業にはテレビ局の取材が入っている。僕の班が授業をしていた時は来ていなかった。でも僕の班の次の班が授業をしているときにはテレビ局の人の取材がきていた。絶対に緊張しているだろうなと思っていたのだが、見ているとそんなに緊張をしている様子ではなかった。僕が同じ立場になっていたらとても緊張していたと思う。もしかしたら緊張のしすぎでうまく授業を進めることができなかったと思う。

2年生は後半に控えている特別講師の方々の接待をしていた。あまり人と話すことが得意ではない僕だったがこのときはいつもよりうまく話せたと思う。

3年生は受験に入っていることもありこの行事には自由参加となっている。でも、この行事には毎年たくさんの3年生が参加している。受験で忙しくても参加できる。そんな生徒が増えていったらいいなと思う。

「東遊園地」

高校2年の冬に初めてこの東遊園地の行事に参加した。

小学校にいたときからこの行事があることは知っていたが、場所が三ノ宮で遠かったのでいままで参加することはなかった。

今回この東遊園地の行事に参加したのは本当によかったと思った。どうして今まで行かなかったのだととても思った。

この行事にはボランティアとして参加した。行事はとても朝早くから始まるので僕と一緒に参加していた友達と一緒に前の日から三ノ宮にいた。だから行事の準備が始まったころにはとても眠くなっていた。

行事が始まるかなり前から、テレビ局の取材の人や新聞記者の人が来ていた。ボランティアに来ている人もたくさんいた。特に気になったのが僕たち以外の学生がボランティアに参加していたことだ。環境防災科以外の子供がボランティアに参加していたことはとても驚いた。行事が始まるすこし前になると一般の人たちがたくさんやってきていた。その中には確実に僕より年下で、阪神・淡路大震災を経験していないような小さな子供が参加しにきていたことに驚いた。眠たいのか眼をこすりながら来ていた。そこまでしてきてくれていたのがとてもうれしかった。

行事が始まると竹の中のろうそくに灯が灯されだした。ろうそくの火はとてもきれいだった。先輩や友達に聞いたのだが、この竹とろうそくは上から見ると1.17の文字になっているらしい。まだ上からの絵は見たことがないので、ぜひ見てみたいと思った。

今まではこの行事のことは次の日のテレビのニュースで見ると、実際に見たのは高校2年が初めてだった。テレビのニュースで見ると、実際に見るとではやはりちがいがあった。実際に見ているとろうそくの灯の光と灯の温かさを感じることができた。東遊園地の隣のビルで1.17の文字が窓と光を使ってあらわされた。これを見たのは初めてだった。

行事が始まって少しすると、すでに学校を卒業している先輩たちがやってきていた。すでに卒業して環境防災科の生徒でもないのに来ていたのに僕は驚いた。

でも、これが環境防災科のすごいところの1つなのかもしれない。環境防災科に在籍している時だけでなく、卒業しても環境防災科の精神を忘れずにいることはいいことだと思う。そんな生徒はもしかしたら少数なのかもしれないが、これからそんな生徒が増えてきたらいいと思う。僕もそのような先輩た

語り継ぐ6

ちのようになれたらいいなと思った。僕も学校を卒業してもこの1. 17震災メモリアル行事にだけは参加しようと思っている。こうやって環境防災科にかかわった人たちが、できるだけたくさん防災に興味を持ってきていたらいいと思っている。

震災から十数年経っているのにもかかわらず、あれだけ多くの人に参加してきているのにとっても驚いた。上はお年寄りから、下は僕よりも年下の子供までが参加していた。自分たちは震災を経験したわけでもないのに、あんなに朝早くから外に出てきていて黙とうのときにも真剣に目をつむってくれていたのに感動した。

これからはできるだけたくさん参加したいと思う。

「最後に」

今回この「語り継ぐ」を書くに当たって父親と母親に当時のことをたくさん聞いた。しかし、自分の経験や記憶をほとんど書けなかったことが悔しい。これで語り継ぐ立場としてこの文章を書いていることに恥ずかしさを覚えた。でも当時の話を聞いてたくさんのことを思い出すことができたと思う。このことをまた別の形で語り継いでいくことが必要だと思う。

環境防災科に入って「語り継ぐ」ことの大切さを知った。いいことも悪いことも語り継いでいくことによって、次の世代の人たちに過去に何があったのか、その時どんな状況だったのか、どんな生活だったのか。教科書にの載せたり本を作ってみたりするのは大事なことだと思う。特に言葉で伝えることは大事だと思う。なぜなら、文字だけではわからないことも実際に会って言葉で伝えればわかることがあると思うからだ。

自分たちが受けた痛みを忘れてしまっはいけない。だから「語り継ぐ」ということをしていかなければいけない。語り継ぐことをやめてしまい、過去の傷を見ないように知らないようになってしまったら、また同じような失敗や、傷を負ってしまうことになってしまうと僕は思う。

阪神・淡路大震災体験記

神戸市垂水区
眞部 賢也

<阪神・淡路大震災とは>

1995年（平成7年）1月17日午前5時46分52秒、淡路島北部（神戸市垂水区）沖の明石海峡を震源として発生したマグニチュード7.3の大地震である。兵庫県南東部と大阪府北部を中心に大きな被害をもたらした。特に神戸市市街地は壊滅状態に陥った。

地震による揺れは、阪神間及び淡路島の一部において震度7が適用されたほか、東は小名浜、西は佐世保、北は新潟、南は鹿児島までの広い範囲で有感（震度1以上）となり、戦後日本で最大最悪・未曾有の震災となった。

この地震はまた震度7が適用された地震である上に実地検分によって震度7が適用された最初で最後の地震でもある。

被害の特徴としては、都市の直下で起こった地震による災害であるということが挙げられる。政府が今回の災害の規模が大きいことに加えて今後の復旧に統一的な名称が必要であるという観点から、淡路島地区の被害も大きかったことにより、災害名を「阪神・淡路大震災」と呼称することが2月14日の閣議によって口頭了解された。

2月24日には、5年間の時限立法として「阪神・淡路大震災復興の基本方針及び組織に関する法律」が制定された。この時に「阪神・淡路大震災」と呼ばれるようになったのである。

<被害内容>

死者は、6433名、行方不明者3名、負傷者43792名、死者の内訳は兵庫県内6402名（99, 5%）・兵庫県外32名（0, 5%）。

負傷者のうち重傷者は県内10494名（98, 2%）・県外189名（1, 8%）軽傷者県内29598名（89, 4%）・県外3511名（10, 6%）。

死者の県内県外の比率から見て県内の負傷者数は混乱の中、正確に数えることはできなかったと推定される。人だけでなく家屋などもたくさんの被害を受けている。

<都市型震災>

都市型震災としては、大都市を直撃した東南海地震以来であり、道路、鉄道、水道、ガス、電話などのライフラインは寸断されて広範囲において全く機能しなくなってしまったのだ。

これ以降、都市型災害及び、地震対策を語るうえで、「ライフライン」の早朝の復旧、「活断層」などへの配慮、建築工法上留意点、「仮設住宅」の行政の対策などが注目されるようになったのである。

元々、日本は地震大国であり、日本の大型建築物は大地震にも堪えられない構造であるとわかり、1982年には大幅な建築基準法の改正が行われた。

しかし、日本の建造物が安全であるとする報道に基づいた誤解をしている市民も多く、1982年以前に建てられたビルやマンション、病院、鉄道の駅舎などでも広い範囲にわたって倒壊・全半壊が多く見られた。

特に神戸市の長田区においては、木造住宅が密集していた地域を中心に火災の被害が甚大で、地域直後に発生した火災に伴う火災旋風が確認されている。これにより、近隣の建物に次々と延焼して須磨区東部から兵庫区にかけても6000棟を越す建物が焼失した。

消火活動で上水道が断水したため、わずかな防火貯水槽を探しているうちに、炎が延焼してしまい被害が大きくなる結果となった。

当時の消防局には、進出路の壁を除去して消防車を現場へ啓開する車両・消防ヘリコプターが十分に配慮されておらず、現場への到着が遅れて重要な初期消火に失敗している。そして、各地の消防車が応援に来て消火栓とホースの規格が合わず消火できなかったことも問題となった。どうにしろ準備不足だったのである。

語り継ぐ6

* 以上、Wikipediaなどを参考にした。

<震災が起きるまで>

僕は、当時神戸市垂水区に住んでいた。四階建てのマンションに住んでいて、とても小さいマンションだった。四階に住んでいた。

でも、このマンションはエレベーターがついていなかったの親は毎日僕を抱っこして階段を下りていたのでとても苦労したと思う。

震災が起きる前に非常持ち出し袋などの用意をしていなかった。これは、とても危険なことだなと思った。この後、恐怖の最強の地震が発生する。

<地震発生～震災後まで>

地震で多くの家が壊れたり、多くの人が亡くなったりした。住む家を失った人たちは、学校に避難したり、親せきの家に避難したりした。町の様子もすっかり変わってしまった。いったい地震のすごさは何によって表わされるのだろうか。

余震があった時、テレビの速報で震度2とか震度3とかを伝えているのを思い出して、調べてみた。マグニチュードというのは、地震自体の揺れの大きさである。震度は震源から離れた場所での揺れの大きさを表しているらしい。

震度計が示す数字で震度を決めることになったのは、平成8年10月からだそうで、最大加速度（ガル）と言うのは、地震が起きてから地面が動く時、はじめはゆっくりで、次第に速くなり、この少しずつ速くなっていく度合いを表す単位みたいなもので、横、上、下の揺れの凄さを表している。

阪神・淡路大震災の震度7、最大加速度818ガルは、とてつもなく激しい揺れで、体が宙に浮くようなまるでジェットコースターに乗って振り回されたような揺れである。

震度0では、人間だれもが揺れを感じない。

震度1と2では人間の一部分がわずかな揺れを感じ、眠っている人の一部分が目覚まして電灯などのつり下げものがわずかに揺れる。

震度3と4では人間のほとんどが揺れを感じ、食器棚の食器が音を立てたり、野外では電柱などの電線が大きく揺れたり、歩いていても揺れを感じたり、自転車で運転していても揺れを感じるようになる。

震度5弱では、多くの人が身に安全を守ろうとする。窓ガラスが割れておちてくることがある。電柱が揺れるのもわかり、住宅や建物に被害が出ることもある。弱い地盤では、亀裂が生じることもあるそうだ。

震度5強になると多くの人間が恐怖を感じ、行動がとりにくくなる。部屋の本棚にある本やキッチンの食器棚にある食器類も落ちてくる。補強されていないブロックの塀がくずれてきたり、自動車の運転も困難になり、停止してしまう事が多い。

震度6弱では、人間が立っていることも困難になってくる。固定していない重たい家具が移動したり、転倒したりする。いたる所のドアや扉などが多くなる。山崩れや地割れなども発生しやすくなっている。

震度6強になると人間は、ほとんど立ち歩くことができなくなってしまい、手をついた状態でないと動くことができなくなる。多くの建物の壁などタイルや窓ガラスなどが破損したり、落下したりする。

震度7になると人間はみんな揺れに翻弄され、自分の意志で行動することが出来なくなる。ほとんどの家具が大きく移動したり、飛び交うこともある。耐震性の強い高い建物などでも、傾いたり大きく破損するものがある。大きな地割れ、地滑りなどがあり、山崩れが発生したりして、地形が大きくかわることがある。

(*気象庁震度階級表を参考にした。)

広い地域で電気やガスや水道などの供給が停止してしまう。阪神・淡路大震災では、東灘区、灘区、兵庫区、長田区などで大火事が起こり、壊れた建物が道をふさぎ、消防車などが火事の現場になかなか近寄れなかった。

あちこちで火災が起きていたので、駆けつける消防車の数も、台数が足りないくらいだった。さらに水道管が壊れているため、火を消すための水が足りなくて、消火することで、ずいぶん苦労してきた。

きれいだった神戸の街が、たった一分ほどの時間で、まるで戦争の後みたいになってしまった。本当

に自然の力って果てしなく、限りなく怖いものである。

人間の文明化がいくら進んだとしても、自然にはとてもたちうちできないのである。

テレビなどでは、いろんな所で地震が起きているニュースなど、見る事はあるが、まさか神戸には絶対来ないといわれていた地震…しかも直下型で縦揺れと横揺れが同時に来る地震が神戸に来るなんてだれもが想像していなかったことである。

今回の地震が大きな被害をもたらしたのは「神戸には地震なんて起こらないだろう…」という油断があったことも原因の一つだといわれている。

もし地震が起きたら…と考えて、普段からいろいろな備えをして置いたり、その時一体どうすればいいのかを考えておく必要があると思った。自然のおそろしさとは…日本は世界の中でも自然災害が多い国である。どんな災害があるのかを考えてみた。

たとえば、大雨は、梅雨や台風お時期に、大雨が降ることがある。大雨は、洪水やがけ崩れなども引き起こし、家が流されてしまったり、つぶされたりする。

大雪は道路や電車などに被害を与えたり、家がつぶされてしまうこともある。

台風は、太平洋の海の上で発生し、夏から秋にかけて、日本全国を襲うこともあり強い雨と風を伴い、大きな被害を受ける。

津波は、地震によって起こることがあり、海岸に大きな波が押し寄せたり、家が人が大きな被害を受ける。全国各地どこの海岸でもあることで、火山などは、今も煙を出しているところが日本にはたくさんある。

火山が噴火すると、溶岩、岩、灰などを噴き出したりすることが多い。特に北海道や九州など関東地方に多い。そして、地震は、日本の各地では地震がよくあり、世界でも有名である。地震は人とか建物や道路などに大きな被害を出したりする。阪神・淡路大震災はこのような地震である。さらに直下型地震というとても危険なものである。

<復興計画>

よみがえれ神戸の街。安全で快適なまちづくりを目指して、大震災後のある日、神戸市震災復興本部が設置され「復興計画」が発表された。それは多くの人々が何回も何回も集まって話し合い、考え出されたものである。

その街づくりの目標とは、まず安心して住んで、働いて、学んで、憩い、集える町など、創造性に富んだ活力のある町、そして個性豊かな魅力のある町などである。震災前にあった姿に戻そうとするだけでなく、震災の経験や教訓を生かし、より安全で快適にぎわいと魅力のある街を目指して復興を目指しているのである。

そのためには防災性に優れた道路や公園、快適でゆとりのある生活など、町の基盤などを整備していかなければならないし、それには神戸市の地域の人々の十分な話し合いや、お互いに力を合わせていくことであると思う。

この震災を通して、生命の大切さや自分自身の生き方について強くとどめた親や子供たちはたくさんいると思う。復興を願って阪神・淡路大震災で多くの命が奪われてしまった。電気が止まり、ガスや水道も使えなくなってしまった。電車も動かなくなった。ずっと親しんできた家やお店や仕事場なども焼けてしまった。道路や病院もひび割れて壊れてしまい家族のため働きたくても仕事がなくなってしまった人もたくさんいた。

僕たちの目に見えないところでも、たくさんの人々の計り知れない悲しみや苦しみ、誰にも言えないつらさもあったと思う。これまでは当たり前のように使っていたものが、どんなに大切に、本当になくしてはならないものであるか。誰もが健康で安全な暮らしをしたいという願いをもっている。今回の大震災、普段何気なく過ごしている自分の生活を見つめなおしたり、多くの人々に支えられて生活したりすることを考えたりする機会でもある。

自然の災害とは、いつやってくるかわからない。大きな災害がやってくることを食い止めるのはできないが、被害を少なくすることはできるはずである。災害を防ぐために地震のときには冷蔵庫やタンスや本棚や食器棚などが倒れてくることもある。大震災でも家具の転倒などが原因で亡くなった人が震災で亡くなった人の一割にものぼっているのである。後、防災を防ぐには心の備えも必要である。

語り継ぐ6

<これからの神戸>

阪神・淡路大震災の被害を受けた神戸市、これからはいつ地震が来てもいいようにしっかりと対策を立てておくことがもっとも重要な点となってくると思う。一人一人の家をしっかりと耐震補強して地震に強い家へと進化させる。火災が起きないように、日頃から火をつけているときはそばにいることなどの細かいところまでちゃんと意識することが大切だと思う。

後、一人一人の防災意識を高めて、防災訓練や避難訓練に積極的に参加することも重要なことだと思う。専門家によると今回の地震の被害は10分の1まで軽減できたということが挙げられている。なので、またこんな地震が来たならば10分の1まで軽減することが最大の役目だと思う。

だから、人に任せるのではなく、みんなが自分の力で神戸を強くするという意識があればあれだけ大きな地震が来ても打ち勝つことができるのではないかと思う。やはり、一番大事なのは意識である。日ごろから意識してもいいように、心構えを持っておく必要があると思う。

<自分の意見>

環境防災科は、阪神・淡路大震災の教訓を生かすためにできた学科だ。だから環境防災科に入っているみんなは普通の人よりもたくさんのことを考えないといけない。でもこの学科が頑張っても何の意味もないと思う。人々みんなが協力しないと救えないことの方がたくさんあると思う。だから、一人一人がしっかりと責任をもつ、感じる事がとても大切だと思う。それを意識させることがこの学科の役目だと思う。

天災のカウントダウン

神戸市垂水区清水が丘
三浦 有理沙

私が地震について初めて知った時、誰かがこう言ったことを覚えている。

「地震なんてめったに起こらないものだから・・・」と。しかし実際には私が地震という言葉を意識する前から悪魔のような一日があったことを父や母から聞いた。

私は1995年に起こった阪神・淡路大震災のことは父が話すまで、1つの夢にあったことだと思っていた。当時私は3歳になる前の歳だったので、全くと言っていいほど震災のことは記憶に無い。しかし、中学生になったころから家族でたまに海に遊びに行った時や夜一緒にいる時、父がよく震災の話をするようになった。だからこれから話すのは、父と母による記憶の話である。

◆前夜

1月16日、つまりあの震災が起きる前日は父の仕事が久々に休みだったこともあって家族一緒に一日を過ごしていた。そして夜になって晩御飯を食べたり風呂に入ったりして一日の生活が一段落すると、父と私と母でいつも通り一緒に部屋の準備をし、まだ1歳にもなってなかった弟は少し離れたところに置いてあるベビーベッドで寝ていた。いつも通りだったが、一つ変わった所といえば、母がその日衣替えをするというので弟のベビーベッドを違う位置に変えたことであった。そして寝る支度をした後に、私はその時寝ていたのか記憶はないが、電気を消した後に父はふと思い出したように母に言った。「そういえば・・・このへんは地震がほとんど起きへんなあ。」「どしたんよ、急に・・・でも淡路のあたりは地震が起こったことないなあ。」と、そんなちょっとした会話をしていたのだった。まさかその数時間後に巨大な未曾有の地震が起こることも知らずに布団をかぶって私の家族は眠りの淵へ落ちていったのである。

◆工事の音から地震へ

地震が起きる前、母と父が最初に感じたのは「ゴオオオ」という地響きだった。父は「何の音や？」母は「こんな朝からどこかで工事でもしているのかな？」と言っていた2、3秒後のこと。地面に穴をあけているような工事だと想像していたが、それが急に上へ突き上げてきて横に揺さぶられるように揺れだした。「地震や！」父と母はそう気づくと私たちのもとへ行こうとしたが、西東に揺れているので思うように前へ進めない。天井の豆球の電気が地震で揺れるとすぐに消えたため、ほとんど何も見えない状態の中、父と母は地面を這うようにして私たちのもとへ駆けつけた。「有理沙！」と母の呼ぶ声があったが私は恐怖で何も言えずにただ雪山にいるかのようにガチガチに痙攣して震えていた。怖すぎたために涙も出なかった。そしてようやく母の顔が見えたので少し安心したのか、震えはおさまった。「しがみつきなさい！」母が必死でそう言ったので私は四つん這いになっている母のおなかに猿のようにしがみついた。そして私が母のおなかにしがみついたのを確認すると、父が「有理沙と一緒にテーブルの下に行け！」と母に言った。母が移動している間、母には猿のようにしがみつく私を見て、私が1匹の動物のように見えたらしい。地震で揺れている間、私は静かで一度も泣かなかった。そう、猿のように。

そして父は離れた所にいる弟を助けるべく、母と同様に四つん這いになって弟のベビーベッドの方向へ向かった。ようやくベビーベッドが見えたその時、父は一人目を見開かせて驚いたという。なぜなら、昨日までベビーベッドを置いていた位置にお雛様のひな人形を置く一番重いひな壇がドン！と音をたてて縦に地面に突き刺さるようにして落ちてきたからである。もしあの場所にまだ弟のベビーベッドがあったら？もし昨日母がベッドの位置を変えてなかったら？・・・それを考えると、それを見て震え上がって固まってしまわないうちに父は慌てて寝ている弟を抱きかかえて私と母がいるテーブルの下へ潜り込んだ。しかし、一安心だと思ったテーブルの下は、実は一番危ない場所であった。テーブルのそばにあった食器棚がガシャガシャと音を立てて左右に揺れ、上の縦明け戸になっている部分から皿が次々

語り継ぐ6

に出てきて破壊されていく。襖のように横開けの扉の部分は開かなかったが、割れた皿の破片がテーブルの下に入ってきたので危なかった。皿の破片によるけがは無かったが、地震で揺れている間はテーブルの下に隠れていても安心できず、あまり生きた心地がしなかったという。

そしてようやく揺れはおさまった。

地震の揺れは1分ほどであったが、心の中では1時間ぐらいと思えるほど、とても長く感じた。父はあれほど大きな地震があったのにもかかわらずまだ寝ている弟に安心して私たちに声をかけた。「2人とも、大丈夫か?」「うん大丈夫よ」と、母からの返事を聞いた父は少し安心したが、また地震が来ては危ないのでまだテーブルの下に隠れているように言った。そして父の声がしなくなると、あたりは不気味なくらい静まりかえっていた。周囲が何の音もせず、ただシーンとしていた。そして父の予想通り、小さな地震が長い間続いた。揺れたり止まったりして怖かったので父と母はジャンパーを着てポケットにお金を詰め、座ったまま寝ていた。また地震が起こった時、すぐに外に出られるように体力を蓄えておくつもりだったが、少しの揺れでも起きてしまうため睡眠はほとんど取れなかった。当時は地震など想定していなかったので避難場所など決めていなかったが、私たちは家がなんとか無事だった。その時父は「家より何よりも家族が生きてて良かった」と思ったのであった。

◆待ち受けていた難関

そして、一安心した私たちに次に待ち受けていた難関は水と食料だった。勿論地震が来ることなど想定していなかった私たちは何も備えておらず、ガスも水道も停止していたのでなす術が無かった。その上、私の弟はまだ1歳にもなっていなかったため、ミルクを作る水が必要だったのである。また、トイレはつぶれていなかったが流すための水が無く、そのままであった。このままではいけないと思い、父は外に出て家の近所の山陽バスの操車場のそこだけ水道が出ていることを発見してくれた。そのことがわかると父と母は大きなポリタンクを2つほど持って行った。そこにはたくさんの人がいて長蛇の列を作っており、長時間並んで水を汲んだ。そしてひとまずその水でミルクを作ったりしているうちに1時間が経った。

もう外に出ても大丈夫だと判断した父は、水や食料などの救援をもとめて一番近い垂水のおばあちゃんの家へ行くことにした。しかし、車のガソリンがほとんど無かったため、ガソリンを入れようとガソリンスタンドに行ったがどこの店も潰れていたので歩いて行くことにした。久しぶりに家を出てまず目にとまったものは、隣の号棟の1階にひびが入っていることだった。しかも×のしるしで。それほど1階部分に重さがのしかかっているのだと思うと怖かった。歩きだしてからわかったことだが、歩いていくことは仕方無しにとった手段であったが、それは正解だったと思う。なぜなら、道が瓦礫などでほとんど塞がれていたために道路は道路ではなく、車は全く進めなかったからだ。瓦礫だらけの道を進んでいくと、しだいにガスの臭いにおいがあたり一面を覆った。どこから出ているのかはわからなかったが、それは確かに鼻をさすような臭いだった。また、信号はどこも電気が切れていて車は瓦礫がない道に無理やり入ろうとしていたので混雑し、地震のために黄色の道路の線が一マスほどズレていた。このような目の前に広がる信じられない光景に誰もが茫然としていた。「その時私たちは何もできなかった・・・ただ逃げるだけしかできなかったんよ」と言った母の顔は悲しそうだった。

◆逃げるしかない・・・

そして私たちは垂水のおばあちゃんの家へ到着し、一時的に避難した。垂水のおばあちゃんは震災の前年に千代ヶ丘から今の垂水に引っ越したため、奇跡的に死から逃れたと言っても過言ではない。前の千代ヶ丘の家の様子を見に行ってみると、壁と壁に亀裂が走って家の中が見える状態であった。「あんな状態では家の中の人はずっと生きてないんじゃないかな・・・」と父はつぶやいたという。その後、母は食料や必要な物を買いに店に行ったが、店の中は私たちを含めて震災の被害にあった人で混雑していた。商品の奪い合いで買いあさっていたという。満員電車の中にいるような人の混雑の中で母は買える範囲で食料を買ってきてくれた。

垂水の方へ来て、少し落ち着いた私たちだったが、次に直面したのがまたもや水であった。垂水の水は出たが、弟のミルクを作るためにはお湯が必要だった。はじめのうちは水でなんとかだったが、ミルクの粉が溶けなくなって固まってきたので水だけではミルクは作れなくなってきてしまった。しかし水をお湯にするためのガスがなく困っていたその時に、どこかの宗教の人たちがカセットコンロをくれたり、ボランティアの人たちが食べ物やいろんな世話をしてくれた。父と母はそれがその時とても助かって嬉しかったので今でも覚えていると言った。私たちはそのもらったカセットコンロでお湯を沸かして何か簡単なものを作って食べた。食べたものが何かは定かではないが、震災直後より状況は落ち着いているとはいえ、生きるために必死だった。

◆命をつなぐもの

その後父は自分が勤務している北区の職場である区役所へ水を求めて向かった。神戸電鉄は駅自体が破壊されていたので混雑も承知で大きなポリタンク4つを積んで長い時間をかけて車を走らせた。その時、私たちの近所には車を持っている人が少なかったため、近所の人分のポリタンクも積んで行った。父によると北区は被害は全く無く、会社も正常に働いて機能していたという。ポリタンクに水を入れて車で運んで帰ると、ちょうど昼ごろで母によるとずっと繋がらなかった電話がようやく復旧したというので加古川にいる祖父・祖母の家に電話をかけて私たちは被害がほとんど無い加古川に行くことにした。父は仕事があったので私と弟と母で加古川に避難した。しかし加古川の祖母はテレビが倒れたぐらいの軽い揺れだったため、はじめは何で私たちが避難してきたのかがわからなかったらしい。母は急いでテレビを付けてずっと見ていた。長田の火災の様子や高速道路の破壊の映像・・・そしてはじめは100人だと言っていた死者が、時間がたつにつれてどんどん増えていく恐怖。私は時間がたつにつれて死者が増えるということを知り、思わず身震いしたが、話している母の方がよっぽど辛そうに見えた。その後、家を片づけないといけないのでずっと加古川にも居れず、毎日行くことも難しかったので週に2回ほど加古川に行ってお風呂を借りた。道が混雑するので必ずその日のうちに家に帰った。家ではカップラーメンやすぐに食べられるサトウのごはんを食べていた。米を炊くことになると父は「いつ復旧するのかわからない大切な水をたくさん使うのがもったいない！」と言っていたので温めて食べられるものにした。幸い電気が使えたのでサトウのごはんを電子レンジで温めて食べ、カップラーメンはガスボンベで水を温めて食べていた。洗い物はどうしたのかというと、家の割れていない食器の上にサララップを敷いて洗い物で使う水を節約したのである。父によると、これは地震が起きる前にテレビで一度洗い物の節約というのでやっていたからだという。私はこれに驚いた。震災の前から知っていたサララップでの節約の知識は私たちのその時の生活に大いに助かったように思う。

しかし、ガス・水道はなかなか回復せず、一番困ったのがトイレのタンクに溜めている水だった。私たちは偶然、いや奇跡と呼べるほどたまたま地震発生の前日の風呂は流していなかったため、風呂の水がトイレを流すことに大いに役立った。少し汚い話をするが、トイレの汚物を流すのに一回一回分けて流すのはもったいないので何回かに分けて流したのだが、ある日問題が発生した。急に汚物が詰まってスムーズに流れなくなってしまったのだ。父は必死に「おさまれええ！」と叫びながらスポンジでトイレの底をキュポキュポしたが、流れぬまま汚物水がみるみる上昇してきた。そして水がトイレの便器ギリギリまで来てもう外に出て漏れそうな時、父の努力が結ばれたのか上昇する水は急に止まり、どんどん下がっていった。父はその時だいぶ安堵した。水が溢れてしまうと下の階に流れてしまうからである。もうそれほど水を使うのがもったいなくて仕方なかった・・・そんな不安で不便な日々が1か月も続いた。普通に生活すれば1か月はあっという間にすぎさっていくものだが、当時の1か月は亀のように遅く、しかも毎日いつライフラインは完全に回復するだろう？いつ水がなくなってしまうのだろうかなどとビクビクした不安が募り、精神的にも肉体的にも疲れていたように思う。1か月ほどは加古川に行ったりしていた生活が続いてこっちで生活ができるようになったらようやく帰ってきたが、何もかもが元通りになったわけではない。私たちが普通の生活に戻った時でさえ、まだ道路は変わらずに混雑していたし、しかしそれ以上に父や母のように今も当時の震災の記憶が鮮明に心に残っているのが心の傷の何よりも証明だと私は思う。

・・・ここまでが私たちが実際に経験した悪魔のような日々であった。

◆記憶をどう生かすか

そして父は震災の話を終えた後に言った。「2月にサリン事件があったやろ？それで震災を体験した友達が4月に東京に行った時はもうサリン事件のことで大騒ぎしてて震災のことを書く記事も見なくなったって言ってたわ」と。その言葉を聞いて私は東京の人はもう神戸の震災のことは遠い昔に終わったことだと勘違いをしているということに察した。私は東京の人にその勘違いは間違っているよ、と言いたい。東京に限定せずに震災を体験していない人は、新聞やニュースなどにならなかつたら神戸はもう大丈夫だと思ってしまい、マスコミが報道を継続させなければその程度のことになってしまう。本当にそれで良いのか？せっかく未来を救う震災の体験という材料があちらこちらのいろんな人に散らばってあるというのにそれを使わないでまた同じことの繰り返しをしてしまうのか？と、この震災体験を聞いて私は思った。母からは「天災は忘れたころにやってくる」ということわざを聞いた。これは授業でもやっていたので初めて聞く言葉ではなかったが、震災体験を聞かされてからこの言葉を聞くと、何故かとても実感が持てて少し怖かった。もうすでに今もどこかで天災のカウントダウンが始まっていると思うと怖いからだ。だからこのことわざを作った人はきっと、いつの時代も天災は一生ついてくるものだから忘れてはいけないという思いを詰めた言葉なのかもしれない。震災を知らない人に「震災の記憶は終わったこと」と言われたらそこで語り継ぐことは終わってしまう。次世代に語り継いでいかないといけないのに、次に地震が起こった時に何も教訓がなく手も足も出せない状態では何も学んでいないことになってしまう。私は地震や津波などの天災は私たちに何かを学ばせてくれていると、ふと思う時がある。こんな言い方をしては天災を敬うように誤解されるかもしれないが、今まで天災があった後はそれに対応できる、いろんな建物・ものが開発されたりして、天災ごとに人が強くなっているのが事実であるからだ。また、その震災から1カ月経った2月の節分の日には父が何気なくテレビを見てみると、ある番組でゲストに出てきた男の人が「今年の節分は、もう地震という大きな鬼が来たから鬼は来んといてくれ！」と言ったそうだ。確かに、当時の節分の鬼は地震というあまりにも大きな敵を目の前にしたと思う。だからこそそんな強敵からの教訓は忘れずに次に生かすべきだと1人1人が気づくことが大切なのである。

◆これからのこと

私は以前、何気なくテレビを見ていた時に、長田の震災特集という特別番組をやっていたのを見た。当時長田で震災を経験した人がもう一度実際に長田を訪れてインタビューを受けていたが、私の目に留まったのはテレビに映し出される背景だった。震災後もう14年も経っているのにまだ家が復興あるいは処分できていないところがあったので衝撃的だった。そしてその人がまだ復興できていない長田の一部を見て「ここでたくさんの方が死んでいくのを私はただ見ていることしかできなかった・・・」と悔しそうに語っていた姿が私の脳裏に焼き付いている。やはりそれほどまで震災というのは恐ろしかったのだなあ・・・と私は改めて実感した。また、加古川のおばあちゃんから聞いた話では、震災の3日後に今の皇太子様が実際に神戸に来て被災者に頑張れのエールを送ったそうだ。通った場所の被災者と握手したり「私たちもついているので頑張ってくださいね」などの言葉をかけたりした。私はその情報は知らなかったが、皇太子様であれほかの人であれ、そのようなエールは必要だと思った。いくら被害がなかった地域から応援していると言っても、言葉やものを送るなどの反応がなければ被災者は、自分は孤独だと勘違いしてしまうからだ。

わかりにくい例を出してしまったが、このような点をふまえて私が言いたいことは、「過去を振り返って前へ進む」ということ。よく悲しいことがあった時は過去を振り返らずに前へ進むという言葉が聞くが、震災体験の教訓については、私は過去を振り返ることが大切だと思う。地震やその他の天災を学ぶのには過去の経験が絶対に必要であるからだ。私はこれからこのいろんな人から聞いた震災体験を生かして、人と人のつながりを今まで以上に大切にしていくとともに、震災を体験していない人に機会があれば私が知っている震災体験をできるだけ語り継いでいきたいと思った。これからの次世代に語り継がないで後悔だけはしたくない。死者がどんどん増えるときは震え上がるほど怖かったことや父や母や

周りの人がその時どんな思いだったかなど、次世代の人にどう話せばうまく伝えることができるかを考えていきたい。また、ボランティアや日常の生活も、これで良いと上限を低くしてしまわず、奇跡的に助かった弟の命の重さも大切に毎日を送ってほしい。

震災の記憶

神戸市垂水区舞子坂
宮田 遼平

地震が起こる前

地震が起こったとき僕は9階建てくらいのマンションに住んでいた。きっと僕や家族が寝ていた場所の周りには大きなタンスや机や鏡台など、倒れてきたら大変なことになるような家具がたくさんあった。家具の固定をしていなかったのだから、僕が住んでいる地域の揺れが大きかったらきっと危なかっただろうと思う。

地震が起こる前は、僕の家では神戸に地震が起こるといことも全く考えていなかったから、地震が来たときの対策など全くしていなかった。僕はその時はまだ3才で、地震が来たことや当時の状況などほとんど何も覚えていない。聞いた話によると地震が起こる前日に空の色がおかしかったり、夜には月の色がおかしかったりと、地震の前触れのようなこともあったそうだ。

地震発生

僕は、地震が起こった時のことをほとんど何も覚えていない。きっと家族は戸惑っただろうと思う。僕が何も覚えていないというのは、きっと親が僕を不安な気持ちにさせないようにと何事もなかったかのように接してくれて、僕にとってはいつものように起きていつも通りの生活ができていたからだと思う。しかし実際は、家具も倒れてしまってテレビはついていて水道やガスなどのライフラインは完璧に止まってしまっていた。僕の家族はきっと神戸には地震なんてこない、大丈夫だと根拠もなく安心しきっているという危ない家族だったため、助かったことは本当に奇跡だと思う。阪神・淡路大震災が発生したときはマンションに住んでおり、地震が発生した朝にベランダから外を眺めたがいつものように車が走っていて、家の前にあった自動車の整備工場の人たちもいつものように仕事をしていて、毎日眺めていた風景があったことだけを唯一覚えている。僕が住んでいた地域は揺れも小さく、被害もあまり大きくなかったことがよかったと思う。

地震発生後

ここからは親に聞いた話になる。まず電気、水道、ガスが全て止まってしまっていた。電気はすぐに復旧したが、水道やガスが使えずに不便な生活を送っていた。水は近くに井戸水を汲むことができる場所があり、並んでもらっていた。電話も使えなくて困ったそうだ。ちょうど震災が起こったとき、母の高校時代の同級生が妊娠していて、いつ生まれてもおかしくない時期まで来ているときに震災が来てしまった。母は大丈夫なのか心配になって何度も電話をしたがつながるわけもなく、結局連絡が取れたのは地震が発生してから二日がたってからだったそうだ。母の友達は震災が来たときは新長田に住んでいて、地面が割れていて歩けないような道もたくさんあったそうだ。そんな道を歩いて親戚の家に行きそこでようやくライフラインを使うことができたそうだ。

地震が収まったあと、神戸の町並みは大きく変わってしまった。建物が崩れていたり、高速道路が横倒しになっていたり、地面が割れていたり。見た目だけではなく、幼稚園や小学校もしばらく休みになってしまったし、仕事をしている人も道路が混雑したり、少なからず影響は受けていた。被害が大きかった地域では長い間ライフラインも使えなかったり、食料に困ったりしばらくの間風呂にも入れなかったり。少しの間は不便な生活をするしかなかった。

復旧・復興

何日か経つと少しずつライフラインが使えるようになったそうだ。ライフラインが使えないと風呂にも入れないしいつも通りの生活ができなくなる。すごく不便だったと思う。どれだけ普通の生活があるがたいものなのかということを実感することができたと思う。

当時、震災が起こった神戸にある球団オリックス・ブルーウェーブが神戸を元気付けようと「がんば

ろうKOBE」をスローガンにしてその年に優勝した。オリックスの快進撃に励まされた人はたくさんいると思う。実際僕の家族も励まされた。震災を乗り越えることができたのは、オリックス・ブルーウェーブの存在はすごく大きかったと思う。実際に僕の家族も野球が好きだったから、すごく励まされたしオリックスの優勝に力ももらった。みんなで協力し、一丸となってがんばれば苦しいことにも打ち勝つことができるということをプレーで示してくれたと思う。先が見えない生活を送っている人がたくさんいる中、そんな人たちを元気付けてくれたと思う。僕が大人になったらこんな風にたくさんの人を元気付けてあげることができればいいと思う。

これからの防災対策

自分の家は防災対策を全くしていなかった。その必要性を理解している人が家族にはいない。だから今思うことは、自分から防災対策の大切さや地震が本当に恐ろしいということを家族に伝えなければならぬと思う。僕が小学校、中学校のときは毎年1月17日には震災のときの映像を見たり、避難訓練を行ったりという震災に関連した行事がたくさんあった。僕より下の学年になる子達は震災についてほとんど何も覚えていないと思う。僕が覚えていないのだから、なかなか覚えている子はいないと思う。だから、小さいときからの防災教育というのが本当に大切なんだと今になって思う。僕が今思うのは、小学校や中学校のときに震災の映像を見ると衝撃的で頭から離れないと思う。実際僕は今でも小学校のときに初めてみた震災の映像を今でも覚えている。防災教育は小さいときから行っておくということが重要だと思う。小学生くらいの小さな子供は、学校であった出来事や学んだことを親に話すことができると思う。そこで、親に防災の授業でこういうことを学んだということを話せば親も学ぶことができるし、そうしてたくさんの人が防災に対する意識を持つようになると思う。だから将来は僕が子供たちに地震の恐ろしさを伝えていくことができればいいと思う。

今テレビで見て

僕は震災の記憶がなく、当時の状況を知る方法はテレビで見るしかない。今テレビで震災の映像を見ると本当に恐ろしい。もし自分が・・・と考えると自分は恵まれていると改めて感じる。自分がテレビで見る映像と実際では大きく違ってくるはずだ。テレビで映しているのはほんの一部分だけで、実際の状況を知る人はこれからどんどん減っていってしまう。テレビでは報道できないような残酷なことや悲しいこと、恐ろしいことはもっとたくさんあるはずだ。自分が今見ることができる映像でも十分恐ろしいし悲しくなる。仮設住宅が立ち並び、水や食料をもらうためにすごい列を作って並び、家が燃えて建物が倒れて、高速道路が落ちて地面も割れて道路も混雑して電気もまともに使えない。そんなことがあったということを、僕たち以上に震災を知らない人たちに震災を伝えていく必要がある。震災を忘れてはいけない。そのためにも僕たちはもっと学ぶ必要がある。できるだけたくさんを知って、少しでも多くの人に知ってもらいたい。

ルミナリエ

今神戸に住んでいて、ルミナリエを知らない人はいないと思う。ルミナリエには、都市の復興や再生への希望が託されている。ルミナリエはこれから続けていけるかがわからないという状況にある。ルミナリエは、これから震災を忘れないためにも必要だと思う。僕も毎年のように行っている。ルミナリエはただ綺麗なだけではない。意味があって行われている。しかし、本当の意味を知ってあの光を見る人が少ないのかもしれない本当の意味を知っている人はどれくらいいるのだろうか。もしルミナリエが行われる意味を本当にみんなが理解しているのなら、いつも行われているルミナリエの募金も集まると思うし、ルミナリエをこれからも続けていくことができると思う。僕は、あのルミナリエの光をただ綺麗な光として見ないでほしいと思う。見るからには本当の意味を知ってほしいと思う。きっと本当の意味を知らない人がルミナリエの光を見るのと、本当の意味を知ってルミナリエの光を見るのとでは大きく違ってくると思う。毎年ルミナリエが始まると、震災があった日が近づいているなという気になる。このようにして震災を忘れないことが大切だと思う。

震災を振り返ると

震災前には当たり前のようにあった水道、電気、ガス、食料、家など何の不自由もなく毎日をすごすことができていた。そんな当たり前のような生活に慣れてしまい、大きな地震が起こったときには当然困るし、わずか何十秒という時間で全てが奪われてしまう。だから、今の生活を当たり前と考えるのではなく、毎日こうやって今まで通りの不自由のない生活に感謝をして過ごすことができれば自然と備えはできると思う。

震災から学んだことはすごく多いと思う。兵庫県南部地震による被害でもっとも多かったのは家具の転倒による圧死だ。死亡者の八割が圧死だったという。地震が起こったとき、普段便利なタンスや本棚も全て凶器となってしまふ。家具の転倒による被害を最小限に食い止めるには家具の固定をすることだ。タンスや本棚を止めるのは天井とタンスなどの間に突っ張り棒を置いたり、タンスの下にジェル状の物を置いてできるだけ揺れないようにする方法などがある。テレビやパソコンはできるだけ低い位置に置くようにするだけでも対策になる。最近では、窓ガラスが飛び散るのを防ぐためのシートができていて、そのシートを窓ガラスに張り付けることで地震が大きな起こってもガラスが飛び散らないようになる。このような防災対策が大切になる。

その他にも教訓として、人と人との繋がりや、関わり合いが大切ということもわかった。普段から近所付き合いを大切にしなければならない。地震が起こって家が倒れてしまつてがれきに埋もれて救出されていないとき、安否の確認ができないということもある。救出活動をするときにも関わり合いは大切になる。最近、近所の人の顔と名前が一致しないというのも珍しくない。しかしそれを当り前にしてはいけないと思う。いざというときに助からない可能性もある。地震が来たときに、近所付き合いは大きな力になると思う。

そして、非常持ち出し袋の準備も大切だ。普段から何日分かの食糧や水を準備しておくこと、懐中電灯やラジオや電池など、情報を得るための道具や、手や足を怪我しないように軍手とスリッパを用意しておく。慣れないと少し動きにくいかもしれないけど、スリッパは普段から家の中で履く習慣をつけておくことが大切だ。

このように、震災から学んだことはたくさんある。このような教訓を生かすことが、これからの大きな地震に対する備えにもなり、自分の命を助ける可能性を少しでも上げることができる方法だと思う。日頃の生活が大切になってくる。

環境防災科に入って

僕が環境防災科に入ったのは、環境に興味があったから、防災に興味があったから、というような理由ではなく、ただ舞子高校に入りたくて環境防災科を受けたという理由だった。しかし実際入ってみると地震のメカニズムや環境のこと、自分が思っていた以上のことをたくさん学ぶことができる。そしてたくさんの外部講師の方が来てくださって、震災当時の話をたくさん聞くことができる。消防士の方や警察官の方やその他にも関西電力の方や自衛隊の方など、たくさんの方の体験談や話を聞くことができた。そこで初めて震災の詳しい部分、周りの人が知らないようなことをたくさん知ることができた。たくさん話を聞いていく中で初めて防災に興味を持つことができたし、普通科では知ることができないようなこともたくさん学ぶことができた。そして僕の中では震災を忘れてはいけない。僕たちが語り継いでいかないといけないという気持ちがより一層強まった。消防学校に行ったとき、環境防災科の卒業生の方に話を聞いた時だ。実際の消防の現場での出来事を話していただいたから一番印象に残っている。テレビで見る世界と実際現場で状況を見た世界では大きく違う。その両方を知ることが僕たちにはできる。だから、環境防災科で学んだ僕たちが知っていることを伝えていく必要がある。

震災はたくさんの人を殺し、憎いものだと思う人もいる。しかし環境防災科に入ることができたのは、震災があったから。そう考えると震災があったからこのクラスのメンバーにも出会えたし、よかったと思う。震災がよかったとは思わない。しかしマイナスの面ばかりではないと思う。考え方によってはプラスになることもある。震災から失ったものも多かったが、その反面得たものも大きいと思う。ここがいけなかった、もっとこうするべきだった、こうしていたらもっとたくさんの人を救うことができた、こういった後悔もたくさんあったと思う。しかし少し考え方を変わると、それはプラスに変わる。こうしていたらもっと人が助かった。逆にとらえるとこれからはもっとこうすれば人を助けることができるという考え方に変わる。こういった切り替えをうまくすることができれば、復旧や復興が早まるこ

ともつながると思うし、被災した方々の心の傷が癒えるのも早くなると思う。しかし、それを直接的に言うのではなく、被災者の方に気付いてもらうということが大切だ。それを直接言ってしまうのは、逆に被災者の方が悲しんでしまったり、傷付いてしまったりするかもしれない。だからうまくプラスに考えるということを知ってもらえるような話し方、接し方を考えていくのがいいと思う。そのためにはやはり、今までの考え方を改善していく必要がある。これから改善していくことができる点はたくさんあると思う。それを考えることが課題だと思う。

将来のこと

僕は将来この環境防災科で学んだこと、震災のことを自分が学校の先生になって自分の生徒達に伝えていきたいと思う。忘れてはいけない震災を、全く知らない子供たちに、地震の恐ろしさ、防災の大切さを教えていきたい。せっかく環境防災科で大切なことを学んだのだから、少しでも多くのことをたくさんの人に伝えていくことができればいいと思う。そして、もしまた神戸に大きな災害が来たとき、周りの人達の先頭に立って少しでも人を助けたり、周りの人の役に立つことができればいいと思う。もし教師になることができたなら、人と接することが多くなる。だから、大きな災害が起こったとき辛い思いをしている人や悲しい思いをしている人の話し相手になったり、自分が住んでいる場所と違う地域で災害が起こったときには被災地の方たちの役に立てるような行動をしていきたいと思う。環境防災科に入ってから正直言うとボランティアや防災に関するイベントにはあまり参加することができなかった。だから少し後悔している部分もある。しかし、環境防災科に入ってから授業ではたくさんのお話を学ぶことができた。今まで知らなかったようなこと、これから実践していくことができること、将来に役立てることができるような情報をたくさん知ることができた。だから今まで学んだことを最大限に活用してこれから生活を送ってきたい。

「語り継ぐ」を書いて

僕たちの年代は、震災を覚えていない人も少なくはない。僕も覚えていない。だから始めは書くのは難しいと思っていた。しかし書いていて感じたことは、震災を経験していない世代でも、調べたり話を聞いたりすると当時の様子や雰囲気がなんとなくわかるような気がする。しかしそれはあくまでそんな気がするだけでわかっているわけではない。だから、これから震災を知らない人たちは少しでもたくさん話を聞いたり調べたりして震災を知ることが大切だ。そして、少しでも当時の様子や雰囲気を知り、それをより実際に近づけていくことが大切だ。地震の被害は場所によって違う。つまり、当時の人たちが目にしたもの、感じたことも人によって違ってくるわけだ。だから、できるだけたくさんのお話を聞くことでたくさんのお話を知ることができる。これからは、震災のことを知らないからこそ、震災のことをよく知り防災に対する意識を高めていくことがこれから必要になり、そしてそれが地域の防災力の向上に繋がっていく。

これからの街

写真で見ると長田の街は無残にも焼き焦げて、どうしたらいいのだろうかという状態になりそうな写真ばかりだ。しかし今の長田の街は復興していて震災があったとは思えないくらいきれいな街になっている。前向きに進むことができたから、今の長田の街があるのだと思う。震災は辛かったと思う。たくさんのお話が悲しんだと思う。しかしそこから進むことが大切だと思う。進みながらも、震災を風化させないことが僕たちの役目だと思う。

阪神・淡路大震災の体験

兵庫県神戸市西区
村上 智哉

<震災前夜>

兵庫県南部地震が起きる日の前は、家族で食事にいった。いつもと変わらない日だった。晩ご飯をたべて帰ってきて、お風呂に入り、10時には就寝していた。あんな大きな地震が神戸に来ることは予測していなかった。後からだがテレビや新聞では、雲がおかしかったり、動物が吠えたりしていたそうだ。僕の家には、ハムスターを飼っていた。母がそういえば、いつもとちがひ活発に動いていたといていた。それが地震と関係あるのかどうかは、知らないそうだ。いつか地震を予知、予測できる時が来てほしいと思う。そうすれば、多くの人が亡くならないですむ。被害を最小限に抑えることができると思う。

<地震直後>

当時僕が住んでいたのは、兵庫県神戸市西区だった。この地域では被害が少なかった。阪神・淡路大震災がおきた当時僕は、父親と一緒に寝ていたことを覚えている。地震が起きた5時46分、とても大きな揺れで目が覚めた。地震はとても長く感じた。実際は揺れている時間は短かったと思う。父にしがみついていた。今まで体験したことのない揺れだった。本立ての本が全部おち、戸棚にしまっていたお皿が全部落ちて割れ、とても大きなテレビですら、落ちそうになっていた。あの瞬間は今でも鮮明にその状況を覚えている。一瞬なにが起きたのかわからなかった。小さい時の記憶はあまり覚えていないのに、このことをしっかりと覚えていることはよほどのことだったのだと今では思う。

地震がおさまったあと、家族みんなとても張りつめた空気が流れていた。けれど、小さい僕にはただ親をみていることしかできなかった。電気をつけようとしたが、電気はつかなかった。暗いところで時間だけが流れて行った。だんだんとあたりが明るくなってきた。それと同時に家じゅうが、めちゃめちゃになっていて、泣き出していた。何が起きているのかわからなかった。普段の家の様子と明らかに違った。見たことのない光景だった。

<地震があった朝>

辺りがだんだんと明るくなってきた。親が電気をつけようとしたが、つかなかった。地震による影響で電気がつかなくなっていた。電気がつかなかったが辺りが明るくなってきたのでその時は、周りが見えよかったそうだ。家中、食器棚から多くのお皿が落ちわれ、割れた破片が散らばっていた。掃除機をだし割れた破片を片付けようとした。しかし、地震の影響で電気が使えなくなっていた。掃除機が使えなかった。子供が、割れた破片でけがしないかと、不安だったのでガムテープを使いできるだけ、ガラスの破片をかたづけた。そのときの写真をとっておいたそうだ。当時の写真をみたが、お皿がたくさん割れていた。地震のこわさが伝わってきた。われたお皿が多かったので、どこにおこうか考えたそうだ。最終的にベランダに置いた。

ガラスの破片を片付け、祖母に無事だということを電話で伝えた。早く電話してよかったそうだ。それからは、電話はつかえなかった。祖母は、千葉に住んでいる。千葉のほうでは、阪神・淡路大震災は速報でながれていた。大丈夫だという電話があつて本当によかったという。

救急車や消防車の音が、30分ぐらいつと聞こえていた。それからは、音は聞こえなかったという。救急車や消防車が全部、被害が大きな地域へ行ったことがわかった。

しばらくして少しの間電気がついたそうだ。このことが、長田の火災につながったのではないかと、母は言う。それからは電気がつかなく、不便な生活が続いた。水は、最初のほうは、マンションだったので貯水タンクにたまってある水で、一時間は水が出ていた。それからは水が出なかった。地震の影響により、生活のライフラインがストップした。水が出ていた時に水をためていたらよかったと母は言っていた。ガスは、完全に止まっていた。生活に必要なライフラインがストップすると生活がしづらかったそうだ。生活に必要な水が一番大切で一番必要だと言っていた。トイレの水、飲み水と水は生活する

上でとても重要な役割を果たしている。それがストップすることはとても厳しいことだ。幸いトイレの水は、お風呂の残り湯で何とかあった。しかし飲み水がなくとても大変だったそうだ。あまり動かないようにしていたそうだ。給水車がきたのは二日後だった。早く来てくれないのかと待っていた。来てくれた時はうれしかったと言う。この様な話を聞くと、お年寄りの方々はどうしていたのかと思う。給水車が来て水も運ばない人々はどうしたのかと思う。家からでられない人はどうしたのかと思う。地震は目では見えないところから、人々は追い込んでいくように思えた。

食べ物などはちかくの大きなお店がありそこで買えたそうだ。電気はつかなく、いつもと違うお店の雰囲気だったが、物は買えた。僕はこのあたりの記憶がないが、当時僕は小さかったので親にとっても迷惑をかけたと思う。買い物に行くときも僕と弟をつれて行ったそうだ。あの頃はまだ小さく、ずっと見ておかないと不安だったそうだ。

<地震があったお昼>

地震があったお昼は、水がなくて困っていた。ご飯は、カップラーメンがあったが、水、ガスが使えないため食べられなかった。ご飯は炊いてあったのでおにぎりにして食べた。洗い物が出ないようにした。水がでないため、洗い物が出て洗えない。洗い物をほっておくと、菌が増え衛生状態が悪くなる。だから、あまり洗い物をだしたくなかった。洗い物がたまって行くのではないかと感じた。だから、あまり洗い物が出ないようにしようとしていた。

ごはんを食べた後は、あまりうごかないようにしていた。動けば、おなかは減るしのが渴くなど地震により、生活が制限されていた。だから、あまり動かないようにした。外に出ようとしたが、家の片付けがあったから、外には行けなかった。

テレビをつけようとしたが、電気はつかなかった。外の情報が聞けないことは困ったことだ。このとき、ラジオがあったらよかったと話す。

<地震があった夜>

地震があった夜は、余震が続いていてなかなか眠れなかったそうだ。これからどうするか、考えていた。いつもと家の様子がことなつたことに、大丈夫なのか、また大きな地震がくるのではないかと考えると、なかなか寝られなかったそうだ。当時小さかった僕は、すぐに寝ていた。けれど、余震がおこると目をさまし、母をよんでいた。いつまた、地震が来るのではないかと、余震が来るたびに思った。明日は無事に生きていけるよう祈る思いだった。

<二日目の朝>

地震から、二日目。余震はまだ続いていた。また、大きな地震が来るのではないかと、ゆれるたびに思ったそうだ。僕が住んでいた西区は、地震の被害は少なかったが、精神的なダメージは大きかった。一番精神的に困ったのが、トイレだ。食べたり飲んだりするとトイレを使わなくなるというのが一番しんどかった。

食べるもの、飲むものを制限した。トイレを使うと流さないといけないのは大変だった。流す水を運ぶのは重いし、流す水の量は多いので、すぐに水をいれないという日が何日つづくのかと考えただけで、いやになった。お風呂も入れなかった。毎日の当たり前に入っていたお風呂がはいれないのは大変だったそうだ。お風呂に入れれないのはよいが、子供が皮膚あれたり、病気になったりしないかと考えていた。だからできるだけ、ぬれたタオルなのでしっかりとふいてあげた。毎日の生活の流れが変わるのはとてもストレスになる。だけど、もっと大変な人がいる。だから、がんばれたという。

食べ物もたべたらなくなる。毎日買いにいかないといけないそうだった。それだけならいいが、家の片付けなど、普段しないことがあれもこれもと、仕事に追われた。

祖母の家に行こうかと二日目から考えたそうだ。祖母の家に行き直ったころぐらいに帰ってこようかと考えた。しかし、地震の影響により大阪まで行かないと新幹線にのれないと知ったので、いくことはできなかった。

洗濯物もたまってきた。けれど水があまりないので、洗濯物を洗えなかった。洗濯物は、どんどんたまっていった。

語り継ぐ6

<二日目のお昼>

二日目のお昼に、近くのお店に買い物にいった。店内の様子は電気がつかず、いつもと違う様子のお店になっていた。生活に必要なものを買えたことは、とてもよかった。多くの人がお店にきていた。地震の影響で水が使えなくなったので、水はなくなりそうになっていた。食べ物もなくなりそうになっていた。

普段、食べ物は不自由なくご飯を食べている。このことは、とても幸せなことだと思う。毎日ごはんを食べるにあたって感謝しないといけないと思う。

<二日目の夜>

二日目の夜のごはんは、レトルトカレーだった。水はガスコンロとガスボンベがあったので、水を沸騰させることができた。それで、レトルト食品を温めた。生活の中では、水が一番必要だと思うが次に、火だと思う。カップラーメンや、レトルト食品、ご飯を炊くのも火が必要となった。電気が使えないため、火が使えたのは良かったと話す。食べ物の冷凍食品は電気が使えなくなって全部だめになった。

いつライフラインが回復できるかの不安だった。このまま、不自由な生活が続くのかと考えたらいやになりそうだった。明日どうするか、考えていた。これから先どうやって過ごしていくのか、もしまた災害が起きたらと、不安だった。一日もはやくもとの生活にも戻らないのかと考えた。明日の朝、何をするのかと考えた。

<幼稚園>

地震により、幼稚園に多くのひびが入っていることを覚えている。幼稚園に大きな山があった。よくそれをのぼり遊んでいたことを覚えている。その山が地震により大きな亀裂が入っていたことを今でも覚えている。あの頃は、なぜ大きな亀裂が入っているのかからなかった。そのせいで、山で遊べなかった。地震のせいで山で遊べなくなったので地震は、いやなものだと思った。幼稚園の校舎でも、いろんな所に亀裂が見られた。その時は何にも思わなかったが、地震は恐ろしいものだと思ってしまう。大きなピアノが違う場所に動いていた。机も違うところに動いていたようだ。僕が、幼稚園を卒園する時も震災の傷あとが残っていた。

<地震から少し経って>

地震から少し経って、ある程度落ち着きだした。しかし、水と電気、ガスなどのライフラインは復旧されなかった。普段当たり前に出る水、ボタンを押せば、電気がつく。普段当たり前に使っているものの大切さに、改めて気付かされた。地震は一瞬にして人の生活を壊すとても恐ろしいものだと思う。僕が住んでいたのは伊川谷高校の近くで、そこに給水車がきて、水をもらったそうだ。水は毎日必要なので、家まで運んで往復していた。水は思ったよりも重く一回では運べないので何回も行っていた。父は仕事にいらっていて、母が水を運んでいた。とても大変だったと思う。マンションの五階に住んでおり、エレベーターは地震の影響で使えなかったため水を運びながら、階段を上がっていた。お風呂やトイレにはたくさんの水が必要とした。そのためお風呂は、なかなか入れなかった。いつもお風呂には入れるのか、不安だった。毎日当たり前に入っていたお風呂が震災によって入れなくなった。普段と違う生活は疲れる。

マンションの中でも水が出るところと、出ないところにわかれるそうだ。出る家庭はいいのだが、でない家庭は、しんどい。マンションのなかでもそうなることを話していた。僕のすんでいたマンションもそうだった。僕のすんでいた五階の階は水が出なかった。いつなおるのか、はやくなおしてほしいのに、人出が足りなく、なかなか修理できなかったそうだ。何であそこは階の人は水が出ているのに、この階は水がでないのだという、怒りの声もすくなくあつた。早くなおしてほしいと皆思っていた。

<ライフラインの復旧>

水が出た。そのときはとても言葉にできないほどのうれしさがあった。水が出たときは、いろんなことを考えた。トイレやお風呂、生活用水が使えると考えただけで、うれしい。水を運ばなくていいことは、お年寄りの人にとってもうれしいことだと思う。僕の家は早めに水、ライフラインが復旧したので、友達がお風呂に入りに来ていたこと覚えている。友達と夜会えることはとてもうれしく、毎日とは違い何かわくわくした。ご飯も一緒になって食べた。そのときの話は、ライフラインのことだった。どこの家もライフラインが途絶えると、しんどい思いをするなということ話を話していた。その友達の家はなかなかライフラインの復旧ができなかったもので、よくきていた。助け合いがここにあったと思う。誰かが困っていたら助けないといけない。助け合うことは、人として必要なものだと思う。

そのうち、よくお風呂に入りに来ていた友達の家も水が出るようになった。それからは、来なくなった。

<小・中・高>

小学校に行った時も、地震により校舎にひびがいていた。小学校の時、「しあわせ運べるように」という歌をよく歌った。小学校の時は、あまり歌詞の内容については考えなかった。なぜ1月になると歌うのかもわからなかった。「しあわせ運べるように」という歌を歌うと、悲しくなったのを覚えている。小学校の時、いつも聞き、歌った。今、その歌を聞くとその歌に聞き入ってしまう。小学校には、阪神・淡路大震災の時の写真を見る時間があった。現実の世界と違う写真だった。小学校のプールの下がものすごく、亀裂が入っている写真があった。地震の強さを物語っていた。今ではきれいになおされているが、僕が泳いでいるときプールの下をのぞいたら、ものすごい亀裂があった。なぜ、あんな亀裂があるのだろうと想像していた。あれは、阪神・淡路大震災によるものだと写真をみてわかった。あと、学校には違う県からの手紙が数多く来ていた。どの手紙もがんばってという手紙だった。数多くの手紙を見て、違う県なのに、気にしてくれていることがわかった。この時、阪神・淡路大震災の被害の大きさがわかった。

中学校の時も、「しあわせ運べるように」という歌を歌った。中学校では、歌詞の意味などわかったが、阪神・淡路大震災のことについて深く考えたことがなかった。阪神・淡路大震災は今では、自分の中でとても大きなものになっている。

高校では、阪神・淡路大震災の行事が多い。1月17日になると、阪神・淡路大震災の行事がある。この行事はずっとなくなるほしくない。震災の知らない子供たちに、知って考えてもらいたい。地震は忘れたときにやってくる。大きな地震が来ても一人も犠牲者を出さない手助けとなる行事にしたい。

<将来の夢>

僕の将来の夢は、地方公務員だ。このきっかけは阪神・淡路大震災だ。阪神・淡路大震災がなければ環境防災科という科はできていなかったと思う。地方公務員という夢もなかったと思う。僕は、地方公務員になり、地域の防災力を向上して大きな災害がきても、被害が出ないまちをつくりたいと思う。地域の防災力が災害を上回れば、被害はでない。しかし地域の防災力を災害を上回れば被害になりうる。だから地域の防災力を向上したいと思う。

対応力も向上したいと思う。災害が起きると物資が足りなくなる。食べ物や毛布など。災害直後に重要となってくる。このとき重要なのは、仕分けしやすいように物資を送ることだ。仕分けする側のことも考えなくてはならない。しかし、日にちがたつにつれ、災害に必要なものが変わってくる。災害直後は、食べ物や水、生活用品などが必要とされるが復旧・復興されてくると、あまり必要にならなくなる。物資よりもお金が必要となる。災害から日にちがたつにつれ、必要なものがかわってくるのを物資をただ送るだけでなく考えて送らないといけないと思う。このようなことを、わかりやすく伝えることができればいいと思う。

<阪神・淡路大震災を振り返って>

阪神・淡路大震災から、14年がたった。14年前の記憶は、あまり覚えていない。しかし、阪神・淡路大震災の記憶は今でも覚えている。地震が起きたあの時、僕の中のなにかが変わったと思う。阪神・淡路大震災は、多くの犠牲者を出した。その犠牲者のためにも毎日をしっかり生きていかないとと思う。

語り継ぐ6

環境防災科に入り、改めて阪神・淡路大震災を考えた。この震災の教訓を日本全国、世界へ伝え、一人でも多くの方が助かってもらう手出すけになってもらいたい。阪神・淡路大震災は、命の大切さを伝えた。命を大切にすることは、家を耐震に地震から身を守ることでも命を大切にすることだと思う。震災により、多くの建物がつぶれた。しっかりと耐震すれば倒れなかったと思う。犠牲者も減ったと思う。阪神・淡路大震災の地震は、二階建ての建物がつぶれ、一階に寝ていた老人が圧死で死ぬことが多かったそう。老人は二階まであがる体力がないので多くの老人は一階に寝ていたからだ。結果的に多くの方が亡くなってしまった。

阪神・淡路大震災を風化させないためにも、伝えていかないといけないと思う。大きな地震や災害に見舞われても、一人でも多くのひとを助ける助けになってもらいたい。阪神・淡路大震災のことを知らない子供たちに教えていけたらと思う。

これからの自分

大阪市東淀川区
山下 大樹

【はじめに】

今回、語り継ぐを書くにあたって、当時まだ3歳で記憶が曖昧なこと、そして大阪に住んでいて被災していないこともあり、体験した話をあまり書けないので、今環境防災科で学んでいることをこれから将来にどういかしていけるかなどを書いていきたいと思う。

【当時のこと】

僕は、1995年1月17日の阪神・淡路大震災が起こった日は、まだ大阪に住んでいた。まだ3歳だったこともあり、正直当時のことはほとんど記憶にない。なので、母から聞いた当時のことを書きたいと思う。

5時46分、激しい揺れで両親は目を覚ましたらしい。両親が、慌てて外に出て行ったことだけがすかさに記憶に残っている。僕の家族や周りの人たちに大きな被害はなかった。しかし父は神戸に会社があったので、すぐに神戸に向かったらしい。テレビからの情報で車は通れないと判断し、原付バイクで行ったと聞いた。幸い会社も大きな被害はなく、その日に父は帰って来た。祖母が豊中市に一人で暮らしていたので心配だったので家族で祖母の家に行った。祖母の家も大きな被害はなくみんなでご飯を食べたようだ。

僕は、周りに大きな被害を受けた人もいなかったし、自分の家族も被害を受けていない。なので僕は、阪神・淡路大震災を全く経験していないのだ。だから、地震は怖いと思うけれど、それは後に震災について学んだからであり、実際の地震そのものの怖さはわからないのである。

【舞子高校環境防災科に入って学んだこと】

僕が、環境防災科のことを知ったのは、中学2年の頃だと思う。消防士になりたいと先生に話すと環境防災科のパンフレットを見せてくれた。そこには、消防学校体験入校や外部講師として消防の方の話を聞けるなど書いており、消防士になりたい僕にとってはすごい魅力的だった。それは、座学だけではなく実際に消防学校などに行き体を動かし体験する授業も多いからだ。

舞子高校環境防災科に合格し、3年になった今まで様々な授業を受けた。消防・警察・自衛隊・電力会社・水道局・ガス会社・地震の専門家などの外部講師の方に来ていただき震災当時の状況や何をしていたのかなど詳しく話を聞くことができた。近隣の小学校に僕たちが行き防災の授業をしたり、小学生が舞子高校に来てハザードマップを作ったりもした。校外の活動では、人と防災未来センター・長田のまち歩き・六甲山フィールドワーク・野島断層保存館・消防学校体験入校・広域防災センター・E-Defenseなどに行き震災について自分の目で見て体で感じながら学んだ。

人と防災未来センターでは、阪神・淡路大震災の当時の写真を見たり、語り部の方に震災を経験した話をしていただいた。実際に阪神・淡路大震災と同じ揺れを体感した。実際の写真を自分の目で見ることは、非常に大切なことだと思った。

長田のまち歩きでは、阪神・淡路大震災で大きな被害を受けた長田に実際に行き、商店街のお店の人に当時の話を直接聞いた。長田は壊滅的な被害を受けたが、今はもうその面影はなかった。長田は復興をしたのだ。長田のまち歩きをして、ただ話を聞いて帰ってくるのでは意味がないので、みんなでお好み焼きを食べに行った。被災地に行ってお金を使ってくるということは、非常に大事なことだとこの時に学んだ。

野島断層保存館では、阪神・淡路大震災の原因となった断層を見た。実物は、とても大きく想像とは全然違うものだった。この断層があればほどの死者、被害をだしたことを考えると、自然の力は計り知れなく、恐ろしいものだと思った。

広域防災センターでは、実際の地震の揺れを体感した。安全が確保されていて、揺れることがわかっていても怖かったので、家や外で普段の生活をしていきなりあんな揺れが起こると考えると恐ろし

語り継ぐ6

い。

E-Defenseでは、建物をわざとに揺らして崩して、どういう壊れ方をするかやどんな被害がでるのかなどの実験をしているらしい。

夏休みには、石川県能登半島にボランティアに行った。仮設住宅の方と茶話会をしてみんなで作ったお菓子と手紙を渡して、地震のこと、地震にまったく関係のない世間話を話したりした。小学生と地震のことをお互いに話をして、地震から命を守るにはどうしたらいいかなど防災の授業をした。その後は、サッカーをして小学生と遊んで交流をした。小学生に「来年もきてね」と言われて本当にうれしかった。石川の高校生とも交流をした。グループディスカッションでは、舞子高校の生徒と石川の高校の生徒が同じグループになり、災害が起こったとき、自分たちに何ができるかなどの議題で話し合いをした。いろいろな意見や考えを聞くことができた。僕は、先輩に半ば強引にリーダーをさせられた。しかし、それがとてもいい経験となった。いつもクラスの前でしか発表をしていなかったのでもと新鮮で緊張したが、石川の高校の生徒の前で代表で発表をして自信がついた。いろんな人と交流することやいろんな方の意見を聞くことは大事なことだと思った。最初は「石川に行ってボランティアをする」という気持ちで行ったが、帰る時には僕たちがよくしてもらってお世話になった気がする。「遠いところから来てくれてありがとう」などたくさんのありがとうをもらった。それが本当にうれしくて、参加してよかったと思った。

このように自分でその場所に行き、自分の目でみて、自分の体で感じることは防災を学ぶうえで、とても大切なことだと思う。

最初はなぜ14年も前のことをこんなに詳しく学ぶのかわからなかった。起きてしまったことは、仕方ないじゃないか。そう思っていた。しかし、諏訪先生や震災関係の専門の方の授業を受けているうちに、阪神・淡路大震災で経験した教訓を次に起こる地震や災害にいかしていかなければいけないと思うようになった。

日本では世界で起こる地震の約20%が起こると言われている。なので間違いなく、今日、明日、1ヶ月後、1年後、10年後いつ起こるか分からないが、日本で大きな地震が起こるのである。その時に、被災した神戸から発信していた教訓がいきて被災地の被害が少しでも減らせれば、阪神・淡路大震災で経験したことは、ダメなことばかりではないんだと考えられるようになると思う。僕は、環境防災科に入って考え方が大きく変わった。

阪神・淡路大震災ではかなりの被害があったが、そのときに学んだこともたくさんあることがわかった。日本全国からボランティアの方がたくさん神戸に来たと聞いた。日本だけでなく、世界からもたくさんボランティアが来たそうだ。震災までは、ボランティアという言葉は、あまり使われていなくて、震災の年にボランティアが広まったことから、1995年は「ボランティア元年」と言われている。

ボランティアの一つとして、救援物資を送ることがある。僕は、初めは被災して困っている人に送るんだから、古着でもいいし、服や食料を同じダンボールに入れて送っても問題ないだろうと思っていた。

しかし、被災地には膨大な量の救援物資がダンボールで送られてくる。送られてきた救援物資の仕分けをしたり、被災者へ配ったりするのは、すべて被災者なのである。それを小口のダンボールで中に服や食料が一緒に入っていたり、ダンボールに何が入っているのかなどを記入していないと、仕分けをするときにかなりの手間がかかることになってしまう。送った人は、善意の気持ちで送っているのだけれど、そこまで深く考えて送らないのでわからないのである。

古着を送るというのも、今の時代ではやめたほうがいいのである。家にある古着をいらないから送る人や、古着を善意で送っても、古着を着たいと思わないし被災地に送られた古着は、ほとんどゴミとなり保管するスペースに費用がかかったり、処分するのにお金がかかってしまう。その費用を負担するのも被災地なのである。

だから、小口で送るより大口で送るほうがよく、古着はできるだけ送らないほうが良い。一つのダンボールには、一種類のものしか入れない。ダンボールに何が入っているのかを書くこと。被災地の方の気持ちを考えて送ることが大切なのである。お金を送るのが一番いいと言われている。今、僕はこういったことを書いているけれど、環境防災科に入って学ぶまでは、何も知らなかったのである。

被災地に無償で自転車を送ったり、お茶わんを送ったり、お風呂に入れないので美容師が行ってボランティアで髪をきってあげたりする。このことを贈与経済という。被災してすぐは、ものがなくて困っ

ているので無償ですることはいいいことなのだが、ある程度復興しているのにもかかわらず、自転車を送ったり、お茶わんを送ったり、美容師が無償で髪をきってあげたりしてしまうと、被災者は無償でしてくれる方を選んでしまう。それによって、被災地の自転車が売れなくなったり、お茶碗が売れなくなったり、散髪屋さんのお客が減ってしまい、被災地の店がつぶれてしまうということがある。こういったように善意でしていることが、被災地の経済の復興に悪影響を与えてしまうこともある。なので、被災地にもものを送ったりする場合は、時期をよく考えて被災地の経済に悪影響を与えないように気をつけることが大切である。対案としては、物を集める、運営は地元の関係者で被災地でバザーをし被災地に収益をだすようにすることなどがある。

阪神・淡路大震災の死者の死因の88%が建物の倒壊、家具の倒壊である。死者の多くが1階部分が潰れたことによる圧死である。1階で亡くなっている人の割合が85.2%で、10%が焼死である。全体的な死者は、高齢者が53.2%と圧倒的に多い。女性、大学生も多かった。高齢者、女性の死者が多い理由としては、体力が弱いことである。特に高齢者は足が悪く、階段を上るのがしんどいので1階で寝ている人が多く、1階部分の倒壊により亡くなったと考えられる。大学生の死者が多かったのは、下宿をしていて安い木賃アパートで暮らさざるをえなかったためである。阪神・淡路大震災は、早朝の5時46分に起こったので就寝中の人が多かった。寝床の近くにタンスやテレビなどの家具を置いていて転倒して亡くなったり、家が倒壊し亡くなった人が多かった。

このことから、家の家具をしっかり固定することや、寝床の近くに大きな家具を置かないこと、家の耐震補強・免震をすることの大切さがわかると思う。いつ起こるか分からない地震などの災害に対して、前もって備えをしておくことが、自分や家族の命、財産を守ることにつながるのである。

もし、強い大きなハザード(災害を引き起こすかもしれない自然現象、地震、台風、火山の噴火など)が起こっても強い社会背景(インフラの整備、備え、貧困、福祉)と適切な災害対応(救出・救助、避難所、ライフラインの復旧、治安維持など)ができていれば、被害は減らすことが可能なのだ。地域で防災訓練などを行い、地域の防災意識を高めることも大切である。地域の防災力を高めるには、防災を国や県、市などの行政に任せるのではなく、一人ひとりが家具の固定や非常持ち出し袋などの備えをして地域の防災力を上げていかなければならない。

阪神・淡路大震災が起こるまでは、家具の固定や耐震補強などの備え、防災ができていなかったけれど、この地震で備えや防災をしておくことの重要さがわかったと思う。阪神・淡路大震災では、6000人以上もの人が亡くなっている。この時に、家具の固定や寝室に大きな家具を置いていなかったり、耐震補強などの備えや防災がされていれば、こんなに多くの死者がでなかったのではないかと思う。だから僕は、この震災の教訓を、環境防災科で学んだことを地域の方に伝えていき、今後起こるかもしれない災害に備えて、被害を少しでも小さくできるようにしたいと思う。

【ルミナリエ】

震災後にルミナリエができた。神戸の復興を象徴したイベントだと思う。毎年みんなの募金で行われているらしい。小学生の頃、家族で見に行きすぎい迫りに感動したのを覚えている。ルミナリエを見て感じることは、一人ひとり違うと思う。震災で家族を亡くした方は、そのことを思い出すだろう。ただ観光で来る人もたくさんいると思う。その人たちには、ただ観光して「きれいだった」「感動した」だけでは終わらせてほしくない。阪神・淡路大震災で6000人以上もの人が亡くなったこと、神戸で大きな地震があったことを少しでも思い出してほしい。そして阪神・淡路大震災を風化させないでほしい。あの日のことを忘れてしまうと、震災で学んだことや教訓が意味を持たなくなってしまう。そのためにもルミナリエをずっと存続させてほしい。

【これからの自分】

僕の夢は消防士になることだ。最初は、ドラマや漫画、消防の特集の番組をみて「カッコイイな」という単純な思いで消防士になりたいと思うようになった。しかし、環境防災科に入り阪神・淡路大震災での消防の活動を学んだり、消防学校や垂水消防署で実際に消防の訓練を体で体験して「こんな消防士になりたい」という具体的な思いが出てきた。

僕は、消防士になっても、環境防災科で学んだことを伝えていきたいと思う。若くて体力があるうち

語り継ぐ6

は、人命救助の第一線で働き、現場の仕事にでない日や年齢的に現場で働くことができなくなったら、幼稚園や小学校、中学校に行き震災を体験していなかったり、震災のことを全く知らない子供たちに、神戸でこんな大きな地震があったことや、たくさんの方が亡くなったこと、備えや防災をしていればこんなに被害がでなかったこと、震災で学んだことを伝えていきたいと思う。

これからの子供たちは、阪神・淡路大震災のことを知らないし、阪神・淡路大震災を経験した人もどんどん少なくなっていく。だから、阪神・淡路大震災を忘れないように、風化させないように環境防災科で学んだことや震災のことを子供たちに話していきたいと思う。ほかには、建物の火災設備や避難経路が確保されているかなどを確認し、できていなければ改善をしてもらい、みんなが安心・安全に暮らせるまちづくりをすることに役立っていきたい。

そして、防災の大切さを地域の方々に理解してもらい、「地震などの災害に強いまち」をつくっていくのに「地域の防災リーダーの消防士」として貢献していきたいと思う。防災の大切さや命の大切さを誰よりも理解し伝えていけるような、そんな消防士になりたい。

【さいごに】

僕たちは、阪神・淡路大震災を忘れてはいけないと思う。環境防災科で学んだことを伝えていき震災を風化させてはいけないと思う。記憶は薄れていくが、忘れてはいけない。それは、阪神・淡路大震災で経験したことが次に起こる災害の減災につながるからだ。経験や教訓をいかし、今後起こる災害に備えなければならない。震災のことを忘れかけている人や震災を経験していない子どもたちに、まず少しでも防災に興味を持ってもらうことが大切だと思う。その人たちが地震などの災害へ備えをするだけでも大きく地域が変わると思う。僕たち、環境防災科の生徒が地域の防災リーダーとして防災を進めていき、安全で地震などの自然災害に「強いまちづくり」をしていくことに加わっていくことで、地域が「防災力の強いまち」になればいいと思う。防災リーダーという大役を担うのは、無理だという人もいるだろう。その人は、家族や親せき、友達に世間話のひとつとして、防災の大切さ、準備の大切さを伝えてほしいと思う。最初は少しの人でも、防災が少しずつでも広まれば、地域全体の防災力が変わってくると思う。自分の地域では地震は起こらない、自分の家は大丈夫、そんな風に思っている人が少しで減ってくればいいと思う。そういったあまい考えが大きな被害を生むことを忘れないでほしい。

震災が残した傷跡と教訓

神戸市垂水区名谷
山田 恵士

～はじめに～

震災当時、僕はまだ3歳だった。だから震災当時のことはほとんど覚えていない、なのでこの「語り継ぐ」を書くことになった時は本当に僕なんかが書けるのかと思った。でも書くことを考えているうちに僕のようなあんまり震災と深くかかわっていない年齢の視点から見た「阪神・淡路大震災」を語り継いでいくのも何か意味がある気がしてきた。だからこの「語り継ぐ」を完成させて次の世代に語り継いでいきたいと思う。

～家族の話～

・震災当日

地震が発生する直前は母と弟と僕の三人同じ部屋で寝ていた。

1995年1月17日午前5時46分、兵庫県南部地震が発生した。地震の規模はとて大きくマグニチュードが7.3もあった。

地震が発生すると、みんなが同時に起き、その後も余震がつづいていたので机の下に隠れた。家族全員これだけ大きな地震を体験したことがなかったので両親もかなり戸惑っていた。

そして、余震が終わると、部屋を出て当時住んでいたマンションの駐車場に降りていった。すると周りの部屋の人たちも外に出ていた。

そのとき空からは、たくさんの黒い灰が降ってきていた。それが火事の灰であるとわかったのはしばらくたってからで、どこかで火災が起こっているのは知っていたが、神戸市全体があれだけ大きな被害にあっているというのを知ったのはもう少し後だ。

僕の住んでいたマンションは十二階建てで、二階三階の部分はひび割れがひどく、六階の僕の部屋は、足の踏み場もないほど物が散乱していて手をつけられる状態ではなかった。

それから近くに住む祖父母の安否を確かめるために、車で祖父母の家に向かった。

祖父母も僕たちのことを心配していたらしく、会ったときには無事を喜びあった。

震災当日の夜は近くの小学校に行ったが体育館は人であふれていたのも、グラウンドに行き車の中で一夜を過ごした。

・地震発生の次の日

次の日の朝にいったんマンションに帰って部屋の片づけをした。部屋の中の物は何一つとして元の位置にはなく、初めての経験に不安と驚きの中割れた食器などを片付けた。そしてマンション全体の電気と水道が止まっていて、そのことにも驚いた。

しかし僕の家族はこの日から父の会社が用意してくれた網干にある家に秋くらいまで住むことになったのでほとんど生活に支障が出ることはなかった。

・震災の復旧

この阪神・淡路大震災は死者6,434名、行方不明者3名、負傷者（重傷者、軽傷者合わせて）40,092名と多くの人が被害を受けた。そのため復興するのにも相当な時間がかかったらしい。

僕の家族は網干に避難していたのでどれくらいの間水や電気が止まっていたのかは知らないのも、祖父母の話聞いた。

祖父母の家は福田にあったので僕の住んでいたマンションとは近かったのも同じような状況だった、水は3日後くらいには復旧したそうで、復旧するまでの間は公園の水道を利用したそうだ。

電気も2、3日で復旧しているところがほとんどだったそうだ。

語り継ぐ6

ガスは1ヶ月近く復旧にかかったそうで、その間は区役所でガスコンロを配っていたらしく、配られていたという情報がほとんど回らなかったそうで、一部の人にしか渡らなかったようだ。

～本を読んで調べたこと～

・ボランティアの実態

地震が発生し、家が倒壊し、燃え上がり、人々が近くの学校や公園に避難してきたとき、大混乱は始まった。

市や県の計画した避難所は500位しかなく、緊急物資は予定した道路を通って避難所につくはずだった。しかし道路は寸断され、避難所は予定の倍以上の1200ヶ所にもなり、避難民は25万人以上になった。

緊急物資は少しずつ避難所に運ばれてきたが、それを受け取り、仕分けし、配分する係の人間は最少10～20人はいるはずだったが、多くて数人、緊急に設置された仮避難所ではゼロの場合もあった。そこですぐさま到着しその仕事を始めたのがボランティアの人々だった。そして、予定していなかった避難所には、物資も来ずにその人々は2～3日は水も食べ物もない状況に陥っていた。この状況を見てすぐに水と食料を運んだのもボランティアの人たちだった。

この25万人の避難民を支えたのがボランティアであると言われている。ある調査によれば2週間の間1万人ずつ計20万人が携わったという。

ボランティアがどこで働くかは市役所やボランティア団体に登録してからの指示によるはずだったが、指示を待っても仕事が来ないときがあり、西宮では5000人登録に来たが、実働は1日600人で、そこで登録を締め切ったらしい。しかしどの現場でも余っている訳ではなく、不足している場合が多いのだ。地方自治体では泊まり込みでボランティアをしてくれる人が必要だったそうだけど、それは少なかった。なぜなら勤め人や学生が多かったからである。

・ボランティアの仕事の内容

運ばれてきた救援物資は配送センターにはたくさんあり山積みになっており、仕分けもできず、配送もできずに腐ってしまうものもあったようだ。一方避難所では受け取りもできず、分配もできなかった。そしてこういったときにボランティアが配送や分配の手伝いをして活躍した。

また阪神・淡路大震災では日本人だけでなく、外国人のボランティアも活動していて、その仕事内容もたくさんあったようだ。棺桶作りをする人や応急トイレを作る人、火葬されない遺体を見守る人もいたようだ。

他にも動けなくなった体の不自由な人やお年寄りの方たちに食事を運んだりする養護関係のボランティアや風邪や怪我をした人を助ける医療に関係しているボランティア、そして震災の時に正確な情報を必要な人に伝えるのも重要なボランティアの仕事であり、どこに行けば風呂に入れるか、どこに行けば何が買えるかなどの情報を配達などの時に収集していたようだ。

・ボランティアと避難所

ボランティアと避難所は密接な関係があり、避難所には介護の必要な老人が多い。食事を運ぶボランティアも必要だが殆どいない。物資の運搬や配分もまた避難所におけるボランティアの最重要な仕事の1つである。

学校はたいいていの場合避難所になっており、災害時に学校が避難場所になった場合、専任の担当者が来ることになっているが、実際は人がおらず、その学校の先生が当たっていて、ここで学校の先生と避難所の複雑な関係が生じるようだ。

・自衛隊の活動

自衛隊は、阪神・淡路大震災で100日間の派遣をし、全国からのべ164万人もの隊員が救助に参加したようだ。

第1回目の派遣が10時15分に陸路を使って神戸まで出発した。

しかし道の状態がかなり悪く神戸に着いたのは14時30分だったそうで、この次からの派遣は空路を使って行われた。

被災地での救助活動はチームごとに分かれて行い、1チームの人数は10～11人だった。救助活動は1つの場所で3回呼びかけても返答がない場合は次の搜索場所に移動していった。

被災地では2日間寝ることはなく、食事も被災者のことを考え乾パンしか食べなかったそうだ。

～環境防災科に入って学んだこと～

僕は、中学生の3年のときにどこの高校に行くか迷っていた。そのとき声をかけてくれたのが一学年上の環境防災科の先輩で、その先輩から「環境防災科なら人間的にも成長できるし、ほかの学校じゃ学べないことも学べるからぜひ入ったほうがいい」と教えてもらって、舞子高校を受験することを決めた。でも当時の僕の知識では環境防災科の受験に受かるのは難しいと中学校の先生に言われたので、それからは普通受験の勉強と一緒に阪神・淡路大震災のことや地球の環境問題についていろいろと調べるようになった。

そして、いろんな環境問題を調べているうちにどんどん環境防災科に入りたいと思うようになり、それから受験をして何とか舞子高校環境防災科に合格することができた。

環境防災科に入学してからはいろんな関係各所の方の講習を聞くことができたし、校外学習をしているいろいろな体験をすることもできた。そして環境防災科だからこそのたくさんのボランティアにも参加することができた。

そして僕が今まで参加したボランティア活動の中で1番いい経験になったと思っているのが「石川県能登半島ボランティア」だと思う。石川県能登半島地震が発生したのは平成19年3月25日で、それから舞子高校では春に1回、夏に2回ボランティアに行った。僕はのうち高1と高2の夏に行ったのと学校代表として友達と二人で発表に行ったので合計3回石川県にはボランティアに行った。

石川県のボランティアに行った目的は、神戸が阪神・淡路大震災の時にたくさんの支援をほかの県の人たちにしてもらったので、その恩返しという意味を込めてのボランティアだと僕は思っている。

能登半島で行ったボランティア活動は、1年の時は仮設住宅の周りの掃除やプランターの花の植え替え、能登半島の伝統的な食べ物の「えご」を作ったり、その「えご」を仮設住宅のお年寄りの方にプレゼントして一緒にお茶やお菓子を食べながら茶話会をしたり、輪島市の教育長のお話を聞いたり、地元の小学生や中学生、高校生と交流したりした。このときの輪島はまだ震災の傷跡が残っているところが所々あったけど、町の人たちはみんな笑顔で復旧の様子も震災当時に比べたらものすごい回復力だと思うので、このときは本当に人の力のすごさを感じることができた。そしてこの忙しい時に行った僕たちにいやな顔一つせずいろいろなお話を聞かせてくれたり、僕の知らない震災に関することを教えてくれたりしてくれて石川県の人たちの温かい気持ちにとてもうれしくなった。

2年の時も仮設住宅の周りの掃除から初めて、現地の小学校の子供たちと交流を含めて一緒に遊んだり、前日の夜に舞子生で作ったお菓子と学校で環境防災科の生徒で書いた寄せ書きを仮設住宅の方たちにプレゼントしてから茶話会を開いたり、現地の中学生や高校生と防災に関してのディスカッションをした。このときにはもうほとんどの所がきれいに復旧していて、僕たちが手伝いに行ったはずが、逆に向こうの人たちに元気もらった。

そして2年の3学期に発表のために行ったときに参加したのが「能登半島地震復興ユース・フォーラム」というイベントで、そこに参加していた学校が僕たち舞子高校と神戸学院大学と金沢大学と現地の高校数校だった。そこで僕たちは環境防災科の概要と石川県能登半島ボランティアでの活動内容の発表をした。いろんな学校の発表を聞いている中で思ったことが、どこの学校も自分の生まれ故郷のことをどうしたらよくなるかとか、実際に活動してみた結果がどうだったかなどの発表を真剣にしていたのでとてもすごいと思った。そして参加した学生全員でディスカッションをして地震に関する様々な質問を受けたり、話し合ったりした。僕が高校生活で成長してきたのもこのボランティア活動があったからだと思っている。

そして、この高校生活でこれだけたくさんの学習や活動を通じて人間的に成長することができたし、多くの知識も吸収することができた。だから僕はこの環境防災科に入って本当によかったと思っている。

～これからの自分～

語り継ぐ6

この高校三年間で学んできた知識と経験をこれからの人生に役立てたいと僕は思っている、だから大学に進学して今よりもっとたくさんの防災知識や環境に関する知識を勉強していきたい。そして、少しでも多くの人にこの阪神・淡路大震災のことを語り継いでいきたいと思う。

～「語り継ぐ」を書いた感想～

今回この「語り継ぐ」を書いて、これまで聞くことのなかった身近な人の阪神・淡路大震災の体験談を聞いて、自分が今まで知らなかったいろんな苦労があるのを知って、今までそれを知らなかった自分が恥ずかしくなった。

そして今まで学校で学んできたことの他にも知らなかった事実がいくつもあって、そういうのを調べていくうちに自分の知らない震災の姿が見えてきて、どんどん調べていくようになった。

だからやっぱり年を重ねるにつれて震災の記憶はどんどん薄れていくと思った。だから「語り継ぐ」ということがどれだけ大切なことなのかがよくわかった気がした。

そして、これからもこの阪神・淡路大震災の話だけでなくほかの震災の話も風化させることなく伝えていかなければならないと思う。

そしてこの震災の記憶を後の後世に語り継いでいかなければならない。

母の震災体験から考える

伊丹市
山本 悠太

【自分の記憶】

阪神・淡路大震災が起きた時、僕は3歳だった。伊丹市の被害は神戸市ほど大きくなかったが、阪急伊丹駅が倒壊するなど、それでも地震による被害は少なくはなかった。正直な事を言うと、僕が阪神・淡路大震災で覚えていることは、家の中がめちゃくちゃ、近くの小学校に避難した、そんな抽象的なことくらい。震災後に、毎年のように放送されていた追悼番組などに出てくる映像ぐらいしか覚えていない。

【母親の震災体験】

震災後、母は震災当時のことを書いていた。

※母の視点である。

◆1月17日 午前5時46分◆

ドーンという、突き上げるような衝撃。「あっ！地震だ。」とつさに隣で寝ている子供たちをかばった。それに続く今までに経験したことのない揺れ、子供の上に覆いかぶさったまま動くことができず、ただ、右に左にもうムチャクチャに揺すられていた。あまりの揺れに、恐いと感じるよりも、「このまま落ちるのかなあ。」そう感じていた。

揺れがおさまった。まずはテレビをつけて地震情報でもと思い、暗い中いつもテレビがあるところに手を伸ばしたが、何もない。その時はまだ、家の中がメチャメチャになっているなんて思いもよらず、「あれ、変だな」くらいの気持ちでいた。

起きて他の部屋にいた夫が「懐中電灯、懐中電灯。」と叫んでいた。だんだんとただ事ではないことが起こったのだとわかってきて、隣の部屋に寝ている一番上の息子（慧）のことが心配になり、「慧、慧。」と声をかけた。息子は「出られない。」と言っていた。夫の寝ていた真上の和ダンスが襖の前に倒れ出口をふさいでいたのだ。「慧（長男）、どっか痛いところない？」と聞くと「大丈夫」との返事。まずは、怪我はしていないだろうと思いほっとした。とりあえず、家族全員に怪我がないことが確認された。夫は5時半に起きて仕事をしていたらしいが、もし寝ていたら和ダンスの直撃にあっていただろう。

私はろうそくでもと思い、まだ暗い中、いつもろうそくが置いてある所に行こうとしたが、どういいうわけかそこまで行けない。とにかく、暗い間は、大きな地震があったということはわかるのだが、まさか家の中がメチャメチャになっているなんて思いもよらず、まして、マンションがズタズタだなんて全く思っていなかった。窓から外を見ると、本当に静かで、ただ、ジャージャーという水の音がすごかった。「今日は、大雨なのか？」と思った。後でわかったことだが、これは、屋上に設置してある給水タンクが壊れて、その水が全部流れ出している音だったのだ。

そうこうするうちに、夫が懐中電灯を見つけ部屋を照らした。茶ダンス、本棚、机、ステレオラック、玩具棚、テレビ、リビングに置いてあるものは全て倒れていた。

子供4人を一部屋に寄せて、布団を被っているように指示して、とにかく動きだした。夫は玄関に行き、ドアを開けようとしたが、全く開かなかった。私は、すぐくのどが渴いてきた。水を飲もうと台所に行くともう水は出なかった。ヤカンにお茶があったはずだと思い見ると、ガスコンロは台から落ち、ヤカンも鍋も下に落ちていた。前の日の残りのおでんが飛び散り、棚の油や砂糖、塩、色々な調味料がぐしゃぐしゃになってこぼれていた。冷蔵庫も動いていて、扉は開いて中身が出ていた。

その頃になると、外のことが気になってきた。玄関で夫と二人ドアを引っ張るもののびくともしない。外に人の気配がするのでドアを叩き、「すみません、開きません。」と言うと、「ぶつかりましょうか？」

語り継ぐ6

との声。「お願いします。」で、お隣のお兄さんがぶつかってくれてドアは開いた。

廊下に出て外を見るともうずいぶん沢山の人が下にいた。下から「余震がくるぞ。早く降りて来い。」と叫んでいる人がいた。本当はその人が言うように早く外に出たほうがよかったのだろうが、私たちはのきなもので、「こんな時ってパニックになる人がいるんだよね。」などと話していた。それでも多くの人が階段を下りて行くのを見て、やっぱり降りたほうがいいのではないかということになった。とりあえず、預金通帳などの貴重品を持っていくことにし、バックに入れるのだが、あわてているときは、どれが必要でどれがいらないかが判断できず、引き出しにあるめぼしいものは全部バックに入れた。子供には前の日に着て洗濯かごに入っていたものや家の中に干してあった洗濯物、そして倒れたタンスから取り出せるもの、はんてんやコートやらそこらのものをたくさん着せた。そのうち、みんなおしっこがしたいということで、ベランダにあったベビーバスの中におしっこをさせて、そして、足の踏み場のない部屋の中を一人ずつ抱いて外に出た。夜はもう、すっかり明けていた。7時は過ぎていただろう。

外に出て改めてマンションを見ると、ちょうど私たちの部屋のドアの上に大きな亀裂。それが1階から12階まで同じ所に何筋か入っていた。部屋の中ばかりかマンション自体も大きく傷ついていることに驚き、非常ベルが鳴り続け、「大丈夫ですか、大丈夫ですか。」と、隣近所のドアを叩いている人がまだまだいるマンションを眺めて、事の大きさにはじめて気づいた私だった。

すでに多くの人々が外に出てきていて、知り合いの人たちの無事を確認した。そして、しばらくの間は、何をするでもなく、ただ、みんなで寄り添っていた。時間の感覚は全くなくなっていた。とにかく、すぐには部屋に戻れないことはわかった。そして、水が出ないであろうことも。私は、飲み物を確保した方がいいだろうと思った。夫に子供を頼んで、近くの自動販売機を見に行った。アローム（近くのパン工場に併設したコンビニ）の前の5台の自動販売機のうち2台が倒れていた。そこに、公衆電話があるのだが、テレカは入るものつながることはなかった。財布の中の100円玉を全部使ってペットボトルのウーロン茶、スポーツドリンクを買った。千円札を使おうとしたがそこでは使えなかった。次に、カーサ（ファミリーレストラン）の前の自動販売機に行った。そこでは千円札は使えた。尼宝線（尼崎と宝塚を結ぶ県道）ではすでに走っている車があった。どこへ行くのだろうと思った。点滅しなくなっている信号と、ついている信号があった。マンションのすぐそばの信号は切れていた。傾いている電柱もあったと思う。

近くの駐車場に車を置いている人たちは、だんだんと車の中に入っていった。天気は良かった。でも、1月である。寒い。いつまでも、そうしているわけにいかないの、私たちも子どもを車の中に乗せることにした。一緒にいた慧（長男）の同級生の姉弟と我が家のこども4人を乗せ、エンジンをかけ、カーラジオをつけた。我が家は軽自動車であまり狭いので、大人は外にいた。カーラジオでは、震源地が淡路島であると言っていた。伊丹市内での死者の名前も言っていた。近くの地名だった。神戸の凄まじさはまだあまり報道していなかったようだ。

◆避難所へ◆

どうしてよいのかわからなかった。とにかく、隣近所の人と情報を交換しなくてはと、子供を車に待たせて、みんなはどうするのか、どうしたらよいかを聞きまくった。着のみ着のまま外に出ていった。娘（夏穂）の友達Mさん姉妹2人も家の車に乗せた。

お昼近くになっていたと思う。学校で子供をあずかってくれると聞いた。私とMさんそして、合流したOさんは片付けるにしても子供は危なくて家に入ることができないので、学校に子供を連れていくことにした。私とMさんで3家庭の子供を学校に連れて行った。夫たちは片付けに家に入った。

途中、アロームが店頭でパンやカップ麺、お菓子などを売っていた。たくさんの方がいた。Mさんが食べ物を手に入れることにして、私は子供9人を連れて学校に向かった。

小学校の空き教室を2部屋つなげたホールに行くとすでに、マンションの友人、Tさん、Sさん、Nさん、Iさんが避難してきていた。Tさんの夫は隣の部屋に寝ていた子供たちを助けようとして、床に

散乱していたガラスの破片を踏み、足を怪我し、病院に行っていた。幸い子供たちは怪我一つしていなかった。Sさんはやはり膝の下に何か刺さっているようで痛いと言っていた。Iさんは日頃から体が弱く、疲れていた。みんな、幼稚園児、小学生の子どもを持つ人たちだ。その後、私たち6家族で何とか助けあった。私と後からパンやお菓子をたくさん買い込んできたMさんは子供たちをTさん、Sさんらにお願いして、大きな子どもは小さい子どもを面倒見るように言って、家の片付けに帰った。部屋に帰ると、ドアは閉まらず、もちろん鍵などかからなくなっていた。とにかく、飛び散ったガラスを片付けることにした。茶ダンスは倒れ、ガラスの破片も多いだろうとのことで、まずは、テレビやステレオ周辺を片付けることにして、ステレオラックのガラスとびらの破片を拾った。夫も私も片づけなくては気を焦るのだが、手はほとんど進まなかった。我が家は電話が茶ダンスの下になっていたので、Mさんのところで電話を借りて私の弟（教泰）に電話したと思う。会社かけるとつながった。家族の無事を伝え、母への連絡を頼んだ。電話はつながったり、つながらなかったりの状態がしばらく続いた。どちらかと言うと、つながらない方が多かった。

片付けの合間、子供の様子を見に学校に戻ると、子供たちが、トイレが流れず、うんちが並んでいると言う。先生に承諾を得て、校庭の池の水を運んで流すことにした。その後、その池には生き物がいるということで、プールの水を運ぶことになった。学校の水道水は、しばらくは出ていたようだが、タンクが空になると出なくなった。外にある水道が出たので、みんなで水を汲み、手を洗ったり、電気ポットで沸かして飲んだ。片付けはほとんど進まないまま夕方になった。自治会から余震の心配もあるので、マンションの安全が確認されないうちは住人全員、学校に避難してほしいと言われ、私たちも学校に戻ることにした。貴重品と、とりあえずの着替え、そして、毛布を車に積み学校に行った。その日の夕方、何かの用事か忘れたが、家に戻り再び学校に行く道すがら東の空に見た満月がやけに白く、そして、周りが輝いていた。今まで見たことのない輝きに思えた。

◆1月17日の夜◆

夜、何を食べたかは覚えていない。市の方から配給はなかったと思う。たぶん、昼に買ったパンやお菓子を食べたのだろう。先生方がテレビを設置してくれて、ずっとついてしたが、私たちは、隣近所の人と話していて、ほとんど見ていない。今思うと、神戸の焼けている模様が中継されていたと思う。

夜、学校の非常電話で、京都の姑と私の母に無事を知らせた。学校の公衆電話はなかなかつながらないが、非常電話ではすぐに通じた。

それぞれの家族が、持参の毛布にくるまって眠れぬ夜を過ごした。9時か10時か、とにかく子供たちが寝静まった頃だと思うが、初めて、支給の毛布を校長先生が持ってきたと思う。私も1枚もらった。家族が多いと、やはり、持ち込んだ毛布だけでは不足、子どもを優先させると私たちの分は少なくなり寒かった。コートとウインドブレーカーを着て寝た。下に敷くように持っていったこたつの上掛けは、毛布よりずっと温かかった。

一晩中テレビがついていた。芦屋の方のマンションが倒壊し、下敷きになった人を見つけるためにファイバースコープを使って捜索しているところが映し出されていた。アナウンサーが中継し、「男の人の手が見えます。」「これは髪の毛でしょうか。」などと言っていた。その経過を追っていた。その時、被災地の中にいる私は、下敷きになった人のことが人事と思えず、それを見るのがつらかった。それを報道できる人がいるのが悲しかった。アナウンサーの中継の合間は被災地の様子が物悲しい音楽をバックに映し出されていた。Oさんが、この音楽の間は、他の地方ではCMをやっているのではないかと言った。本当はどうだったのだろう。

とにかく、私はその晩はほとんど一睡もできなかった。余震はあったのだろうか？そのあたりの記憶はない。ホールにもその晩は60人から70人の人がいたのではないだろうか。体育館とホール、そして、1年1組、1年2組の教室を合わせて、700人以上の人が避難したらいい。校庭いっぱいには車が停まり、その車の中で寝泊まりしている人も多かった。文化住宅が全壊し、その下敷きになって助け出された娘（夏穂）の同級生のS君は天井のある建物の中では寝られないと軽自動車の中で親子3人寝泊まりしていた。しばらく経ってからも、校舎の中の方が手足を伸ばせるからと誘っても、どうしても怖

語り継ぐ6

いと言っていた。今は、宝塚の方に家を見つけ転校していった。マンションの人でも余震が怖いから車の方が安心と何人もの人が車の中で夜を過ごした。

【母の震災体験を振り返って】

母の震災体験を振り返って、母は適切な判断したのではないかと思った。地震が起きてすぐに、水が出ないであろうことを判断し、近くの自動販売機で飲み物を確保したこと。近くのコンビニですぐに食べ物を確保したこと。マンションの友人と協力して子供の安全を確保したこと。その後も、マンションの友人と助けあったことなど、母は適切な判断したと思う。その中でも一番印象に残ったのは、マンションの住人、知り合いの人たちと協力したことだ。そしてまた、近所とのコミュニケーションを取ることがどれだけ必要なものかということをも改めて理解することができた。

マンションの友人と協力して、子供を学校に連れて行き、食べ物も確保し、自分たちの子供の安全を確保した上で、自分たちの活動に戻るといった、模範的な動きができたのではないかと思う。もしも、母が近所の人とコミュニケーションを取らずに、友人がいなかったと考えると、食べ物も確保できていなかったかもしれないし、子供の安全も確保できたかどうかは分からない。それだけ、近所との付き合いは必要ということだ。実際、阪神・淡路大震災では、下敷きになった多くの人が、消防、警察、自衛隊の手によってではなく、近所の人たちによって助け出されている。これは、日頃からのコミュニケーションが取れていたからだと思う。考えてみると、隣の家は何人家族であるか、その家族にはどのような人が住んでいるのかなど、あまり気にしないかもしれないが、知っておく必要は十分にあると思う。日頃からのコミュニケーションが災害時には命を救うこともあるのだ。

【母の体験から今後の災害に活かす】

母の体験からいくつかだが、必要なこと、しておかなければならないことが浮かび上がってきた。それは、懐中電灯、家具の固定、非常持ち出し袋である。

懐中電灯について、地震が起こった後、家の中が暗かったので、懐中電灯を使おうとしたが、すぐに見つけ出すことができなかった。これは、懐中電灯を寝ているすぐそばに置いておくこと、懐中電灯の位置を把握し常に取り出しやすいようにする必要があったと思う。すぐに懐中電灯が見つければそれだけ早く行動できるので、安全の確保がすぐに行える。

家具の固定について、地震の起こった後、家の中がメチャメチャだった。家具の固定をしておけば、家具の転倒の防止にもつなげるし、先に述べた懐中電灯の場所もすぐにわかるはずだ。

非常持ち出し袋について、母が言ったとおり、パニック状態、あわてているときには、何を入れていいのか分からなくなってしまう。この場合は非常持ち出し袋のようなものを用意しておけばいい。

【これからの地震に備える】

これから、東海、東南海、南海地震が予想されている。その規模は阪神・淡路大震災をも凌ぐと言われている。その地震に対して、必要なことは、正しい知識と対応であると思う。自分の地域には災害なんか起きないといった油断が、阪神・淡路大震災のような大災害を生むことになる。災害に対して、防災意識と知識の向上が必要であると考えている。

手つかずだった世界

神戸市垂水区狩口台
綿田 梨乃

阪神・淡路大震災。当時、私は今住んでいる家ではなく5階建ての団地の1階に住んでいた。この頃、4つ年下の弟はまだ生まれておらず、私と父と母の3人で暮らしていた。その家には幼稚園を卒業するまで住んでいたの、曖昧ではあるが家具の配置なども覚えている。私がまだ小さかったこともあり、いつもリビングの隣の部屋で3人で川の字になって寝ていた事。その部屋には鏡のついた横長で背の高いクローゼットがあり、いつもその鏡を見ながら歯を磨いていた事も覚えている。

しかし、震災時、私はまだ3歳で、あの日のことをはっきりと覚えているというわけではない。とぎれとぎれの幼い頃の記憶である。これから書くことは、私のあの日の記憶と父と母の話を交えたものである。

○地震が発生する前

あの日も私たち家族3人はいつも通りの生活を送り、就寝する頃には母、私、父の順で川の字になって寝ていた。ずいぶん昔の話で、私がいつ、なぜその話を聞いたのかは、覚えていないが、あの日の月がとても赤くて不気味だったという事を、小学生の頃に母に聞かされた覚えがある。(だから 赤い月の夜は不吉なことが起こると信じ、自分の中で小学5年生の自然学校の夜の赤い月を見て恐ろしくなって眠れなくなったこともある…)

父と母の記憶によると、あの大地震の発生する2日ほど前に何度か小さな地震が、私の住んでいる地域であったようだ。しかし、その時の父の考えでは、兵庫県（特に神戸）や大阪は地盤が強いから安全だ！と信じていたらしく、そんな小さな地震が起きてもたいして気には止めていなかったようだ。

しかし、そんな父とは違って、母はというと、東北のほうから、だんだんと地震の発生がおりてきていたので、「上の方から、地震が下りてきようなあ・・・こっちにも地震、くるんやないやろか？」と父に不安で尋ねたらしい。しかし、父は「神戸は地盤も強いから、絶対こえへんわ！」と、笑いながら話していたようだ。(この会話をしていたことは、今でも一番震災が起きる前にした何気ない古い会話であるのに、はっきりと覚えているようだ。)だが、当時から心配性だった母は、そんな父の考えを聞かされても不安なままだったので、低いベビーダンスの上に飾っていた写真立てや、ぬいぐるみなどの家具をすべて下ろしたようだ。「あの時、写真立てなどを下に下ろしていて、本当に正解だった」と、母は語った。

○1月17日、5時46分（ここからは、私の記憶より父の記憶を元にしたものである。）

父は、いきなり上にドーン！と大きくつき上げられ、「え？」と思い目を覚ました。そんな父の疑問とは裏腹に、地震は大きな横揺れに変わった。父は隣で寝ていたまだ幼かった私に布団をかぶせ、抱っこをして、必死で私の身を守ってくれた。「母も隣に寝ていたのに、私だけ？」といったような質問を、私が持ちかけると父は、「そんなん、しとる間なかったわ。お前はまだ小さいし、お母さんもお前の隣で寝とって、とどかへんしなあ」と言われた。(さすがに、母にその時どう思った？とは聞きづらかったが、昔、母が、「私は、私の身を自分自身で守った・・・」と少し寂しげに言われたのを、しっかりと覚えている。)父が私の上に覆いかぶさっていた事だけは今でも私の記憶にある。揺れ、というより、大きな音がしていた気がする。もちろん、私たち家族が身を守っている間、電子レンジやテレビ、食器棚の食器が床へ落ちていき、その音もあったであろうが、そんな音ではなかったと思っている。父は、あの揺れている時間がきちんと分かった時は、もっと長い時間だった、と思ったようだ。

揺れがおさまると、父はまだ外が暗かったので、部屋の電気をつけようとしたが、つかなかった。部屋がぐちゃぐちゃなのは、分かっていたが、電気がつかなければ、明かりがなければ、歩き出すことは出来ない。もしかしたら、ガスが漏れているかもしれないのに、見に行くことさえ出来ない。そこで、役に立ったのが、押し入れにしまわれていた大きなローソクだった。ローソクに火をつけ、急いでガス漏れをしていないかチェックしにいった。ガスは漏れていなかった。部屋の中も本当にグチャグチャではあったが、窓のガラスも割れておらず、リビングを避けてなら、歩くことが出来たようだ。

いま、自分たちの地域でいったい何が起こっているのか？普段なら部屋でラジオやテレビで、緊急のニュースとして、情報として自分の耳に入るのであろうが、この時はまだ電気が使えないので、テレビ

語り継ぐ6

もラジオもつける事ができない。父は車のラジオなら電気が使えなくても聞ける事を思い出し、私と母を家に置いて、駐車場に向かった。駐車場には 普段のこの時間帯ならこんなにも人はいないだろう、というくらいの人が出てきていた。皆、父と同じ、または外の状況を知るために出てきていた。父が車のラジオをつけてみると「神戸で地震が発生しました。」といったような、はっきりとした情報がない放送がかかっていた。「やっぱり地震やったみたいですねえ」「大きかったですねえ」「どっか煙、あがってんちゃうか？」など、しばらく不安の中、近所の人と話をしていたようだ。

その間、私と母は 真っ暗な部屋で不安を抱えたまま父の帰りを待っていた。ラジオを聴き、近所の人との話が終わったであろう父は、しばらくすると家に帰ってきて、地震が起きた、ということ話を話した。その時、母が心配していたのは、近所に住んでいた祖母の安否だった。祖父が亡くなり一人暮らしをしていたので、母は父に頼み、祖母の家にももらった。

祖母の家も同じようにグチャグチャだった。父が家に行くと、祖母は怪我もなかった様子だったが、仏壇が倒れてきており、それを立て直したりと片づけをし、父は家に帰ってきた。父も自分の母が心配だったのだが、電話もつながらず、不安の時間をすごした。

○父と震災

父はしばらくして、会社に出勤の時間になったので、一度会社が倒れているか心配になったので、車で行こうとした。しかし、信号が働いていない。これでは もしかしたら事故になるかもしれない。そう思った父は そう遠くでもなかったので徒歩で会社までいったようだ。

このとき、まだ父の中で「地震」というものがはっきりと理解できるようなものではなかった。この大きな地震が神戸中心に起こった事を知ったときは、まさか! と思っただろう。もっと大きな、全国で起きたのだ、もしかしたら日本が潰れたのかもしれない。そうまで考えたようだ。

会社は潰れていなかった。会社に着くと、父と同じように他の会社員の人も会社へ集まっていた。幸い、父の仕事場で亡くなった人はいなかった。が、その話をしたあと 父は私に初めて父の祖母の妹さんが須磨でこの震災によって亡くなられた事を私に話した。本当に、私はこの時初めてその話を聞いた。

会社での仕事は、もちろん会社の片づけがほとんどだった。片づけが3日、4日は続き、片づけが終わると家へ帰る、と繰り返していた。それから3日4日たつと、信号もちゃんと動くようになっていたので、単車でお客さんの家へ「大丈夫ですか?何かお困りではないですか?」と回ったようだ。

その回っている中でも父がもっとも印象に残っているのは、灘のお客さんのところへ1週間ほどしてから行った事だった。

はじめは、単車で道を通っていてもお店もちろほらと見かけた。しかし、あたりの様子はだんだんと変化していったのだった。目的地であったお客さんの家は電気もついておらず、真っ暗だった。

外も暗くなってくると、少しずつだが まわりでポツポツと明かりがつかけてきた。しかし、そこには家はない。その明かりの正体は、公園や広場でやっていた、焚き火や炊き出しにつかわれている火の明かりだった。それを見た父は 改めてここは本当にあの神戸なのか、と思っただろう。父は体験したことではないが、これはまるで戦争中の空襲のあとなのではないか、と錯覚するほどだった。その火からでてきている煙のにおいだけではない。家などの建物が多く焼けた嫌なにおいが漂っていて 背中がぞくぞくしたようだ。

○水とガス

電気は早く復旧したが、ガスと水道はしばらく使うことが出来なかった。洗いをすることが出来ないで、紙皿にサランラップをつけて使用したり、料理もすることが出来ないで電子レンジでチンしてできるものを食べていた。(色んな家具が落ちてしまったが、お皿以外は壊れることはなく、使用することが出来た。)

いつもならたくさん商品を置いているお店もどこのお店も、まったくといっていいほど商品が置いていなかったようだ。水も色んなところに回ってもらいにいった。そこで見かける多くの人の格好は、必ずといっていいほど皆リュックサックを背負っており、服装も普段ならきれいな格好をしているひと、動きやすい格好で歩いていて、そんなきれいな格好をして歩いている人など誰一人見かけることはなかった。もちろん、お風呂も使えないので、色んなところのお風呂に入りに入った。時には、父の友人の家のお風呂は使用することが出来ていたので、私と父で使わせにもらったりもしたようだ。

なかでも一番生活に困ったのは母だった。この時母のお腹の中には私の弟がいて、3、4ヶ月で一番

つわりがひどい時期だった。つわりでトイレに駆け込んでも流すことが出来なかった。

また、持病の薬も手に入らず、福岡県にいた担当医から心配で連絡がきたほどだった（しばらくして、母にはちゃんと薬が届けられた）。

○福岡へ・・・

しかし、このままでは 母と弟が持たない。そこでわたしたち家族がとったのは、福岡県に住む母の兄の家へ少しの間お世話になる、ということだった。だが、家族全員がお世話になるのは無理な話で、その前に、父は会社があるので、一緒には来られなかった。福岡に行ったのは、私と母、そして母方の祖母だった。

福岡では、まったくといっても良いほど、私たち家族が体験したあの大地震は他人事に近かった。テレビのニュースなどで取り上げられてはいたが、母はそう感じ取ったらしい。「どうしても自分たちが本当に体験しなければ、あの状況がわからないやろなあ・・・自分とこはこえへんっておもってるからなあ・・・」そう母はいつていた。そんな感情とともに、母はもうひとつ心配だった。

神戸に残してきた父の存在だった。（余震だって続いているかもしれない。パパ、生きてるやろか・・・もう、生きて会えんのかなやろか。もう、この世の終わりなんやないやろか。もう前のような普通の生活、出来へんかも・・・。）そればかり考えていたそうだ。

一方、父は余震も続く中、1週間ほど、一人で過ごしていた。会社に行く、一人でいるのにはどうってことなかったらしいが、やはり夜になると就寝時などは正直言って怖かったそうで、毎晩これはまるで日本沈没だ・・・と思っていた。

父方の祖父と祖母も神戸に残っていた。（家も近いので父もよく出向いていたらしい。）朝やお昼は、ご飯も何でも家でやっていたが、やはり夜は怖いので近くの憩いの家で近所の人と集まって寝ていた。

その中で、父の弟は、震災時スキーに行っていたそうで、帰ってこようとしてもなかなか家に帰ることは叶わず、やっと帰れる！となっても普段なら2時間あれば帰れる筈が、10時間以上もかかって大変苦労したそうだ。

○神戸に帰ってきて

余震も落ち着いて、水道も使えるようになった頃、私たちは神戸へ帰ってきた。しかし、まだガスが使えない。そんな時、父の会社がガスコンロを配りだしたらしい。もちろん、私の家にも父がガスコンロをもって帰ってきた。それでご飯を炊いたり、鍋をしたりした。このガスコンロはとても重宝しており、今日もこのガスコンロは我が家で使い続けられている。

そこからの回復は私の地域は早かった。私は記憶が薄れながら成長していった。しかし、あの地震の恐ろしさを体は覚えているのか、私は地震に敏感になっていた。母方の祖母がよく私に話してくれたのだが、震災から少ししてから、祖母の家に私一人が泊まっていたとき、小さいが地震がきたそうだ。

祖母はあわててお風呂から上がってきて、私の安全を確認しにきたが、私の姿がなかったらしい。名前を呼ぶと私は「地震こわかったから、あぶないからな、逃げてん」と、言いながらコタツから出てきたそうだった。今でも、地震には敏感だ。

○私とグラント

平成8年、私は今住んでいる住宅に引っ越した。近所にも同じくらいの年頃の子が多くいて、友達に困ったりはしなかったが、近くのグラントによく行くようになった。といっても当時の私の頭の中には、そこがグラントだ、という事を把握できていなかっただろう。大きなグラントには仮設住宅が建てられていたからだ。そんなに前の家から遠くない場所なのだが、このグラントに行くようになったのは引っ越してきてからで、私はそこがグラントではなく、自分が住んでいるところと同じような住宅だと思い込んでいた。グラントの端には小さな公園があり、そのブランコが目的でよく通っていたのだ。いつものようにブランコをしに行くと、先客がいた。あまり年のかわらないであろう女の子とその子の弟がいた。私たちが友達になるのに時間はかからなかった。一緒にブランコに乗ったり、滑り台をたのしんだりして遊んだ。休みの日は、その子と遊ぶことが増えた。

ある日母に誰と遊んでいるのか聞かれたとき、私は「家がいっぱい建つてるとこの子と遊んでるよ」と答えた。その時、私は初めてあのグラントに建っている家が「震災で家が壊れてしまった人のために建てられた仮設住宅」だということを知った。

語り継ぐ6

小学校に上がる頃には、もう「広いグランド」になっていた。名前も覚えていない子だったが、ふと思い出すときがある。元気にしているだろうか。

○私と「しあわせ運べるように」

小学校に上がると、1月17日になると、毎年学校では防災訓練が行われた。教室のテレビで震災のビデオを観たり、「しあわせはこぼろ」という本を読んだりした。あの本を読んだ次の日にはいつも枕元にリュックと懐中電灯を置いて寝ていた。そんな防災訓練の後にいつも講堂で行われていた、黙祷、そして「しあわせ運べるように」を歌うことは、もっとも印象深い毎年の行事の一つだった。もちろん、低学年のときは、なぜこの歌をこの日に歌わなければならないのか、一体この歌の意味は何なのか、わかりもしなかった。本当に歌詞の意味を理解できるようになったのは、小学5年生の頃だと思う。歴史にとっても興味を持ち始め、戦争の歌を初めて音楽会で歌ったときに、歌には深い意味が込められていて、その歌の歌詞の意味を理解することで、その歴史や、その事について知ることができると思ったからだ。私が「しあわせ運べるように」の歌詞を真剣に読んで理解しようと、歌詞を完璧に覚えたのもこの時だった。

○環境防災科と私

中学に上がると、部活などもあり、ハードな日々が始まった。この頃はまだ、環境防災科の存在は知らず、1・17に学校で黙祷と歌う時だけ防災について振り返っていたばかりだった。その頃、私は美術関連に力を入れており、中学3年になるまでその方向に進む気だった。しかし、その一方で人の役に立てるような活動がしたい、とも思うようになっていた。そして夏休み、塾の高校説明会で出会ったのが、舞子高校環境防災科の説明だった。そこまで詳しい説明というわけではなかったが、そのような学科がある事を知ってとても興味を引かれたのが始まりだった。

○環境防災科に入って

1年生の頃はたくさんの外部講師の方々の震災の話聞き、私が普通の生活に戻れる、また戻った間、たくさんの人の努力と協力があることを知った。そして、その方々が体験したあの時の悲しいこと悔しいことも。あれがすべてだとは思わないが、私にとってとても大きなものをぶつけられた感じだった。私は、本当にちゃんと講師の方々が伝えたかった事を受け止められているのか、ちゃんと理解できているのか、そしてこの事を伝えていけるのか、不安にもなったことがある。

それでも、1年生の頃の不安は、これまで参加させていただいてきたボランティアによって変わってきたと思う。ボランティア活動で変わったことは、それだけではない。誰かとコミュニケーションをとる大切さ。それは震災時でもとても大きな力となった人と人とのつながりだ。私はその力をつけるコミュニケーションの大切さを教えてもらったと思った。

そして一番私が環境防災科に入ってよかったと思ったのは、地域での防災訓練に始めて参加したときだった。楽しかった、というのもあったが、こんなにも良かったと思えたのは、やはり新鮮さを感じたからだと思う。私の地域では、こういった地域での防災訓練は取り組まれていない。昔、地域清掃活動があって、それに参加したくらいだと思う。地域の人と連携して防災訓練を行うことは、私にとって、こんなにも人とコミュニケーションをとれるものは他にないと感じた。

私の住む地域でもこういった取り組みをすれば、もっとつながりが強くなる、まずは、自分の身近なところから 変えていきたい、そう思うようになった。

また あの震災の頃お腹にいた弟も中学に上がり、何度か震災の事を聞かれたことがある。私は、自分でもはっきりと覚えていない事を、こうやって本当になにも知らない弟に伝えられることはとてもうれしいと思う。

弟のように震災を知らない子供たちに伝えていけるように、これからも残り少ない学校生活で学び、語り続けて生きたい。

今回、語り継ぐを書くにあたって、父と母に話をしてもらい本当に感謝したい。私を守ってくれたこと、そして今日まで知らなかったことも教えてもらった。語り継ぐを書くのに、私も父と母に語り継いでもらった気がした。

語り継いでもらった事を、私が受け取り、次の人へ、私もしっかり語り継ぎたい。

たくさんの方が、あの震災と人とのつながりを、いつまでも語り継げるように。